雑 餉 隈 遺 跡 4

—雑餉隈遺跡５次、８次、10次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第569集

1 9 9 8

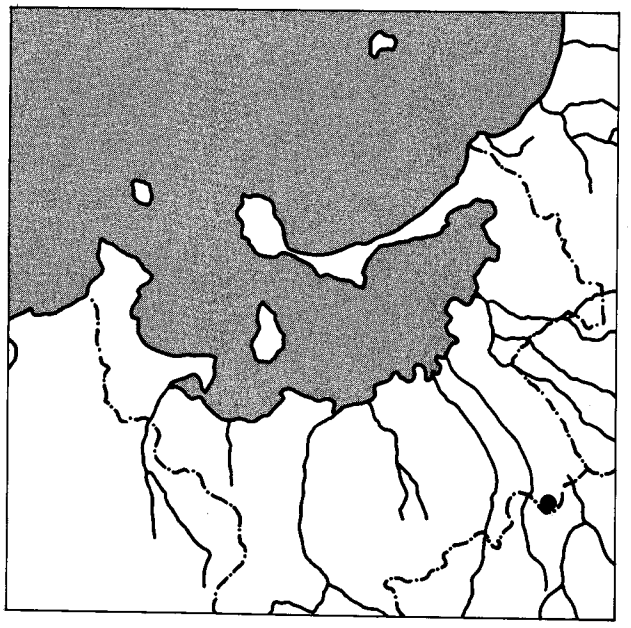
福 岡 市 教 育 委 員 会

za　　ssho no kuma

雑 餉 隈 遺 跡 4

—雑餉隈遺跡５次、８次、10次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第569集



遺跡略号　ZSK5　ZSK8　ZSK10
調査番号　9407　9550　9670

1 9 9 8

福 岡 市 教 育 委 員 会

巻頭図版. 1

（1）調査区全景

（2）調査区全景

巻頭図版. 2

（1）F－H、1－5区

（2）D－H、3－7区

巻頭図版. 3

（1）B－J、5－9区

（2）A－C、3－8区

巻頭図版. 4

（1）住居跡81

（2）住居跡26

序

古くから大陸との文化交流の玄関口として栄えた福岡市には、多くの文化財が分布しており、本市では文化財の保護、活用に努めています。しかし九州の主都として発展を続ける本市においては、各種の開発事業もまた多く、やむを得ず失われる文化財については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書はそうした遺跡のひとつで、博多区雑餉隈遺跡内における市営住宅建設工事に先だって行った発掘調査の成果報告書です。

発掘調査の結果先土器時代から奈良時代にわたる遺構、遺物が見つかりました。とくに弥生時代と奈良時代には極めて大規模の集落があったことがわかり、注目を集めました。この地域にも奴国を構成する重要な拠点となるムラや、大宰府を支えた人々のムラがあったことが証明されたと言えるでしょう。

発掘調査から整理、報告にいたるまでご理解とご協力をいただいた本市建築局を始めとする多くの関係者の方々に対し、心からの感謝をいたしますと共に、本書が文化財に対する認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いに思います。

平成10年３月３１日

福岡市教育委員会

教育長　町　田　英　俊

例　　言

1．本書は市営住宅建設に先だって、福岡市教育委員会が、1994年４月11日～10月18日にかけて行なった雑餉隈遺跡第５次調査、1996年２月２日～３月27日に行なった第８次調査、および1997年２月14日～３月31日に行なった第10次調査の報告書である。雑餉隈遺跡としては４冊目の報告書である。

2．検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Ｍを付して検出順に通し番号を付した。本章では、この番号からＭを除き、遺構の性格を示す用語を付して、住居跡１、溝２のように記述する。

3．本書で使用する方位は磁北である。

4．本書で使用した遺構実測図は宮井善朗の他、平田こずえ、今泉博子、鈴賀智幸（別府大学）、岩崎秀幸（西南学院大学）、本田浩二郎、川野博之、田中大介、益永武史（熊本大学）、成在賢（高麗大学）、李準浩（東京大学）、相良大輔、池田伸子、柳谷美佳、中河秀崇、荒川直子（福岡大学）福田朱美、木原篤、乙部武彦、吹春憲治、藤川繁昌が作成した。また製図は宮井の他、林由紀子の協力を得た。

5．本書で使用した遺物の実測図は宮井の他中暢子、中河秀崇、荒川直子（福岡大学）が作成した。また石器の実測には山口譲治氏の協力を、鉄製紡錘車の実測には比佐陽一郎氏の協力を得た。製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。

6．本書使用の写真は、宮井が撮影したものである。

7．遺物実測図の番号は収蔵時の登録番号である。遺構図中の遺物出土状況図の番号に一致する。

8．本調査に関わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。

9．本書の執筆は先土器時代の遺物、及び弥生時代の石器については山口譲治氏の協力を得た。その他については宮井が行ない、編集は宮井が行なった。

10．付篇として、雑餉隈遺跡第７次調査の報告を末尾に掲載した。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査体制 …… 1
Ⅱ．雑餉隈遺跡周辺の地理的、歴史的環境 …… 3
Ⅲ．調査の記録
　1．概　要 …… 7
　2．先土器時代の調査 …… 7
　3．弥生時代の遺構と遺物
　　（1）円形住居跡 …… 15
　　（2）方形住居跡 …… 19
　　（3）土　壙 …… 19
　　（4）方形周溝状遺構 …… 30
　　（5）弥生時代の石器 …… 32
　4．古代の遺構と遺物
　　（1）住居跡 …… 41
　　（2）土　壙 …… 109
　　（3）井　戸 …… 126
　　（4）円形周溝状遺構 …… 126
　　（5）溝、掘立柱建物 …… 131
Ⅳ．小　結 …… 132

挿　図　目　次

Fig. 1　雑餉隈遺跡周辺の遺跡(1:25000) …… 4
Fig. 2　調査区位置図(1:4000) …… 6
Fig. 3　調査区割図(1:1000) …… 8
Fig. 4　10次調査出土石器実測図 …… 9
Fig. 5　5次調査出土先土器時代石器実測図1 …… 11
Fig. 6　5次調査出土先土器時代石器実測図2 …… 13
Fig. 7　先土器時代石器出土分布状況 …… 14
Fig. 8　住居跡51、64実測図(1:80) …… 16
Fig. 9　弥生時代住居跡出土土器実測図(1:4) …… 17
Fig.10　住居跡59、62、49実測図(1:60) …… 18
Fig.11　住居跡81実測図(1:80) …… 20
Fig.12　住居跡81出土土器実測図(1:4) …… 20
Fig.13　弥生時代土壙実測図1(1:60) …… 22
Fig.14　弥生時代土壙出土土器実測図1(1:4) …… 23
Fig.15　弥生時代土壙出土土器実測図2(1:4) …… 24
Fig.16　弥生時代土壙実測図2(1:60) …… 25
Fig.17　弥生時代土壙出土土器実測図3(1:4) …… 27
Fig.18　弥生時代土壙実測図3(1:60) …… 28
Fig.19　方形周溝状遺構実測図(1:60) …… 28
Fig.20　弥生時代土壙出土土器実測図4(1:4) …… 31
Fig.21　方形周溝状遺構8出土土器実測図(1:4) …… 31
Fig.22　各住居跡出土石器実測図 …… 33
Fig.23　住居跡81出土石器実測図1 …… 35
Fig.24　住居跡81出土石器実測図2 …… 37
Fig.25　各土壙及び溝出土石器実測図 …… 38
Fig.26　古代住居跡実測図1(1:60) …… 40
Fig.27　古代住居跡出土土器実測図1(1:3) …… 42
Fig.28　古代住居跡実測図2(1:60) …… 44
Fig.29　古代住居跡出土土器実測図2(1:3) …… 45
Fig.30　古代住居跡実測図3(1:60) …… 47
Fig.31　古代住居跡出土土器実測図3(1:3) …… 48
Fig.32　古代住居跡実測図4(1:60) …… 49
Fig.33　古代住居跡出土土器実測図4(1:3) …… 50
Fig.34　古代住居跡実測図5(1:60) …… 52
Fig.35　古代住居跡出土土器実測図5(1:3) …… 53
Fig.36　古代住居跡実測図6(1:60) …… 55
Fig.37　古代住居跡出土土器実測図6(1:3) …… 56
Fig.38　古代住居跡実測図7(1:60) …… 57

Fig.39　古代住居跡出土土器実測図7(1:3) …… 58
Fig.40　古代住居跡出土土器実測図8(1:3) …… 60
Fig.41　古代住居跡実測図8(1:60) …… 61
Fig.42　古代住居跡出土土器実測図9(1:3) …… 63
Fig.43　古代住居跡実測図9(1:60) …… 64
Fig.44　古代住居跡出土土器実測図10(1:3) …… 66
Fig.45　古代住居跡実測図10(1:60) …… 67
Fig.46　古代住居跡出土土器実測図11(1:3) …… 69
Fig.47　古代住居跡出土土器実測図12(1:3) …… 70
Fig.48　古代住居跡実測図11(1:60) …… 71
Fig.49　古代住居跡出土土器実測図13(1:3) …… 73
Fig.50　古代住居跡実測図12(1:60) …… 74
Fig.51　古代住居跡出土土器実測図14(1:3) …… 76
Fig.52　古代住居跡実測図13(1:60) …… 77
Fig.53　古代住居跡出土土器実測図15(1:3) …… 78
Fig.54　古代住居跡出土土器実測図16(1:3) …… 79
Fig.55　古代住居跡出土土器実測図17(1:3) …… 81
Fig.56　古代住居跡実測図14(1:60) …… 82
Fig.57　古代住居跡出土土器実測図18(1:3) …… 83
Fig.58　古代住居跡出土土器実測図19(1:3) …… 85
Fig.59　古代住居跡実測図15(1:60) …… 86
Fig.60　古代住居跡出土土器実測図20(1:3) …… 87
Fig.61　古代住居跡実測図16(1:60) …… 88
Fig.62　古代住居跡出土土器実測図21(1:3) …… 89
Fig.63　古代住居跡出土土器実測図22(1:3) …… 91
Fig.64　古代住居跡出土土器実測図23(1:3) …… 92
Fig.65　古代住居跡実測図17(1:60) …… 93
Fig.66　古代住居跡出土土器実測図24(1:3) …… 95
Fig.67　古代住居跡実測図18(1:60) …… 96
Fig.68　古代住居跡実測図19(1:60) …… 97
Fig.69　古代住居跡出土土器実測図25(1:3) …… 99
Fig.70　古代住居跡実測図20(1:60) …… 101
Fig.71　古代住居跡実測図21(1:60) …… 103
Fig.72　古代住居跡出土土器実測図26(1:3) …… 104
Fig.73　古代住居跡出土土器実測図27(1:3) …… 105
Fig.74　古代住居跡出土土器実測図28(1:3) …… 106
Fig.75　古代土壙実測図1(1:60) …… 108
Fig.76　古代土壙出土土器実測図1(1:3) …… 110
Fig.77　古代土壙実測図2(1:60) …… 111
Fig.78　古代土壙実測図3(1:60) …… 113

Fig.79　古代土壙出土土器実測図2(1:3) …… 114
Fig.80　古代土壙出土土器実測図3(1:3) …… 115
Fig.81　古代土壙実測図4(1:60) …… 117
Fig.82　古代土壙実測図5(1:60) …… 119
Fig.83　古代土壙実測図6(1:60) …… 120
Fig.84　古代土壙出土土器実測図4(1:3) …… 122
Fig.85　井戸実測図(1:40) …… 127
Fig.86　井戸111出土土器実測図1(1:3) …… 128
Fig.87　井戸111出土土器実測図2(1:3) …… 129
Fig.88　古代住居の規模と類型 …… 135
Fig.89　住居跡23出土鉄製紡錘車実測図(1:2) …… 138

図 版 目 次

巻頭図版１　（１）調査区全景
　　（２）調査区全景
巻頭図版２　（１）Ｆ－Ｈ、１－５区
　　（２）Ｄ－Ｈ、３－７区
巻頭図版３　（１）Ｂ－Ｊ、５－９区
　　（２）Ａ－Ｃ、３－８区
巻頭図版４　（１）住居跡81
　　（２）住居跡26
PL. 1　（１）10次調査区石器出土状況
　　（２）10次調査区(南から)
PL. 2　（１）住居跡64、67（西から）
　　（２）住居跡49(西から)
PL. 3　（１）土壙12（南から）
　　（２）土壙13（北から）
PL. 4　（１）土壙15（北から）
　　（２）土壙40（西から）
PL. 5　（１）土壙74（南から）
　　（２）遺構８（南から）
PL. 6　（１）遺構58（西から）
　　（２）住居跡４（西から）
PL. 7　（１）住居跡５（南から）
　　（２）住居跡９（東から）
PL. 8　（１）住居跡６、16（南から）
　　（２）住居跡20、土壙21（北から）
PL. 9　（１）住居跡23出土紡錘車
　　（２）住居跡25（西から）
PL.10　（１）住居跡26（南から）
　　（２）住居跡26竈（南から）
PL.11　（１）住居跡33（南から）
　　（２）住居跡36（西から）
PL.12　（１）住居跡53、54（南から）
　　（２）住居跡60、61（南から）
PL.13　（１）住居跡65、66（西から）
　　（２）住居跡87（東から）
PL.14　（１）住居跡88煙道（北から）
　　（２）住居跡90（東から）
PL.15　（１）住居跡96、97、101（東から）
　　（２）住居跡100（南から）

PL.16　（1）住居跡102（北から）
　　（2）住居跡114（西から）
PL.17　（1）住居跡114竈（南から）
　　（2）8次調査区検出住居(東から)
PL.18　（1）土壙30（東から）
　　（2）土壙43（西から）
PL.19　（1）土壙48（北から）
　　（2）土壙68（東から）
PL.20　（1）円形周溝状遺構112（西から）
　　（2）井戸111（南から）

表　目　次

Tab.1　麦野雑餉隈遺跡群の既往の調査一覧 …… 5
Tab.2　住居跡一覧 …… 134
Tab.3　土壙一覧 …… 136

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

1993年度、福岡市建築局より、博多区新和町に所在する市営住宅の建て代えに伴って、当該地内の埋蔵文化財の有無についての事前調査依頼が出された。申請地は周知の文化財包蔵地である雑餉隈遺跡内に位置し、また申請面積も広大であるため、埋蔵文化財課では事前調査依頼を受けて93年８月19日および11月11日に試掘調査を行なった。その結果申請地内には遺構が良好な状態で検出された。この成果をもとに協議を行ない、申請地全域について発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、建築局の令達事業として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなった。買収および解体の関係から、調査は３年度にわたる結果となった。各次調査の地番、調査期間、調査面積については、下に記した表の通りである。

５次調査が行なわれた1994年は、福岡市は記録的な渇水と猛暑に襲われた。調査にも多大な影響が出たが、参加者に大きな事故も無く終了できたことは幸いであった。また調査期間中には、福岡市新採用職員の職場実習、那珂南小学校生徒の見学会、韓国高麗大学の学生受入れ、埋蔵文化財センター主催の体験発掘などの活動に利用され、いくらか文化財保護の市民への理解に資するところがあったと考える。

2．調査体制

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花剛（前）、町田英俊（現）

調査総括　埋蔵文化財課　課長　折尾学（前）　荒巻輝勝（現）

第２係長　山崎純男（前）　山口譲治（現）

調査庶務　埋蔵文化財課第１係　吉田麻由美、西田結香、浅原千晶（前）　河野淳美（現）

調査担当　埋蔵文化財課第２係　宮井善朗

調査補助　井上繭子（九州大学　現福岡市教育委員会）平田こずえ、今泉博子　鈴賀智幸（別府大学）
岩崎秀幸（西南学院大学）　本田浩二郎（熊本大学　現福岡市教育委員会）　川野博之
田中大介　益永武史（熊本大学）　成在賢　朴宰奭　鄭寛鎬　沈孝貞　姜静媛（高麗大学）
李準浩（東京大学）

調査作業　野村道夫　太田正顕　田原房五郎　楠林司朗　吉田米男　三浦力　平田穂積　中川敏男
小原義行　品川厚　西本弘　池田省三　越智信孝　大谷政道　江下和彦　吹春憲治
藤川繁昌　大津山晴夫　右寺栄次　藤野保夫　鳥井原良治　乙部武彦　岡野裕　木原篤
杉本和暁　相良大輔　中河秀崇
森田祐子　古賀典子　持丸玲子　森園弘子　山村スミ子　吉田恭子　鍋山治子　大石紀子
舎川キチエ　田中トミ子　岩本三重子　藤野信子　佐藤志津　福場真由美　北条こずえ
藤野トシ子　中川原美智子　有田恵子　澄川アキヨ　中村フミ子　播磨千恵子
森山キヨ子　石川洋子　林厚子　平田浩美　福田朱美　中池佐和子　村上真由美
内田直美　田之上裕子　池端真小子　石原華留奈　篠原恵子　田中花子　坂本俊子
綟川ゆかり　穴井加菜子　池田伸子　柳谷美佳　荒川直子

（５、８、10各次調査の総勢）

整理作業　中暢子　大石加代子　林由紀子　太田順子　武田祐子　秋丸亜佐子　森田めぐみ
谷口美由紀　西岡由美子　水町志保

また調査時の条件整備等に関して福岡市建築局に多くのご配慮を賜った。また調査、整理中には多

くの方々の教示を受けた。感謝申し上げるとともに、本報告に十分生かせていないことをお詫びする次第である。

（5次調査）

遺跡調査番号	9407	遺跡略号	ZSK－5		
調査地地番	福岡市博多区新和町1丁目2～6				
開発面積	6,400㎡	調査対象面積	6,400㎡	調査面積	4,784㎡
調査期間	1994年4月11日～10月18日	分布地図番号	13-0054		

（8次調査）

遺跡調査番号	9550	遺跡略号	ZSK－8		
調査地地番	福岡市博多区新和町1丁目7の一部				
開発面積	同上	調査対象面積	同上	調査面積	394.5㎡
調査期間	1996年2月2日～3月27日	分布地図番号	13-0054		

（10次調査）

遺跡調査番号	9670	遺跡略号	ZSK－10		
調査地地番	福岡市博多区新和町1丁目7の一部				
開発面積	同上	調査対象面積	同上	調査面積	337㎡
調査期間	1996年2月14日～3月31日	分布地図番号	13-0054		

Ⅱ．雑餉隈遺跡周辺の地理的、歴史的環境

雑餉隈遺跡は、東を大野城市、西を春日市に挟まれた福岡市の最南端に位置する。地理的には春日丘陵の東辺にほぼ平行して伸びる台地上に立地する。この台地は北西方向から多くの谷にが入り込んでおり、数条の舌状台地状をなす。この舌状台地ごとに、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡、麦野Ａ～Ｃ遺跡などに分けられているが、その地形的な境界は判然としない。今仮にＪＲ南福岡駅、西鉄雑餉隈駅周辺に展開する南八幡遺跡、雑餉隈遺跡、麦野Ａ～Ｃ遺跡の総称として、麦野・雑餉隈遺跡群という名称を用いたい。以下この遺跡群の歴史的展開について略述する。

麦野•雑餉隈遺跡群で最も遡る遺物としては、麦野Ａ１次、麦野Ｂ３次、雑餉隈５次、10次調査地点で旧石器時代の石刃、剥片が出土しており、広い範囲に遺跡が分布することが明らかになりつつある。

これに続く縄文時代の遺構、遺物についてははっきりしない。麦野Ｃ遺跡３次地点では該期の石鏃が出土している。但しこれも後世の撹乱からの出土品である。遺構としては最近、麦野Ｂ３次、南八幡６次、７次の各調査地点で、該期の落とし穴ではないかという遺構が検出されている。ただ時期を明らかにする遺物に乏しく、確定はできないようである。この他、縄文時代については晩期刻目突帯文期に至るまで、確実な遺構、遺物に恵まれていない。

弥生時代に入ると、遺構、遺物とも増加が見られる。既に前期段階には、雑餉隈５次地点から円形住居、住居跡と考えられる方形土壙、方形の貯蔵穴等が検出されている。円形住居の中には径８ｍ程の比較的大形のものを含み、規模の大きい拠点集落があった可能性もあろう。中期には雑餉隈５次地点で方形住居跡と考えられる遺構が見られる程度で、遺跡群全体でも遺構は少ない。後期には雑餉隈５次地点では遺構が見られなくなり、他の地点でも遺構が希薄であるが、南八幡遺跡５次地点では、方形の住居が検出されている。

古墳時代に入っても遺構、遺物は不明な点が多い。とくに前期、中期の遺構、遺物は全くといっていいほど見られない。後期に入ると、南八幡遺跡２次、３次地点で住居跡が検出されている。隣合う調査区である２次、３次地点合わせて７基の住居が見つかっており、一定の広がりを持つ集落が展開していたことが推測される。しかしこの集落は奈良時代の大規模な集落には直接つながっていかないようである。

７世紀末から８世紀にかけては大きな画期である。雑餉隈遺跡９次地点では７世紀末ないし８世紀初頭に、方形の配置を持つ大形建物群が現われる。その規模と配置は官衙的性格を思わせるものがある。８世紀前半から後半に至ると集落は遺跡群全域で爆発的に増加する。各遺跡群どの地点を掘っても、該期の住居に当らないことがないと言っても過言ではない。これらの住居は例えば雑餉隈遺跡５次、８次、10次地点合わせて5500㎡の中に58基と、かなりの高密度で分布する。当然遺跡全体としては粗密はあったろうが、それにしても該期の村落景観は相当壮観なものがあったと想像される。この集住の契機としては大宰府、水城、大野城などの国家的規模の土木事業ないしはその維持、営繕に関るものと推測していたが、雑餉隈遺跡９次地点の大形建物の検出により、その可能性は高まったように思われる。但し、８世紀後半にはこれら国家的構築物の創建はほぼ終息していたであろうから、そのための集住とは考えがたい。

なおこれらの集落は９世紀に下る物はごくわずかである。遺跡群内では雑餉隈５次のピットなどからわずかに遺物が見られ、掘立柱建物などの存在が推定される。麦野Ａ遺跡３次調査で井戸が１基見つかっている程度である。その後の中世前半期も遺構は希薄であるが、中世後半期では麦野Ａ遺跡１次地点で、15世紀代の集落が検出されている。

1．雑餉隈遺跡　2．南八幡遺跡　3．麦野C遺跡　4．麦野A遺跡　5．麦野B遺跡　6．井相田B遺跡　7．井相田A遺跡　8．井相田C遺跡　9．仲島遺跡　10．高畑遺跡　11．板付遺跡　12．諸岡B遺跡　13．笹原遺跡　14．三筑遺跡　15．須玖遺跡群　16．岡本遺跡群　17．下月隈C遺跡　18．立花寺B遺跡　19．立花寺遺跡　20．金隈遺跡　21．金隈上屋敷遺跡　22．影ヶ浦遺跡　23．持田ヶ浦古墳群E群　24．堤ヶ浦古墳群　25．持田ヶ浦古墳群　26．御陵古墳群

Fig. 1 雑餉隈遺跡周辺の遺跡（1:25000）

遺　跡	次数	所　在　地（すべて博多区）	概　　要	報告書
雑餉隈	1	新和町2丁目10-2、6	奈良時代の土壙	276
雑餉隈	2	西春町1丁目17-27	奈良時代集落	409
雑餉隈	3	西春町1丁目18	奈良時代集落	409
雑餉隈	4	新和町2丁目13	奈良時代土壙、掘立柱建物	409
雑餉隈	5	新和町1丁目2～6	弥生時代、奈良時代集落	569(本書)
雑餉隈	6	新和町2丁目1-35	奈良時代土壙、掘立柱建物	528
雑餉隈	7	新和町2丁目14-1	奈良時代土壙、掘立柱建物	569(本書)
雑餉隈	8	新和町1丁目7	奈良時代集落	569(本書)
雑餉隈	9	元町3丁目1	奈良時代大形掘立柱建物	570
雑餉隈	10	新和町1丁目7	奈良時代集落、旧石器	569(本書)
南八幡	1	南八幡2丁目8-5	古墳時代溝	489
南八幡	2	寿町2丁目119-1	古墳時代、奈良時代集落	128
南八幡	3	寿町2丁目4-12	古墳時代、奈良時代集落	181
南八幡	4	寿町2丁目86-1、2	時期不明掘立柱建物	277
南八幡	5	寿町2丁目84、85-1	弥生時代後期住居	441
南八幡	6	元町1丁目19-4	奈良時代集落	501
南八幡	7	元町1丁目20-2	奈良時代集落	528
南八幡	8		奈良時代集落	
麦野A	1	麦野1丁目28-56	中世後期集落	107
麦野A	2	麦野5丁目		
麦野A	3	麦野4丁目14-23	奈良時代、中世集落	275
麦野A	4	麦野1丁目27-3、5	平安前期井戸	409
麦野A	5	麦野1丁目27-1、2	古代井戸	
麦野B	1	麦野4丁目26-32	奈良時代、中世井戸	164
麦野B	2	南本町31-1、2	奈良時代集落	
麦野B	3	南本町2丁目3	奈良時代集落　旧石器	568
麦野B	4	南本町2丁目	奈良時代集落	568
麦野C	1	麦野6丁目11-4	奈良時代集落　旧石器	361
麦野C	2	銀天町2丁目4	奈良時代集落	
麦野C	3	銀天町3丁目14	奈良時代集落	501
麦野C	4	銀天町2丁目3-6	奈良時代集落	

Tab. 1 麦野、雑餉隈遺跡群の既往の調査一覧

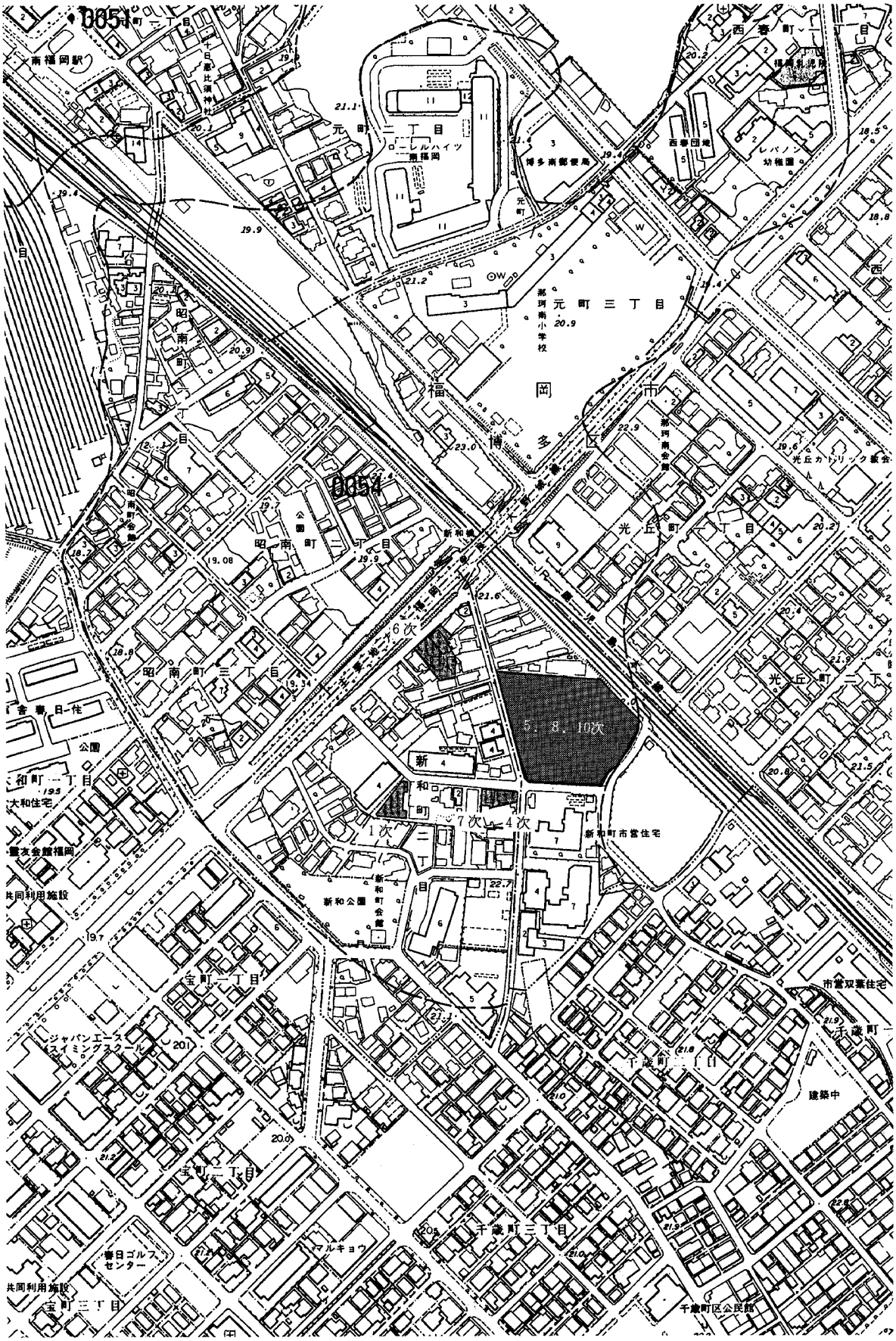


Fig. 2 調査区位置図（1:4000）

Ⅲ. 調査の記録

1. 概　要

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代前期～中期および古代に属する住居跡、土壙、貯蔵穴、井戸、溝、ピット等である。この他の時代の遺構は全くといって良いほど検出されておらず、遺物もまた、遺構覆土中から出土し、整理中に確認した旧石器を除くとほとんど見られない。つまり弥生時代後期～奈良時代初頭にかけては断絶が見られるのである。各時代の遺構の数などは各説において述べることとし、ここでは調査日誌に従い、5次調査の調査過程を略述しておく。

表土剥ぎは前年度事業として3月に行なっている（公共事業事前審査担当)。従って、調査開始日の4月11日からただちに遺構検出を始めた。大形の撹乱が多く、また調査区が広いため、5月18日までかかった。その間測量用の基準杭を配置し、平板測量を並行して行なう。5月19日より住居跡、土壙の掘り下げを始める。5月30日、住居跡23から鉄製紡錘車が出土した。6月末より掘り下げと並行して遺構配置図の作成にかかり、8月4日、気球による全体写真撮影を行なった。ほぼ同時に実測も終了した。8月8日より後半部の表土剥ぎを始めた。同時に6次調査を並行して行ない、これには埋蔵文化財課加藤隆也氏の応援を得た。後半部は表土剥ぎ、撹乱除去の後8月23日から遺構検出を始めた。8月26日から掘り下げ、平板測量を行ない、9月13日からは遺構配置図の作成にも取りかかった。9月24日にはほぼ掘り下げを完了し、30日に気球による全体撮影を行なった。その後図面の完成と、補足的な調査を行ない、10月18日に終了した。

調査中、4月には福岡市役所新規採用職員の職場研修受入れ、5月21日には、近隣の那珂南小学校生徒による現場見学、7月には埋蔵文化財センター主催の体験発掘等の普及事業を行なった。また6月末日～7月中旬には韓国高麗大学学生の発掘研修受入れを行なった。夏季休暇時には別府大学、西南学院大学、熊本大学、東京大学、大谷女子大学等多数の考古学専攻学生の参加を得た。

調査区の座標は、西側道路に平行する任意の人孔2点を基点として設定した（Fig. 3）。磁北とは8.5°西偏する。同一事業である5、8、10次は勿論、6次調査も同じ座標で調査している。

2. 先土器時代の調査

（1）10次調査と出土遺物（Fig. 4、7）

5次調査出土遺物中に、ナイフ形石器等先土器時代の定型石器があること、雑餉隈遺跡に隣接する麦野B遺跡3次調査で、先土器時代のナイフ形石器文化期の包含層が良好な状態で検出されたこと、雑餉隈遺跡・麦野B遺跡の旧地形が近似するとともに土層堆積状態も類似していることなどから、本調査地においても先土器時代の文化層の存在が予想できたため、調査区を設定し、ローム層中の調査を実施した。

土層堆積状況は、上から下へ盛土・耕作土・黒色土（古代包含層）・黒色～暗褐色土（木根等による撹乱）・黄褐色～褐色ロームとなっており、標高22.75m前後のローム上面で古代の遺構を検出した。本調査においては、ローム上面下18～34cmの標高22.41m～22.64mで3点の遺物が出土した。

1001は古銅輝石安山岩製の横長剥片の片方端部片で、主要剥離面から折断されて廃棄されたものといえよう。1002は頁岩製の石核で、表面に6回の剥出面が残っているが調査時の破損が大きく、剥出角度はわからない。なお、裏面は自然面である。1003は花崗岩製の敲打器？で、片方端部に打痕がみられるが、人為的なものであると判断できない。ただし、ローム中には含まれない礫なので、何らかの形で運び込まれたものであり、先土器時代の遺物であるとはいえる。

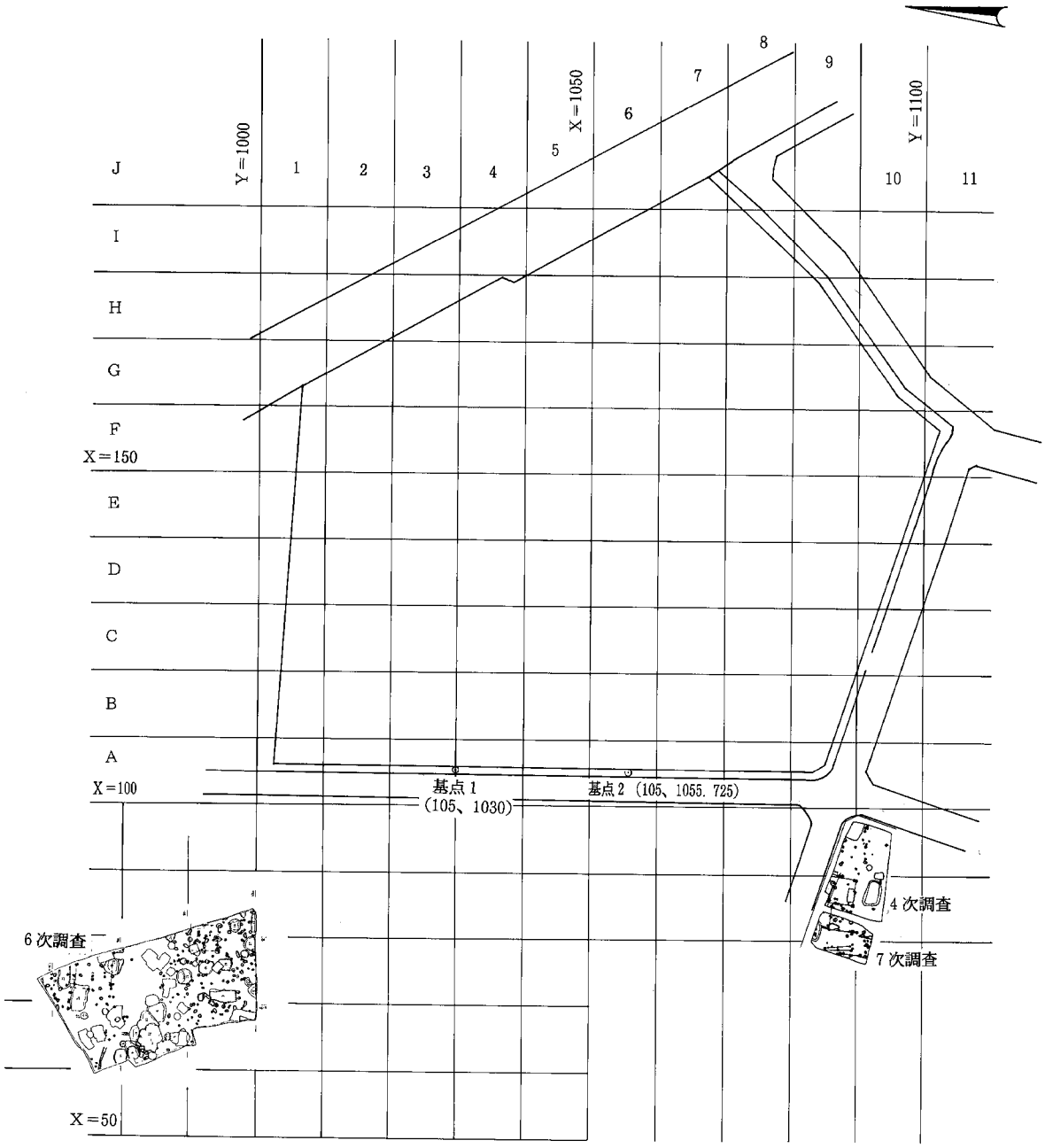


Fig. 3 調査区割図 (1:1000)

（2） 5次調査出土遺物

先土器時代石器の認定

5次調査は、弥生時代と古代の竪穴住居跡群などからなる集落の様相把握をおもな目的として調査を実施したため、ローム中の先土器時代の調査は実施しなかった。したがって以下に述べる出土石器は、弥生時代前期の竪穴住居跡・土壙、古代の竪穴住居跡・土壙・柱穴などの遺構から出土したものおよび遺構検出作業中に出土したものを、先土器時代の遺物として認定したものである。

認定にあたっては、出土し、取り上げられた石製品をすべて観察した。観察にあたっては、ナイフ形石器・台形石器・尖頭器・細石刃核・細石刃など先土器時代の定型石器があるかないかをまず調べた。その結果、ナイフ形石器と細石刃を確認した。次に、ナイフ形石器と弥生時代の遺構から出土した弥生時代の打製石器の器面の風化状態を比較観察し、剥離加工技術を参考としながら器面の風化が進んだものを先土器時代の遺物として認定した。先土器時代の定型石器として、ナイフ形石器2点・細石刃1点があり、認定遺物は28点となった。

認定遺物28点すべてが先土器時代の遺物であると断定できるかというと否である。中には火を受けたものもあるが、弥生時代前期の石器とは、器面の風化状態および剥離加工技術が異なっており、少なくとも縄文時代前期以前の遺物であるとはいえよう。

先土器時代の遺物認定は、黒曜石製のものを行ない。古銅輝石安山岩製のものは認定しなかった。また、10次調査出土では、1003のような敲打器？が出土しており、弥生時代・古代の各遺構からも花崗岩製の礫が多数出土しているが、帰属時期認定は不可能であり、先土器時代遺物として認定しなかった。後で述べるが、明らかに先土器時代遺物を弥生時代石器として再生したものがあるが、ここでは触れないことにする。

出土遺物（Fig. 5、6）

1017・1018はナイフ形石器で、1017は柱穴1434、1018は竪穴住居跡55から出土した。1017は漆黒の黒曜石製の先端に自然面を残す剥片を素材とし、素材打点を先端とし、片側縁辺に主要剥離面から刃潰し加工を加えているが他側縁が欠失しているため全体の形状はわからない。重さ2.7gを測る。1018はハリ質安山岩製の横長剥片を素材として、素材打点側および他側縁辺の一部に主要剥離面から刃潰し加工を加え基部を造り出し、残りの縁辺を刃部として残し、ペンナイフ型に整形している。先端の一部を破損し、重さ1.4gを測る。

1009は細石刃で、竪穴住居跡81出土である。黒曜石製で縁辺の一部に二次加工がみられる。長さ4.6cm、幅0.9cm弱、最大厚0.3cm弱、重さ0.71gを測る。

1005・1008・1015・1019・1025は黒曜石製の削器で、1005は土壙12、1008は土壙24、1015は土壙99、1019はE－6区、1025は竪穴住居跡49の出土である。1005は幅広の表皮を大きく残す剥片を素材とし、自然面がない縁辺に表裏から細かい二次加工を加え刃部としている。長さ4.4cm、最大幅3.2cm、最大厚0.8cm弱、重さ14.8

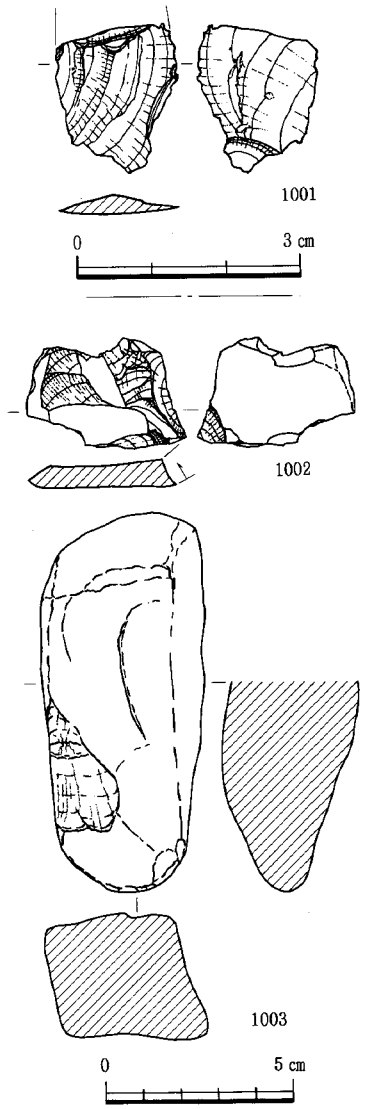


Fig. 4 10次調査出土石器実測図

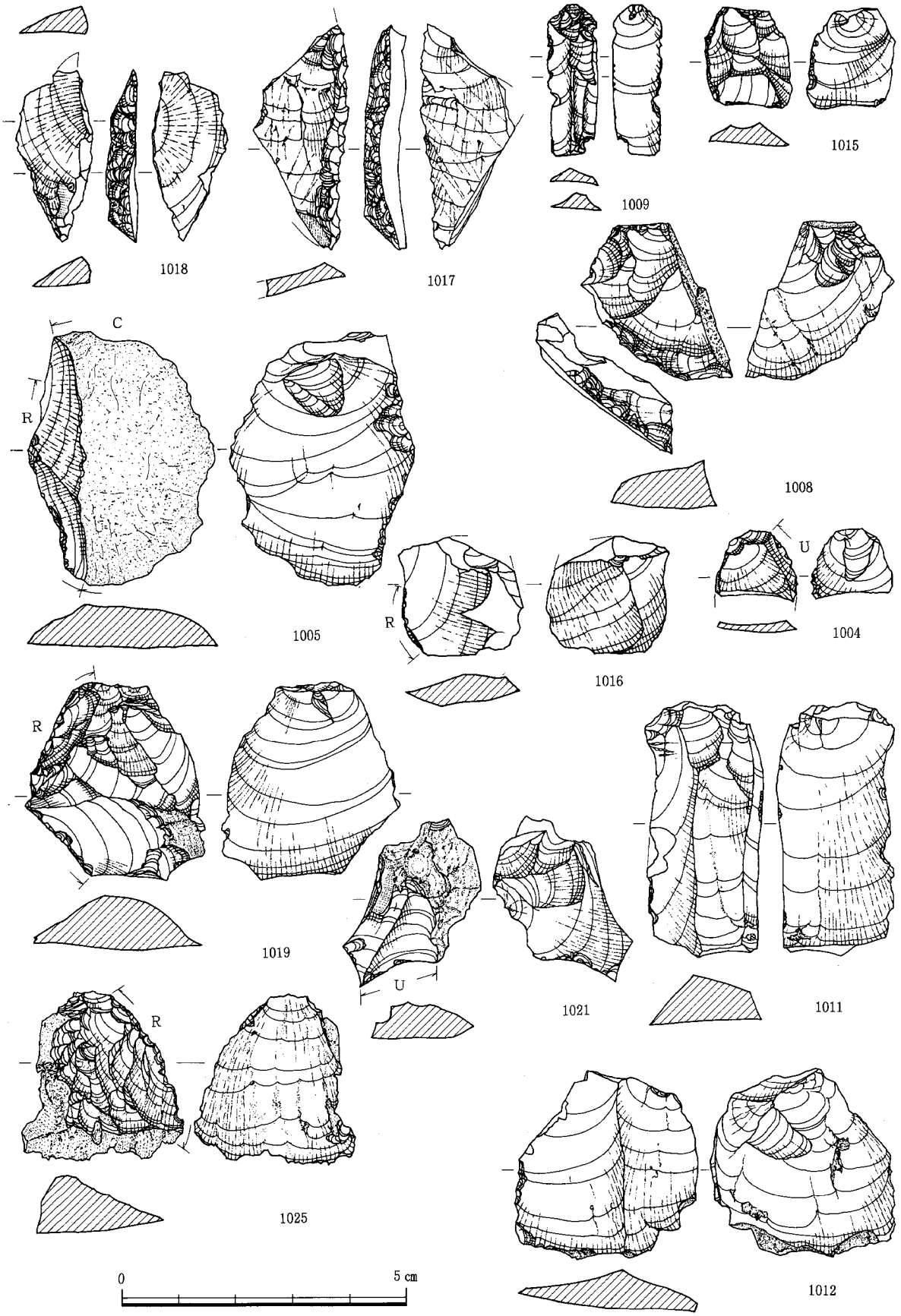


Fig. 5　5次調査出土先土器時代石器実測図1

g強を測る。1008は不定形剥片を素材とし、素材先端に主要剥離面から角度のある刃潰し加工に近い二次加工を加えており、先刃掻器状をなしている。重さ4.8g弱を測る。1015は寸詰まりの剥片を素材とし、左側縁に主要剥離面から刃潰し加工に近い二次加工を加え、台形石器状をなしている。細石刃文化期のものか。長さ1.9cm、幅1.5cm、最大厚0.4cm、重さ1.1g強を測る。1019は比較的分厚い剥片を素材として、左側縁に主要剥離面から二次加工を加え刃部を造り出している。長さ3.4cm弱、幅3.1cm、最大厚1cm弱、重さ7.9g強を測る。1025は先端および片側表面に表皮が残る剥片を素材とし、他縁辺に主要剥離面から二次加工を加え、刃部を造り出している。重さ7.1gを測る。

1003・1004・1011・1012・1016・1021は使用痕がみられる剥片石器で、1021がハリ質安山岩製、他は黒曜石製である。1003は土壙47、1004は土壙10、1011は土壙110、1012は竪穴住居跡9、1016は柱穴1434、1021は柱穴1430の出土である。1003は幅1.4cmの片側に表皮を残す剥片で、長さ2cmの所で主要剥離面から折断し、折断部に一部二次加工を加え、左縁辺に刃こぼれがみられる。1004は主要剥離面から折断した剥片基部で右縁辺に刃こぼれがみられる。1011は幅2cm、長さ4.5cm、最大厚0.8cmを測る典型的な縦長剥片で、両側縁には使用による刃こぼれがみられる。ナイフ形石器文化期のものといえよう。1012は幅3.2cm、長さ3.4cmを測る幅広の剥片で、左縁辺に刃こぼれがみられる。本遺跡出土遺物のなかでもっとも風化が進んでいる遺物であるが、これは竪穴住居跡カマドからの出土であり火を受けたためと考えられる。1016は寸詰まりの剥片の左縁辺に主要剥離面から細かい二次加工を加え、使用による刃こぼれもみられる。1021は表皮を大きく残す不安定剥片で、嘴状をなす端部に、使用によると考えられる刃こぼれがみられる。彫器的な用途をもつか。

1001・1002・1006・1007・1010・1013・1014・1020・1022～1024の11点を剥片で、図化しなかった剥片が他に4点あり、計15点を先土器時代遺物として認定した。1010・1020はハリ質安山岩製、他は黒曜石製である。1001は竪穴住居跡71、1002は竪穴住居跡64、1006は土壙12、1007は土壙41、1010は竪穴住居跡81、1013は土壙95、1014は竪穴住居跡102、1020は柱穴1275、1022は柱穴1235、1023は柱穴1044、1024は土壙78の出土である。1001は右側縁に表皮を残す縦長剥片で、長さ2.3cmの所で主要剥離面から折断されている。ナイフ形石器文化期のものか。1002は先端に表皮が残る剥片で、主要剥離面から折断され、左折断部に3面の樋状剥離がみられ嘴状をなしているが意図的なものであると断定できない。1006は表皮を大きく残す剥片である。1007は左半分に表皮を残す剥片で、右縁辺が約半分欠失している。1010は縦長剥片の基部片、1013は左半分に表皮を残す剥片で、打面は破損している。1014は左縁辺に表皮を残し、主要剥離面から折断された先端部である。1020は打面変移がみられる剥片で、打面左側に樋状剥離がみられる。1022は円礫分割片で最大厚1.1cmを測る。1023は剥片打面に表皮から二次加工を加えており石器の可能性が高い。1024は先端に表皮を残す剥片である。

1026・1027は黒曜石製の石核で、1026は竪穴住居跡98、1027は柱穴1216出土である。1026は角礫の分割片を素材とし、表皮面を打面とし数条の剥出痕がみられる。器面の風化は進んでおり先土器時代遺物としたが、剥出技術的には弥生時代前期によくみられるものであり、弥生時代前期の遺物の可能性もある。1017は半割円礫素材とし、半割面に各方向から平坦剥離が加えられており、剥片剥出用の打面を形成し、放棄された母核といえよう。未図化の剥片3点は、竪穴住居跡67、土壙45・47から出土した。

以上のほか、竪穴住居跡22から黒曜石製削片1点が出土している。

(3) 出土先土器時代遺物について

出土層位

10次調査では、新期上部ローム層のハード層中から剥片・石核・敲打器？各1点が出土した。本遺

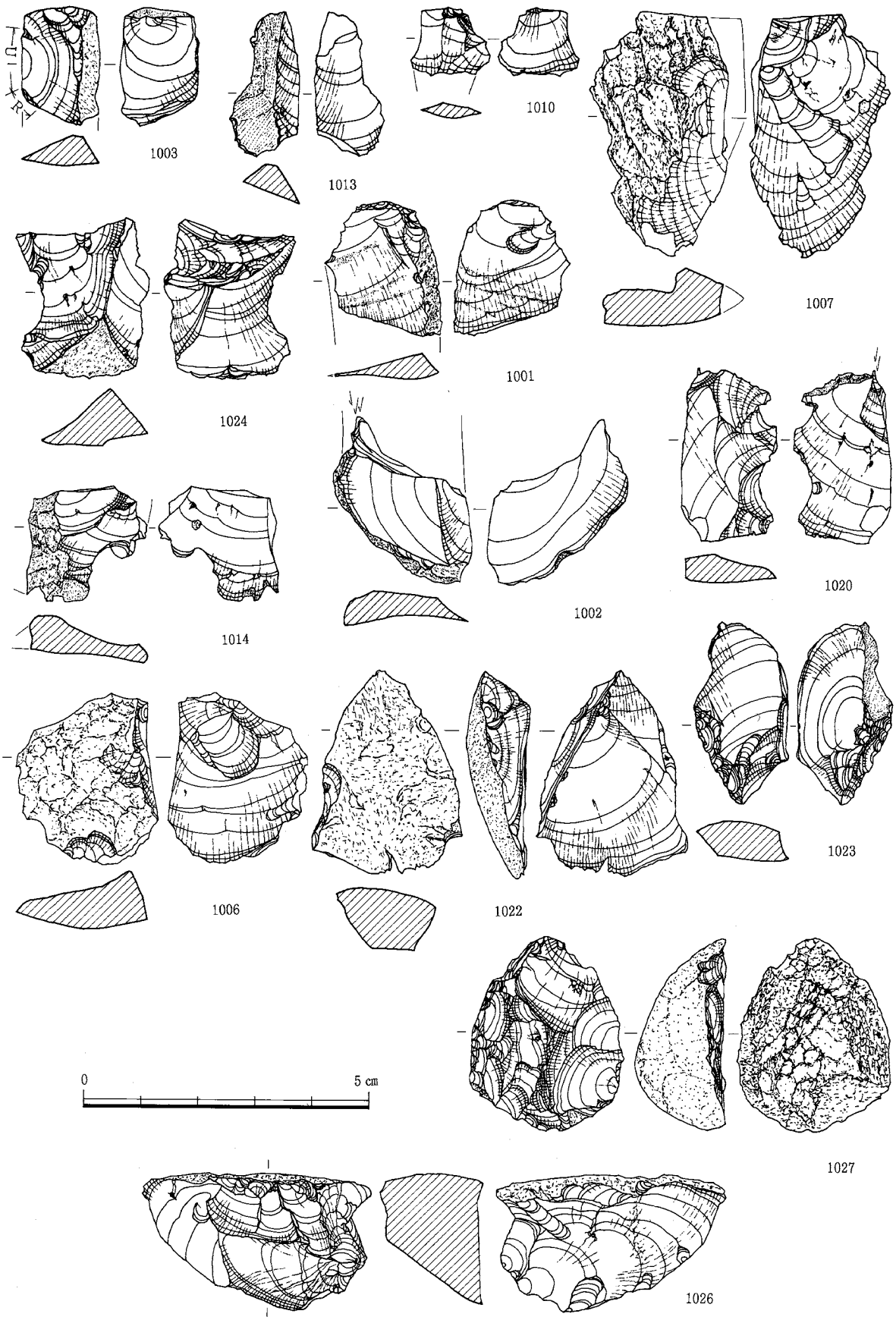


Fig. 6　5次調査出土先土器時代石器実測図 2

跡周辺では、麦野Ｂ遺跡３次調査・麦野Ｃ遺跡・諸岡遺跡・諸岡館址遺跡・那珂遺跡で新期上部ローム層のハード層の層中から先土器時代ナイフ形石器文化期の文化層が良好な状態で検出される。また、井尻Ｂ遺跡・諸岡遺跡では、新期上部ローム層のソフト層とハード層の境界で先土器時代細石刃文化期の文化層が良好な形で検出されている。

５次調査では、弥生時代前期および古代の遺構中からナイフ形石器２点、細石刃１点、削器５点、使用痕がある剥片石器６点、剥片14点、削片１点、石核２点が出土した。なお、８次調査においても先土器時代遺物の存在が予想されたため、５次調査出土遺物と同様の確認・認定作業を行なったが、先土器時代のものと認定できる遺物はなかった。福岡平野を中心とする北部九州地域では、弥生時代から古代にかけの遺跡が多く、これらの各遺構はロームを基盤としているため、先土器時代の文化層を破壊している場合がある。したがって先土器時代遺物が弥生時代以降の遺構から出土する例がよくみられる。５次調査の竪穴住居跡81は、黒曜石製の石鏃・石鏃未製品・剥片・削片・石核が多量に出土しており、本遺跡集落の石鏃等剥片石器製作者の住居と考えられる。同住居跡では、出土石鏃中に1060・1075等先土器時代の石器を再生したものがあり、石鏃等製作のため黒曜石を素材として集め貯蔵していたと考えられる。この住居跡の場合は、先土器時代遺物は持ち込まれた可能性が高く、近い位置で出土したものとはいえないが、特殊なケースといえる。弥生時代の竪穴住居跡とか土壙出土の先土器時代遺物は他所から持ち込まれたものがあるかもしれないが、甕棺墓・柱穴から先土器時代遺物が出土した場合は、遺構の性格上ほぼ近い位置に包含されていたと推定できる。したがって５次調査出土の先土器時代遺物は、少なくとも本調査地内およびごく近い範囲に包含されていたといえる。５次調査と同様の先土器時代出土遺物がある遺跡としては、本調査地周辺では、板付遺跡・那珂遺跡・比恵遺跡各調査地があり、これらの遺跡も先土器時代の遺跡であるといえよう。

用　材

10次調査においては、古銅輝石安山岩・頁岩・花崗岩を素材とした石製品各１点が出土した。しかし、先土器時代石器認定の項で述べたように、５次調査出土先土器時代石製品は、良好な包含層から出土したものではなく、弥生時代および古代の各遺構から出土したものを認定したものである。５次調査出土の古銅輝石安山岩製石製品には、先土器時代の定形石器がなく、石鏃・尖頭器・掻器・石錐といった弥生時代前期の定型石器がある。削器７点・剥片12点・削片９点・石核１点のうち数点は、先土器時代石製品の可能性があるものの、剥離加工技法からも先土器時代のものとする積極的な根拠がないため弥生時代に帰属させた。頁岩を素材とするものは、５次調査の古代の遺構から円錐形の縦長剥片を連続剥出した石核が１点出土しているのみである。これも、先土器時代のものとする積極的な根拠がないため認定しなかった。５次調査出土先土器時代遺物は、ハリ質安山岩を素材とする４点のほかは、すべて黒曜石を素材としている。黒曜石は、漆黒の気泡の少ない良質のものが用いられており、遺存表皮の観察から角礫と円礫がほぼ同じ割合で使用されていることがわかる。肉眼的な観察では、黒曜石円礫素材は、長崎県松浦市星鹿半島産と近似しているといえる。角礫素材は佐賀県伊万里市腰岳産とは異なるが、西北九州か壱岐島産のものといえよう。

10次調査出土石製品および５次調査出土先土器時代石製品の素材は、34点中、黒曜石製27点、ハリ質安山岩製４点、古銅輝石安山岩製・頁岩製・花崗岩製各１点である。出土石製品の80％弱は、黒曜石が占め、12％弱がハリ質安山岩製である。以上のように、漆黒の黒曜石が、出土石製品の80％前後の用材を占めるあり方は、諸岡遺跡・麦野Ｂ遺跡・麦野Ｃ遺跡・那珂遺跡など本調査地の周辺の遺跡や日ノ岳遺跡・度島中山遺跡など西北九州のナイフ形石器文化期の遺跡のあり方と共通しているといえる。

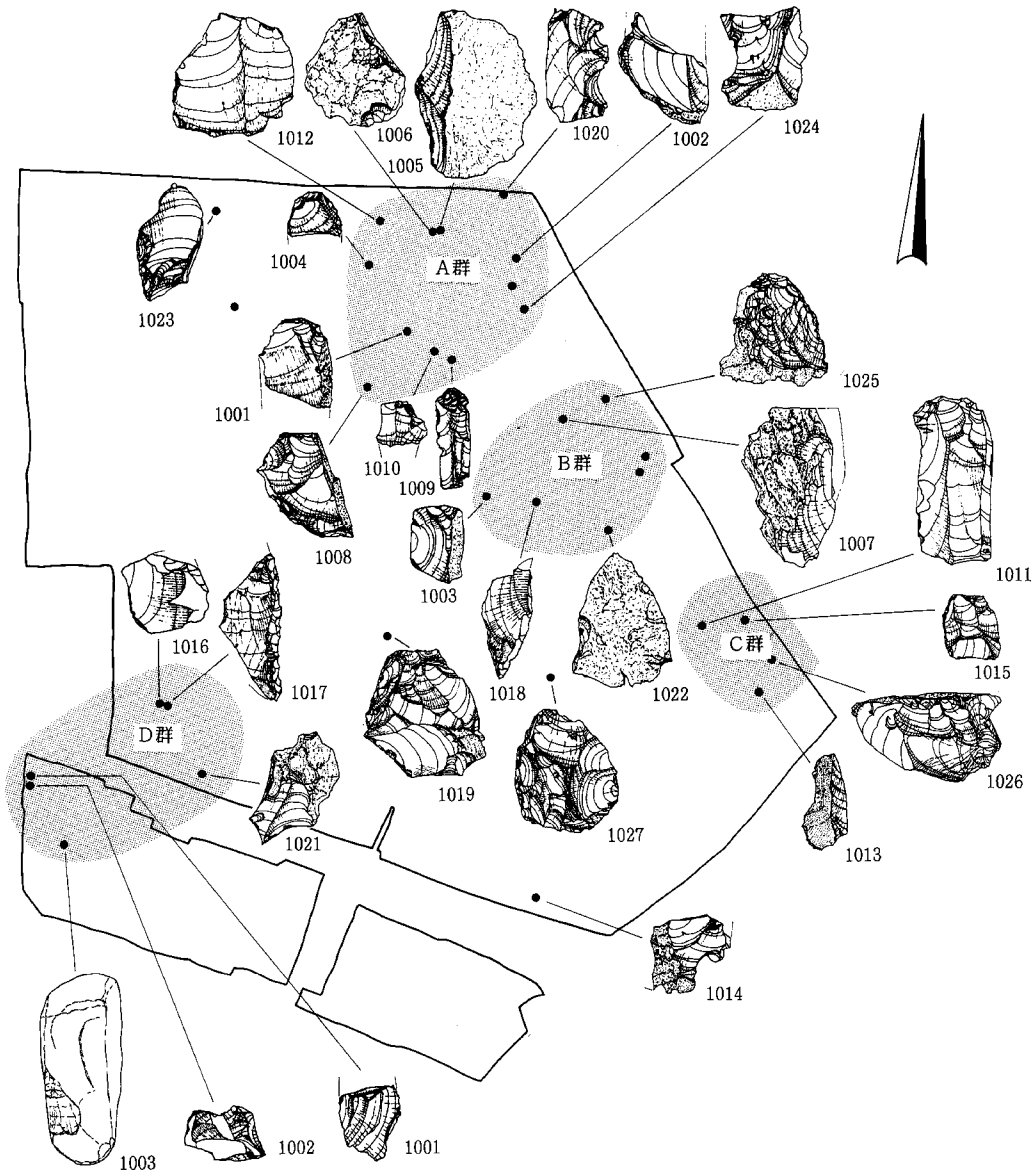


Fig. 7　先土器時代石器出土分布状況

遺物分布（Fig. 7）

5次調査出土先土器時代遺物が、出土遺構中か近接地に包含されていたとして、出土地を点記したものがFig. 7である。4ヶ所の遺物集中区が結果的にでき上がったので、これをA～D群とした。以下、個々にみていくことにする。

A群は竪穴住居跡9・64・67・71・81、土壙10・12・24、柱穴1275から出土した石製品の集中区である。石製品の構成は、細石刃1点、削器2点、剥片石器（U-Flake）2点、剥片7点となり、ナイフ形石器・細石刃両文化期の遺物が混在している。A群は4群の中ではもっとも原位置から離れている石製品の集中区である。B群は竪穴住居跡49・55、土壙41・45～47、柱穴1235から出土した石製品の集中区である。ナイフ形石器・削器・剥片石器各1点と剥片3点からなり、ナイフ形石器文化期の石組成を示している。C群は竪穴住居跡98・土壙95・110から石核・剥片・削器・剥片石器各1点が出土した。D群は10次調査出土と柱穴1430・1434から出土した石製品の集中区である。遺構の性格上、柱穴出土遺物はほぼ原位置に包含されていたと考えられ、D群は先土器時代の良好な資料の一つといえる。ナイフ形石器・敲打器？・剥片・石核各1点、剥片石器2点からなり、組成不充分であるがナイフ形石器文化期のものといえる。

北部九州では、弥生時代の甕棺墓や各時代の掘立柱建物の遺跡が多く、これらの遺構から先土器時代石器の出土がよくみられる。今回の作業方法で死遺物を生遺物にすることが可能であろう。

3．弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の主な遺構は、円形住居跡５基、方形住居跡１基、方形土壙13基、方形周溝状遺構２基である。土壙の中には住居跡の可能性があるものを含んでいる。弥生時代の遺物は少なく、時期比定については、小片から推定したものや、形態から判断したものもある。検出位置は付図の全体図を参照されたいが、分布的な特徴を記せば、調査区の北東部に集中する傾向があると言えよう。南側の８次、10次調査地点では遺構、遺物とも全く出土していない。

（１）円形住居跡

まず円形を呈する住居跡から述べる。円形住居は調査区のほぼ中央から北側にかけて列状に並んでいる。遺存は総じて悪く、古代住居との差異は顕著である。

住居跡51(Fig.8)

Ｅ５区で検出した。径7.3～7.5ｍを測る。遺存は悪く、10㎝ほどしか残っていない。主柱穴は6本に復元できる。主柱穴の深さは床面から50㎝ほどである。ほぼ中央に深さ20㎝ほどの中央土壙がある。中央土壙の南側に小穴があり、注意を引く。図上北側にある小穴は木の根跡であるが、これに撹乱された小穴があったとすれば、楕円形の中央土壙の両端に小穴を持つ、所謂松菊里タイプの住居になる可能性がある。但し、他の住居との形態的比較から、そうならない可能性もあり、後述する。

出土土器(Fig.9)

図化できる土器は１点に過ぎない。232は甕の口縁部である。端部の大部分を欠き、刻目の有無は不明である。口縁は如意状に開く。口縁部下部に段を持つ。前期後半頃と考えられる。

住居跡59(Fig.10)

Ｅ４区で検出した。古代住居52、古代溝808（1200）に切られる。径４～4.2ｍほどである。中央を撹乱されているため、中央土壙の有無は不明である。また主柱穴も特定できない。西側の壁沿いに、壁溝と思われる小溝が認められる。遺存は悪く、10㎝ほどの深さである。図化に耐える遺物は無い。

住居跡62(Fig.10)

Ｆ４区で検出した。古代住居60、61に東側を切られ、南側を撹乱で破壊される。断面図中に示した土壙を中央土壙と考えれば、径５ｍほどに復元されようか。遺存している北西１／４部分に主柱穴になりそうなピットが見当らず、主柱穴の数と配置は不明である。

出土土器(Fig.9)

273～276はいずれも甕である。273は口縁部片。口縁部は如意状に開き、刻目は端部全面に施す。内外面に指頭痕が認められる。274はほぼ全形が復元できる。口縁部は如意状に強く屈曲して開く。刻目は端部全面に施す。内面には指頭痕が認められる。外面はハケメをナデ消している。口径23.8㎝、器高27.4㎝を測る。275は底部破片である。平底で胴部付け根に指頭痕が認められる。276は上半部の破片である。口縁部は如意状に短く屈曲する。刻目は下半部に施す。外面はハケメを施し、口縁部内面にもハケメを施す。以上の遺物から住居の時期は前期後半と考えられる。

住居跡64(Fig.8)

Ｇ３区で検出した。径7.1～7.2ｍを測る。古代住居67、63に切られる。主柱穴は6本と考えられる

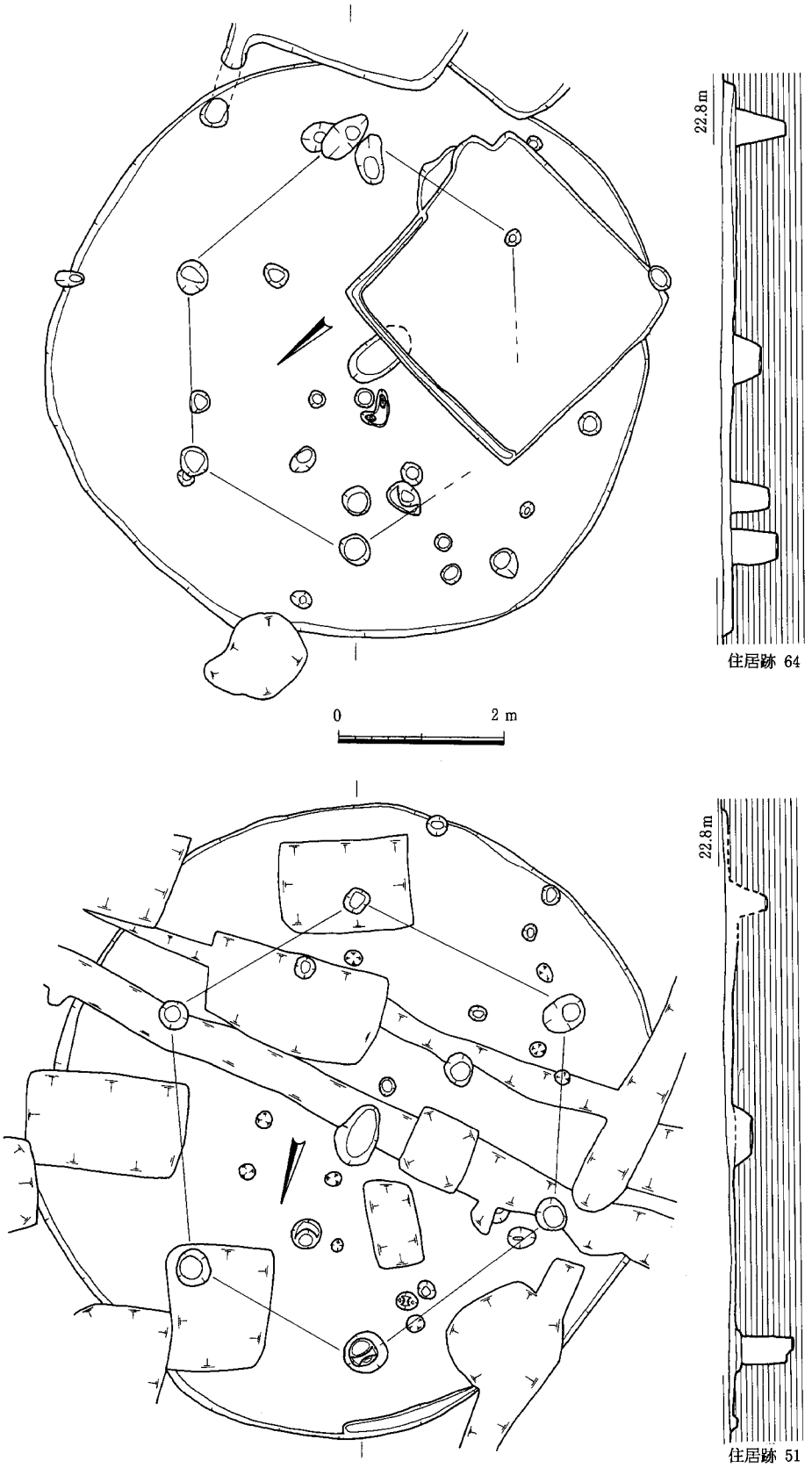


Fig. 8　住居跡51、64実測図（1:80）

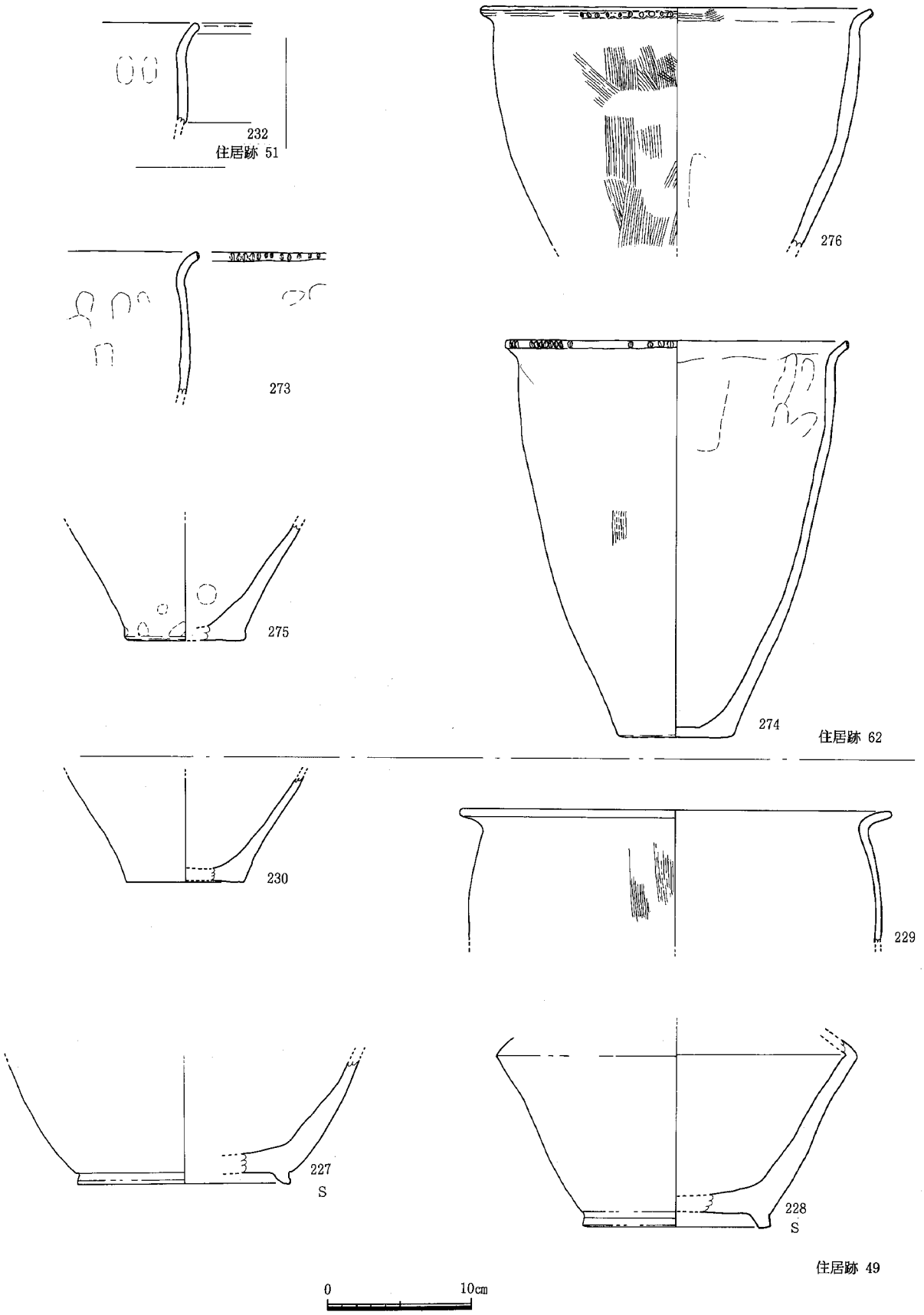


Fig. 9　弥生時代住居跡出土土器実測図（1：4）

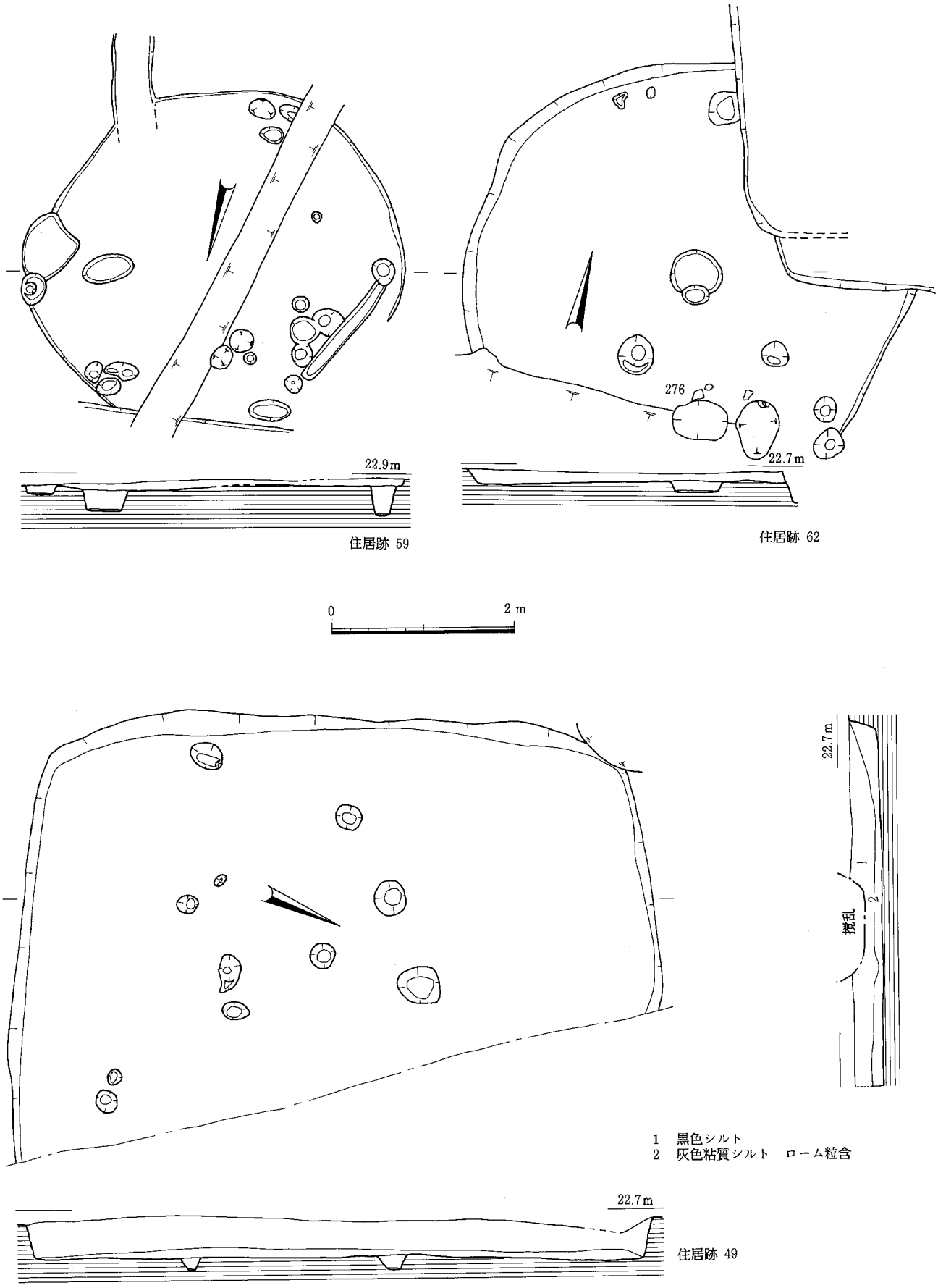


Fig. 10　住居跡59　62　49実測図（1:60）

が、住居67に切られる部分にピットが見当らない。他の主柱穴は住居67の床面より深いので、疑問である。中央に楕円形の中央土壙があり、床面からの深さは40cmほどである。北側に長軸上からやや外れた傍らと、長軸上ではあるがやや離れた位置に、小穴がある。いずれかが中央土壙に伴う可能性がある。しかし南側には小穴がない。住居67に削平されている可能性はある。図化に耐える遺物は出土していない。

住居跡81(Fig.11)

Ｆ３区で検出した。古代土壙82、84、古代溝808（1200）に切られる。径８～8.2ｍを測る。主柱穴の特定は困難で、図に示した４本柱の復元は一案に過ぎない。柱穴の深さは床面から50～80cmほどである。中央にやや東西に長いほぼ円形の中央土壙があり、床面からの深さは20cmほどである。東端に小穴があるが、西側にはない。ここで想起されるのは住居跡51、64の中央土壙である。住居跡81を含めたこの３基の住居は、形態、規模をほぼ同じくする。前出の２基の住居は、撹乱、削平の可能性はあるものの、調査結果としては住居81と同じく、中央土壙には片側しか小穴がない。従って、松菊里タイプの一変種として、片側のみに小穴を持つものがある可能性は考慮しておくべきであろう。

出土土器(Fig.12)

図化した遺物はいずれも底部片である。321は壷であろう。外面はミガキと思われる。円盤状に突出する。322も壷であろう。底部は厚く、突出する。底径８cmを測る。内外面ナデを施す。323は甕であろうか。底部端は丸みを帯び、胴部は外反せず直線的に立ち上がる。壷の特徴からは前期の範疇と考えられよう。

（２）方形住居跡

住居跡49(Fig.10)

方形住居と考えられる遺構をＦ６区で１基検出した。東側が調査区外に出るので、長方形か方形か、あるいは長軸が南北か東西かと言うようなことは不明である。南北７ｍ、東西4.5ｍ以上を測る。隅丸の方形を呈し、各辺ともふくらみを持つ。比恵遺跡などでよく見られる小判形の住居に類似した形態と思われる。主柱穴らしきピットは検出されていない。

出土土器(Fig.9)

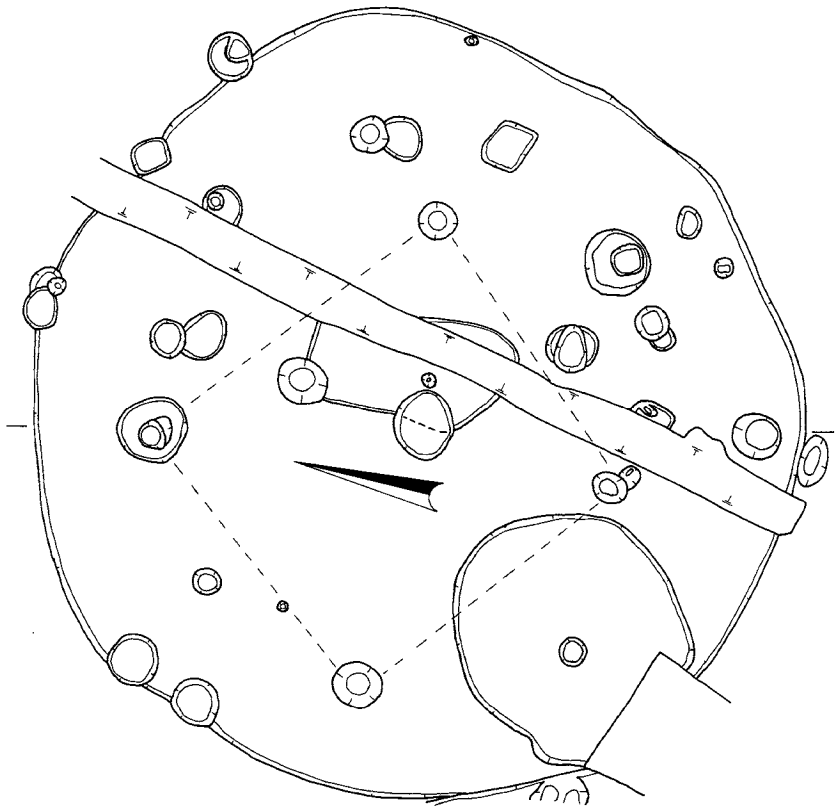
229は甕である。口縁部は強く屈曲して外反する。端部は丸く納める。外面は縦方向のハケメを施す。中期後半の甕である。230は甕底部である。平底で、胴部はわずかに外半しつつ立ち上がる。227、228は住居49を切る古代土壙50に伴う遺物であろう。227は須恵器の壷である。厚い平底の底部で、高台を持つ。胴部外面には回転ヘラ削りを施す。228も須恵器の壷である。肩部で強く屈曲する。底部は平底で、高台を持つ。外面は回転ヘラ削りを施した後、回転ナデを施す。

（３）土壙

弥生時代土壙は大きく分けて、深いものと浅いものの２種がある。Fig. 13には、相対的に浅いものを示した。

土壙12(Fig.13)

Ｆ２区で検出した。古代土壙83に切られる。東西に長く、長辺3.8ｍ、短辺２ｍの長方形を呈する。長軸の両端に小ピットを持つ。ピットは径20cmほどの小形であるが、床面からの深さ40～50cmと深い。



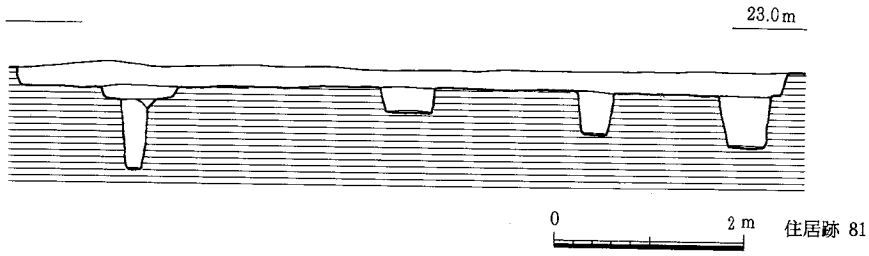


Fig. 11　住居跡81実測図（1:80）

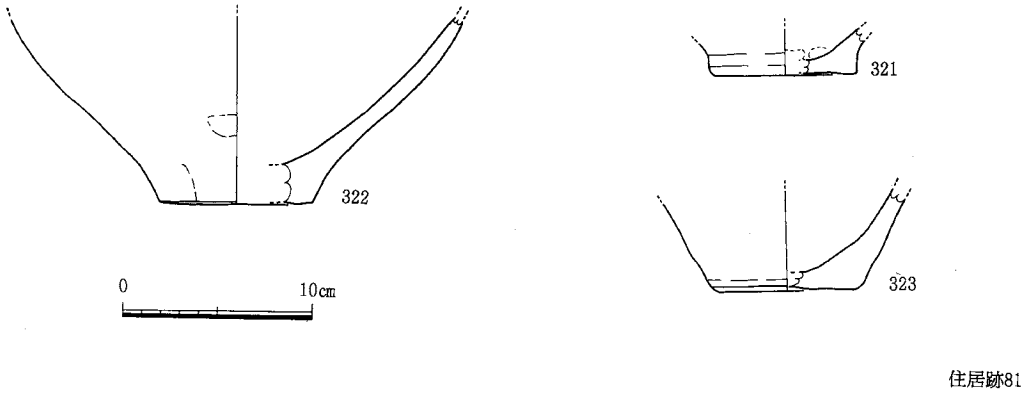


Fig. 12　住居跡81出土土器実測図（1:4）

壁は直に立ち、床面は平坦である。検出面からの深さは10cmほどである。

出土土器(Fig.14)

46は甕口縁部片である。端部をほとんど欠き、刻目の有無は不明である。口縁部は如意状に広がる。口縁部下に沈線を巡らし、始点と終点がずれている。外面にハケメを施す。47は壷底部である。厚い円板状を呈する。外面は丁寧なナデと考えられる。底径11.5cmを測る大形の壷である。48は甕底部である。胴部付け根はほとんど外反せず、直線的に立ち上がる。

土壙15(Fig.13)

Ｇ２区で検出した。やや胴の張る長方形を呈する。東西に長く、長2.5ｍ、幅1.7ｍを測る。壁は直に立ち、床面は平坦である。検出面からの深さは40cmほどである。長軸の両端に小ピットがあり、床面からの深さ30～40cmを測る。床面近くから土器が出土している。

出土土器(Fig.15)

72は甕である。口縁部直下でわずかにすぼまり、口縁部は如意状に広がる。刻目は端部全面に施す。外面はハケメをナデ消している。胴部は縦方向、口縁部は横方向のハケメである。内面には指頭痕が認められる。口径19.8cm、器高24.6cmを測る。59、61、62、66～68は口縁部片である。59は口縁部直下でわずかにすぼまる。端部は薄く、刻目を施す。61も如意状に開く。端部をほとんど欠き、刻目の有無は不明である。62は端部に坦面を持つ。刻目の有無は不明である。口縁部下ですぼまらずに開く。67もすぼまらず直線的に開き、口縁部は如意状に小さく広がる。刻目は端部全面に施す。66は口縁部直下で一旦すぼまって開く。口縁部は薄く、刻目を施す。屈曲部の外面にヘラ状工具で押さえ付けたような圧痕が認められる。68もわずかにすぼまって開く。口縁端は坦面をなし、全面に刻目を施す。屈曲部外面に66と同様な圧痕が認められる。70は壷口縁部である。口縁部は緩やかに屈曲して開き、頸部との境には甘い段をなす。口縁端は坦面をなす。内外面とも丁寧なナデを施す。58、60、63～65、69、71は底部である。いずれも甕と考えられる。いずれも外面はナデを施すが、64はハケメが認められ、71はヘラ状工具を押しつけたような痕跡が認められる。これらの遺物から、土壙15の時期は前期後半と考えられる。

土壙46(Fig.13)

Ｈ５区で検出した。長方形を呈する。南北に長く、長３ｍ、幅1.9ｍを測る。壁は直に立ち、床面は平坦である。検出面からの深さは40cmほどである。長軸からやや東へ振れて壁際と中央に小ピットが並ぶ。両壁際のピットは径25cm、床面からの深さ30cmを測る。中央のピットはやや小さく、径20cm、床面からの深さ20cmを測る。図化に耐え得る遺物は出土していない。

土壙74(Fig.13)

Ｄ４区で検出した。古代住居23に切られる。長方形を呈する。東西に長く、長2.9ｍ、幅1.6ｍを測る。壁は直に立ち、床面は平坦である。検出面からの深さは30cmほどである。長軸の両端に小ピットがあり、床面からの深さ30～50cmを測る。図化に耐える遺物は出土していない。

以上の４基は規模の大小はあるが、比較的浅く、平面形長方形で、長軸の両端に深い小ピットを持つ点が共通している。このような土壙は、両端のピットに柱を立て、上部構造を持つ構造と考えられることから、住居の一種の可能性が高いと考えられる。次に述べる土壙13は、規模や形態は以上のものに似ているが、柱穴を持たない点が大きく異なる。住居と考えた場合でも、出土遺物からは前期後

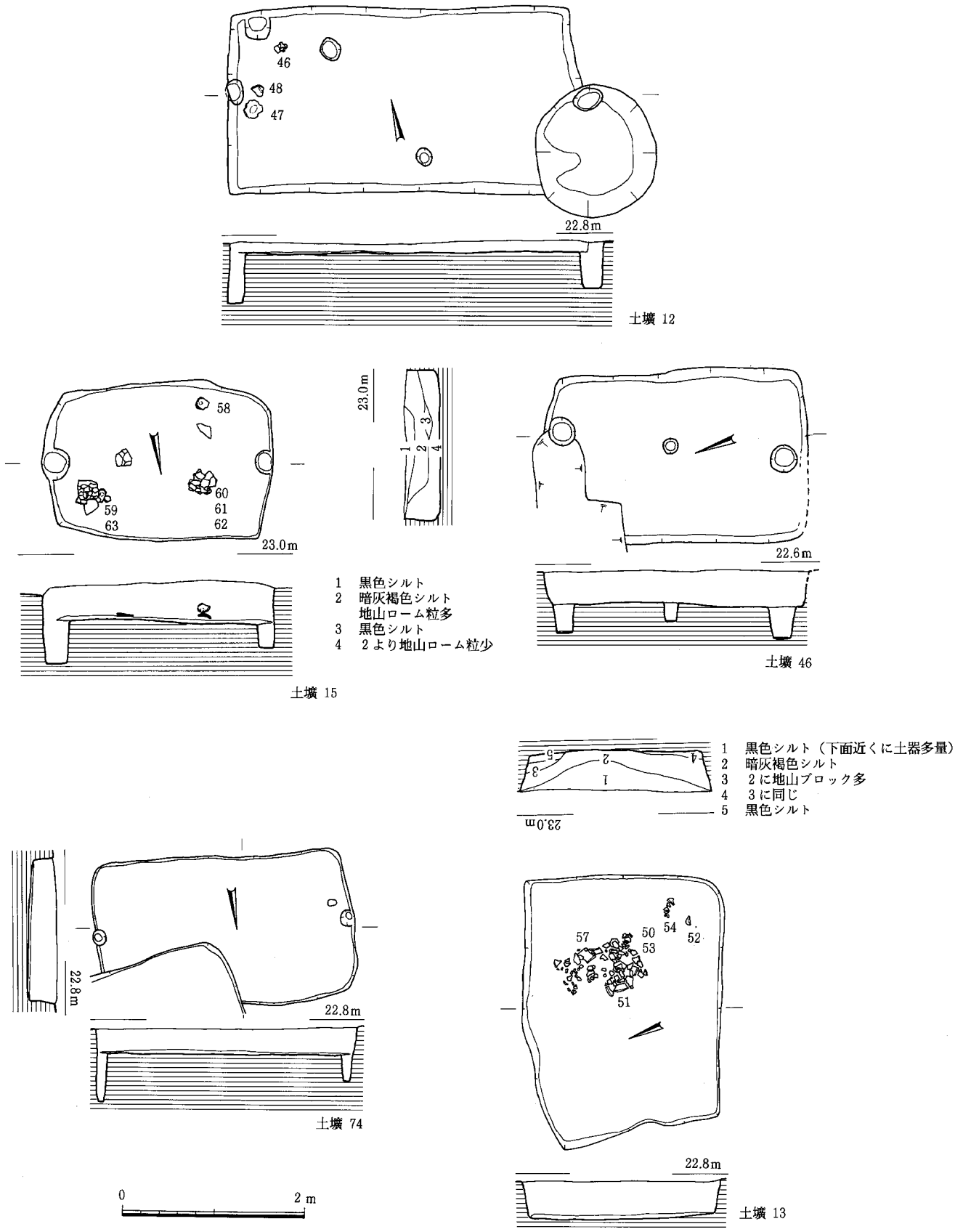


Fig. 13 弥生時代土壙実測図1（1:60）

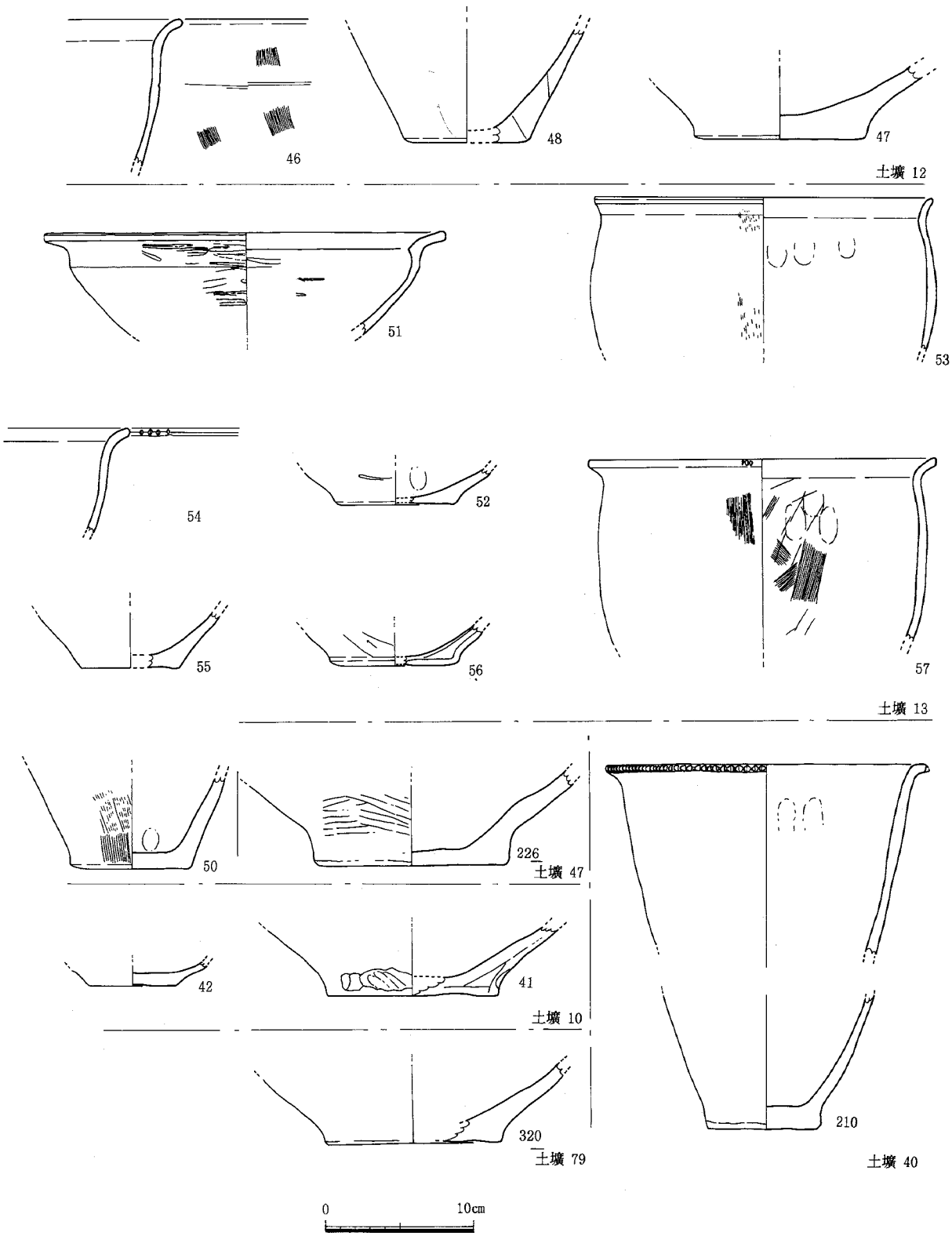


Fig. 14　弥生時代土壙出土土器実測図1（1:4）

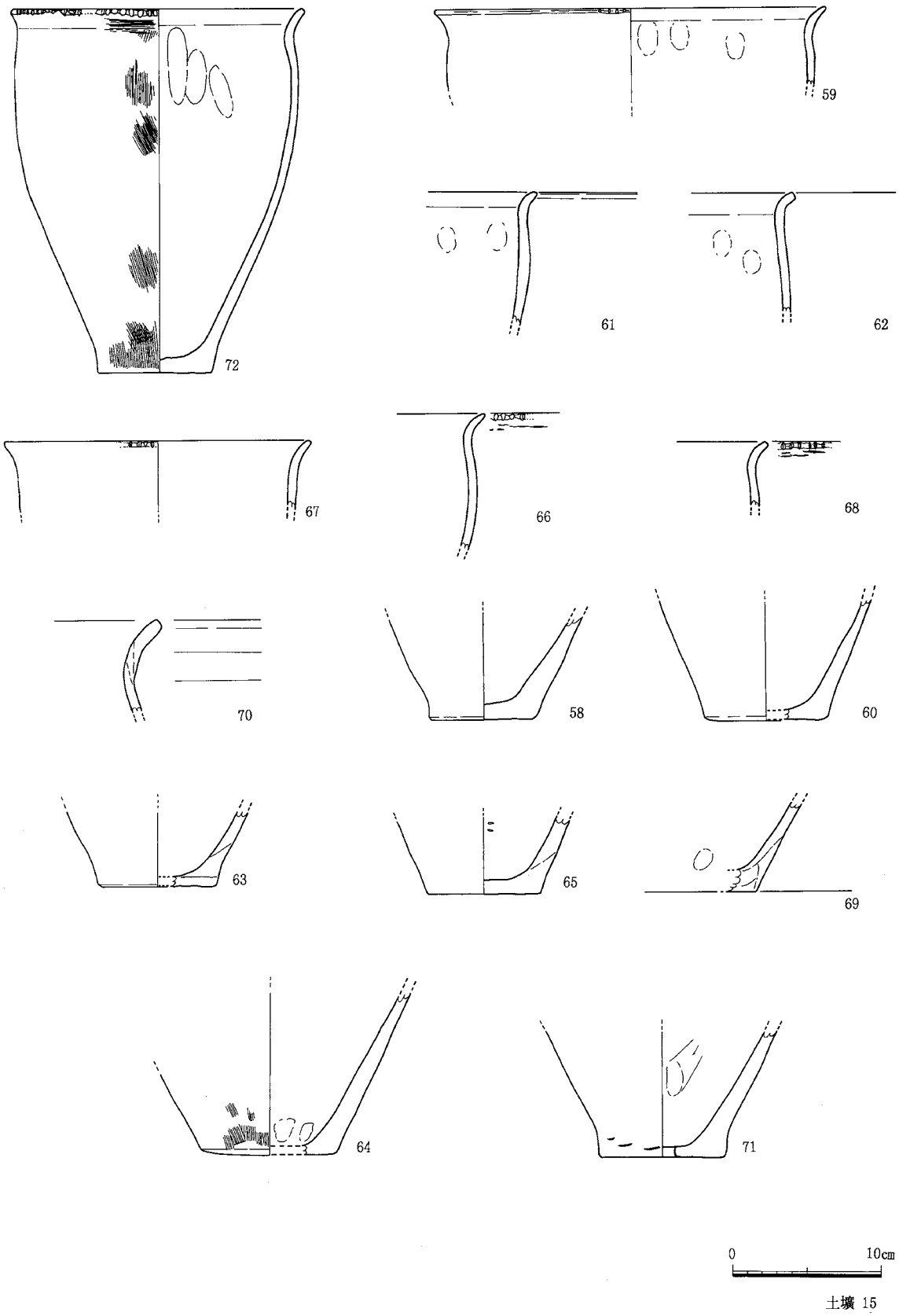


Fig. 15　弥生時代土壙出土土器実測図２（１：４）

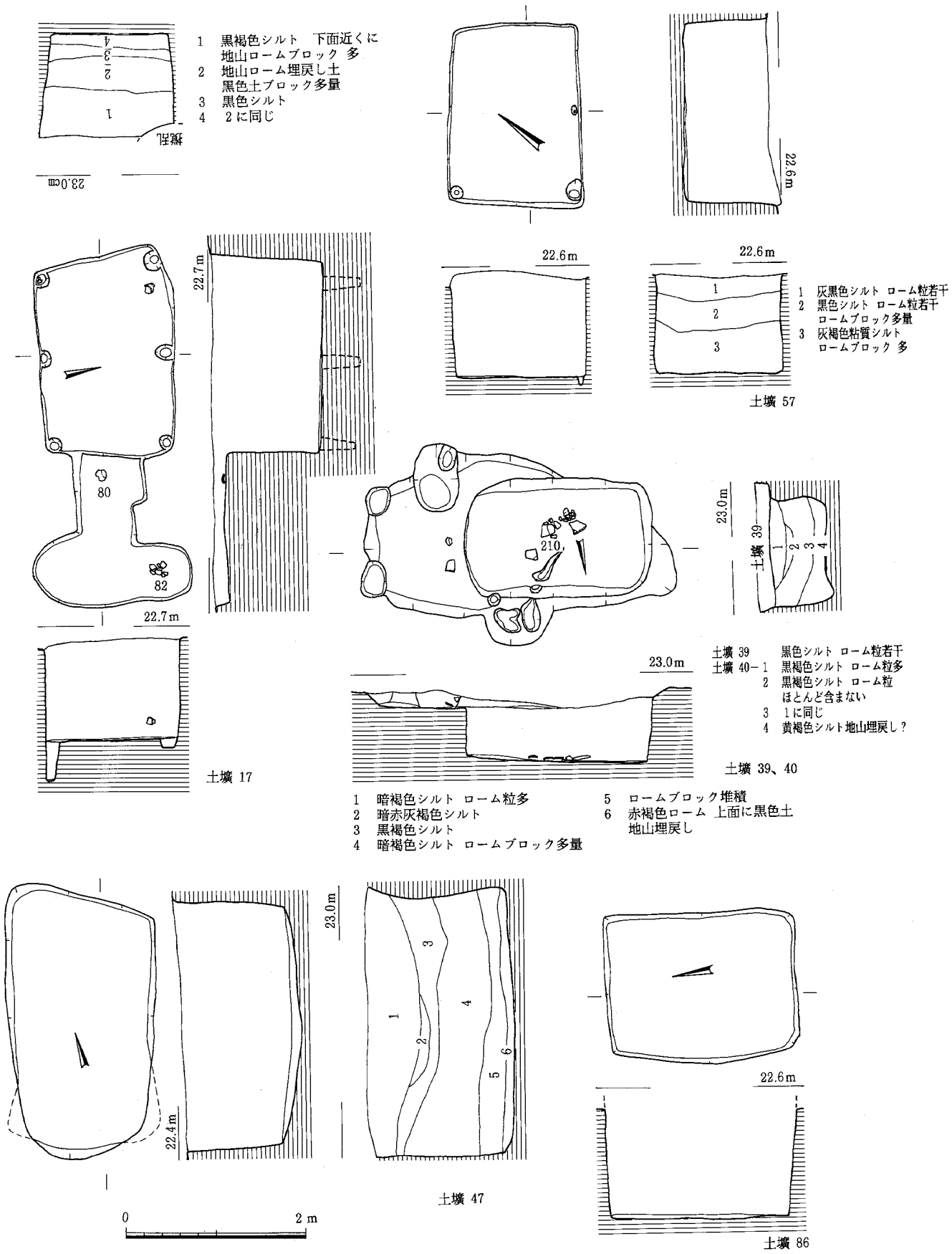


Fig. 16 弥生時代土壙実測図 2 (1:60)

半頃の時期が考えられ、円形住居との時期差は認められない。同じ集落内の機能差と考えるべきであろう。

土壙13(Fig.13)

Ｆ２区で検出した。長方形を呈する。東西に長く、長2.8m、幅2.1mを測る。壁は直に立ち、床面は平坦である。検出面からの深さは40cmほどである。床面からわずかに浮いた位置から土器が出土している。

出土土器(Fig.14)

51は高坏坏部である。口縁部は内傾する鋤先状を呈し、屈曲部から外反しながら開く。屈曲部内面には明瞭な稜が立つ。内外面ともミガキを施す。53、54、57は甕口縁部片である。口縁部直下でわずかにすぼまって開く。口縁部は如意状に短く屈曲する。端部を大きく欠き、刻目の有無は不明である。外面はハケメをナデ消し、内面には指頭痕が認められる。54はあまりすぼまらず、口縁部が如意状に開く。端部は全面に刻目を持つ。内外面ともナデを施す。57は口縁部直下でわずかにすぼまって、口縁部は如意状に強く屈曲する。端部は大きく欠くが刻目は確認でき、全面に施されると考えられる。内外面は条線の不明瞭な板状工具による擦過痕が認められ、ハケメとは異なるようである。52、56は壷底部であろう。わずかに突出気味の平底を呈する。内外面ともナデを施す。55は甕底部である。胴部付け根は外反しながら立ち上がる。50も甕底部である。胴部は直線的に立上り、外面はハケメを施す。以上の出土遺物から土壙13の時期は前期後半と考えられよう。

Fig. 16と18には相対的に深いものを示した。これらは貯蔵穴と考えて良かろう。

土壙17(Fig.16)

Ｆ２区で検出した。東西に長い長方形を呈し、その西側に平面形凸字状の張出しがある。この張出し部分の床面から弥生土器が出土していることから、土壙17の一部と考えた。長方形部分は長2.2m、幅1.5mを測る。検出面からの深さは120cmを測る。壁は直に近く、床面は平坦である。床面には四隅と、長辺の中央に、計６個の小穴がある。径は15～20cmほどと小さいが、床面からの深さが40cmと深い。

出土土器(Fig.17、20)

98は大形の鉢である。口縁部は如意状に短く屈曲する。端部は坦面をなす。内外面ともミガキを施す。口径36cmを測る。79、83、90～92、96は甕口縁部片である。79は口縁部直下でわずかにすぼまって開く。端部は全面に刻目を施す。内外面ともナデで、内面に指頭痕が認められる。83は口縁部が短く屈曲する。端部は全面に刻目を施す。90は直線的に開き、口縁部は短く強く屈曲する。胴部上半部に突帯を一条巡らす。口縁端部と突帯に刻目を施す。内外面ともナデで、口径25cmを測る。91は口縁部が緩く屈曲する。端部は欠損が著しく刻目の有無は不明である。外面はハケメをナデ消している。92も同様に端部の欠損が著しく、刻目は不明である。外面はハケメをナデ消す。96は口縁部が緩く屈曲する。端部は全面に刻目を施す。外面はハケメをナデ消す。内面には指頭痕が認められる。100は口縁部直下でわずかにすぼまり、口縁部は短く強く屈曲する。端部は全面に刻目を施す。80、81、85、87、97は甕底部である。胴部付け根は外反しながら立ち上がる。外面はナデで、97にはハケメを施す。85は円板状に突出する平底を持ち、端部に坦面を持つなど、やや他のものと趣を異にする。内面にもハケメが認められる。80は土壙17の西側突出部で出土したものである。82も西側突出部で出土した椀である。明赤褐色を呈する精製品で、体部は回転ナデを施す。古代の土師器である。Fig. 20は壷を示した。93は口縁部である。口縁部は緩やかに屈曲し、わずかに肥厚する。頸部との境には甘い段状

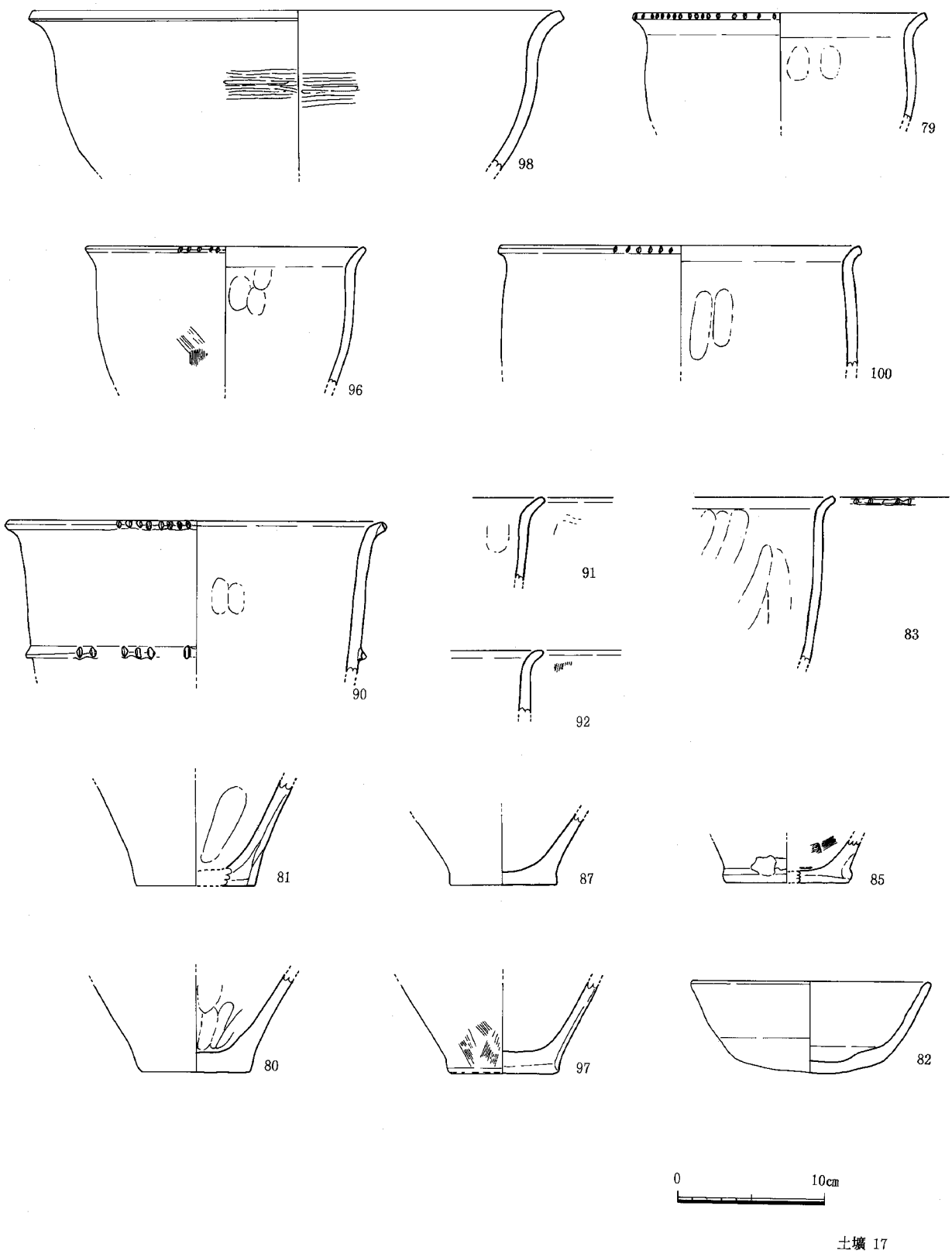


Fig. 17　弥生時代土壙出土土器実測図3（1：4）

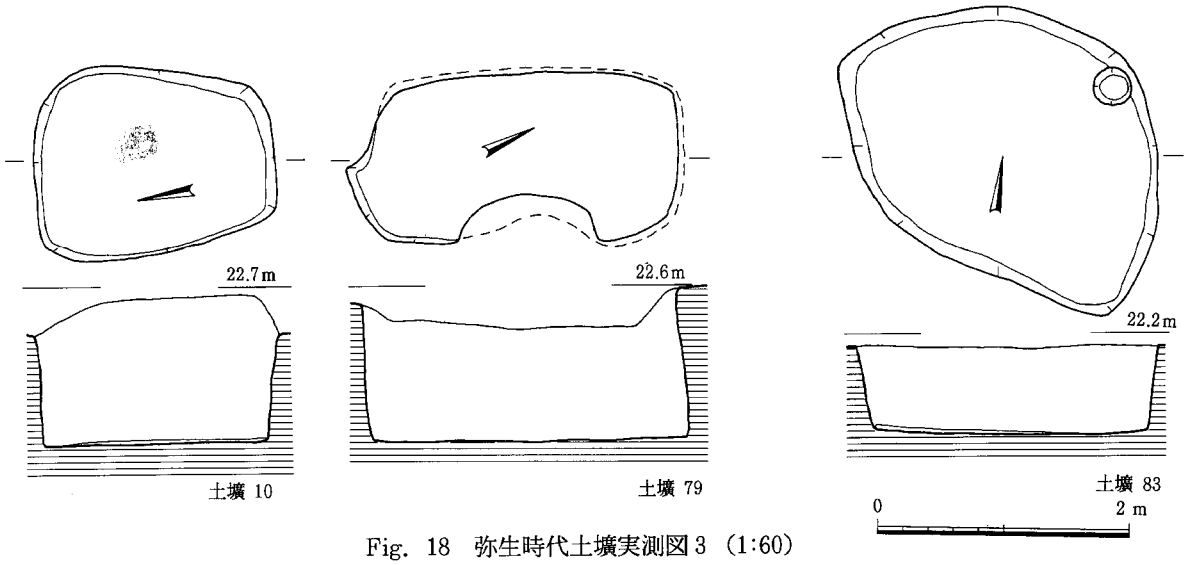


Fig. 18　弥生時代土壙実測図 3 (1:60)

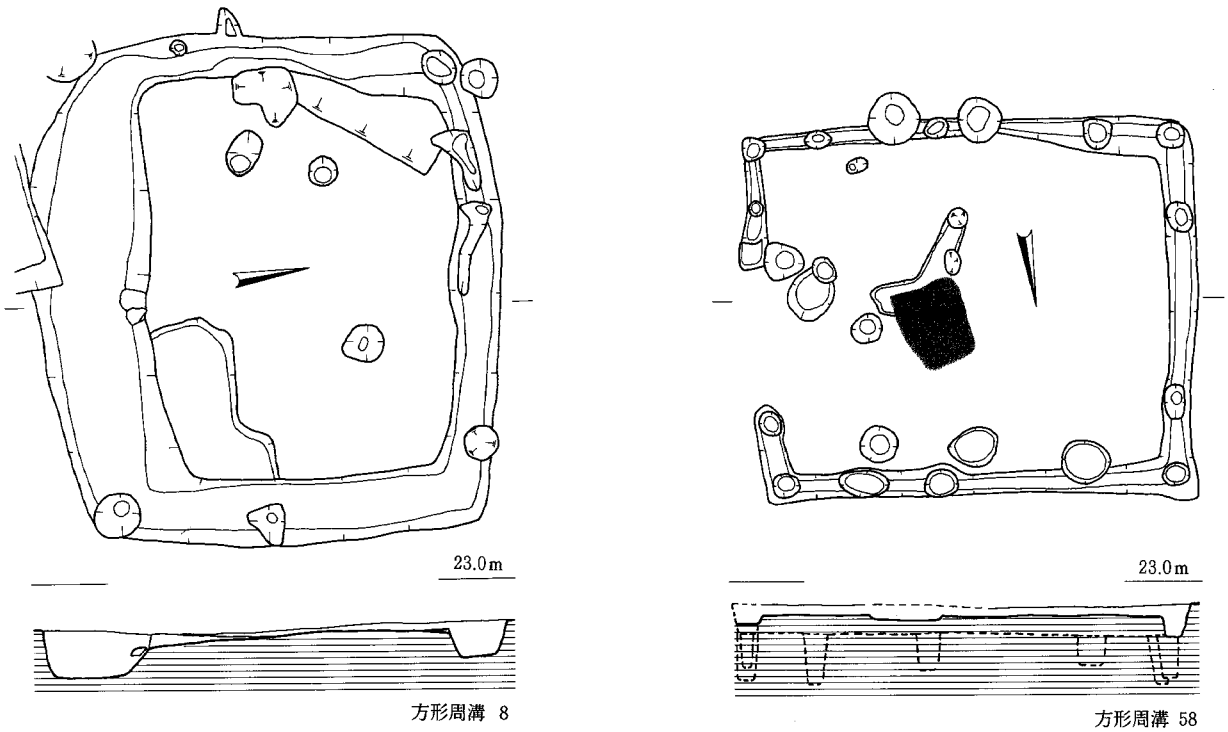


Fig. 19　方形周溝状遺構実測図 (1:60)

を呈する。88も壷口縁部である。わずかに肥厚し、頸部との境に不明瞭な段をなす。丹塗を施している。89は端部に坦面を持つ口縁部片である。84、86、95は底部片である。胴部付け根付近をヨコナデする比較的丁寧な調整である。84は底径12cmを測るやや大形の壷である。99も大形壷で、底径14cm、胴部最大径44.5cmを測る。外面はミガキを施す。底部はやや突出気味の平底を呈する。以上の土器から、土壙17の時期は前期後半と考えられる。

土壙57(Fig.16)

Ｇ５区で検出した。北東～南西に長い長方形を呈し、長２ｍ、幅1.5ｍを測る。検出面からの深さは100cmを測る。壁は直に近く、床面は平坦である。床面には西隅と南隅、及び南東側の長辺の中央に、計３個の小穴がある。隅角の小穴は床面からの深さが30cm～50cmと比較的深く、長辺中央のものは10cmほどと浅い。図化に耐える遺物は出土していない。

以上の土壙17、57の２基は床面にピットを持つ例である。ピットに柱を立て、屋根などの上部構造を持つと考えられるが、17と57ではピットの数、配置が異なり、上部構造も当然異なっていると考えられる。

土壙40(Fig.16)

Ｇ６区で検出した。古代土壙39に切られる。東西に長い長方形を呈し、長2.1ｍ、幅1.3ｍを測る。土壙39の深さを加えた検出面からの深さは80cmを測る。壁は直に近く、床面は平坦である。床面から土器がまとまって出土している。

出土土器(Fig.14)

210は甕である。胴部は直線的に開き、口縁部は如意状に短く強く屈曲する。刻目は端部全面にかなり密に施される。内外面ともナデを施す。口径21.8cmを測る。

土壙47(Fig.16)

Ｆ５区で検出した。南北に長いややいびつな長方形を呈し、長2.9ｍ、幅1.6ｍを測る。壁は直に近く、南側の隅角ではややオーバーハングする。床面は中央部が若干深まる。中央部で、検出面からの深さは1.3ｍを測る。

出土土器(Fig.14)

226は壷底部である。底部は円板状に突出する平底である。底径13cmを測る比較的大形品である。外面はミガキ、内面はナデを施す。

土壙86(Fig.16)

Ｅ２区で検出した。住居跡11の床面で検出した。南北に長い長方形を呈し、長2.2ｍ、幅1.8ｍを測る。壁は直に近く、床面は平坦である。住居跡11の深さを加えた検出面からの深さは1.3ｍを測る。図化に耐える遺物は出土していない。

以上の土壙40、47、86の３基は比較的整美な長方形を呈する土壙であり、先述した土壙17、57の２基と異なるのは床面にピットを持たないことである。

土壙10(Fig.19)

Ｅ２区で検出した。南北に長いいびつな楕円形を呈し、長1.9ｍ、幅1.5ｍを測る。壁は直に近く、床面は平坦である。検出面からの深さは110㎝を測る。床面に炭化物を多量に含む層が薄く堆積していた。

出土土器(Fig.14)

41は壷底部である。底径11.2㎝を測る。胴部付け根に粘土を貼付した痕跡が明瞭に残っている。42も壷であろう。平底で、底径６㎝を測る。

土壙79(Fig.19)

Ｅ３区で検出した。古代土壙28、29に切られる。南北に長いいびつな楕円形を呈し、長2.5ｍ、幅1.3ｍを測る。壁はわずかにオーバーハングする。床面は平坦である。検出面からの深さは120㎝を測る。

出土土器(Fig.14)

320は壷底部である。底部は平底で、やや突出する。内外面ともナデである。

土壙83(Fig.19)

Ｇ５区で検出した。古代住居55の床面で検出した。いびつな楕円形を呈し、長2.8ｍ、幅2.1ｍを測る。壁は直に近く、床面は平坦である。検出面(住居55の床面)からの深さは70㎝を測る。図化に耐える遺物は出土していない。

（４）方形周溝状遺構

方形周溝状遺構とした遺構は２基検出したが、形態は異なり、遺構の性格も異なっていると考えられる。

遺構８(Fig.19)

Ｄ２区で検出した。古代住居跡16に切られる。ほぼ方形に近く、南北3.8ｍ、東西４ｍを測る。溝の幅は、南側の広いところで90㎝、北側や西側の狭いところで40㎝を測る。溝で囲まれる内部にはピットなどが散見するが、確実に伴うと考えられる遺構はない。溝の深さは30～40㎝ほどである。

出土土器(Fig.21)

20は甕底部である。上底状を呈する。21は大形壷である。頸部は緩やかにすぼまるが、胴部との境は不明瞭である。胴部最大径は上半部にある。外面は剥離がひどくよくわからないがミガキと考えられる。内面には指頭痕が顕著である。22は甕底部であろう。

遺構58(Fig.19)

Ｅ４区で検出した。東西に長い長方形を呈、東西3.6ｍ、南北３ｍを測る。幅20㎝の溝が巡り、西辺の中央に溝が途切れる個所がある。溝内には小穴が並ぶ。四隅に各１基と短辺に各２基、長辺に２もしくは３基配置される。小穴は溝底からの深さ30～50㎝ほどと深い。中央部には床が焼けた部分がある。この遺構は住居の一種と考えられる。壁溝に柱穴を掘り、上屋を建てるものであろう。中央の焼土は炉跡と考えられる。類似した遺構として持田ヶ浦古墳群検出の弥生時代住居があり、この例は竪穴式住居である。遺構58も削平された竪穴式住居の可能性は高い。図化に耐える遺物は出土していない。

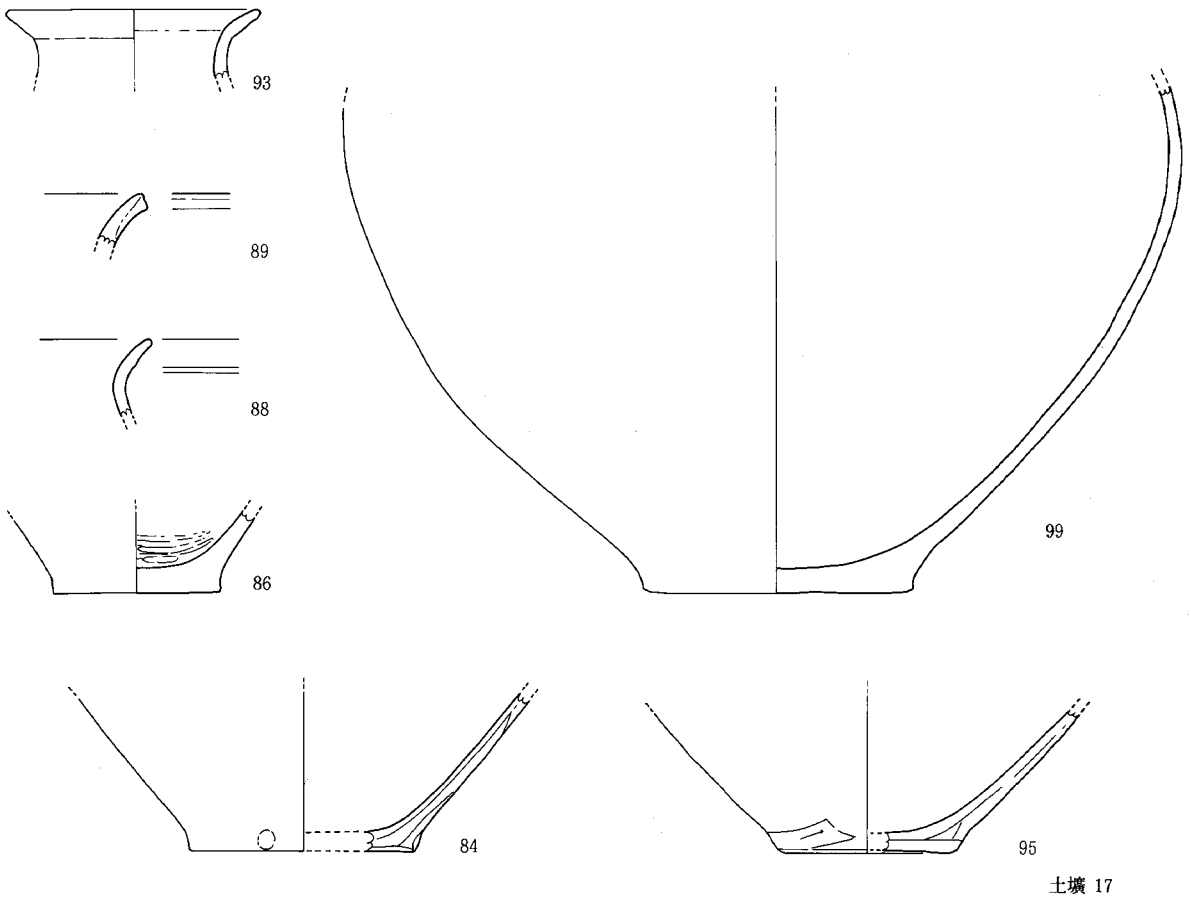


Fig. 20　弥生時代土壙出土土器実測図 4 (1:4)

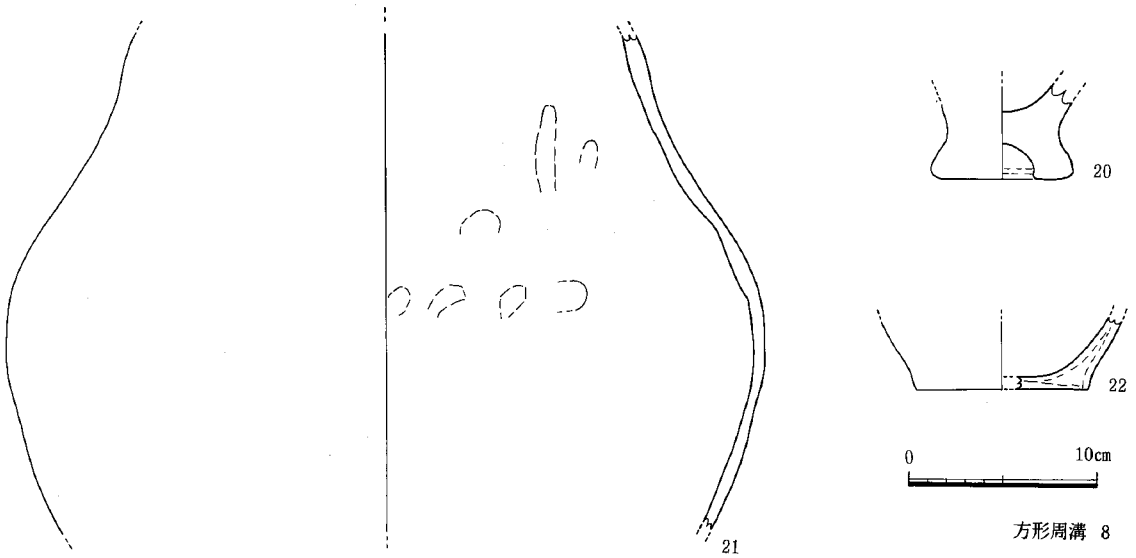


Fig. 21　方形周溝状遺構 8 出土土器実測図 (1:4)

（5）弥生時代の石器

雑餉隈遺跡5・8・10次調査では、弥生時代の竪穴住居跡・土壙・溝から、578点の石製品が出土した。また、古代の竪穴住居跡等の各遺構から360点の弥生時代の石製品が出土した。総計938点を弥生時代の石器としてカウントしたが、古代各遺構出土の砥石30点については、時期決定が困難であるため、古代の遺物とした。また、柱穴のなかには弥生時代のものもあると考えられるが弥生時代の柱穴確認を私はしていないため、柱穴出土弥生時代石製品については、古代遺構出土の弥生時代石製品としてカウントした。

以下、弥生時代石製品について、弥生時代前期中頃から前期後葉の竪穴住居跡・土壙ごと、中期前葉の溝出土のものとみていき、最後に弥生時代石器について本調査での知見をまとめていくことにする。

竪穴住居跡49（Fig.22）　本住居跡では、石製穂摘具（1035）・太型蛤刃石斧（1037）・砥石（1036）各1点と黒曜石製剥片2点、削片2点の7点の石製品が出土した。1035は小豆色擬灰岩ホルンフェルス製で敲打後研磨によって杏仁形に整形し、器面には研磨傷痕が明瞭に残っている。刃部は、両刃で2／3が破損によって失われている。残存重は16.7ｇ弱を測る。1037は安山岩製で、横断面形楕円形を呈する体部片で、敲打整形後丁寧な研磨を加えている。残存重は58.4ｇ弱を測る。1036は砂岩製で、横断面形は台形を呈し、三面が砥面として使用されている。

竪穴住居跡51（Fig.22）　本住居跡からは太型蛤刃石斧（1029）・剥片石器（1030）各1点と黒曜石製剥片10点・削片29点・石核3点・礫1点、古銅輝石安山岩製削片1点の46点の石製品が出土した。1029は今山産出玄武岩製で、剥離加工後敲打を加え整形し、体部には丁寧な研磨を加えて仕上げているが、頭部には剥離痕が残っている。横断面形は楕円形を呈し、刃部は使用によって破損したと考えられる。破損部に表裏から剥離加工を加え再生を試みている。重さ623.3ｇ弱を測る。1030は、黒曜石製の先端に表皮が残る不定形剥離片の右縁辺に二次加工を加えている。

竪穴住居跡58（Fig.22）　本住居跡からは石製編み錘（1032）・蛤刃石斧（1031）各1点と黒曜石製の剥片5点・削片6点・石核1点の14点の石製品が出土した。1032は長さ9.7㎝、幅6.7㎝、最大厚1.6㎝を測る偏平な転礫を素材として、表面両側に数回の剥離加工を加え縄縛部を造り出している。重さ157ｇを測る。なお、打製石斧製作過程の可能性もある。1031は粘板岩製ホルンフェルスを素材として、剥離加工後敲打を加え、一部研磨を加えているが刃部から頭部にかけて欠失している。横断面形は楕円形を呈したと考えられ、重さ220.5ｇを測る。

竪穴住居跡59　本住居跡では黒曜石製の剥片4点・削片6点・石核1点の11点の石製品が出土したが、石器は出土しなかった。

竪穴住居跡62（Fig.22）　本住居跡からは石製穂摘具（1038）・蛤刃石斧（1039）・削器（1042）の各1点、磨石（1040・1041）2点と黒曜石製の剥片7点・削片6点・石核1点と古銅輝石安山岩製剥片1点の20点の石製品が出土した。1038は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製で、剥離加工後敲打・研磨を加え三角形から杏仁形に整形しているが1／3を欠失している。刃部は両刃で、中心間2.3㎝の手固定用の縄縛穿孔は表裏から行なっている。最大厚1㎝弱、残存重47.3ｇを測る。1039は安山岩？製の磨製石器片で、蛤刃石斧の片部片と考えられる。1042は黒曜石製の不定形剥片を素材として、先端から右縁辺にかけて主要剥離面から角度のある二次加工を加え、左縁辺には表面から細かい二次加工を加えており先刃掻器状をなしている。長さ2.4㎝、幅2.5㎝、最大厚0.6㎝、重さ2.5ｇ強を測る。1040は磨石片で、1041は安山岩転礫製で、器面は磨耗している。径6.6㎝前後、残存最大厚2.9㎝、残存重114.5ｇを測る。

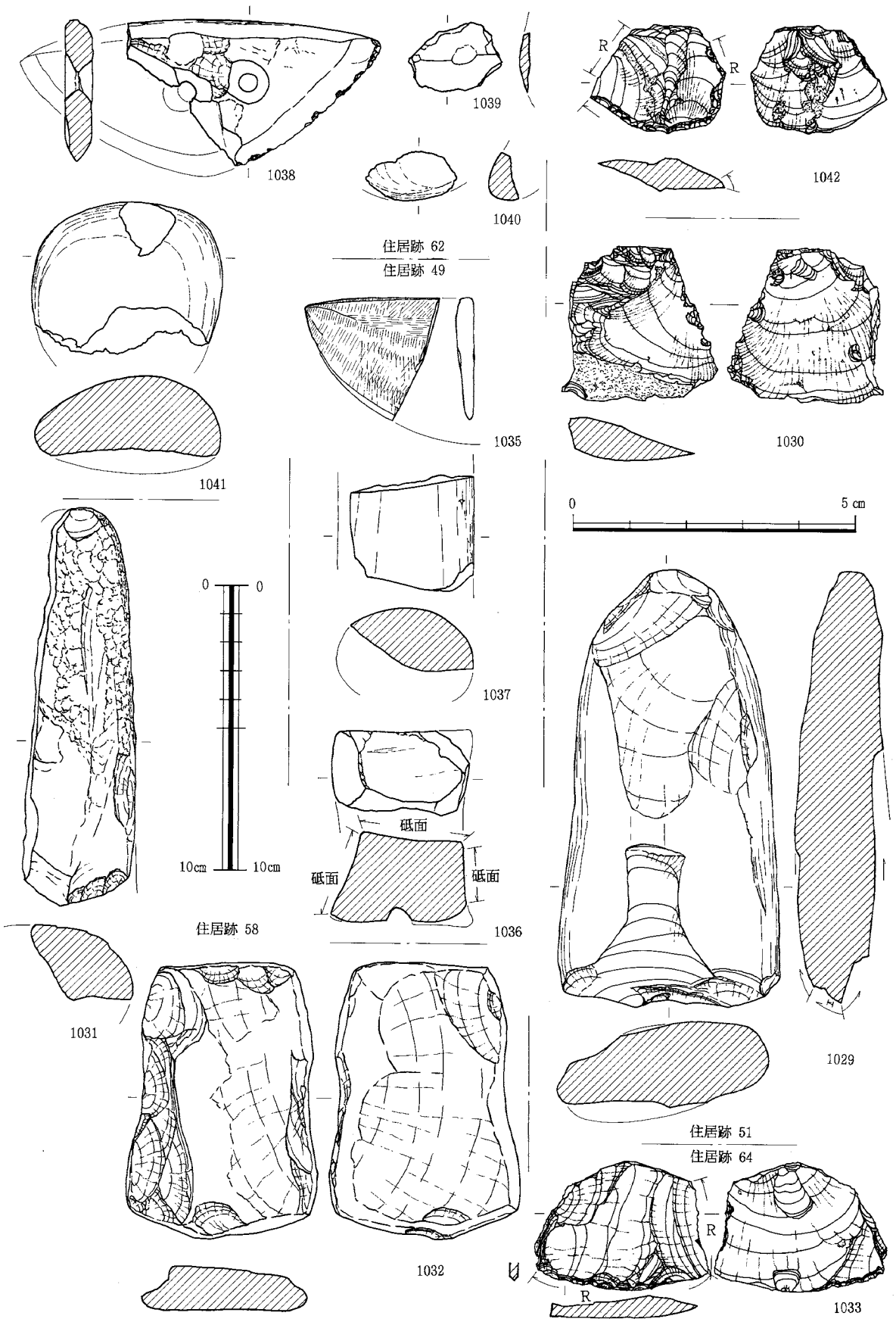


Fig. 22　各竪穴住居跡出土石器実測図

竪穴住居跡64（Fig.22）　本住居跡からは、削器（1033）1点と黒曜石製の剥片4点・削片5点・石核1点の11点の石製品が出土した。1033は横剥ぎの剥片を素材として、先端に主要剥離面から、その続きから右縁辺にかけては表面から二次加工を加え刃部を造り出している。長さ4.5㎝、幅6㎝、最大厚0.8㎝、重さ24.4ｇ弱を測る。本地域において、打製穂摘具の可能性がある数少ない例の一つといえよう。

竪穴住居跡81（Fig.23、24）　本住居跡からは打製石鏃（1055～1063・1065・1069～1091）33点、尖頭器（1044）・石製穂摘具（1050）・磨石（1054）・磨製石器各1点、太型蛤刃石斧（1051～1053）・削器（1043・1046・1047）各3点、石錐（1045・1064）2点、剥片石器7点と打製石鏃未製品（1048・1049・1066～1068等）14点、黒曜石製の剥片104点・削片163点・石核25点、古銅輝石安山岩製の剥片3点・削片5点・石核1点の367点の石製品が出土した。まず、打製石鏃からみていくことにする。

本住居跡出土の打製石鏃および同未製品はすべて良質の黒曜石を用いている。基部に視点をあて製品からみていくと、凸基部をなすものが6点、平基部をなすものが10点、やや内湾する基部をなすものが14点、不明のものが2点、特殊な木葉形をなすものが1点である。凸基をなすものとしては、1063・1069のように、長さ2.7㎝、幅2㎝、最大厚0.7～0.9㎝を測り、重さ4.1ｇ弱（1063）・3.9ｇ弱を測る大型のものと、1058・1070・1078・1086のように長さ1.9～2.6㎝、幅1.3～1.8㎝を測り、重さ1.1～1.5ｇを測るものがある。整形加工方法をみていくと、1069は表面は比較的丁寧な打圧剥離を加えているが、裏面は主要剥離面を大きく残し、周縁に粗い二次加工を加え横断面形三角形に整形している。他の4点は表裏とも比較的丁寧な二次加工を加え、1070は横断面形台形をなすものの他は菱形から凸レンズ状をなすように仕上げている。平基部をなすものは1072・1084のように正三角形をなすものと、1055・1059・1073・1076・1077・1079・1083・1088のように二等辺三角形状をなすものがある。1072は長さ・幅が1.5㎝、1084は1.3㎝弱、重さ0.6ｇ強・0.3ｇ強を測る。1072は表裏に素材剥離面を中央に残し、縁辺に角度のある二次加工を加え横断面形六角形に整形している。1084は比較的丁寧な押圧剥離を加え横断面形凸レンズ状に仕上げている。二等辺三角形をなすものは、1059・1073・1079のように長さ2.1～2.2㎝、幅1.4～1.6㎝、重さ1.4ｇ弱・1.2ｇ前後のものと、1055・1076・1077等のように長さ1.5㎝前後、幅1.2～1.3㎝、重さ0.6～0.7ｇ強を測るものがある。1059・1079は表面は比較的丁寧な押圧剥離を加えているが、裏面には主要剥離面を残し、周縁に粗い二次加工を加え横断面形三角形に仕上げている。1073は素材剥離面を生かした形で周縁に粗い二次加工を加え横断面形三角形に仕上げている。1055・1076・1088は表裏とも比較的丁寧な押圧剥離を加え横断面形三角形・凸レンズ状をなすように仕上げている。1077・1083は裏面に主要剥離面を残し、横断面形三角形に仕上げている。基部がやや内湾するものは1057・1061・1085・1087・1089・1091のように、長さ2～2.5㎝、幅1.6～1.9㎝、重さ0.9～1.3ｇを測るやや大型のもの、1080のように長さ2.1㎝、幅1㎝弱、重さ0.8ｇを測るもの、1062・1071・1074・1081・1090のように長さ1.7㎝前後、幅1.1～1.3㎝強、重さ0.5～1ｇ弱のもの、1060・1075のように特殊なものに大別できる。1057・1061等6点は表裏とも比較的丁寧な押圧剥離を加え、横断面形菱形から凸レンズ状に仕上げている。基部が欠失している1056は裏面に主要剥離を残しているが、同形のものか。1080も表裏とも比較的丁寧な押圧剥離を加え、横断面形六角形に仕上げている。1062・1071・1081・1090は表裏に素材剥離面を残し、縁辺に角度のある二次加工を加え、横断面形台形に仕上げている。1074は表裏とも比較的丁寧な押圧剥離を加え、横断面形凸レンズ状に仕上げている。1060・1075は表裏に大きく素材剥離面を残し、両側縁は主要剥離面から刃潰し加工が加えられており、1060はおもに表から二次加工を加え、1075は主要剥離面から刃潰し加工を加え基部を造り出し、横断面形台形に仕上げている。1060は素材剥離面、1075は素材剥離面および両側縁の刃

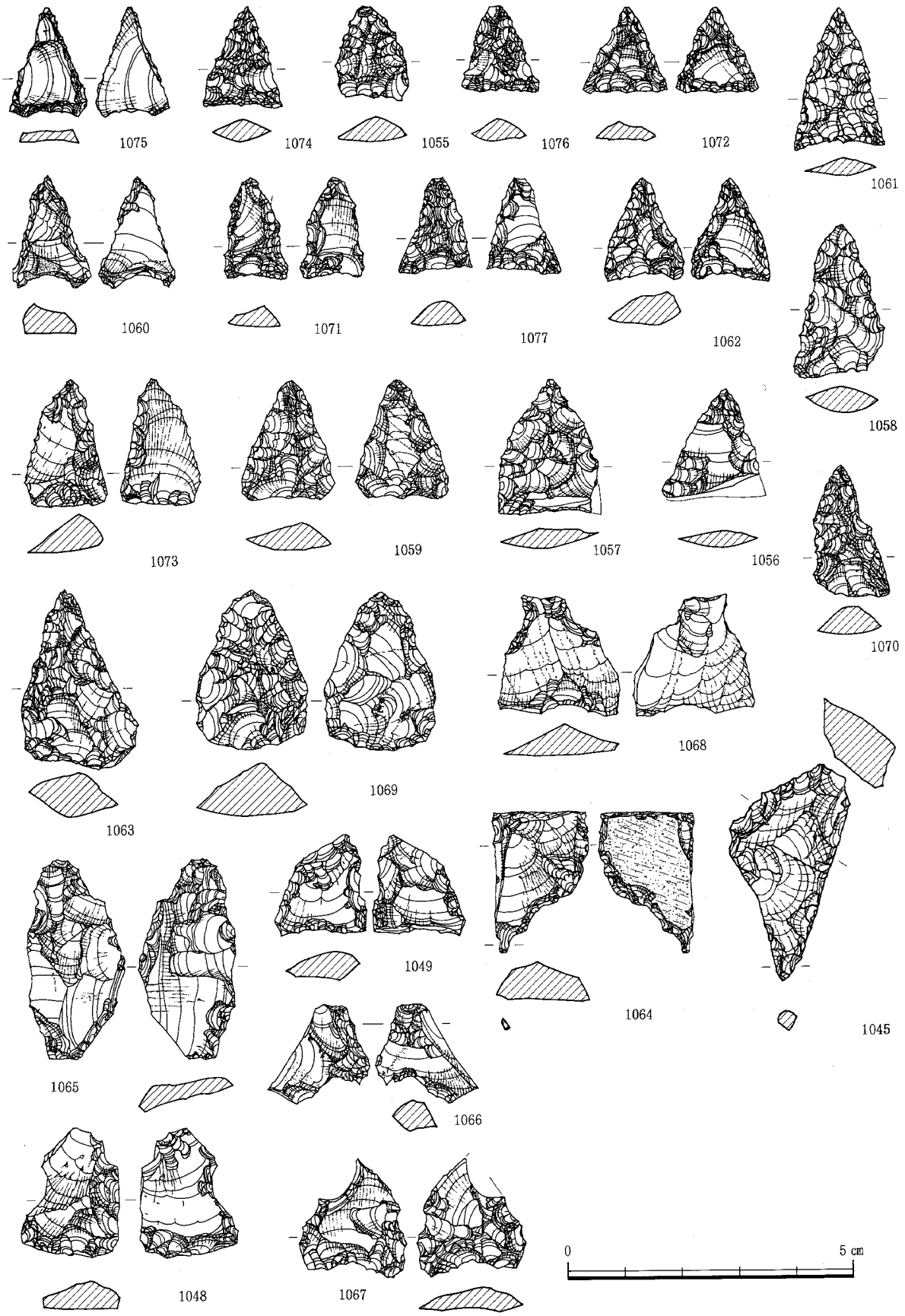


Fig. 23　竪穴住居跡81出土石器実測図 1

潰し加工面の器面の風化が進んでおり、1075は先土器時代の台形石器を、1060は先土器時代の剥片か石器を1075をまねて打製石鏃に再生したと考えられる。1060は長さ２㎝、幅1.3㎝、最大厚0.5㎝、重さ1.1ｇ弱を測り、1075は長さ1.9㎝、幅1.3㎝、最大厚0.2㎝、重さ0.6ｇ弱を測る。1065は横広の剥片を素材として、縁辺に粗い二次加工を加え木葉形に整形し、横断面形は台形をなしている。長さ3.5㎝、幅1.6㎝強、最大厚0.4㎝、重さ2.8ｇ弱を測る。加工が粗く打製石鏃の未製品とも考えたが、実用に耐えるため製品とした。1082は先端部片で表裏とも丁寧な押圧剥離が加えられ、横断面形菱形に仕上げている。

1048は不定形剥片を素材とし、素材打面を表から折断して先端とし、幅広で肉厚の素材先端を表裏からの二次加工によって凸基部を造り出しているが、尖頭部がまだ不完全である。重さ1.7ｇ強を測る。1049も1048と同様の製作工程をとっているが、尖頭部およびやや内湾する基部を意図していると考えられるが不完全である。重さ1.5ｇを測る。1066は不定形剥片を素材として、素材打面を尖頭部にする意図で、打瘤を押圧剥離を加え除去し、右側縁に主要剥離面から、素材先端には表面からそれぞれ二次加工を加えているが未完の状態で終わっている。重さ１ｇ弱を測る。1067は不定形剥片を素材として、素材打面を表裏からの二次加工により内湾する基部を造り出し、素材剥離面を大きく残しながらも、尖頭部および両側縁も整形されており成品の可能性もある。長さ2.1㎝、幅1.8㎝、最大厚0.4㎝、重さ１ｇ強を測る。1068は縦長剥片を素材として、素材打面を尖頭部とする意図で、素材基部の両側縁に主要剥離面から二次加工を加え、長さ２㎝ほどのところで主要剥離面から折断し、折断面に主要剥離面から二次加工を加え、やや内湾する基本部を造り出した状態で終わっている。重さ2.2ｇ強を測る。他の９点中１点は大きく内湾する基部を意図した脚部片であるが、脚部端に表皮が大きく残っており、製作中に破損し廃棄されたものと考えられる。６点は剥離片を素材とし、４点は１㎝以上の肉厚の剥片に押圧剥離や三角形になるように意図した二次加工を加えた状態で終わっている。残りの２点は、0.8㎝・1.5㎝の厚さをもつ残核に押圧剥離加工を加え打製石鏃のイメージができ上った状態で終わっている。

1044は古銅輝石安岩製の肉厚の剥片を素材とし、表裏に二次加工を加え三角形状に整形し、縁辺には細かい二次加工を加え鋭い刃を造り出している。尖頭器としたが掻器の可能性もある。長さ4.2㎝、幅3.2㎝、最大厚1.4㎝、重さ21.3ｇ強を測る。

1050は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製石製穂摘具で、粗割・剥離加工によって直線的な背部と刃部を三角形に造り出し、背部・体部・刃部に丁寧な研磨を加え両刃の刃部とし、表裏から穿孔し、穿孔部を穿孔研磨具で研磨し仕上げている。長さ4.9㎝、幅9.3㎝、穿孔部中心間3.4㎝、最大厚0.6㎝強を測る。

1051は頭部片で、敲打整形後、頭部端は研磨が加えられている。横断面形は楕円形を呈する。残存重202ｇを測る。1052は安山岩製の刃部から側縁部片で、残存重37.3ｇを測る。1053は安山岩製の頭端部片で、残存重66.2ｇを測る。３点とも太型蛤刃石斧といえよう。

1045・1064ともオールで、前者は古銅輝石安山岩製、後者は黒曜石製である。1045は剥片の先端を用い、嘴状をなす素材折断面に二次加工を加え、鋭い錐部を造り出している。錐部端には使用によるとみられる磨耗がみられる。重さ6.7ｇを測る。1064は裏面に表皮が残る残核片を用い、裏面からの折断面の一部を嘴状に整形し錐部とし、右縁辺には表裏から細かい二次加工を加え整形している。重さ2.7ｇを測る。1043・1046・1047は古銅輝安山岩製の削器で、1043は残核、他は剥片を素材としている。1043は素材裏面に大きく表皮を残し、素材表面の周縁に裏面から、素材右縁辺には表からも二次加工を加え鋭い刃部を造り出している。重さ26.4ｇを測る。1046は素材表面から連続した二次加工

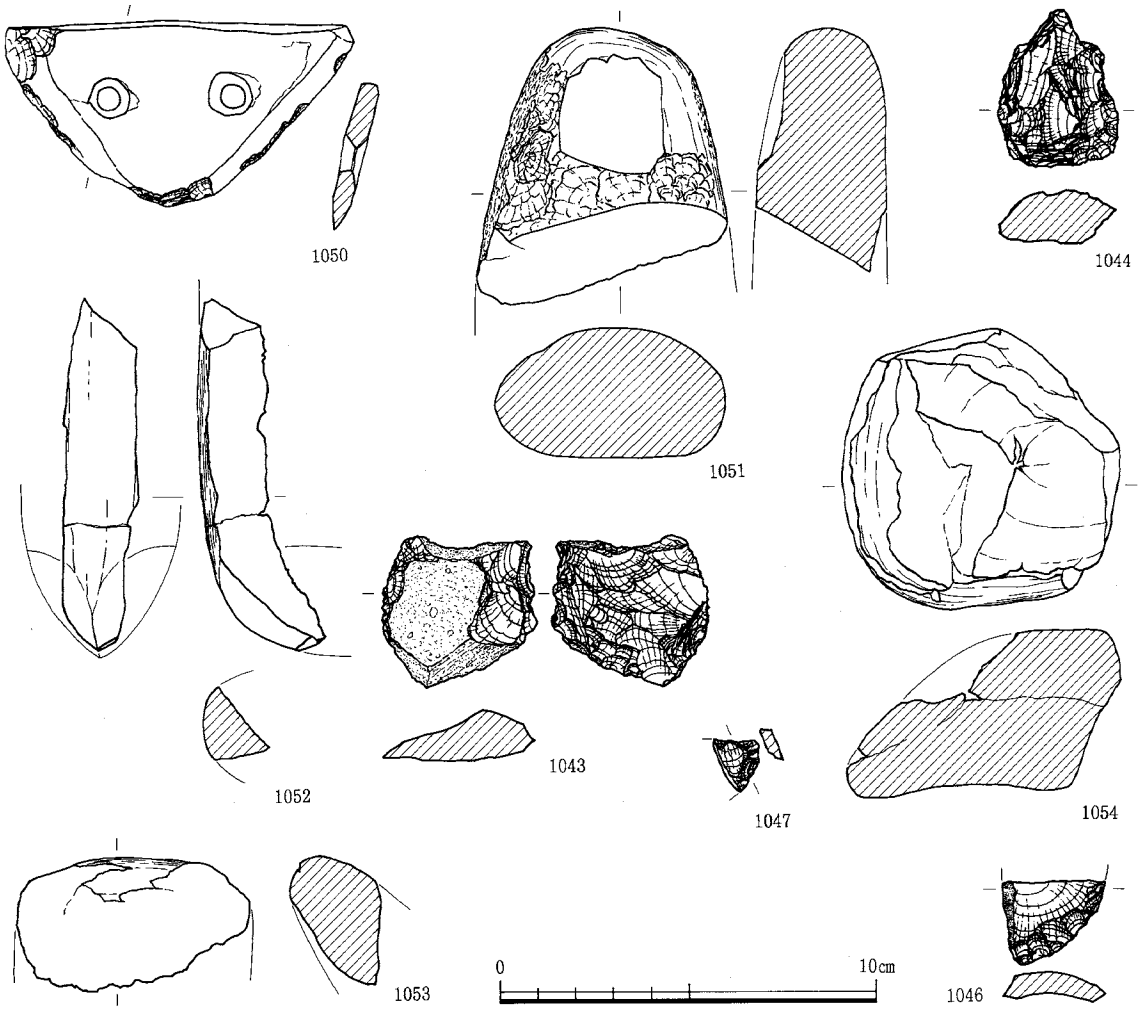


Fig. 24　竪穴住居跡81出土石器実測図２

を加え鋭い刃部を造り出しているが、大半が欠失しているため全体の形状はわからない。1043は主要剥離面から二次加工が加えられた端部片で、石匙の可能性もある。

1054は凝灰岩ホルンフェルス製の磨石で、全体が磨耗している。重さ278.6ｇ強を測る。

以上のほか、磨製石器の細片１点を剥片の一部に二次加工を加えた剥片石器７点があるが、剥片石器については、他の住居跡、土壙出土のものと大差ないため、ここでは省略する。

本住居跡では、黒曜石製の剥片・削片・石核が多量に出土しており、図化しなかったが少し紹介しておく。剥片は縦長剥片も少量あるが、長さ3.5cm前後、先端が幅広で２～3.5cmのものと、長さ２cm弱、先端が幅広で２cm前後、打面幅１cm前後のものがそれぞれ出土剥片の40％以上を占めている。石核もこういった剥片を生み出すものであり、典型例として、鈴桶技法のものが１点ある。したがって、石核・剥片は打製石鏃製作用であるといえよう。

土壙12・15　土壙12からは黒曜石製の剥片１点・削片10点の11点の石製品が、土壙15からは黒曜石製の打製石鏃未製品・剥片・削片・礫各１点の４点の石製品が出土した。

土壙13（Fig.25）　本土壙からは打製石鏃（1110・1111）２点、掻器１点、黒曜石製剥片石器２点と黒曜石製の剥片８点・削片12点・石核３点・安山岩製剥片２点の30点の石製品が出土した。1110・1111は古銅輝石安山岩製で、表裏とも比較的丁寧な二次加工を加え横断面形菱形に整形し、やや内湾する基部をもっている。重さ0.6ｇ弱・0.6ｇを測る。1109も古銅輝石安山岩製の残核を素材として、表皮が残る１面を残して表裏から二次加工を加え鋭い刃部を造り出している。重さ61.6ｇ強を測る。

土壙17（Fig.25）　本土壙からは打製石鏃（1104）・石製穂摘具（1101）・削器（1102）・砥石(1100)各１点、剥片石器（1103等）２点と黒曜石製の剥片６点・削片５点・石核２点・礫１点、古銅輝石安山岩製の剥片２点、削片１点の23点の石製品が出土した。1104は黒曜石製で表裏とも比較的丁寧な

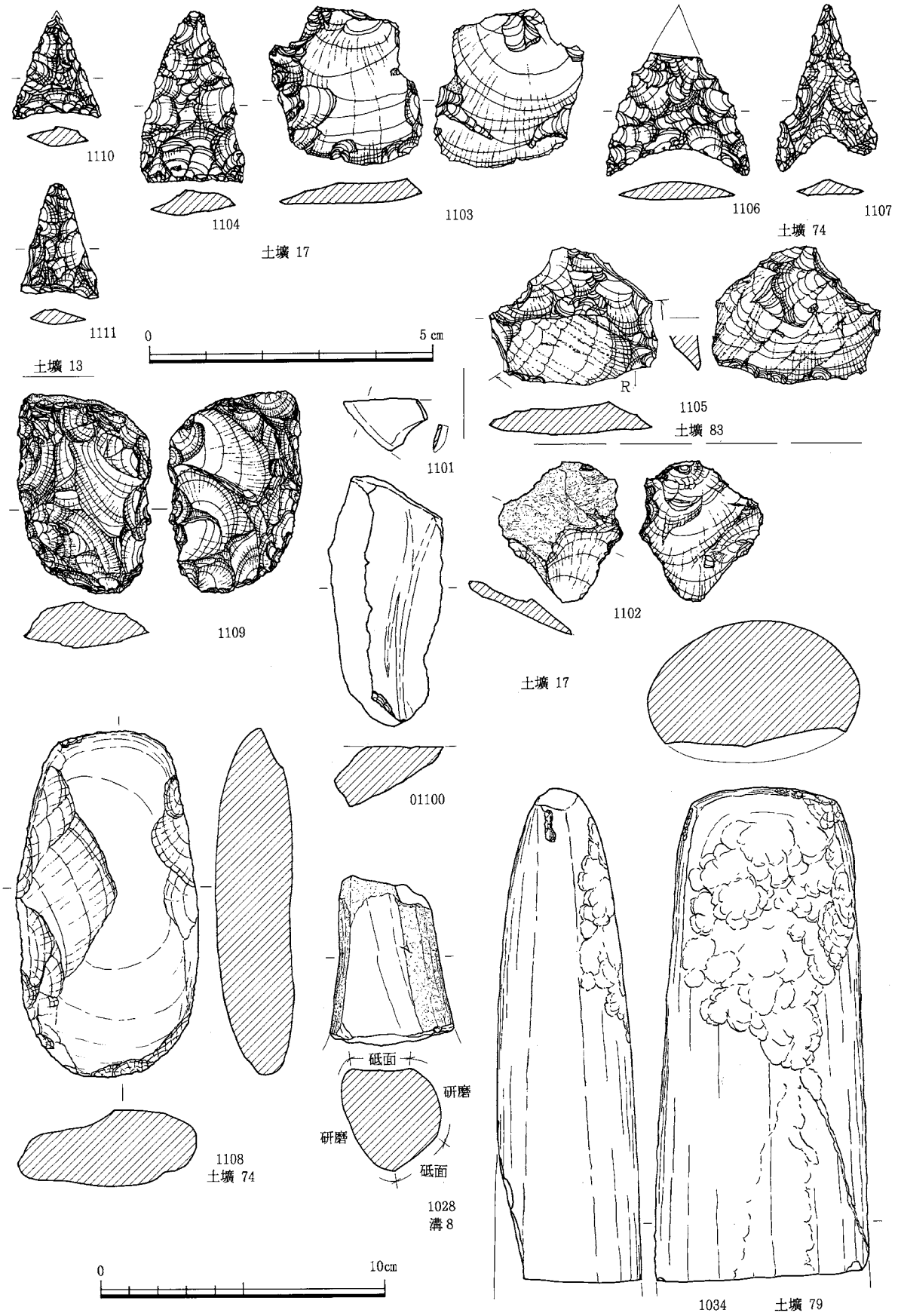


Fig. 25　各土壙及び溝 8 出土石器実測図

二次加工を加え、二等辺三角形に整形し、横断面形菱形に仕上げている。重さ2.6ｇ弱を測る。1101は凝灰岩ホルンフェンス製の端部片である。1102は古銅輝石安山岩製の表皮が残る剥片を素材として、右縁辺に表裏から二次加工を加え刃部を造り出している。重さ13.6ｇを測る。1103は長さ・幅2.7cmの剥片を素材として、縁辺に表から二次加工を加えている。重さ3.2ｇ強を測る。1100は砂岩製の破片である。

土壙40・57　土壙40からは黒曜石製の剥片４点・礫１点、古銅輝石安山岩製の剥片１点の６点の石製品が、土壙57からは黒曜石製の剥片１点・石核１点、安山岩素材１点の３点の石製品が出土した。

土壙74（Fig.25）　本土壙からは打製石鏃（1106・1107）２点、敲石（1108）と黒曜石製の剥片２点・削片２点の７点の石製品が出土した。1106は黒曜石製、1107は古銅輝石安山岩製で、２点とも基部は内湾している。1106は表裏とも比較的丁寧な押圧剥離を加え、横断面形凸レンズ状に仕上げている。重さ1.5ｇを測る。1107も比較的丁寧な二次加工を加え、横断面形三角形に仕上げている。重さ1.1ｇ強を測る。1108は長楕円形を呈す河原礫の両側に一部剥離加工を加えた後研磨し、木口端部には敲打痕がみられる。

土壙79（Fig.25）　本土壙からは太型蛤刃石斧（1034）１点と黒曜石製の剥片１点・削片５点の７点の石製品が出土した。1034は今山産出玄武岩製で、敲打整形後比較的丁寧に研磨を加えている。横断面形は楕円形を呈し、刃部は欠失している。重さ1,106.5ｇを測る。

土壙83（Fig.25）　本土壙からは黒曜石製の剥片石器（1105）と削片１点の２点の石製品が出土した。1105は横広の剥片を素材として端部に表から二次加工を加えている。重さ4.1ｇ強を測る。

溝８（Fig.25）　本溝からは砥石（1028）１点と黒曜石製の剥片２点・削片６点の９点の石製品が出土した。1028は砂岩製の手持ち砥石で、表裏に砥面があり、両側は研磨されている。

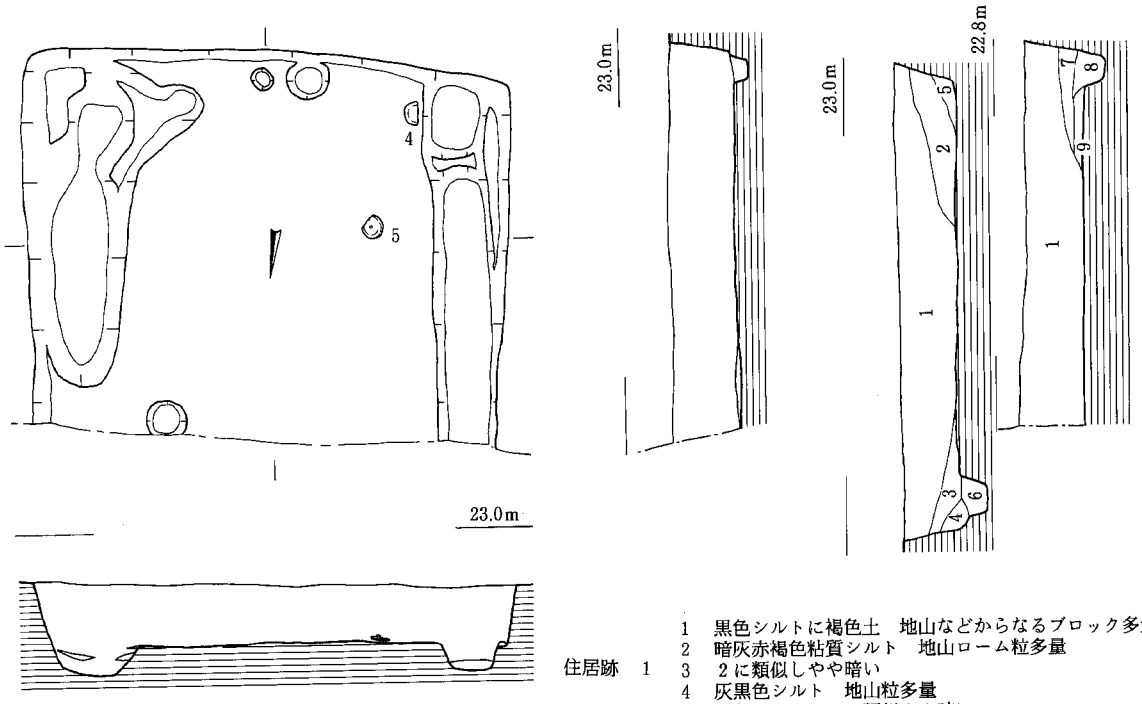
出土石器について　本調査においては、弥生時代の石製品が938点出土した。本調査検出の遺構は、溝８を除くと、板付Ⅰ式土器新段階から板付Ⅱ式土器中段階の弥生時代前期中頃から後葉にかけてのものである。古代遺構出土の弥生時代石器も前期のものといえる。

竪穴住居跡81では、石器52点等367点の石製品が出土した。出土割合は、石器14％、未製品４％、素材および加工屑82％となる。用途別に出土石器をみていくと、武器（狩猟具：石鏃・尖頭器）65％、調理具（削器・剥片石器・磨石）21％、収穫具（穂摘具）２％、伐採斧６％、工具（敲石・石錐・砥石）４％、その他２％となる。また、大陸系磨製石器の出土石器中の割合は10％を占める。本住居跡からは石鏃が多量に出土しており、石鏃未製品があること、石核・剥片が石鏃素材と考えられることから石鏃製作者住居と考えられる。

弥生時代各遺構からは568点の石製品が出土し、出土割合は石器が13％、未製品３％、素材および加工屑84％である。用途別割合は武器（狩猟具）46％、収穫具５％、調理具（掻器含む）29％、伐採斧11％、工具７％、加工具（編み錘）１％、その他１％となる。竪穴住居跡81を除いた各遺構出土石器は26点で、武器（狩猟具）８％、収穫具11％、調理具46％、伐採斧19％、工具12％、加工具４％となる。また、大陸系磨製石器の出土割合は17％を占めている。

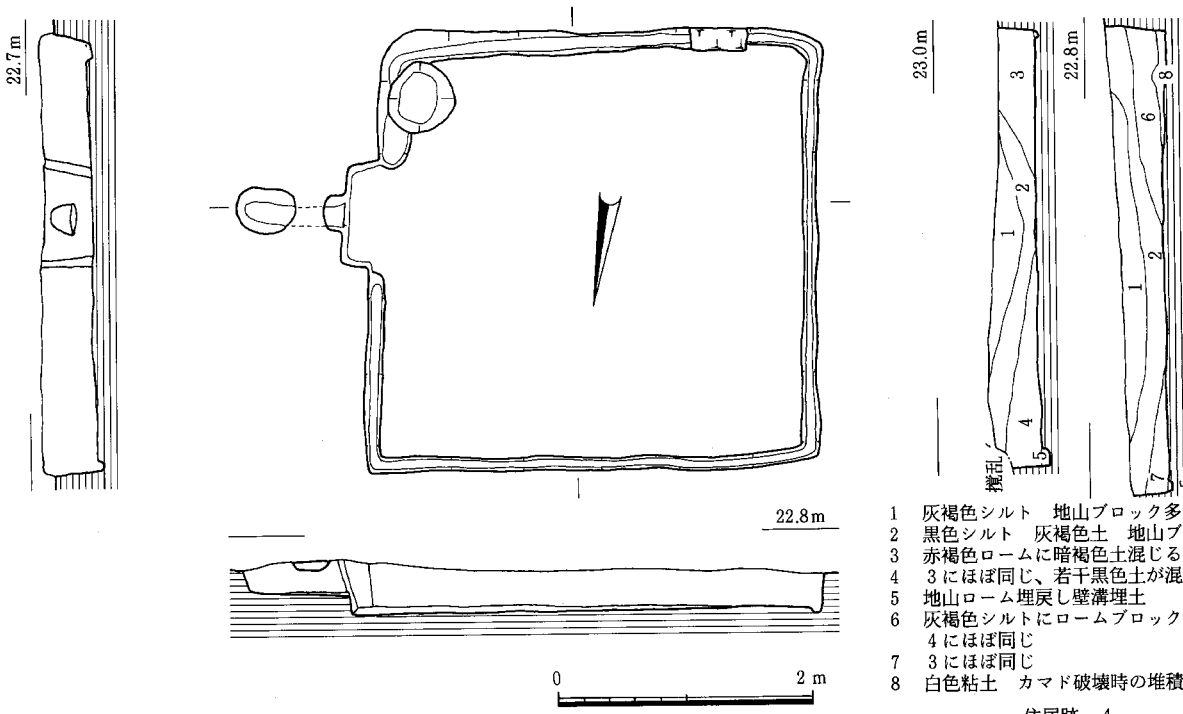
古代遺構出土の石器を含めると石器は110点で、石製品の12％となる。用途で分けると、武器（狩猟具）48％、土掘り具（打製石斧）１％、収穫具２％、調理具26％、伐採斧８％、加工斧（抉入片刃石斧）２％、工具８％、加工具１％、紡織具（紡錘車）１％、その他１％となる。

本調査出土石器の大陸系磨製石器の割合、用途別の出土割合は、加工斧が少なく、石鏃が多いということはあるが、福岡平野の弥生時代前期中頃の各遺跡での出土割合と近似しており、当時の道具を反映しているといえよう。



住居跡　1

1　黒色シルトに褐色土　地山などからなるブロック多量
2　暗灰赤褐色粘質シルト　地山ローム粒多量
3　2に類似しやや暗い
4　灰黒色シルト　地山粒多量
5　黒色シルト　4に類似やや暗い
6　明赤褐色地山ローム埋戻し　壁溝状土壙埋土
7　暗褐色シルト　3に類似
8　黒色シルト　壁際のピット埋土
9　灰赤褐色粘質土　ピットに切られており貼床か？
最低1～4　7は人為的な埋戻しと思われる。6も可能性有



1　灰褐色シルト　地山ブロック多量
2　黒色シルト　灰褐色土　地山ブロック多量
3　赤褐色ロームに暗褐色土混じる
4　3にほぼ同じ、若干黒色土が混じる
5　地山ローム埋戻し壁溝埋土
6　灰褐色シルトにロームブロック多量
4にほぼ同じ
7　3にほぼ同じ
8　白色粘土　カマド破壊時の堆積

住居跡　4

Fig. 26　古代住居跡実測図1（1：60）

4．古代の遺構と遺物

古代の主な遺構は、竪穴式住居跡58基、土壙52基、井戸２基、溝２条である。土壙52基は一定の深さとプラン、出土遺物があり、調査時に人為的な土壙と認定して番号を付したものに限っている。また検出位置は付図の全体図を参照されたい。尚遺構番号であるが、５次調査では検出順にＭ１から番号を付し、８次、10次についてはこの２次分で通し番号をまたＭ１から付している。この報告では番号の重複を避けるため、８、10次調査分については、８を頭に加え、801から番号を付すことにする。

（１）住居跡

まず雑餉隈遺跡検出の住居の典型例である住居跡４を例に、雑餉隈遺跡５、８、10次調査検出の古代住居跡の基本的な形態を述べておきたい。平面形は方形をなす。規模は２ｍ～５ｍほどで、５ｍ四方のものはこの遺跡ではかなり大形という印象である。竈は、壁から方形または楕円形の張出しを持って作られ、更に外側へトンネル状の煙道をもつものや、住居壁から直接煙道が付くものがあるが、南八幡遺跡で見られたような竈側の棚状遺構は、かなり遺存の良い住居でも見られなかったので、雑餉隈遺跡では敷設されていなかったと考えている。竈はほとんど破砕されており、前面に白色粘土や焼土が散布する状態である。貼床は多くの住居で見られた。主柱穴は確認されないものがほとんどである。廃棄後の覆土はブロックを多量に含んでおり、人為的に埋め立てられたものが多い。その際に土器の投棄が行なわれている例もある。もちろん例外的は住居も多数あり、それについては各住居の項で述べていく。

住居跡１（Fig.26）

Ｂ１区で検出した。北側が調査区外に出るが、こちら側に竈が付くのであろう。１辺3.8ｍほどの方形と考えられる。東西壁際に幅広の壁溝が見られるが、本来貼床下にあるものかも知れない。主柱穴は確認できない。覆土中にはロームブロックを多量に含み、人為的な埋め戻しが行なわれたと考えられる。

出土土器（Fig.27）

図示したものはいずれも須恵器である。１は短脚の高坏脚である。端部は折り返している。２は壺底部であろう。厚い底部と高台を持つ。内外面に回転ナデを施す。３は坏である。体部はやや内湾気味に立ち上がる。高台は底部端に付く。外底部はヘラ切りのままである。４は皿である。外底部はヘラ切りの跡をナデを施す。５は蓋である。灰白色で焼成はよくない。つまみを欠く。天井部はヘラ削りを施す。

住居跡４（Fig.26）

Ｆ８区で検出した。１辺3.5ｍほどの方形である。東側に竈を持つ。竈は幅90㎝、奥行30㎝の張出し部に敷設し、張出し部奥壁中央から長90㎝のトンネル状の煙道が伸び、現況で径30㎝ほどのピットに連結して、排気する構造になっている。竈は破砕され、張出し部前面に粘土が散漫に散布するのみである。竈のすぐ脇に当たる南東隅に径50㎝、深さ20㎝ほどの凹みがある。張出し部を除く四周に幅10㎝程の壁溝が巡る。主柱穴は検出されなかった。図化に耐える遺物は出土していない。

住居跡５（Fig.28）

Ｄ２区で検出した。１辺2.8ｍほどの方形である。西側に竈を持つ。竈は幅70㎝、奥行60㎝の張出

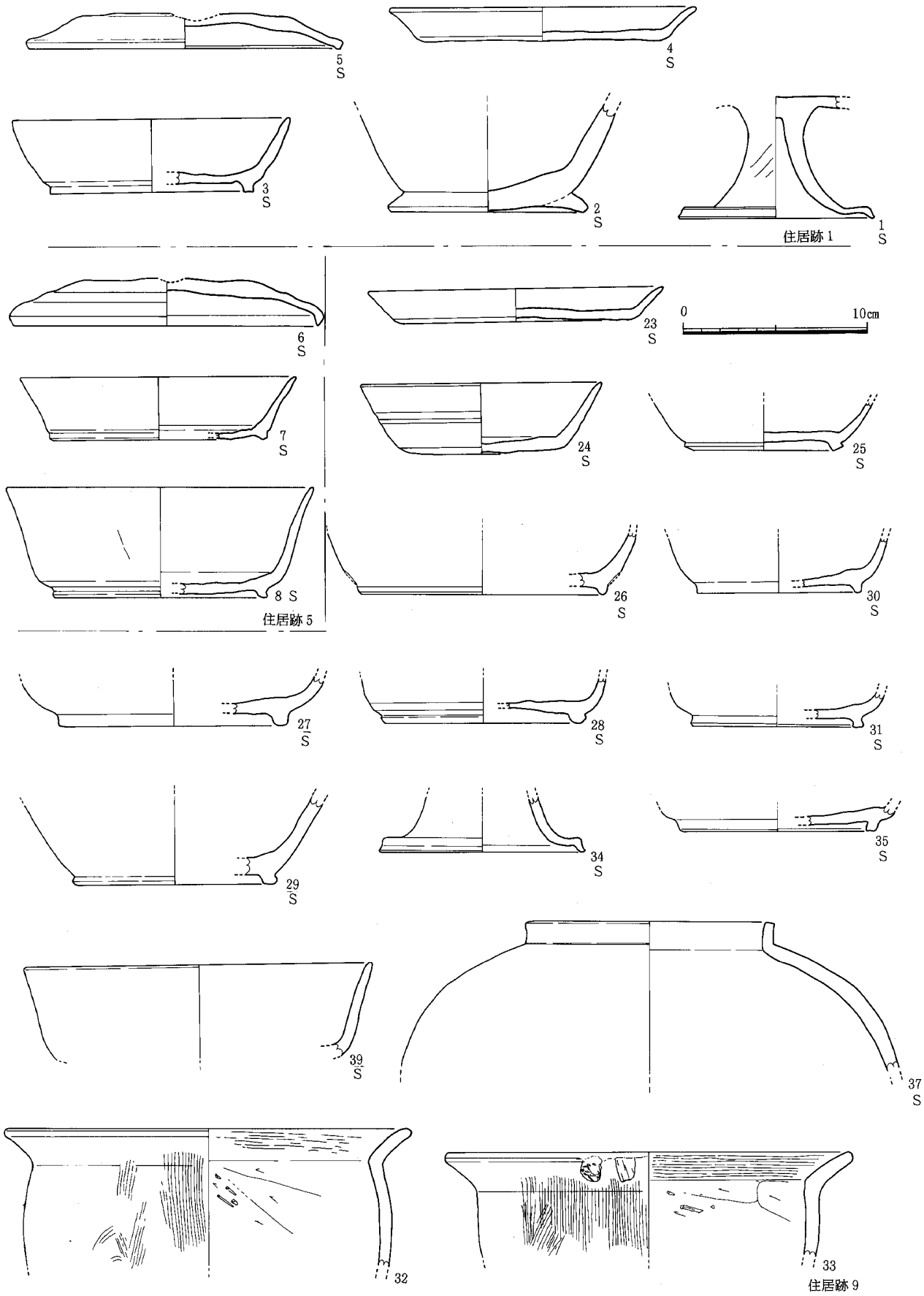


Fig. 27　古代住居跡出土土器実測図1（1：3）

し部に敷設し、張出し部奥壁中央から煙道が伸びるが、端部は攪乱によって破壊されている。竈は破砕され、粘土の散布もほとんど見られない。竈のすぐ脇に当たる南西隅に、壁を抉るような状態で、床からの深さ10cmほどの掘り込みがある。住居跡4にも類似した掘り込みがあったが、竈補修用粘土などの貯蔵用土壙ではないかと考えている。張出し部を除く四周に幅20cm程の壁溝が巡る。主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.27)

図示した土器はいずれも須恵器である。6は蓋である。つまみを欠く。灰白色で焼成がよくない。天井部にヘラ削りを施す。7は坏である。口径に比して器高が低い。高台は体部と底部の境に付く。薄手で焼成もよい。底部には板目が認められる。8は深めの坏である。口縁部近くでわずかに外反する。

住居跡6、16(Fig.28)

D2区で検出した。北側を攪乱で破壊されている上に、2基以上が切り合っているため形態は良くわからない。

住居跡6は住居跡16を切っている。西側のベッド上の高床部は古代の住居としては例が無く、別の住居になる可能性もあるが、土層や平面形の精査によっても確証は得られない。この部分を除くと住居跡6は1辺2.6〜2.8mほどの方形で、高床部を入れると、東西3.4mほどの長方形となる。遺存している壁には竈は無く、削平された北側にあった可能性が高い。壁溝や主柱穴は検出されなかった。

住居跡16は1辺3mほどの方形に復元されよう。竈は確認されていないが、東壁際に土器片や焼土、粘土の散布があり、また壁溝がこの地点で切れていることから、あるいはこちら側に合ったのかも知れない。但し、張出し部や煙道などは無い。東壁の中央付近から南壁にかけて、幅20cmほどの壁溝が巡る。主柱穴は検出されていない。

出土土器(Fig.29)

13、14、18は須恵器蓋である。13はつまみを欠く。天井部はいずれもヘラ削りを施す。14は住居6の床面出土である。15は坏である。高台は踏張り気味に取り付き、底部端からやや内側に付く。底部と体部の境は丸みを帯び、体部は口縁付近でわずかに外反する。9も坏で、体部はほぼ直線的に開く。高台は底部端からやや内側に付く。住居6床面出土。10は外反しながら開く体部で、灰白色を呈し、焼成が悪い。11は体部のみの破片で、直線的に開き、焼成はよい。19は焼成が悪い。15は口径13cm、10は口径15cm、他は14cm程を測る。12は大形の坏である。口径18cmを測る。体部は直線的に大きく開く。10と同様灰白色で焼成が悪い。以上の遺物が、一部住居16覆土出土の破片と接合したものもあるが、住居6に伴うと考えられるものである。

73は須恵器坏である。体部は直線的に開く。高台は底部端からやや内側に付く。焼成はよい。ほぼ完形で、住居16床面の出土である。76は須恵器の皿であろう。口縁部のみの破片である。75は土師器の小形甕である。器面は磨滅が著しく、調整は不詳であるが、内面はケズリと思われる。床面出土。77も小形甕である。16、17、78は土師器甕である。外面は縦方向のハケメを施し、口縁部にヨコナデを施す。口縁部内面は横方向のハケメで、胴部内面はケズリを施す。17、78は床面出土である。以上は住居16出土と考えられる遺物である。

住居跡9 (Fig.30)

E2区で検出した。東西4.5m、南北3.5mほどの横長の長方形を呈する。北側壁の中央に竈を持つ。

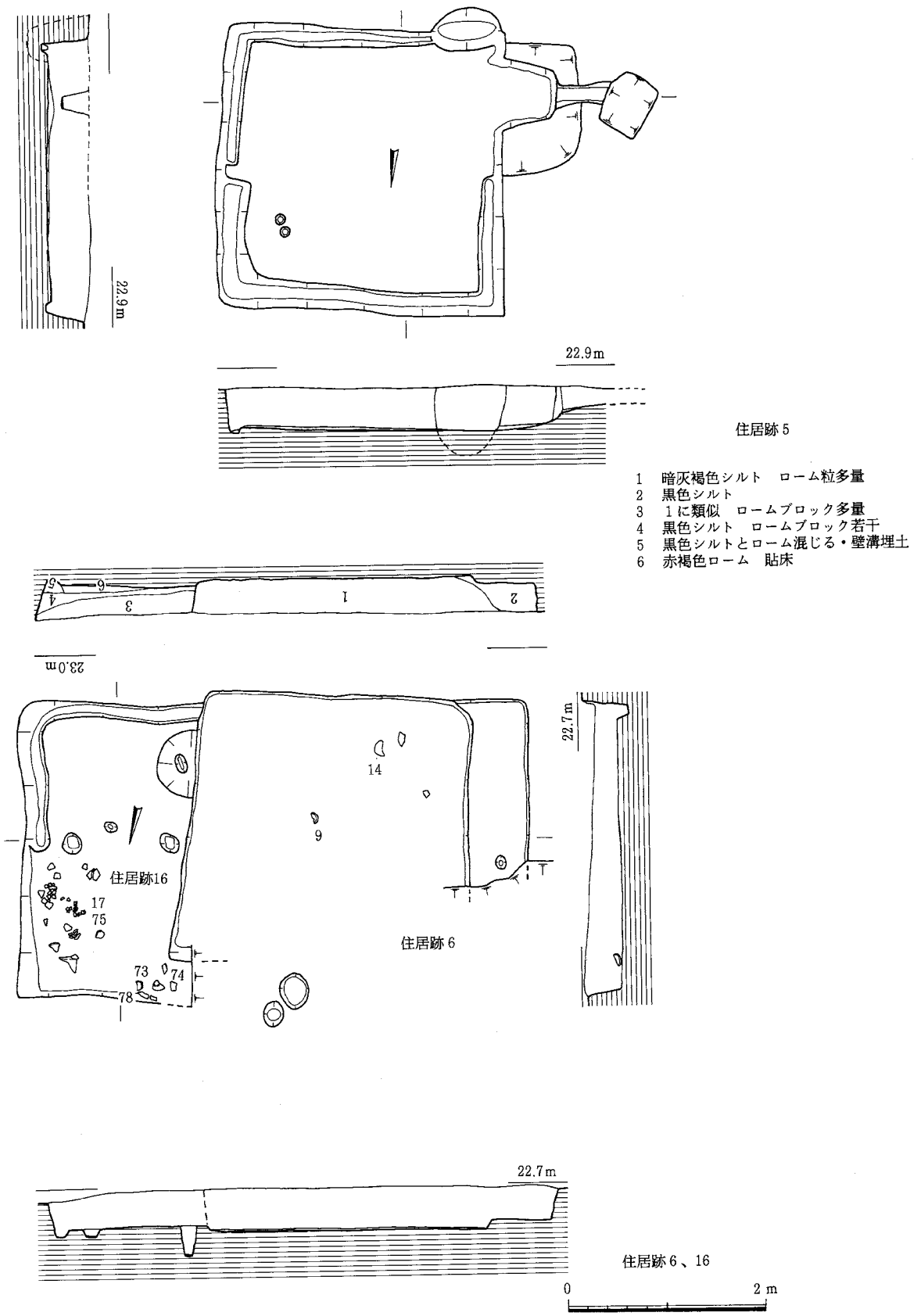


Fig. 28 古代住居跡実測図2（1：60）

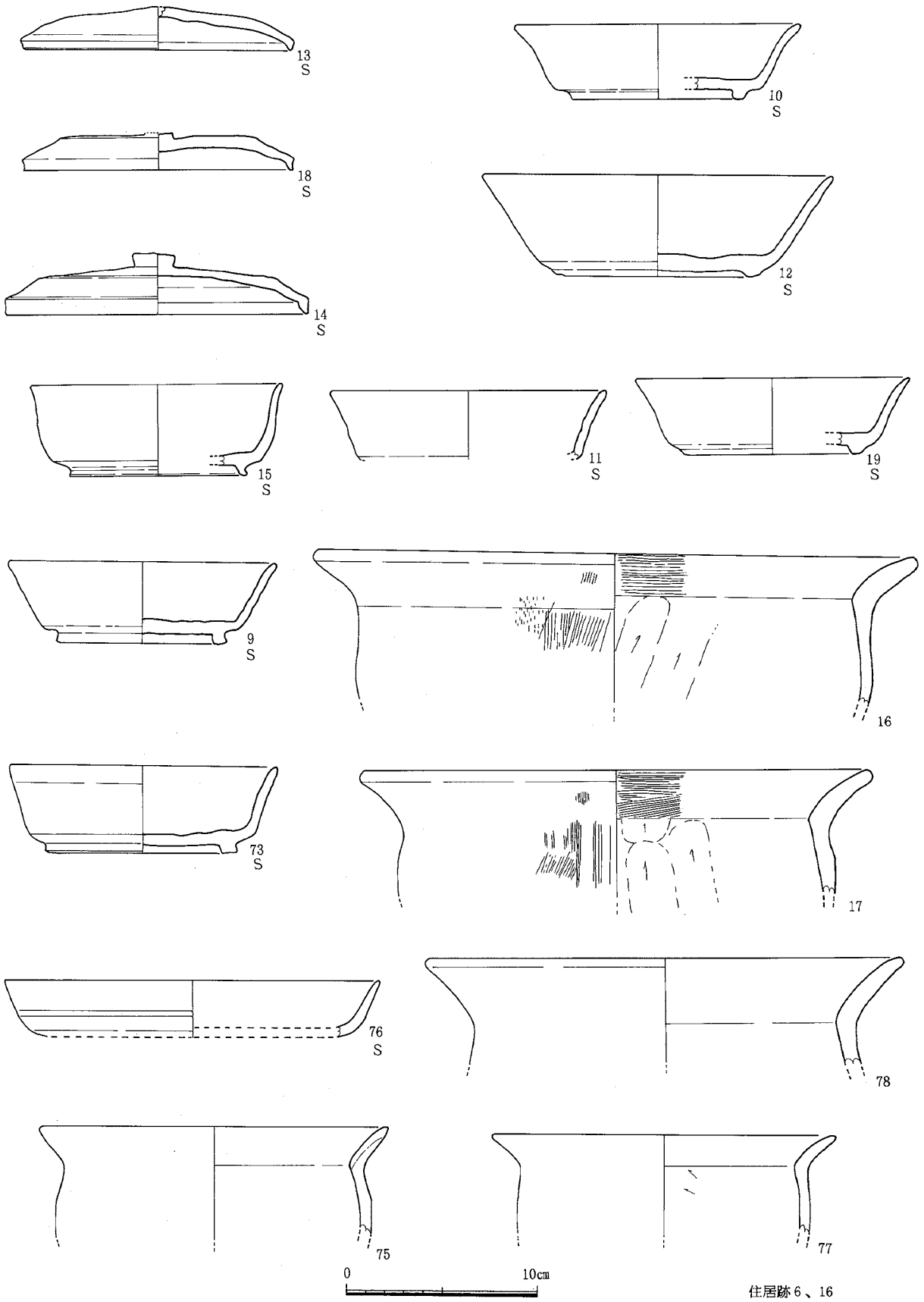


Fig. 29　古代住居跡出土土器実測図2（1：3）

竈は張出し部を持たず、壁から直接幅50cm、長90cm以上の煙道が伸びているが、煙道端部は調査区外に出る。煙道前面の竈跡は、住居床面より一段深く掘り込まれている。竈は破砕され、焼土や粘土が竈跡や煙道に雑然と放置されたような状態を示している。床面に幅広の溝が壁に沿って巡っているが、後述する他の住居との比較から、住居跡１と同じく、本来貼床の下に掘られていた可能性がある。主柱穴は確認できない。

出土土器(Fig.27)

24は須恵器坏である。高台を持たない。体部は直線的に大きく開く。底部はヘラ切りで、板目状の圧痕が認められる。口径13cmを測る。25～28、30、31は高台付の坏である。底部片のみであるが、高台は底部端からやや内側に付くものが多い。25は底部端に近い。26、27が高台径11～13cmとやや大形品に属するか。29は器壁が厚く、高台も大振りで、外面は回転ヘラ削りをナデ消したような痕跡が認められ、壺底部と考えられる。39は坏体部である。焼成はよい。34は短脚の高坏脚部である。端部は折り曲げている。37は短頸壺である。口縁部は短く直立し、端部は坦面をなす。内外面とも回転ナデ。復元口径13cmを測る。32、33は土師器甕である。外面に縦方向、口縁部内面に横方向のハケメを施し、口縁部外面は横ナデで消す。胴部内面はケズリを施す。

住居跡11(Fig.30)

Ｅ２区で検出した。東西3.1m、南北2,8mほどのわずかに横長の長方形を呈する。北側壁の中央に粘土の散布が見られ、こちら側に竈を持っていたと考えられる。竈は張出し部を持たず、煙道も見られない。住居の遺存が悪いので、煙道は削平された可能性もある。弥生時代貯蔵穴86を切るため、貼床は比較的厚い。住居跡１や９のように幅広の溝を壁に沿って巡らせ、それを埋め立てる形で床を貼っている。主柱穴は確認されず、貼床上面では壁溝も見られない。

出土土器(Fig.31)

図示した土器はいずれも須恵器である。44は蓋である。口径16cmを測る。低平なつまみをもち、口縁端部は短く屈曲する。天井部は回転ヘラ削りを施す。43は坏である。高台は底部端に付き、細くて高い。45は底部と体部の境が丸みを持ち、不明瞭である。

住居跡20(Fig.30)

Ｄ３区で検出した。土壙21を切る。１辺2.4～2.6m程の方形を呈する。北側の壁に竈を持つ。竈は張出し部を持たず、壁から直接幅30cm、長110cmの煙道が伸びている。煙道端部は径40cmほどのピットになる。本来は住居跡４のようなトンネル状の煙道と考えられる。端部のピットには甕が据えられ、煙突の機能を持っていたものと考えられる。煙道前面の竈跡は、住居床面より--段深く掘り込まれている。竈は破砕され、焼土や粘土が煙道前面に散布するのみである。壁溝、主柱穴は確認できない。

出土土器(Fig.31)

図示した土器は109を除いて床面出土である。106は須恵器蓋である。つまみを欠く。灰白色で焼成が悪く調整が不明で、ヘラ削りの有無もよくわからない。口縁端もわずかに屈曲するのみである。111は須恵器皿である。口縁端部でわずかに外反する。底部はヘラ切りのままである。110は須恵器坏である。体部は直線的に開く。102は高台のない坏である。底部はヘラ切りのままである。体部は直線的に大きく開く。107は土師器皿である。明赤褐色を呈する。外底部は回転ヘラ削りを施す。103～105、108、109は土師器甕である。103はほぼ器形がわかる。口縁部は外反しながら強く屈曲する。胴部は截頭球形で、口径に比して器高が低い。外面は縦方向のハケメで、口縁部付近をヨコナデで消す。底

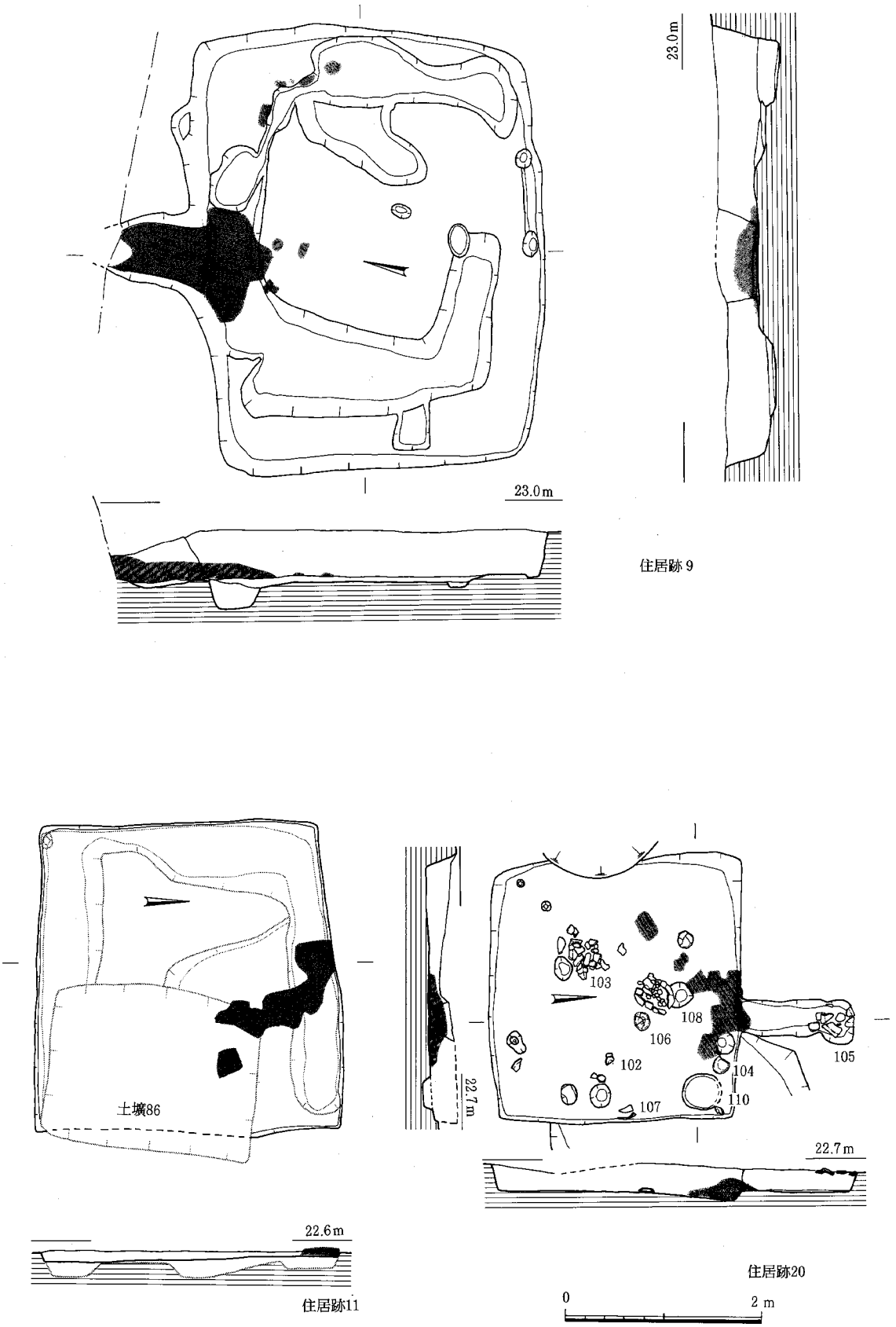


Fig. 30　古代住居跡実測図3（1：60）

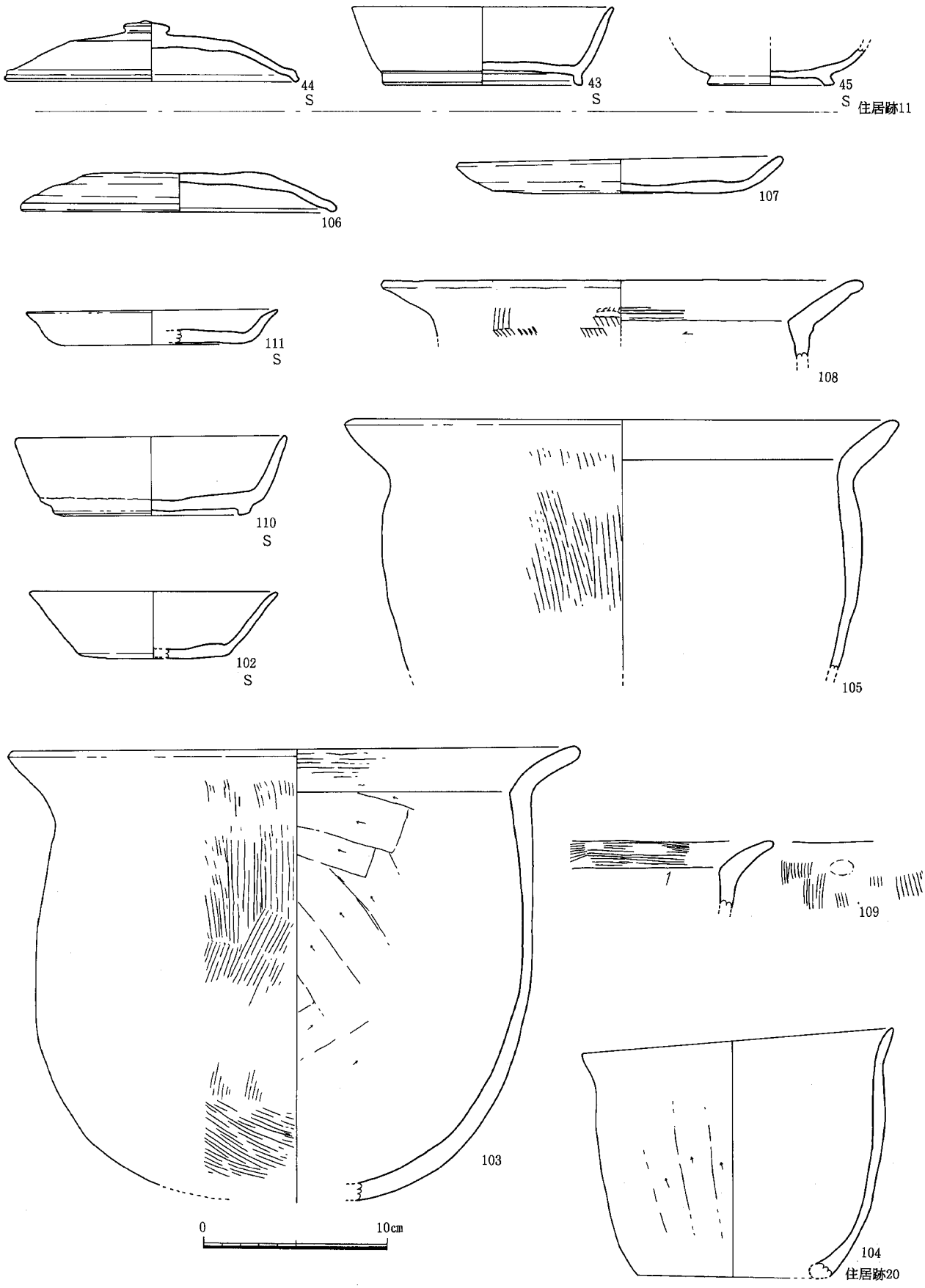
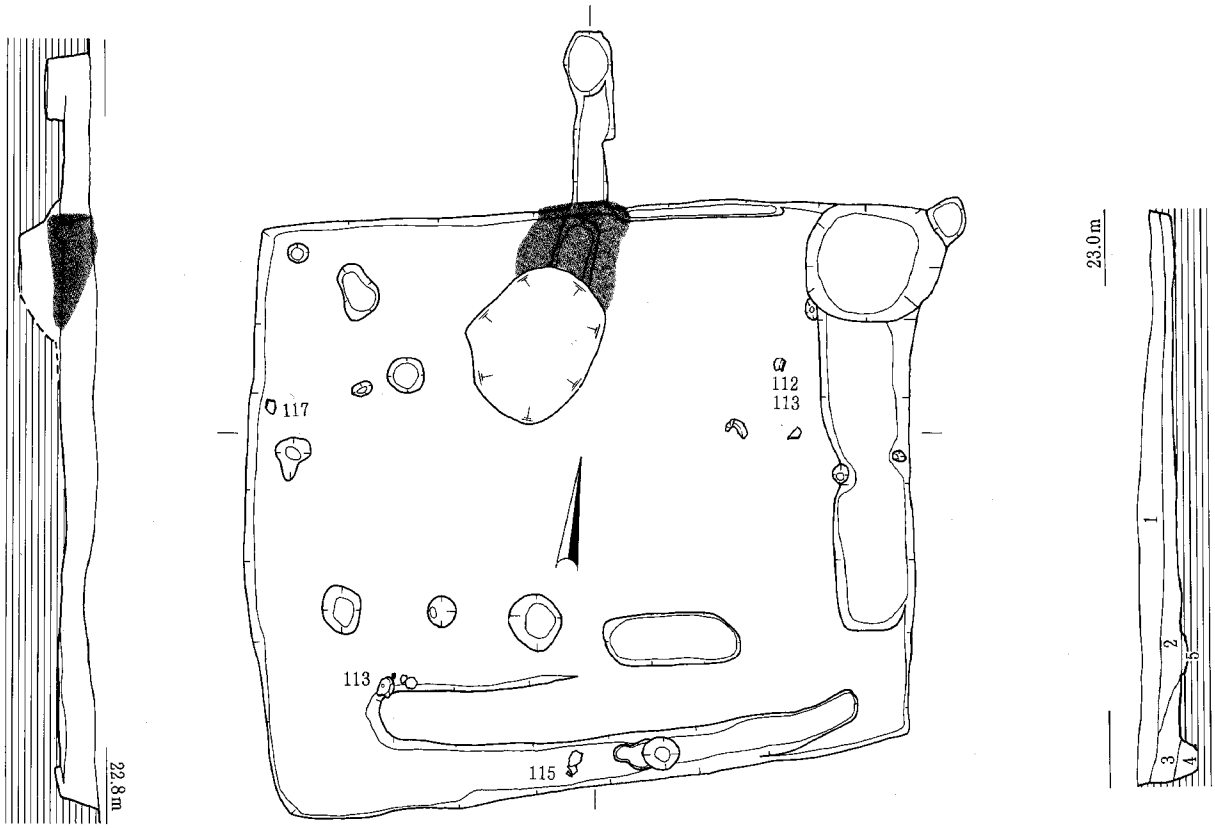
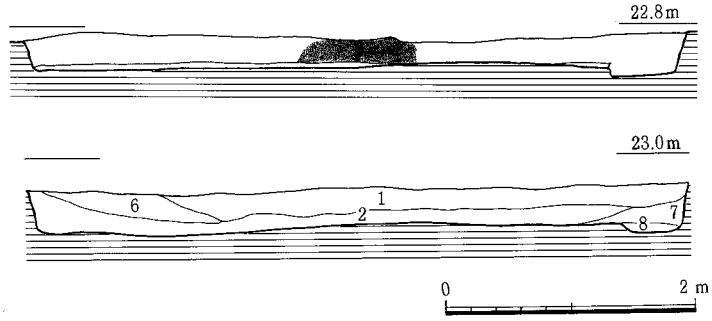


Fig. 31　古代住居跡出土土器実測図３（１：３）





1　暗灰褐色シルト　ローム粒　多量
2　黒色シルト
3　1に類似　ロームブロック　多量
4　黒色シルト　ロームブロック　若干
5　2に類似　分層されない可能性有り
6　2に同じと思われる
7　2に同じと思われる
8　2に同じと思われる　壁溝埋土
　4に似たブロック
　若干混じるが8と分層困難

住居跡23

Fig. 32　古代住居跡実測図4（1：60）

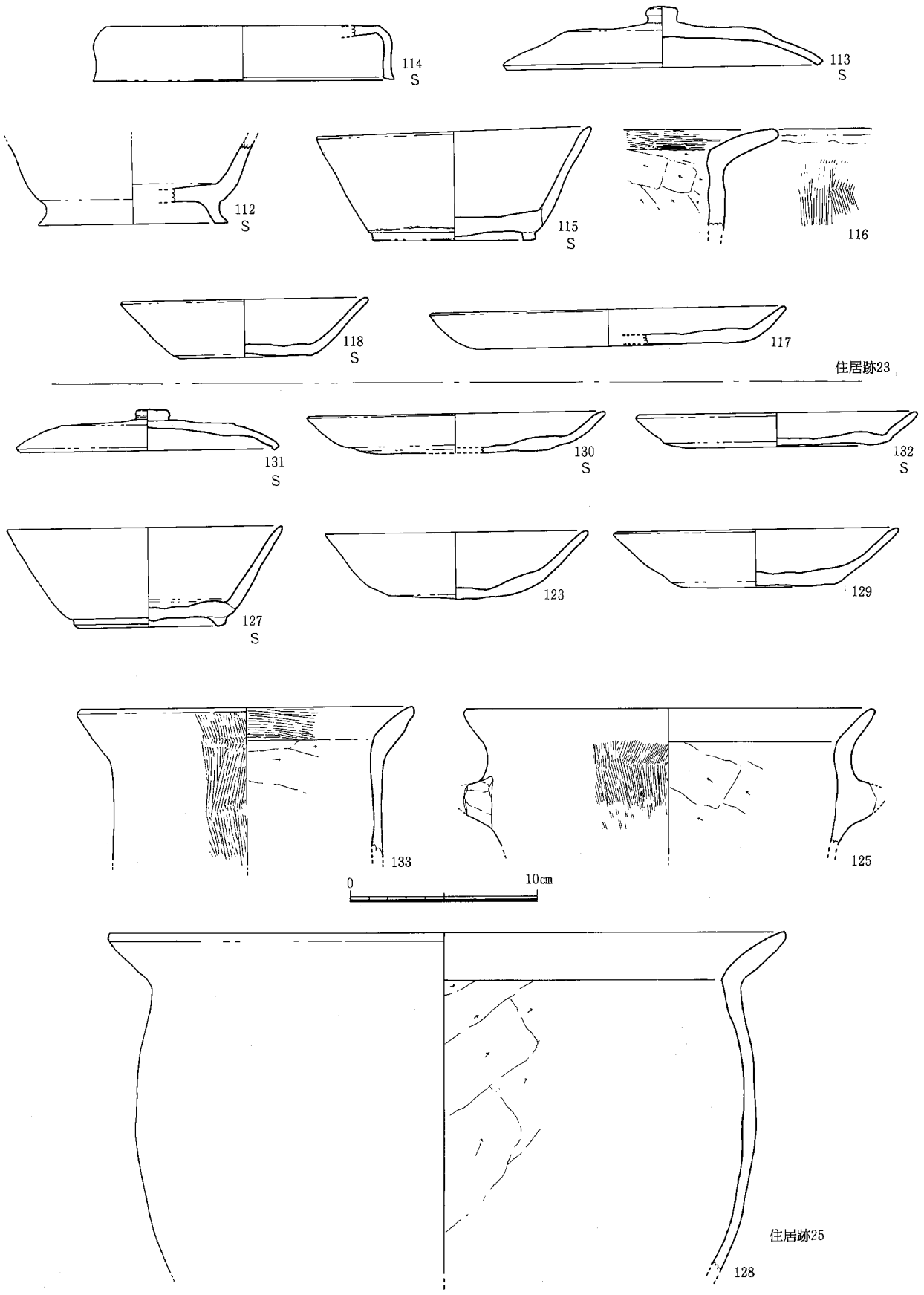


Fig. 33　古代住居跡出土土器実測図４（１：３）

部のハケメは放射状ではなく、平行に施される。口縁内面は横方向のハケメで、胴部内面はケズリを施す。105は口縁部が厚く、直線的に開く。108、109は内面の口縁部と胴部の境にケズリによって明瞭な稜が立つ。104は甑であろう。口縁はわずかに開く。外面はケズリ調整の後、粗くナデられている。内面は比較的丁寧な横方向のナデを施す。

住居跡23(Fig.32)

Ｄ４区で検出した。東西5.3ｍ、南北4.7ｍほどの横長の長方形を呈する。北側壁中央に竈を持つ。竈は張出し部を持たず、壁から直接幅20㎝、長1.2ｍの煙道が伸びている。煙道端部は径40㎝ほどのピットになる。端部のピットは、煙道床面より一段深く掘り下げられている。煙道前面の竈跡も、住居床面より一段深く掘り込まれている。竈は破砕され、焼土や粘土が煙道前面に堆積しているが、袖、および奥壁の基底部のみ残存している。壁際には幅60～40㎝の壁溝が部分的に巡っている。北東隅の径１ｍ、深さ20㎝ほどの凹みは、住居跡４や５と同様の施設であろうか。

出土土器(Fig.33)

114は須恵器蓋である。屈曲して下方に垂下する。端部は坦面をなす。113も須恵器蓋である。灰白色で焼成が悪い。宝珠形のつまみを持つ。端部は屈曲せず、坦面をなすのみである。112は壺の底部であろうか。厚い底部と高台を持つ。高台は踏張り気味に取り付く。115は坏である。体部は直線的に大きく開く。底部は厚く、高台も幅広である。高台はほぼ底部端に付く。口径14.5㎝を測る。118は高台のない坏である。体部は大きく開く。底部はヘラ切りのままである。116、117は土師器である。116は甕の口縁部片である。口縁部は強く屈曲して開く。117は皿である。底部は回転ヘラ削りを施す。113、112、115、117は床面出土である。

住居跡25(Fig.34)

Ｃ６区で検出した。１辺3.7ｍほどの方形を呈する。煙道が北側、東側の２ヶ所に見られるが、最後に使用されていたのは東側である。東側の竈は中央やや南側に敷設され、張出し部を持たず、直接幅20㎝、長さ1.3ｍの煙道が取り付く。端部は煙道幅とほぼ同じ径のピットに連結する。竈は破砕され、煙道前面に粘土、焼土が堆積するが、袖の基底部のみが残存していた。竈部分は住居床面より一段深く掘り込まれている。北側煙道は、ほぼ中央に取り付き、幅20㎝、長さ1.4ｍの溝として残っている。

出土土器(Fig.33、35)

127、130～132は須恵器である。131は蓋である。低平な宝珠形のつまみを持つ。端部はごく短く屈曲する。天井部は回転ヘラ削りを施す。130は皿である。底部と体部の境は曖昧で、底部はヘラ切りのままである。132も皿である。底部はヘラ切りで、板目状の圧痕が認められる。127は坏である。体部は深く、直線的に大きく開く。高台はほぼ底部端に付く。ほぼ完形で、床面から出土した。口径15㎝を測る。灰白色で、焼成はよくない。123、125、128、129、133は土師器である。123は皿である。底部は丸みを帯びて緩やかに体部に至る。底部に回転ヘラ削りを施す。129も皿である。体部は回転ナデであるが、底部は磨滅して不詳である。123、129とも床面出土。125は把手を持ち、甑であろう。口縁部は緩やかに屈曲する。把手は口縁直下に付く。外面はハケメ、内面はケズリである。128は甕である。胴が張り、口縁部は強く屈曲して開く。磨滅が著しいが、外面はハケメであろう。133は口縁が厚く、胴が張らない。小形の甕である。128、133は竈近くの粘土内から出土している。Fig. 35も土師器甕である。胴の張りや口縁の屈曲など形態に差異はあるが、調整はほぼ共通している。126、

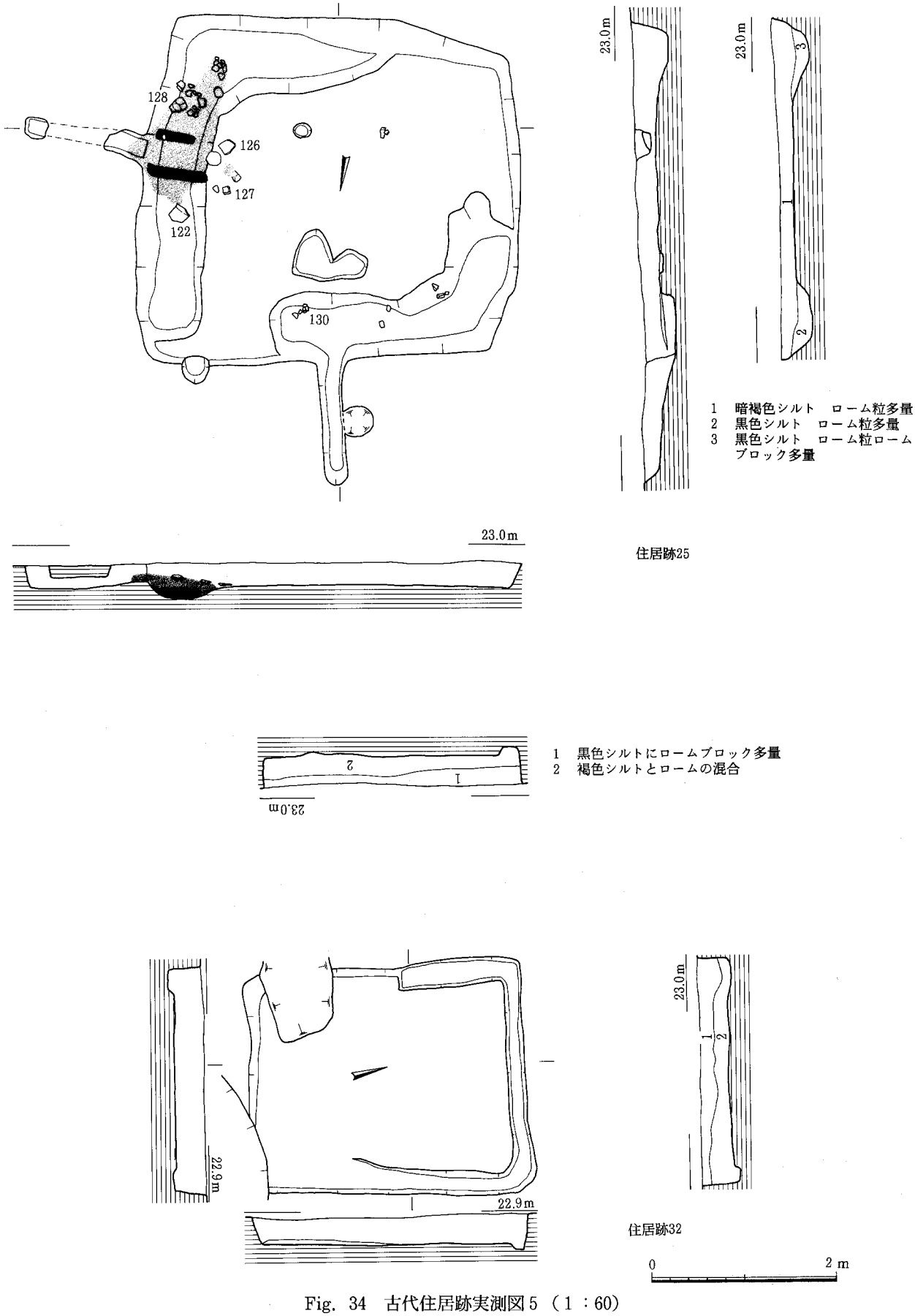


Fig. 34　古代住居跡実測図5（1：60）

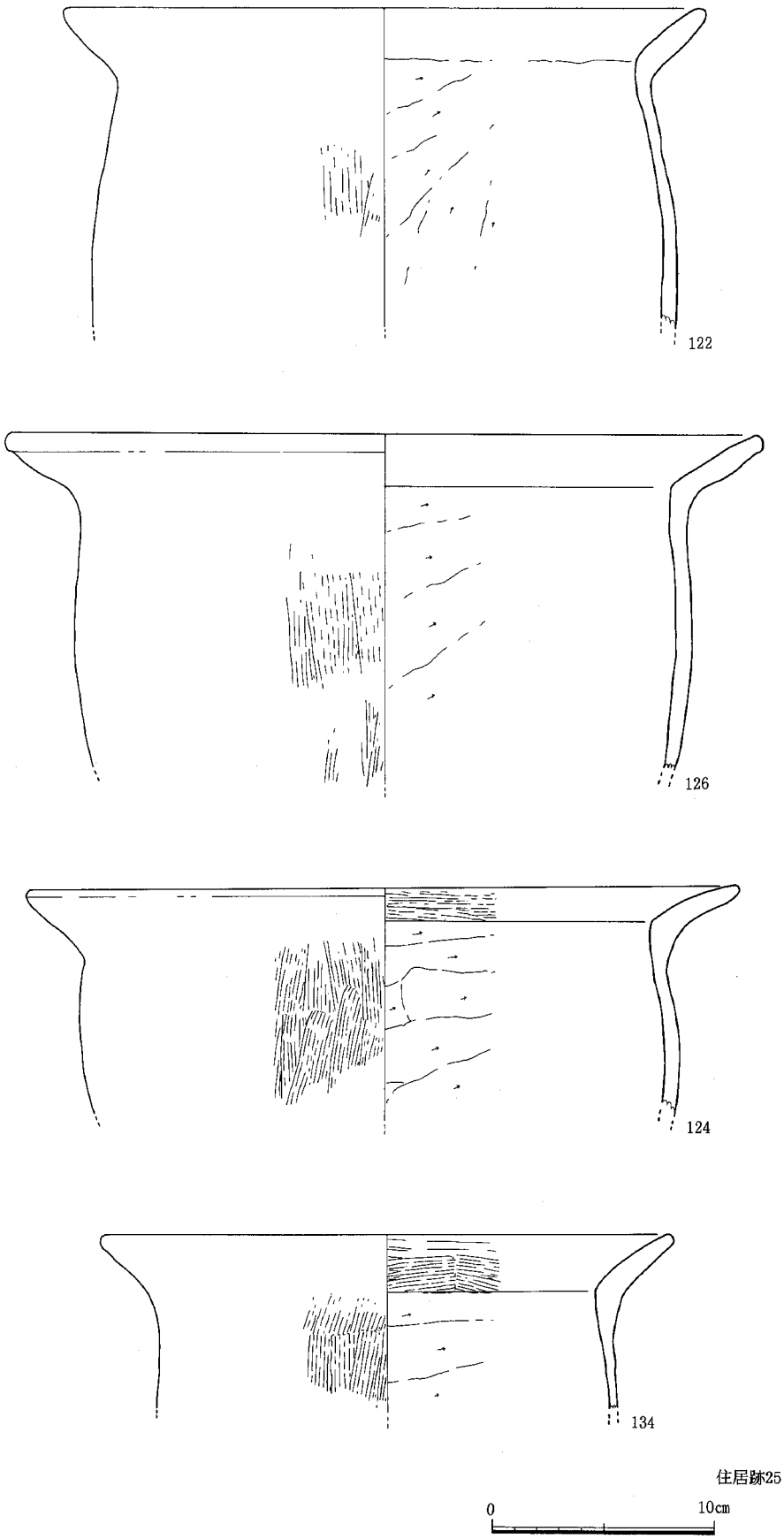


Fig. 35　古代住居跡出土土器実測図５（１：３）

124、134は竈付近の出土である。

住居跡26(Fig.36)

Ｄ７区で検出した。１辺5.5～5.3ｍほどの方形を呈する。竈は北側に敷設されるが、当初ほぼ中央にあったものが、後にやや東側へ作り替えられている。新しい方の竈は壁から直接トンネル状の煙道が取り付く。煙道は幅30㎝、長1.4ｍを測る。端部は径30㎝ほどのピットに連結する。ピット内には補強と思われる甕片が出土している。竈本体は破壊されており、袖の一部が遺存するのみである。竈部は住居床より一段深く掘り込まれている。古い方の煙道は壁のほぼ中央に取り付き、幅20㎝、長80㎝ほどを測る。但し、煙道前面に新期竈跡のような掘り込みが無く、実際にこの煙道の前に竈が敷設されたかどうかは疑問である。床面には幅20㎝ほどの壁溝が巡っている。貼床の下からは壁に沿って巡る幅60㎝ほどの溝が検出された。この溝を埋め立てる形で、床が貼られたことがわかる。また床面では検出できなかった主柱穴も確認でき、４本柱であることが明らかになった。

出土土器(Fig.37)

135は須恵器坏である。体部はやや外反しながら開く。ほぼ完形で、床面から出土している。坏である。136は蓋である。完形である。口径10.8㎝を測る。宝珠形のつまみを持つ。天井部には削りを施さない。端部はわずかに屈曲する。140も蓋である。扁平で、端部もわずかに突出するに過ぎない。つまみを欠くが、剥離痕が明瞭ではなく、本来なかった可能性もある。天井部にはケズリはない。137は土師器の蓋である。つまみの付近を天井ごと欠いており、つまみの有無は不明である。口縁端内面をわずかに凹ませ、端部を突出気味に作る。ケズリはないようである。138も土師器の蓋である。全面回転ナデと考えられる。端部の作りは須恵器に比して甘い。139、142、143は須恵器皿である。底部はヘラ切りで、142は部分的にナデを施す。143の底部には板目が見られる。142と143は竈付近の粘土内からの出土である。141は内黒の黒色土器坏である。内面に炭素を付着させミガキを施す。144～146は土師器である。144、145は甕である。144は小形である。調整はほぼ共通する。145の内面ケズリは、上部の一部がナデ消されている。146は把手である。141、145、146は煙道端部から出土している。

住居跡32(Fig.34)

Ｅ７区で検出した。東西2.6ｍ、南北３ｍほどの長方形を呈する。住居に伴う施設としては、北側半分に確認される壁溝のみで、竈の痕跡、主柱穴などは見られない。覆土中にはロームブロックを多量に含み、人為的な埋め戻しが行なわれたと考えられる。図化に耐える遺物は出土していない。

住居跡33(Fig.38)

Ｅ７区で検出した。南北2.7ｍ、東西2.9ｍほどの、やや横長の方形を呈する。竈は北側壁に敷設される。壁のほぼ中央に幅70㎝、奥行20㎝ほどの張出しを作り、更に外側に幅30㎝、長60㎝以上130㎝未満の煙道が伸びる。煙道端部は攪乱により破壊されるが、煙道床より深いピットは無いと考えられる。竈は破壊され、張出し部前面に粘土などが散布するのみである。北側壁の竈西側を除き、四周に壁溝が巡る。主柱穴は検出されなかった。覆土中にはロームブロックを多量に含み、人為的な埋め戻しが行なわれたと考えられる。

出土土器(Fig.39)

176は竈付近の出土である。土師器甕で、胴はあまり張らない。口縁は強く屈曲し、厚い。外面は

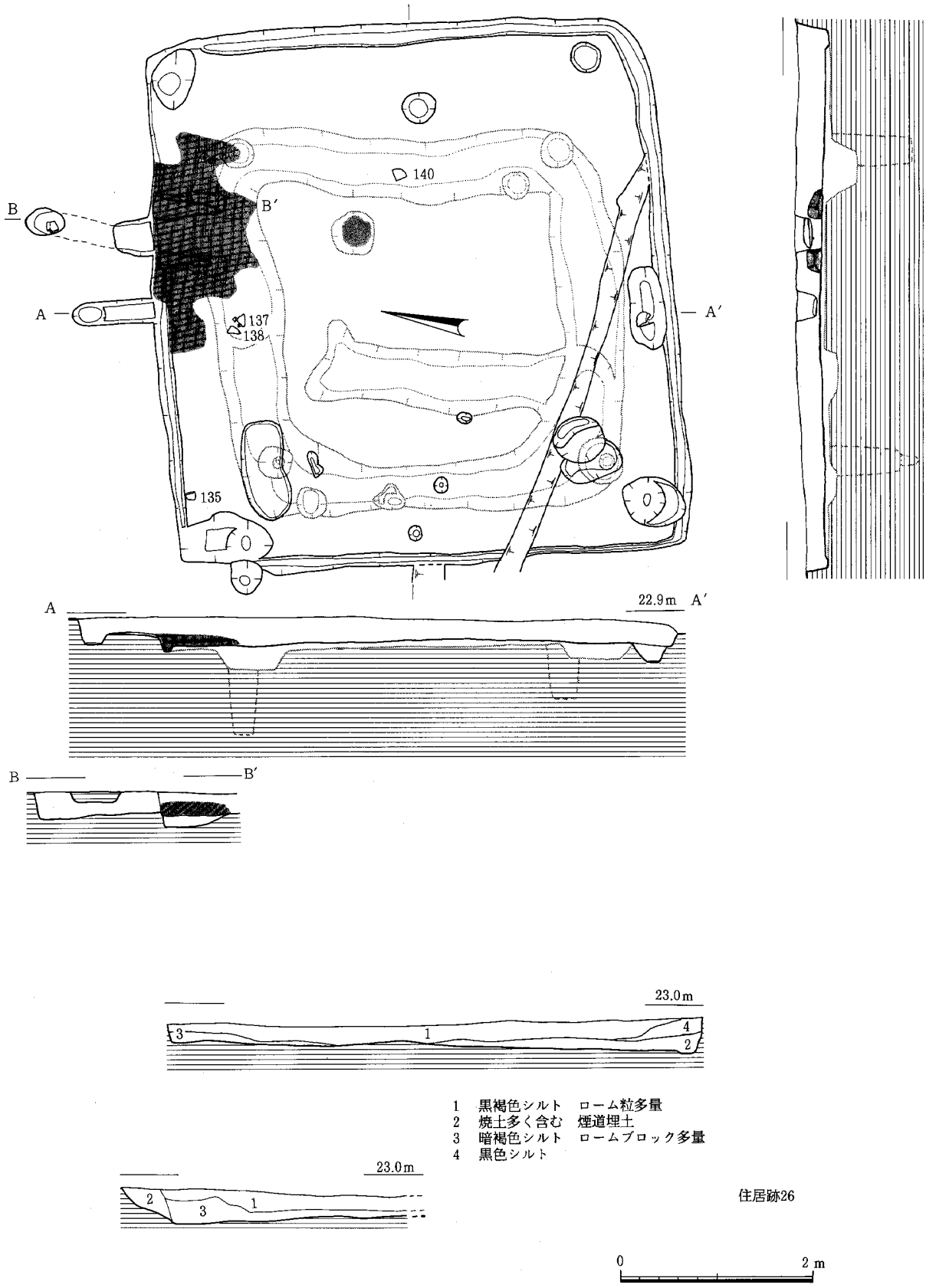


Fig. 36　古代住居跡実測図6（1：60）

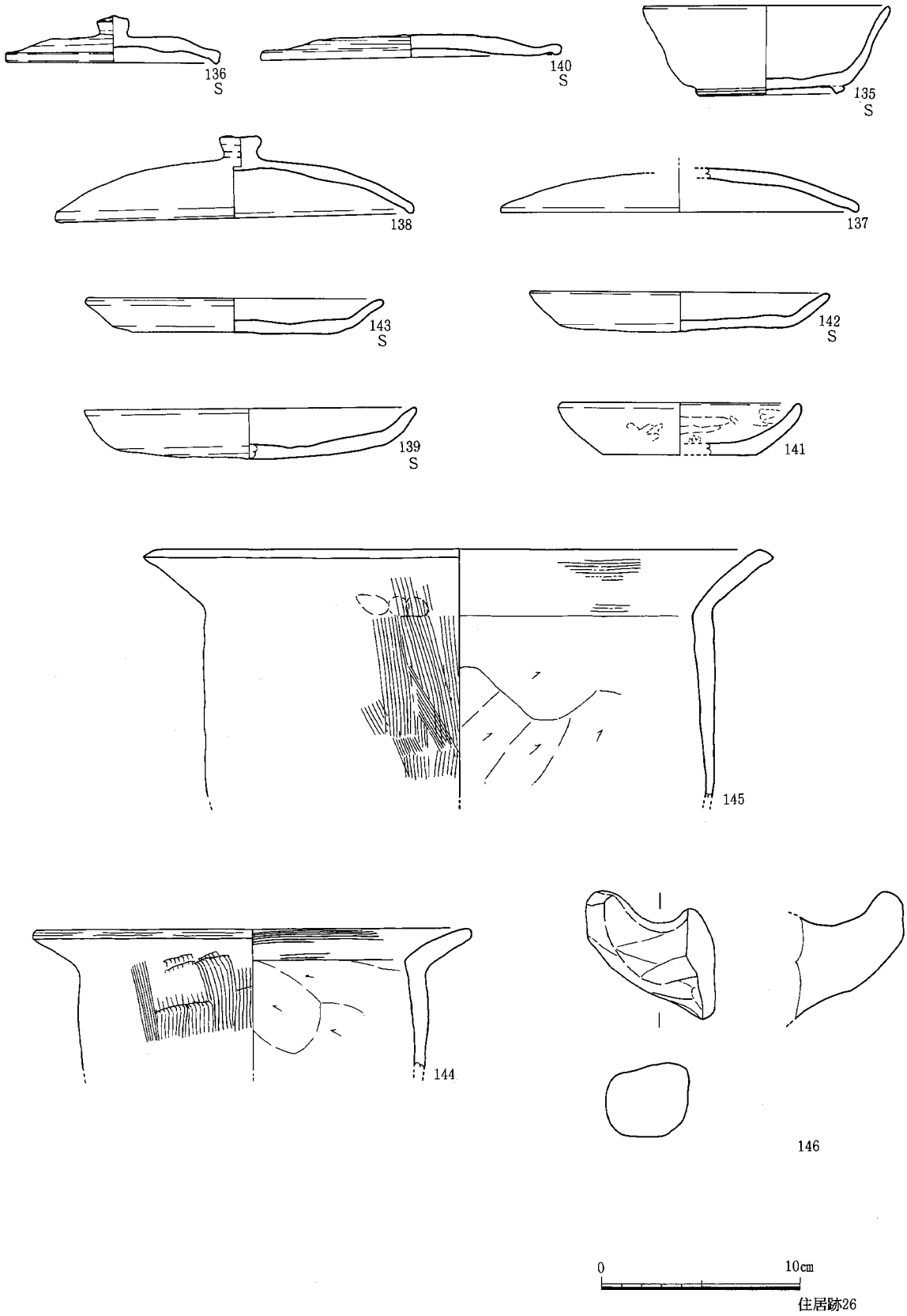


Fig. 37　古代住居跡出土土器実測図６（１：３）

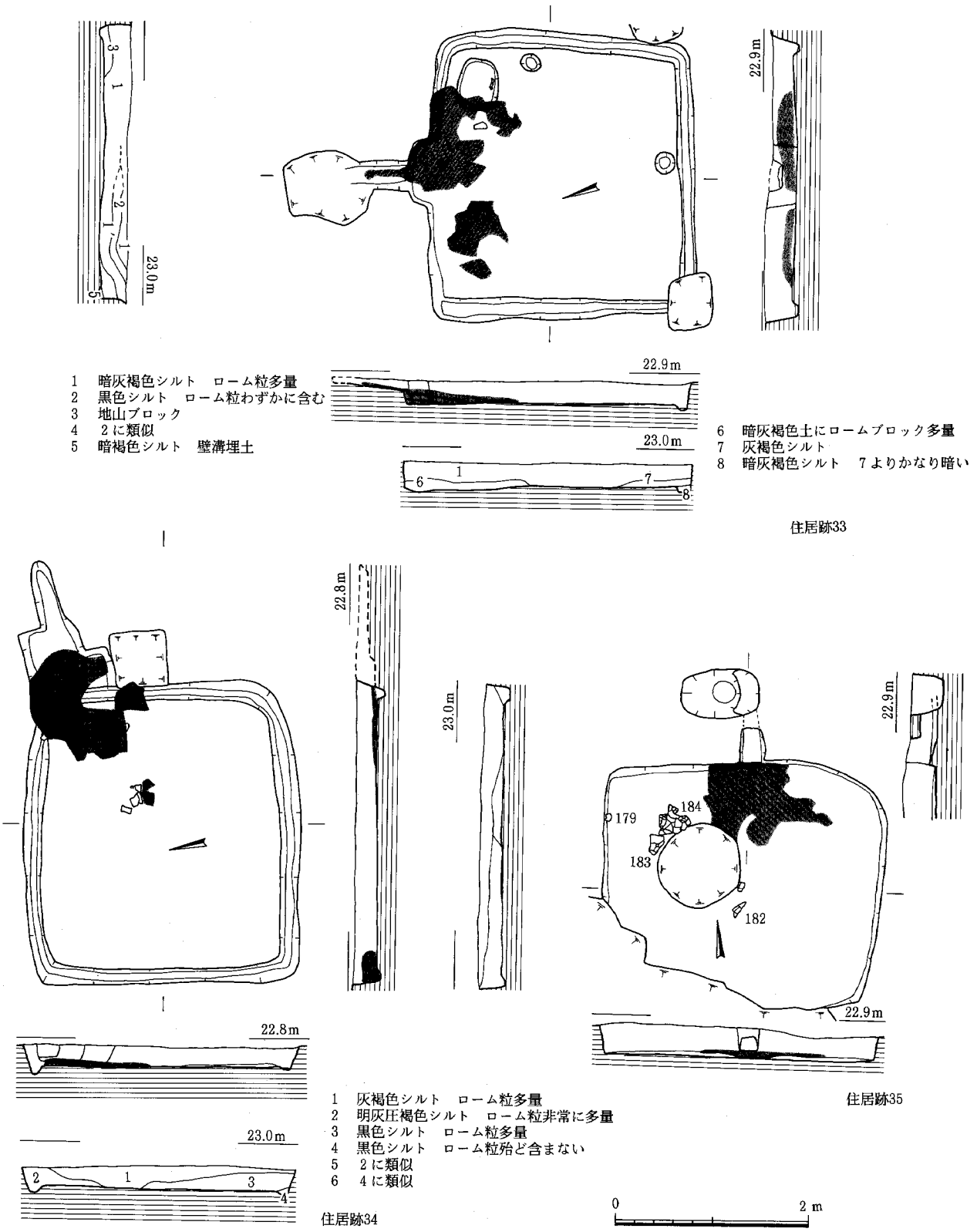


Fig. 38　古代住居跡実測図7（1：60）

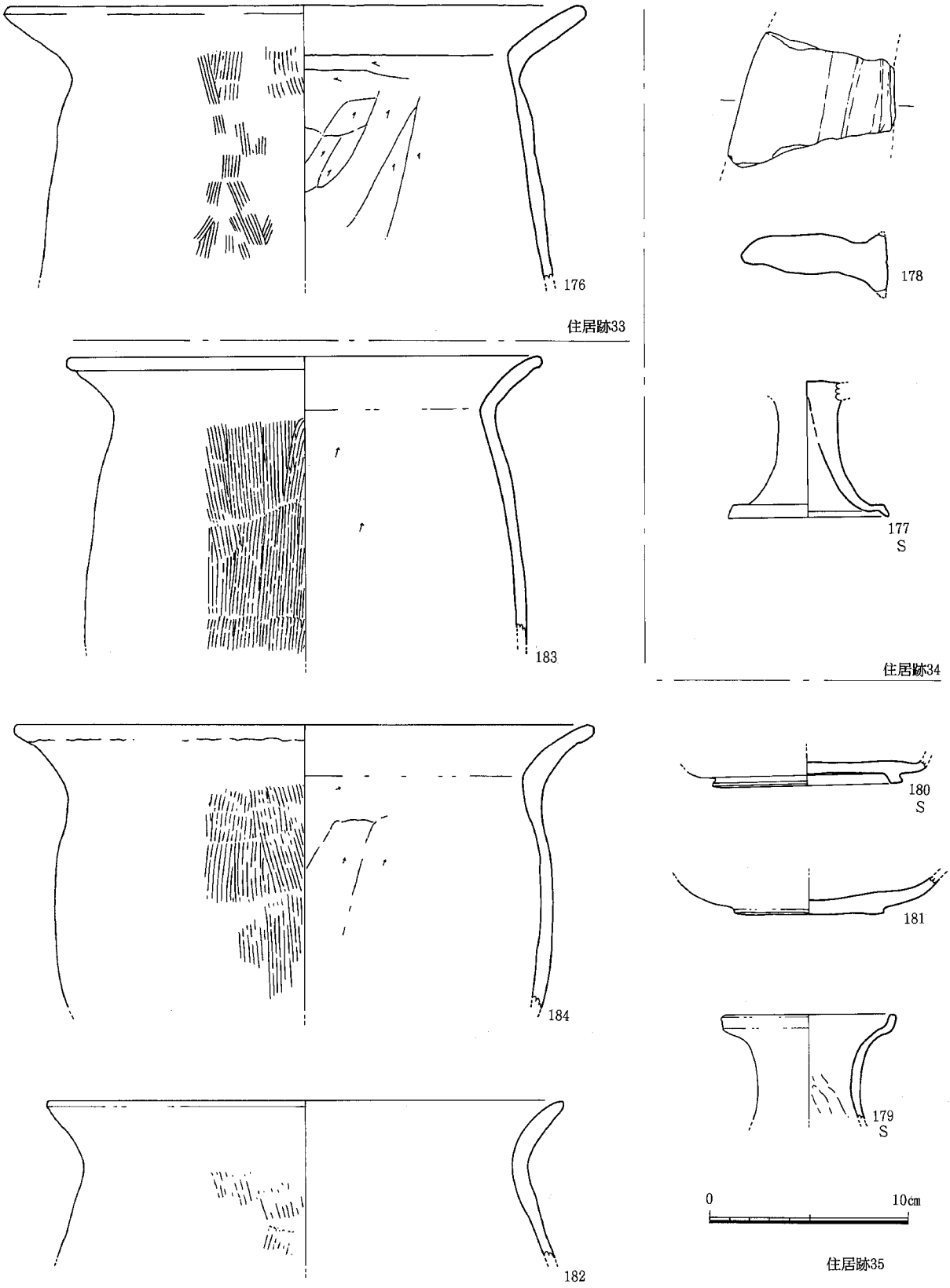


Fig. 39　古代住居跡出土土器実測図７（１：３）

ハケメ、内面はケズリ、口縁部はヨコナデを施す。

住居跡34(Fig.38)

Ｆ７区で検出した。南北2.8m、東西３ｍほどのやや縦長の方形である。北東隅に竈を持つ。竈はコーナー部分に幅90cm、奥行60cmの張出し部を敷設し、更に東側に70cmほどの煙道が伸びるが。端部は攪乱によって破壊されている。竈は破砕され、張出し部とその前面に粘土の散布が見られるのみである。竈部も含めて四周に壁溝が巡る。主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.39)

177は須恵器高坏である。短脚の脚部片で、端部は屈曲する。178は竈付近出土の移動式竈片である。作り付け竈と併用されていたのであろうか。

住居跡35(Fig.38)

Ｆ７区で検出した。南側を攪乱で破壊されているが、南北2.6m、東西2.9mほどのやや横長の方形を呈する。北側壁に竈を持つ。竈は張出し部を持たず、壁のほぼ中央から直接煙道が取り付く。煙道は幅20cm、長１ｍほどを測る。端部には長径80cm、短径50cmの楕円形のピットがあるが、他の住居の例から見て、位置がずれる上に大きすぎる。本来のピットを切って掘り込まれた可能性がある。竈は破砕され、粘土などが散布するのみであるが、散布範囲が長方形に近く、ほぼ竈基底部の規模を示しているかも知れない。壁溝や主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.39)

179、180は須恵器、181～183は土師器である。179は長頸壺と思われる。口縁は屈曲しつつ直立し、受け口状になる。頸部内面に絞り痕が見られる。180は坏底部の破片である。高台はやや内側に付き、踏張り気味になる。181は突出する平底を持つ底部片である。器壁は比較的厚く、内面は黒色で、ミガキを施していると考えられる。器形はよくわからず、弥生土器とも異なる。外来系の土師器であろうか。182～184は甕である。調整はほぼ共通する。

住居跡36(Fig.41)

Ｅ７区で検出した。１辺2.5mほどの方形を呈する。西側壁の中央に竈を持つ。竈は幅1.9m、奥行1.2mの楕円形で棚状を呈する張出し部を持つ。煙道は張出し部を掘り込んで壁に直接取り付き、張出し部の外に出た付近で北側に折れる。竈は破砕され、焼土や粘土が棚状の張出し部や煙道内に散布するが、住居跡内にはほとんど見られない。竈のある西側を除く三方に壁溝が巡る。住居床面や棚状張出し部から多量の土器が出土している。主柱穴は確認できない。

出土土器(Fig.40、42)

185～189、191～195は須恵器である。194、195は口径の大きい蓋である。194は焼成がよく、天井部に回転ヘラ削りを施す。つまみを欠く。195は灰白色で焼成が悪い。磨滅が著しく、調整は不詳であるが、天井は削っていると思われる。185、191は小形の蓋である。191は天井部に回転ヘラ削りを施すが、185は施さない。186～189、192は坏である。少しづつ口径を異にし、192は口径13cm、188は17.8cmを測る。いずれも底部と体部の境は丸みを帯び、高台は底部端からやや内側に付く。189は浅い皿状の坏部を持つものである。口径19.2cmを測る。193は鉢である。体部は緩く内湾しながら開く。口縁端部は坦面をなす。外面は回転ヘラ削りを施すが、口縁部近くはナデ消している。

190、196～199は土師器である。190は皿か、もしくは高坏坏部と考えられる。但し脚部の剥離痕は

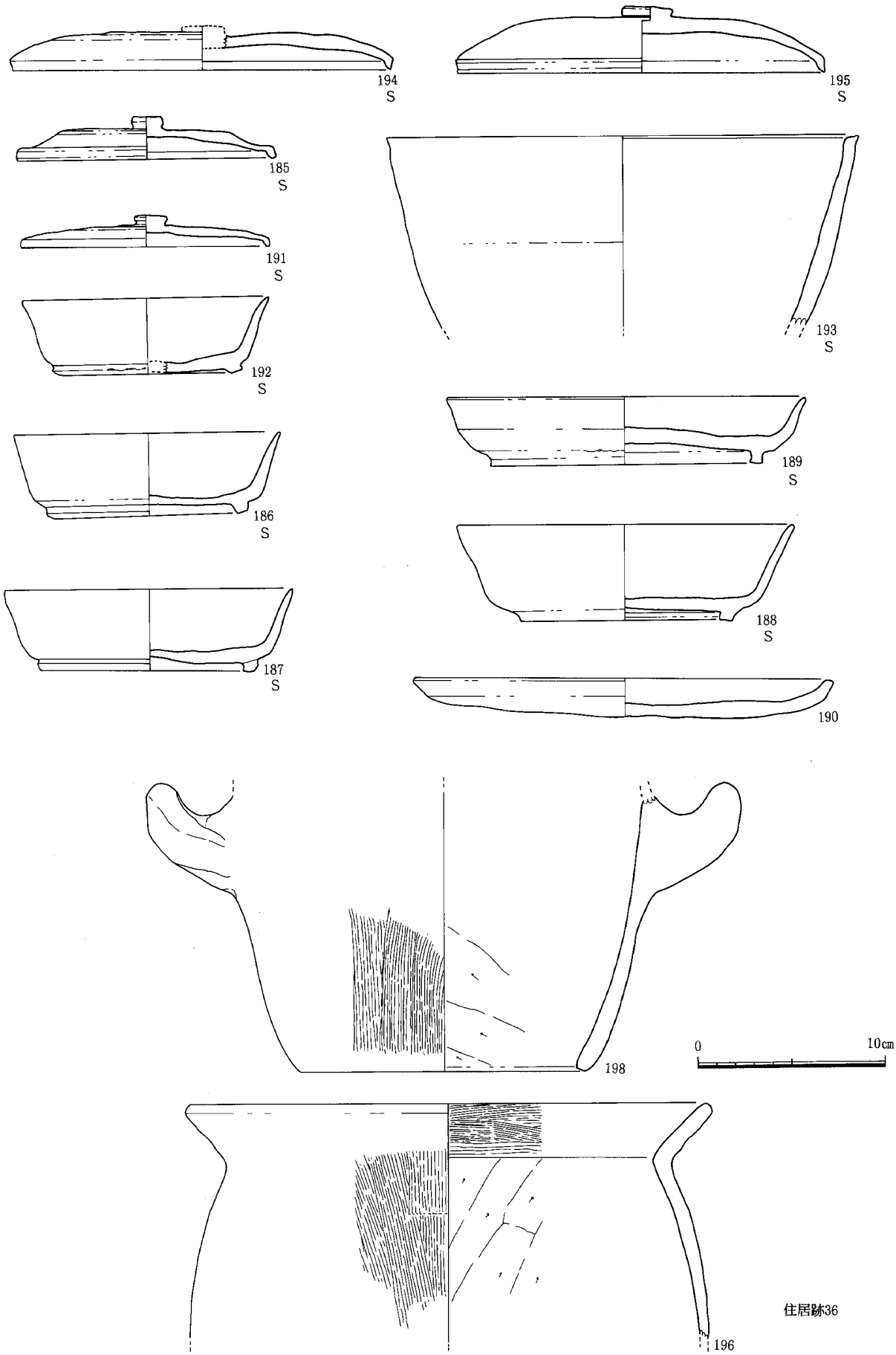


Fig. 40　古代住居跡出土土器実測図８（１：３）

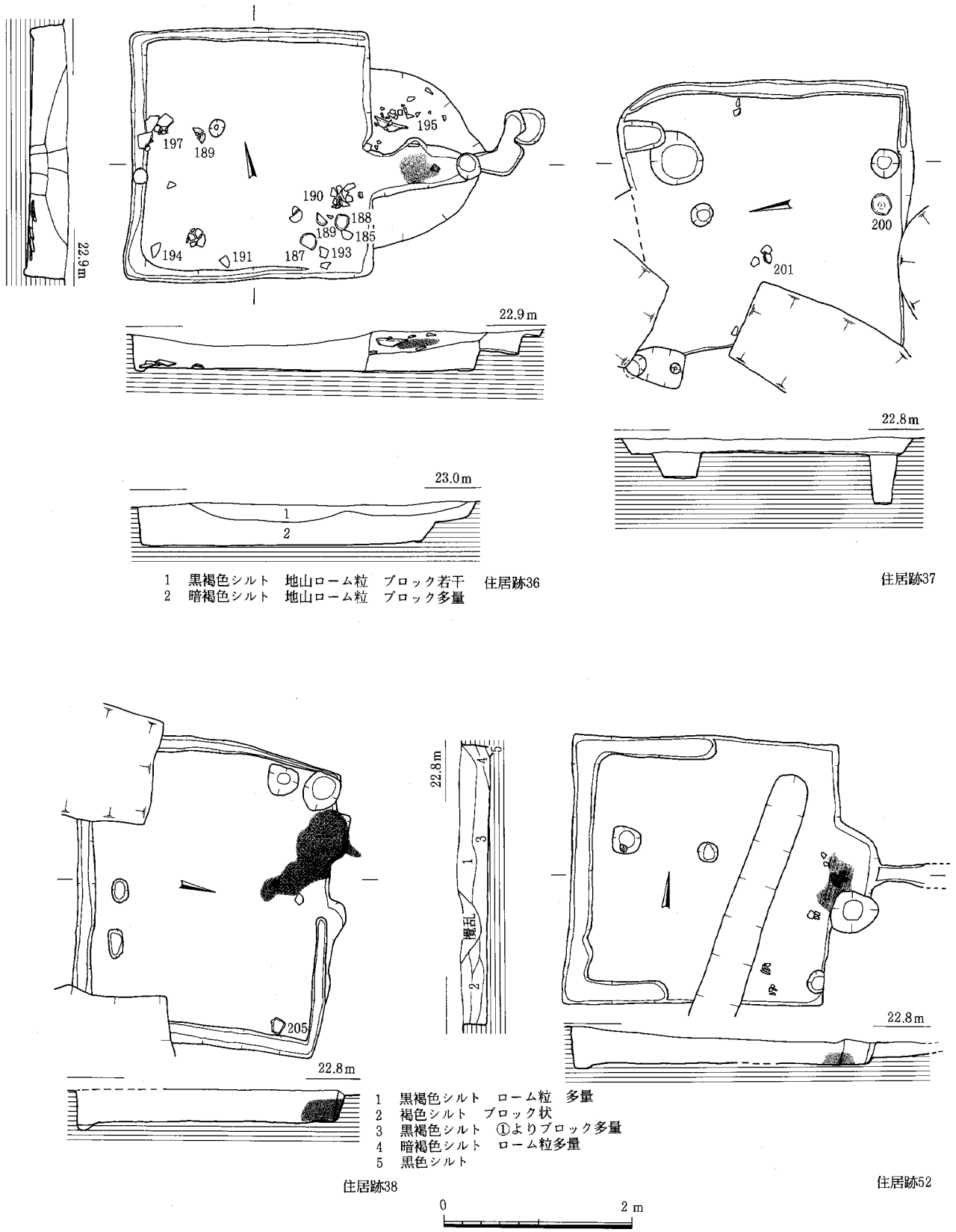


Fig. 41　古代住居跡実測図８（１：60）

判然としない。口縁端部は丸く納め、全体を回転ナデで仕上るようである。198は甑である。把手は強く屈曲する。底部近くまでケズリ痕が明瞭に残る。196、197、199は甕である。ほぼ形態、大きさも類似する。196は口縁内面に横方向のハケメが見られるが、他の二つはヨコナデを施す。それ以外は調整もほぼ共通している。

住居跡37(Fig.41)

Ｇ６区で検出した。１辺2,8mほどの方形を呈する。北側壁の一部に少量の粘土塊が見られ、他の多くの住居と同様こちら側に竈を持っていた可能性がある。壁溝は東側壁と、南側壁の一部に見られ、主柱穴は確認されなかった。

出土土器(Fig.42)

図示したものは須恵器である。200は蓋で、焼成は悪い。天井部には回転ヘラ削りを施す。端部の屈曲も甘い。201は坏底部片である。高台は底部端より内側に付く。

住居跡38(Fig.41)

Ｆ４区で検出した。東西３m、南北2.8mほどのやや横長の方形を呈する。北側壁中央やや西よりに竈を持つ。竈は幅50cm、奥行20cmの張出し部に敷設される。煙道は見られず、削平されたものと考えられる。竈は破砕され、張出し部とその前面に粘土などが散布するのみである。竈部を除く四周に壁溝が巡る。主柱穴は確認できない。

出土土器(Fig.42)

202～206は須恵器である。202、206は坏である。口縁部はわずかに外反する。高台はほぼ底部端につき、踏張り気味になる。204は蓋である。つまみを欠く。天井部に回転ヘラ削りを施す。203は高坏坏部であろう。口縁部は短く直立し、端部は丸みを帯びた坦面をなす。底部は回転ヘラ削りを施す。205は皿である。灰白色で焼成が悪い。体部は直に近く立上り、比較的深い。底部に回転ヘラ削りを施す。207、208は土師器甕の口縁部片である。

住居跡52(Fig.41)

Ｅ４区で検出した。１辺2.8mほどの方形を呈する。東側壁中央に竈を持つ。竈は幅80～100cmほど、奥行50cmほどの張出し部に敷設される。煙道は張出し奥壁中央から東側へ50cmほど残るが、端部は攪乱されて不明である。竈は破砕されているが、粘土はブロック状に散布しており、ある程度竈の規模を反映しているかも知れない。南半分のみに壁溝が確認され、主柱穴は検出されなかった。図化に耐える遺物は出土していない。

住居跡53(Fig.43)

Ｆ６区で検出した。住居跡54を切る。１辺3.5mほどの方形を呈する。東側壁中央に竈を持つ。竈は幅80cmほど、奥行40cmほどの張出し部に敷設される。張出し部奥壁から煙道にかけて攪乱による削平を受け、煙道の有無は明らかでない。竈は破砕され、粘土や焼土を竈跡から住居内へかき出したような状況を示している。壁溝、主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.44)

233の高坏、235、236、239、242の甕以外はすべて須恵器である。240、241は蓋である。ほぼ大きさが同じで、口径16cmを測る。扁平な宝珠形のつまみを持ち、天井部に回転ヘラ削りを施す。237は

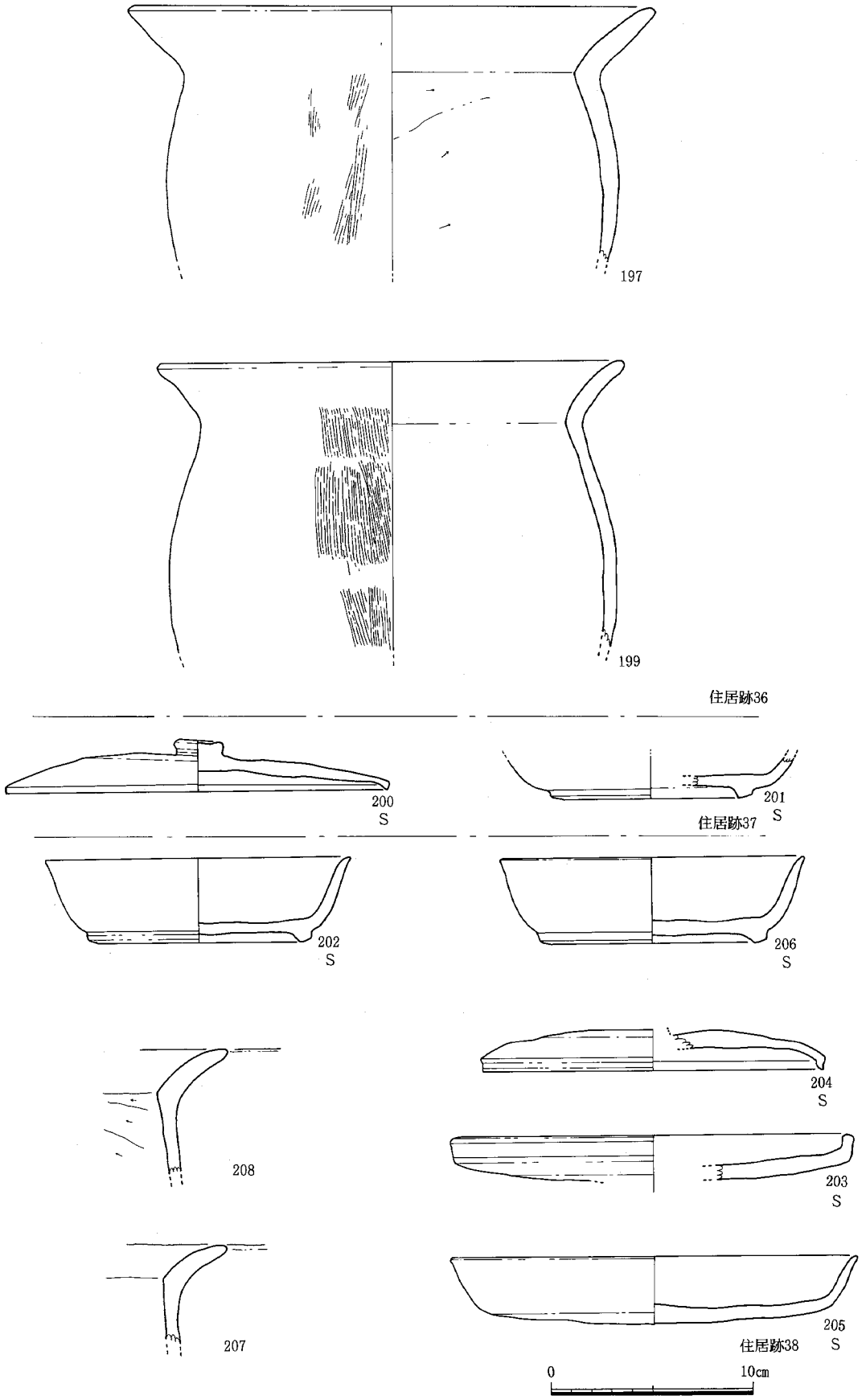


Fig. 42　古代住居跡出土土器実測図９（１：３）

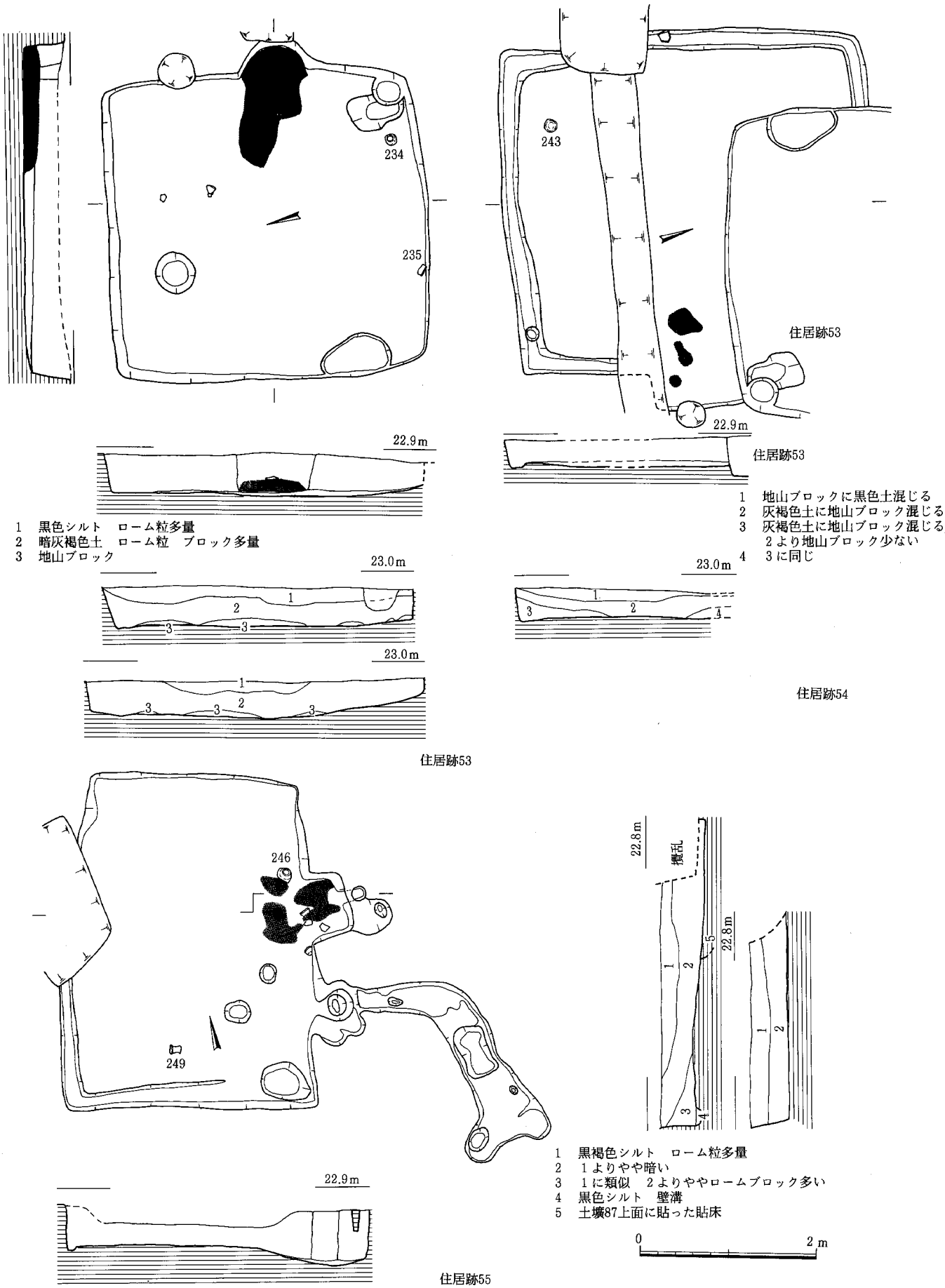


Fig. 43　古代住居跡実測図9（1：60）

やや口径が大きく、21cmほどに復元される。天井部は回転ヘラ削り。234は坏である。高台は扁平で、つぶれたような形態になっている。238は口径が大きいもので、体部もあまり開かない。233は土師器高坏の坏部であろう。口縁部は短く外反しながら屈曲する。底部中心付近に砂粒が動いた痕と考えられる条線が同心円状に残るが、回転ヘラ削りの痕か、ヘラ切りの痕かは定かでない。235、236、239、242は土師器甕である。242はやや小形品。236はやや形態が異なり、肩部に段をなす。調整もかなり磨滅しているものの、内外ともナデを施すようである。

住居跡54(Fig.43)

Ｅ６区で検出した。住居跡53に切られるが、南北４ｍ、東西3.6ｍほどの横長の長方形に復元できる。竈の位置であるが、東壁の住居跡53と溝状の攪乱の間に粘土の散布があり、また溝状攪乱の南北で、壁の位置がずれており、北側の壁際には壁溝が検出されないことから、この部分が張出し部になり、竈が敷設されていたと考えられる。この竈推定位置を除いて、四周に壁溝が巡ると考えられる。主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.44)

244、245、は須恵器蓋である。244は焼成がよく、天井部にヘラ削りを施す。245は焼成が悪く、天井部はヘラ切りのままである。竈付近の出土である。243は須恵器坏である。歪みが大きい。

住居跡55(Fig.43)

Ｇ５区で検出した。東西2.8ｍ、南北3.8ｍの横長の長方形を呈する。竈は東壁の中央やや北よりに敷設される。壁から幅80cm、奥行50cmの張出し部を設け、張出し部奥壁からごく短い煙道を伸ばし、径15cmほどの小ピットを連結している。張出し部床面は住居床からゆるやかに深くなっている。竈のやや南側にも、張出し部がある。その奥壁からは浅く長い溝が東方向からゆるやかにカーブしつつ南方向へ伸びており、これも竈であった可能性もある。竈のある東壁を除いて三方に壁溝が巡る。主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.44、46)

Fig. 44に図示したものはいずれも須恵器である。246は坏である。体部に比して底部が厚い。底部と体部の境は丸みを帯び、不明瞭である。底部はヘラ切りのままである。249は高坏脚である。短脚で、脚柱部は比較的太い。端部の屈曲は大きくなく、わずかに突出するのみである。灰白色で、焼成はよくない。251は蓋である。天井部は回転ヘラ削りを施す。Fig. 46は土師器である。247、250は甕である。247は口縁部が強く外側へ屈曲する。250はやや小形である。248は小形鉢とすべきであろうか。底部はほぼ平底で、直に立ち上がる体部を持ち、口縁はわずかに外反する。底部近くはケズリによって成型している。体部外面は調整がよくわからないが、あるいは叩きをナデ消しているかもしれない。内面は目の粗いハケメを施している。

住居跡60(Fig.45)

Ｇ４区で検出した。住居跡61を切るが、検出時には切り合いがわからず、住居跡60の床面のレベルで、貼床の範囲を追うことにより、規模、形態を確認した。尚切り合いも住居跡61の覆土上に住居60の床が貼られていたため、判明したものである。

住居跡60は１辺４ｍほどの方形を呈する。竈は北側壁中央にある。張出しを設けず、壁から幅50cm、長1.4ｍの煙道が取り付く。端部がピット状の形状をなすことから、本来はトンネル状であったと思

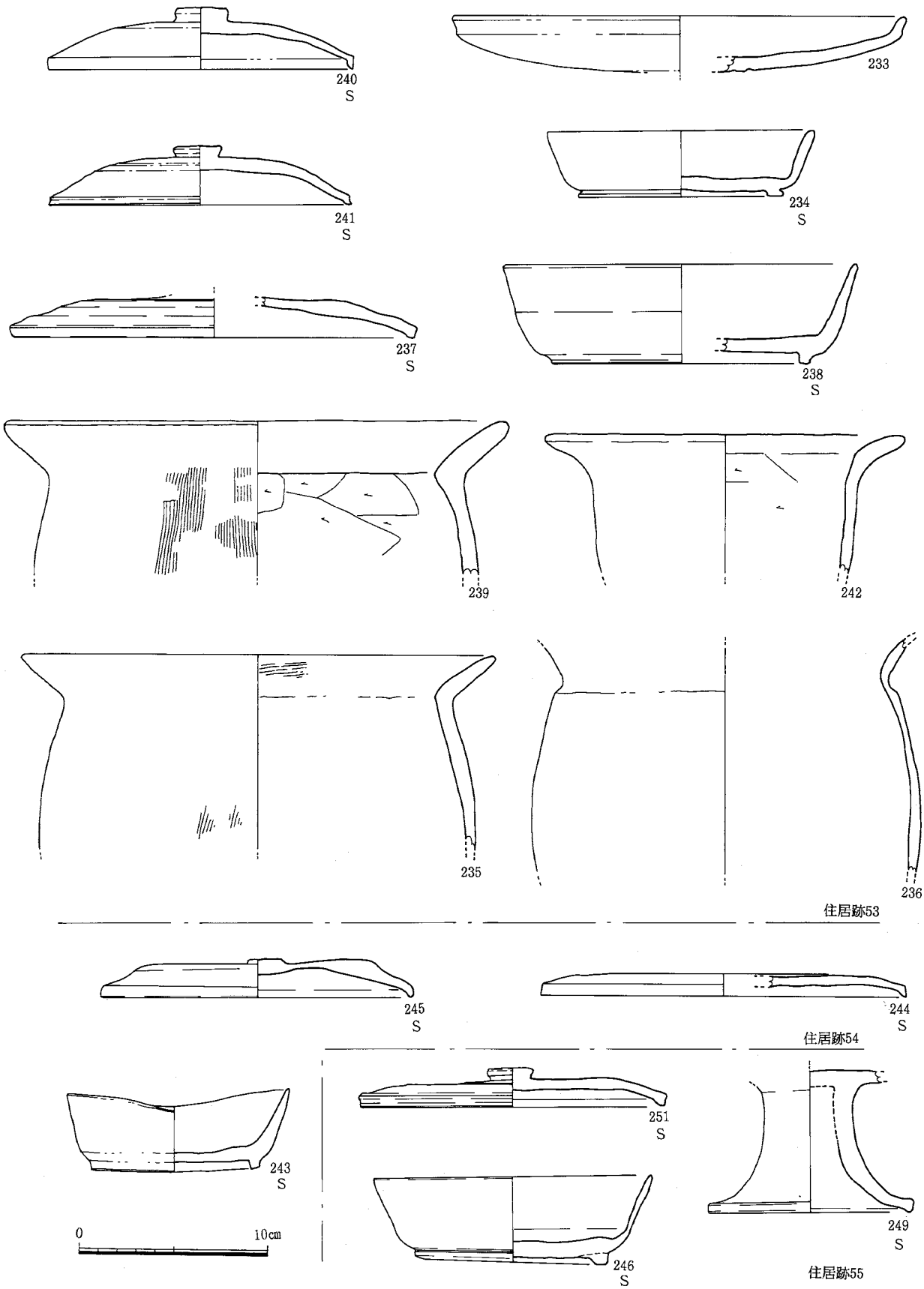
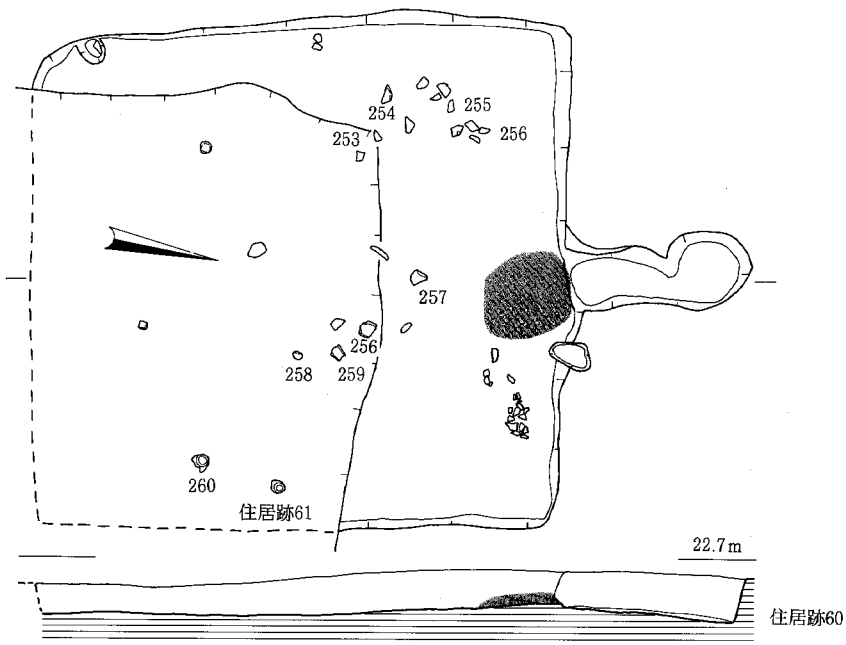
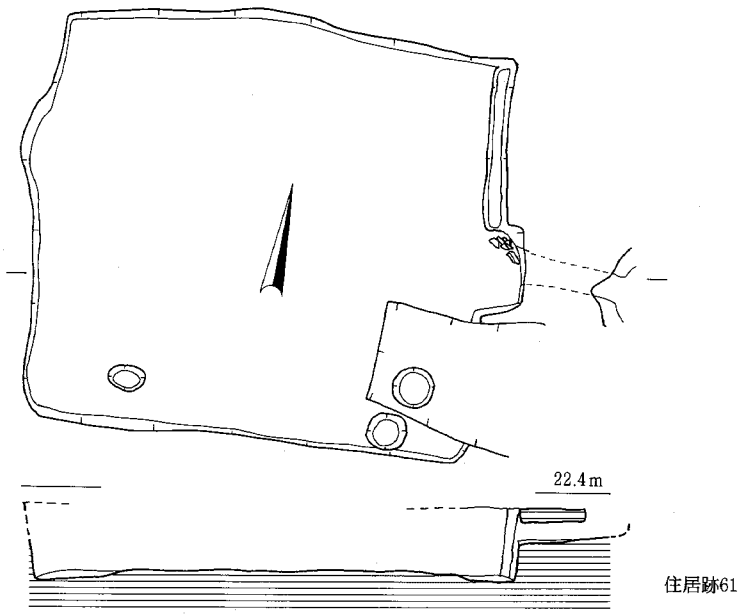


Fig. 44　古代住居跡出土土器実測図10（1：3）





0 2 m

Fig. 45　古代住居跡実測図10（1：60）

われる。竈は破砕したまま放置したような状況で、煙道前面に粘土などが散布する。壁溝、主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.46、47)

Fig. 46に図示したものはいずれも土師器甕である。264はやや胴の張る器形である。257は口縁内外をヨコナデするが、263、264は口縁内面はハケメを施す。Fig. 47は268、269が土師器で、他は須恵器である。254、270、271は蓋である。254は端部の屈曲はほとんどなく、内側がわずかに凹むのみである。天井部は回転ヘラ削りを施さない。270も天井部のヘラ削りはない。271のみ天井部はヘラ削りを施す。255、260、265～267は坏である。体部は直線的に大きく開く。口径は13～14cm、266はやや小さく12cm程である。底部と体部の境は稜線を持ち、明瞭である。高台は華奢で、底部端、もしくはわずかに内側に付く。258は大形の坏である。口径20cm程に復元でき、体部は深い。体部下半部に回転ヘラ削りを施す。外底部は回転ナデを施す。高台は大振りで、外方へ踏張り気味になる。261は高台を持たない坏である。体部と底部の境は稜線を持ち明瞭である。外底部は静止ナデを施す。253は皿である。底部はヘラ切りのままである。256は鉢である。口縁部は内湾し、端部は坦面をなす。底部近くまで回転ヘラ削りを施すが、底部には及ばず、ヘラ切りのままである。口縁部付近のみ回転ナデで削りを消す。口径21cmを測る。259は短頸壺である。口縁部は短く屈曲して直立し、端部は坦面をなす。外面は回転ヘラ削りをナデ消すようである。269は器種不明の土師器である。上下も不明である。高く突出する突帯が一条巡る。突帯下はハケメを施す。口縁？端部は丸く納める。

住居跡61(Fig.45)

Ｇ４区で検出した。住居跡60にきられるが、住居跡60よりかなり深い。南北3.2m、東西3.6mほどの縦長の長方形を呈する。竈は東側壁の中央にある。幅70cm、奥行40cmほどの張出しを設け、奥壁から幅20cm、長80cm以上の煙道が伸びている。端部は土壙45に切られ明らかでない。煙道はトンネル状をなす。竈跡には粘土等の散布は見られない。住居60構築時に除去されたものか。

出土土器(Fig.47)

272は須恵器坏である。高台は持たない。体部と底部の境は稜線を持ち明瞭である。外底部は静止ナデを施す。

住居跡63(Fig.48)

Ｇ３区で検出した。南北3.6m、東西4.2mほどの、やや横長の長方形を呈する。竈は北側壁に敷設される。壁のほぼ中央に、張出しを持たずに直接幅30cm、長1.2m程の煙道が取り付く。煙道はトンネル状を呈する。煙道端部は径30cmほどのピットに連結する。ピット部分は煙道床面より一段深く掘り下げられている。竈は破壊されているが、竈奥壁と袖の一部が残存している。竈前面のピットを焚口付近に想定すれば、竈は１辺80cmほどの方形に復元できようか。住居掘方には壁に沿って幅１mほどの溝が「コ」字形に掘られており、この溝を埋め立てる形で貼床が施されている。

出土土器(Fig.49)

図示した土器は277、278、285が須恵器である。277は皿である。体部を回転ナデし、底部との境に稜を持つ。底部はヘラ切りの痕をナデ消している。278、285は坏である。底部はヘラ切りの痕をナデ消している。279、284は内黒の黒色土器の坏である。内面はミガキ、外面はナデであるが、回転ナデではないようである。284は煙道出土。280、283は土師器坏である。280は底部回転ヘラ削り、283は体部下半まで削りが及ぶ。283は竈、煙道出土。281、282は土師器甕である。281はやや小形品。282

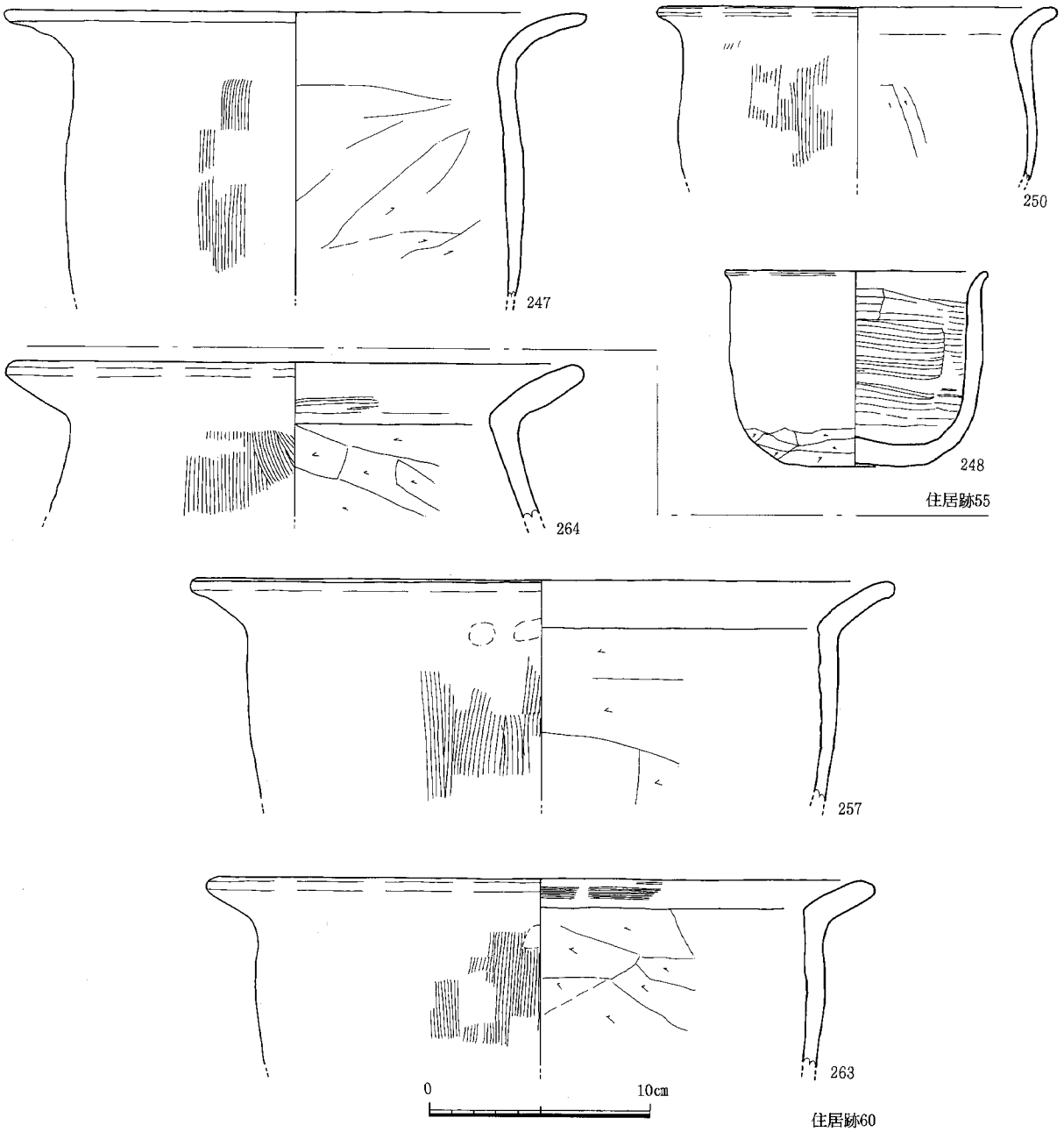


Fig. 46　古代住居跡出土土器実測図11（1 : 3）

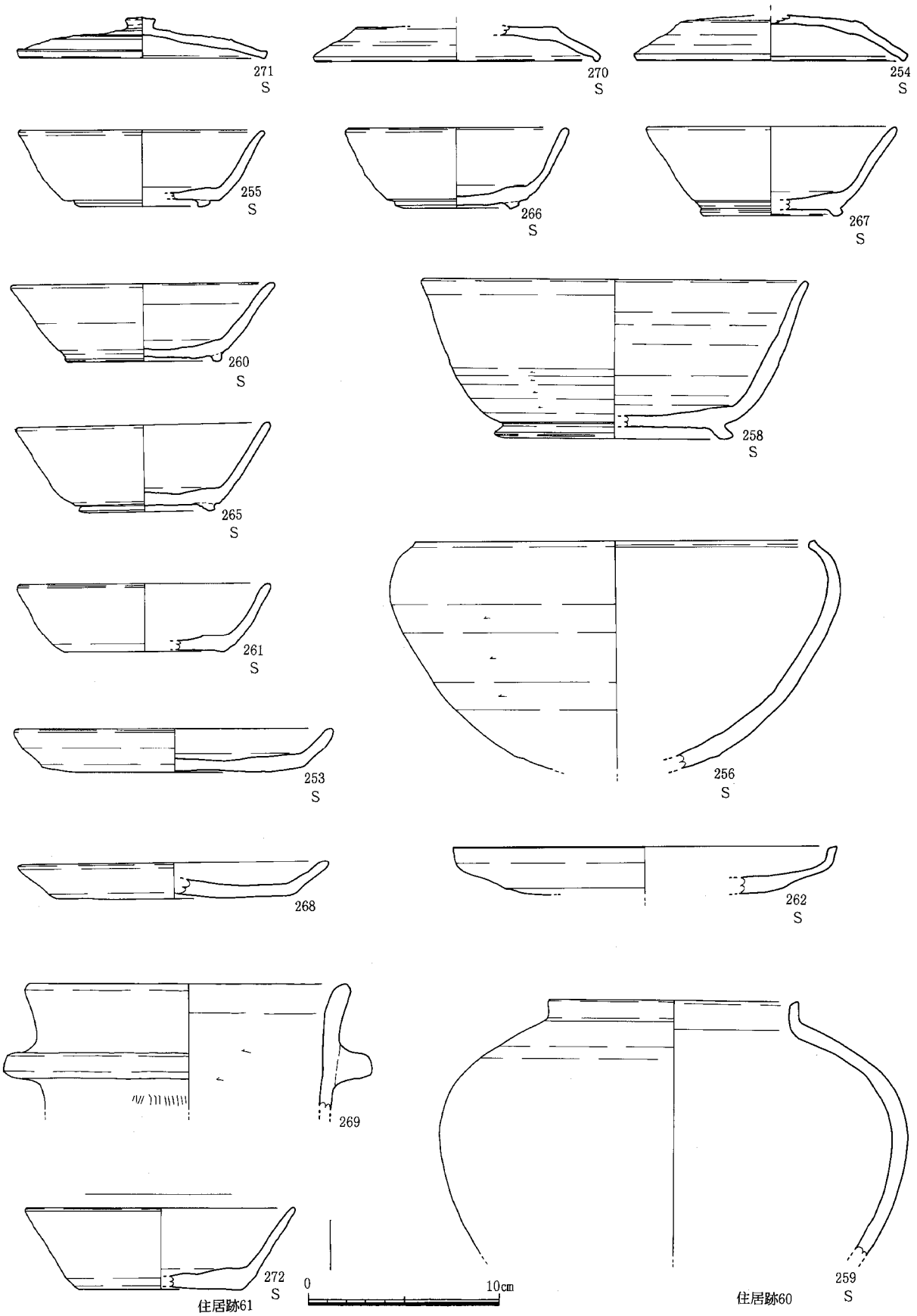


Fig. 47　古代住居跡出土土器実測図12（1：3）

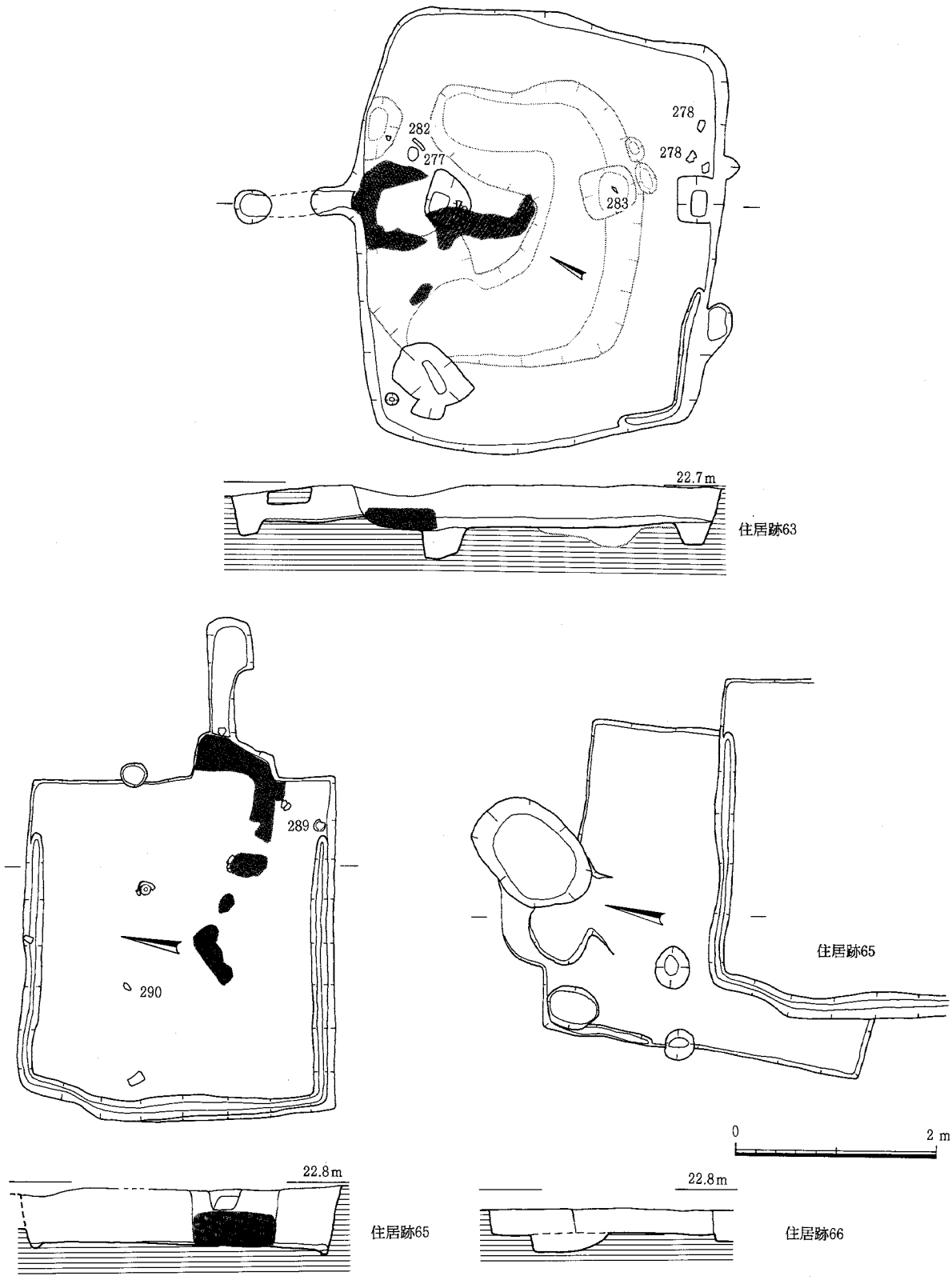


Fig. 48　古代住居跡実測図11（1：60）

は口縁部内面までハケメを施す。住居63出土の土器は調査区検出遺構の中でも新しい様相を示し、8世紀末～9世紀にかかる頃と考えられる。

住居跡65(Fig.48)

F3で検出した。住居跡66、土壙68を切る。1辺3.2mほどの方形を呈する。東側壁に竈を持つ。竈は壁の中央やや南よりに敷設される。幅80cm、奥行40cmほどの張出しを持ち、張出し奥壁から幅20cm、長1.2mほどの煙道が伸びる。煙道端部は径40cmほどのピット状を呈し、本来煙道はトンネル状をなしていたと考えられる。竈は破砕され、粘土や焼土が張出し部から住居内へかき出されたような状態で散布する。壁溝は、竈のある東壁を除く三方に巡る。主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.49)

287は須恵器蓋である。天井部はヘラ削りを施す。289、290は須恵器坏である。体部は直線的に開く。289は底部から体部下端にかけて回転ヘラ削りを施す。291は土師器の小形甕である。288は土師器甕である。

住居跡66(Fig.48)

F3区で検出した。住居跡65、土壙69に切られ、土壙68を切る。1辺3mほどの方形に復元される。残っている壁には竈の痕跡が認められないので、住居跡65と同様東側にあったか、土壙69によって壊された北側壁にあった可能性が高い。壁溝や主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.51)

292、293は須恵器蓋である。293は端部の屈曲が小さい。端部のみの破片で、天井部の削りの有無は不明。292には天井部に回転ヘラ削りが見られる。

住居跡67(Fig.50)

F2区で検出した。1辺2.8mほどの方形を呈する。東側壁に竈を持つ。竈は壁のほぼ中央やや南よりに幅1.2m、奥行40cmほどの張出しを設ける。煙道は検出されず、削平された可能性が高い。粘土などはあまり広い範囲に散布せず、破砕した後、その場にそのまま放置したような状況を示している。壁溝は竈北側脇から北側壁にかけて「L」字状に認められる。主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.51)

298は土師器甕である。口縁は強く屈曲して開く。外面はナデを施す。294、296は須恵器坏である。体部と底部の境は丸みを帯び、高台は底部端より内側に付く。295は高坏として図示したが、蓋かもしれない。底部は回転ヘラ削りを施す。297は壺口縁部であろう。受口状を呈し、内外面とも回転ナデを施す。286は焼成が極めて悪いが、須恵器と考えられる。磨滅が著しく調整は不明。

住居跡70(Fig.50)

E2区で検出した。住居跡71を切る。南北4.8m、東西4.6mほどのやや縦長の方形を呈する。竈を北側に持つ。北側壁の中央やや東よりに、幅1m、奥行50cmほどの張出しを設ける。張出しの奥壁西側コーナーから更に外側に煙道が取り付く。煙道は幅20cm、長1mほどで、端部はピットを持たず、そのまま緩やかに浅くなる。竈は破砕されており、張出し部前面に広い範囲で粘土塊などが散布している。貼床が全面に見られるが総じて浅い。しかし住居掘方は壁際が若干深くなっており、この部分や、住居跡70を埋め立てた部分などは、比較的厚い貼床が施されている。

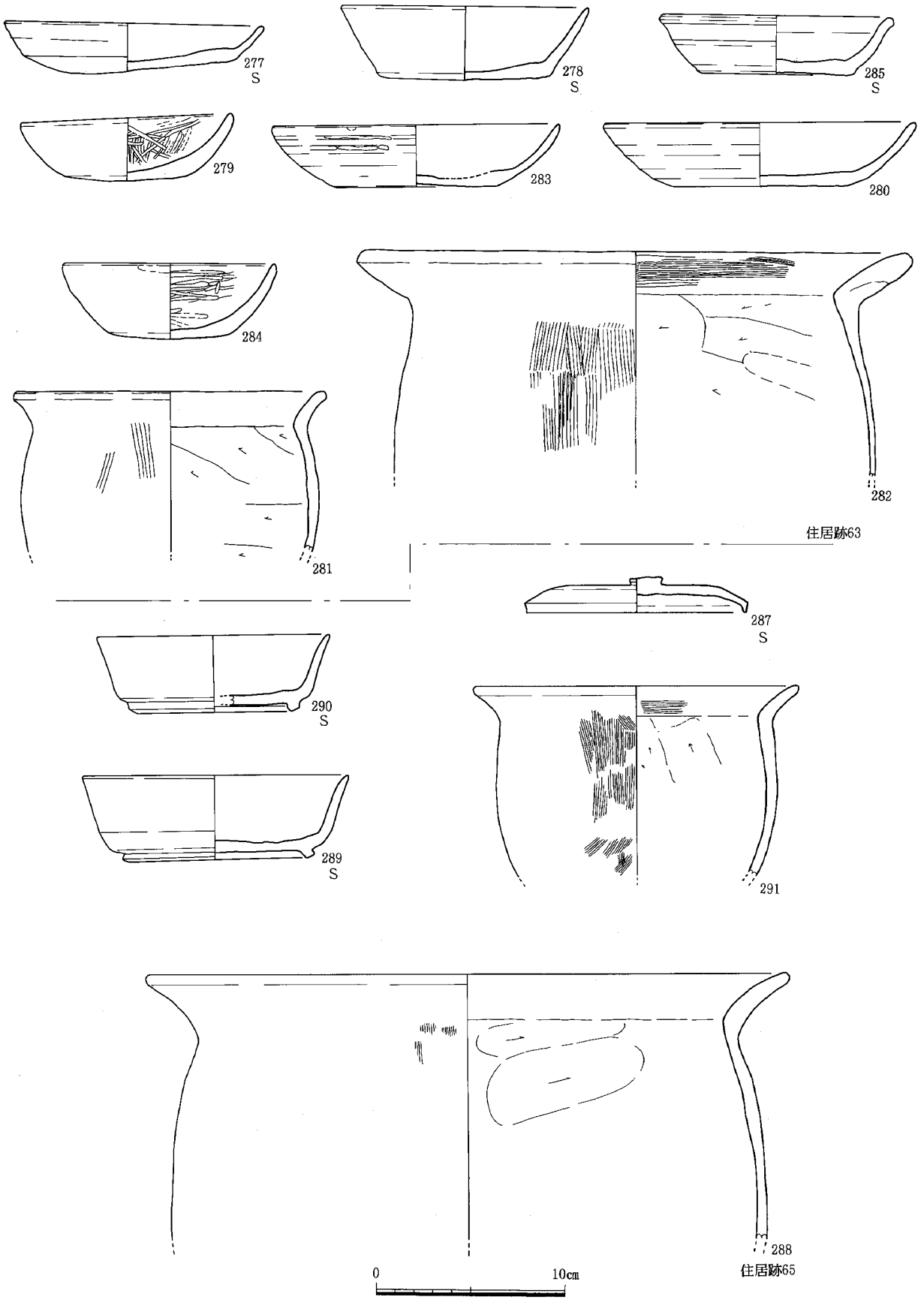


Fig. 49　古代住居跡出土土器実測図13（1 : 3）

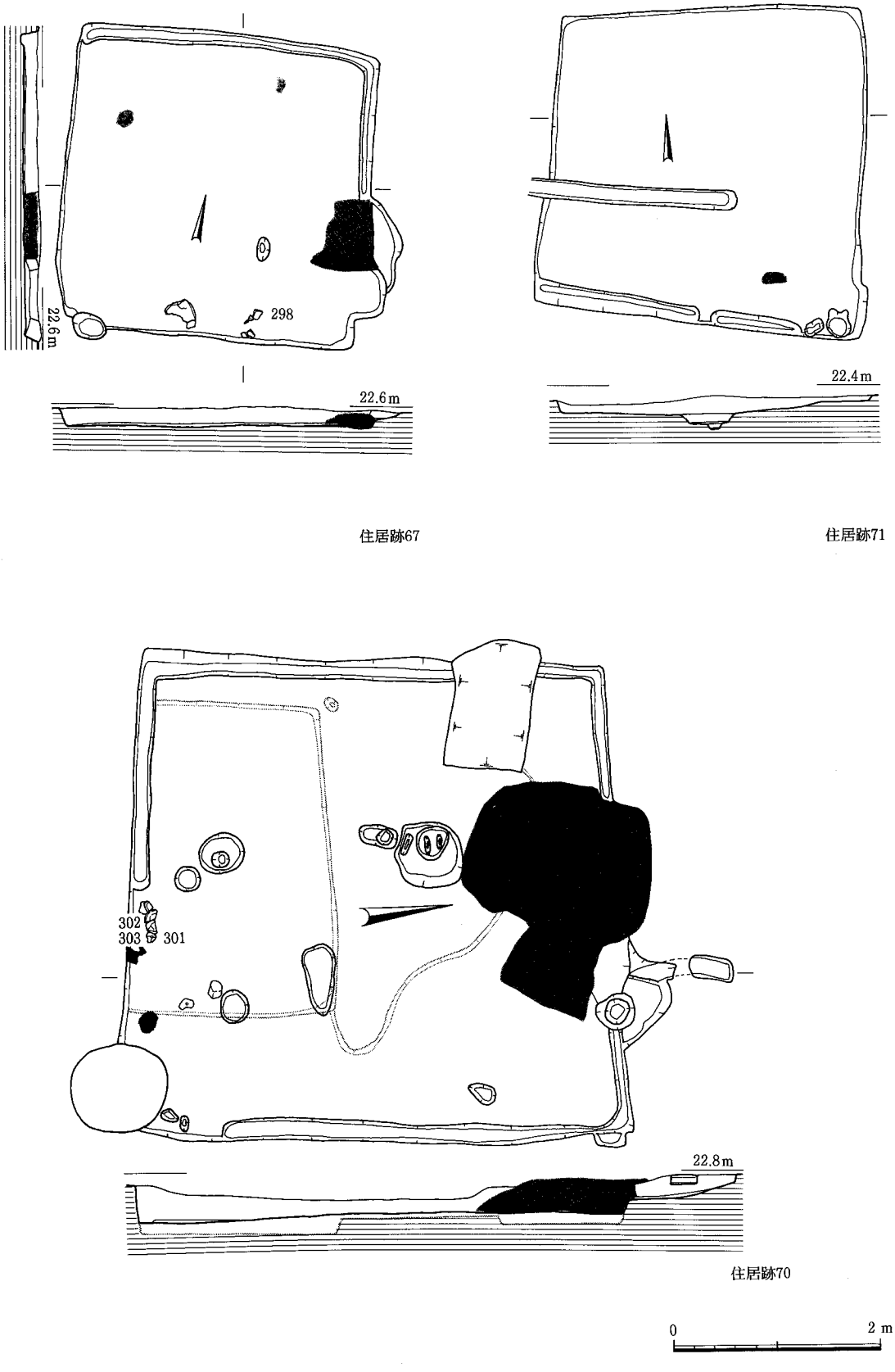


Fig. 50　古代住居跡実測図12（1：60）

出土土器(Fig.51)

302～305は須恵器蓋である。302が口径15.6㎝、305が16.8㎝とほぼ大きさ、器形も共通する。305のみ天井部に回転ヘラ削りを施さない。301、306は坏である。高台は低く華奢である。307は土師器甕である。

住居跡71(Fig.50)

Ｅ３区で検出した。住居跡70、土壙73に切られる。１辺３ｍほどの方形を呈する。竈は見られないが、南東隅に粘土の散布が見られ、東壁にあった可能性がある。壁溝は南壁に見られるのみである。主柱穴は検出されなかった。また図化に耐える遺物も出土していない。

住居跡76(Fig.52)

Ｈ６区で検出した。攪乱による破壊が大きいが、南北3.2ｍ、東西3.8ｍほどの横長の長方形に復元される。北側壁に粘土の散布があり、こちら側に竈があったと考えられるが、張出し部や煙道は残存していない。幅30㎝とやや幅広の壁溝が西側壁に認められる。主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.53)

蓋313、314、315は須恵器である。313は径が大きく低平である。313、314は天井部にヘラ削りを施す。蓋318は極めて焼成が悪く、磨滅が著しいが、須恵器のようである。天井はヘラ削りを施さない。坏311は須恵器。高台は底部端につき、底部と体部の境に明瞭な稜が立つ。坏312は土師器である。317は土師器竈である。炊口の鍔部片である。316は把手付きの甕である。甕に比べて把手が大振りである。

住居跡87(Fig.52)

Ｈ６区で検出した。土壙105に切られる。１辺3.4～3.6ｍほどの方形を呈する。北側壁中央に竈を持つ。竈は幅100㎝ほど、奥行60㎝ほどの張出し部に敷設される。煙道は張出し奥壁中央から東側へ40㎝ほど残るが、端部は他の遺構に切られている。しかしピットには連結せず、そのままスロープ状に浅くなるものと考えられる。竈は破砕されているが、粘土は張出し部に散布するのみであるが、張出し部奥に、竈奥壁の一部が残存している。竈西側脇から西壁の一部のみに壁溝が確認され、主柱穴は検出されなかった。住居は人為的に埋め立てられ、覆土中には多量の焼土が含まれている。焼土層上面に完形に近い土器が多数見られ、廃絶時に祭祀が行なわれたか、廃絶後に廃棄所として利用された可能性がある。この他床面近くでも多量の土器が出土している。

出土土器(Fig.54、55、57)

須恵器蓋345、351、354、357は上面出土。他は下面出土である。いずれも天井に回転ヘラ削りを施す。348はつまみが剥離している。354の径16㎝、358の径21.3㎝を測る。342は須恵器甕口縁片。端部はわずかに内湾し、受口状を呈する。口縁部直下に突帯風の段を持つ。上面出土。347は須恵器長頸壺である。屈曲部には明瞭な稜が立ち、屈曲部以下に回転ヘラ削りを施す。下面出土。335は体部が直線的に開く鉢の底部と考えられる。下面出土。339、340、360は須恵器皿である。底部はヘラ切りで、360のみナデをかける。360のみ下面出土。349は白磁片である。上面出土。口縁部は小さな玉縁状を呈する。Ｉ類の白磁と考えられ、また出土状況からも混入とは考えられない。

須恵器坏は333、334、359が下面出土。他は上面出土である。口径10～11㎝の小形品、14～15㎝の中形品、18～19㎝の大形品がある。330のように高台が底部端からやや内側に付くものもあるが、ほ

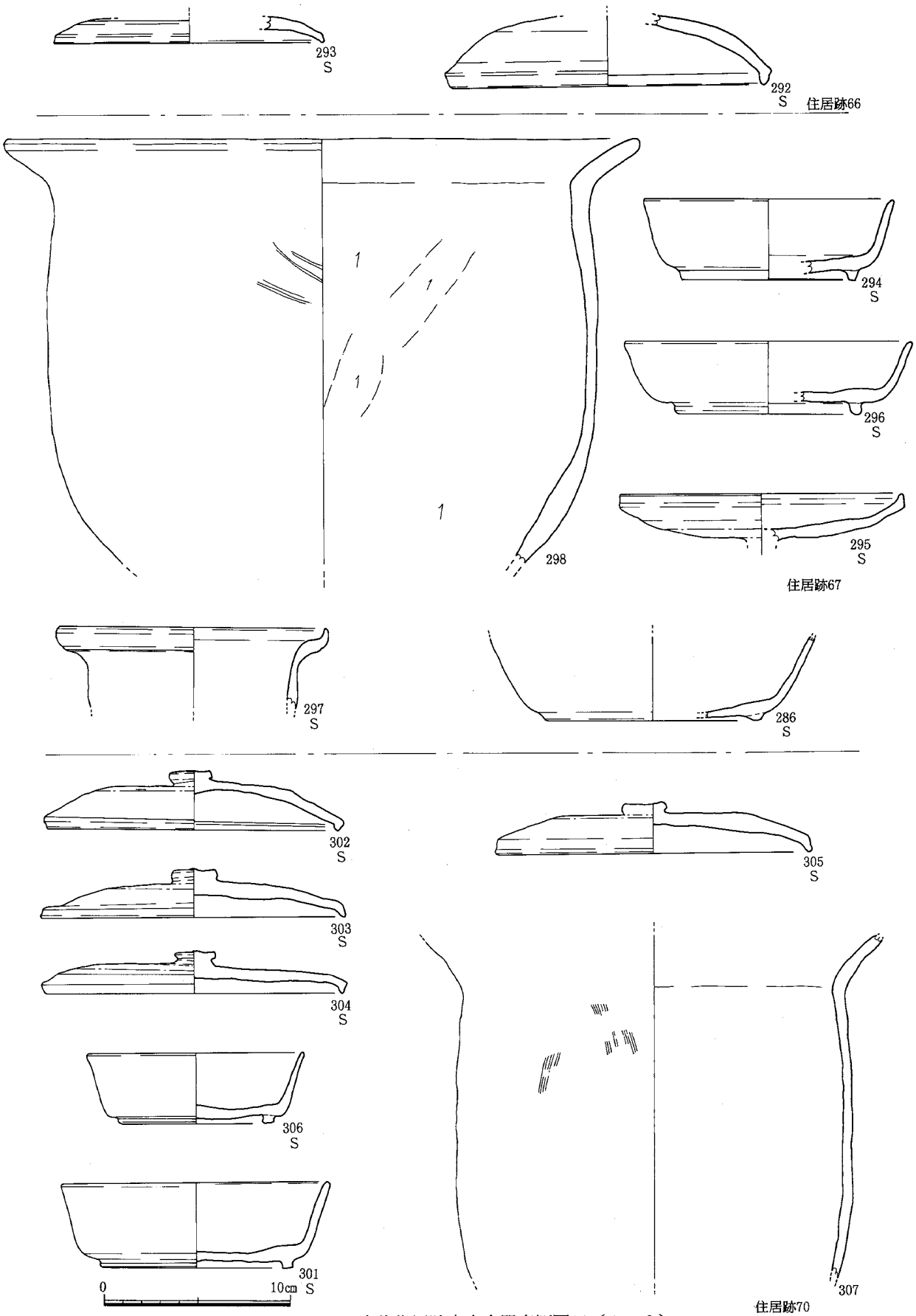


Fig. 51　古代住居跡出土土器実測図14（1：3）

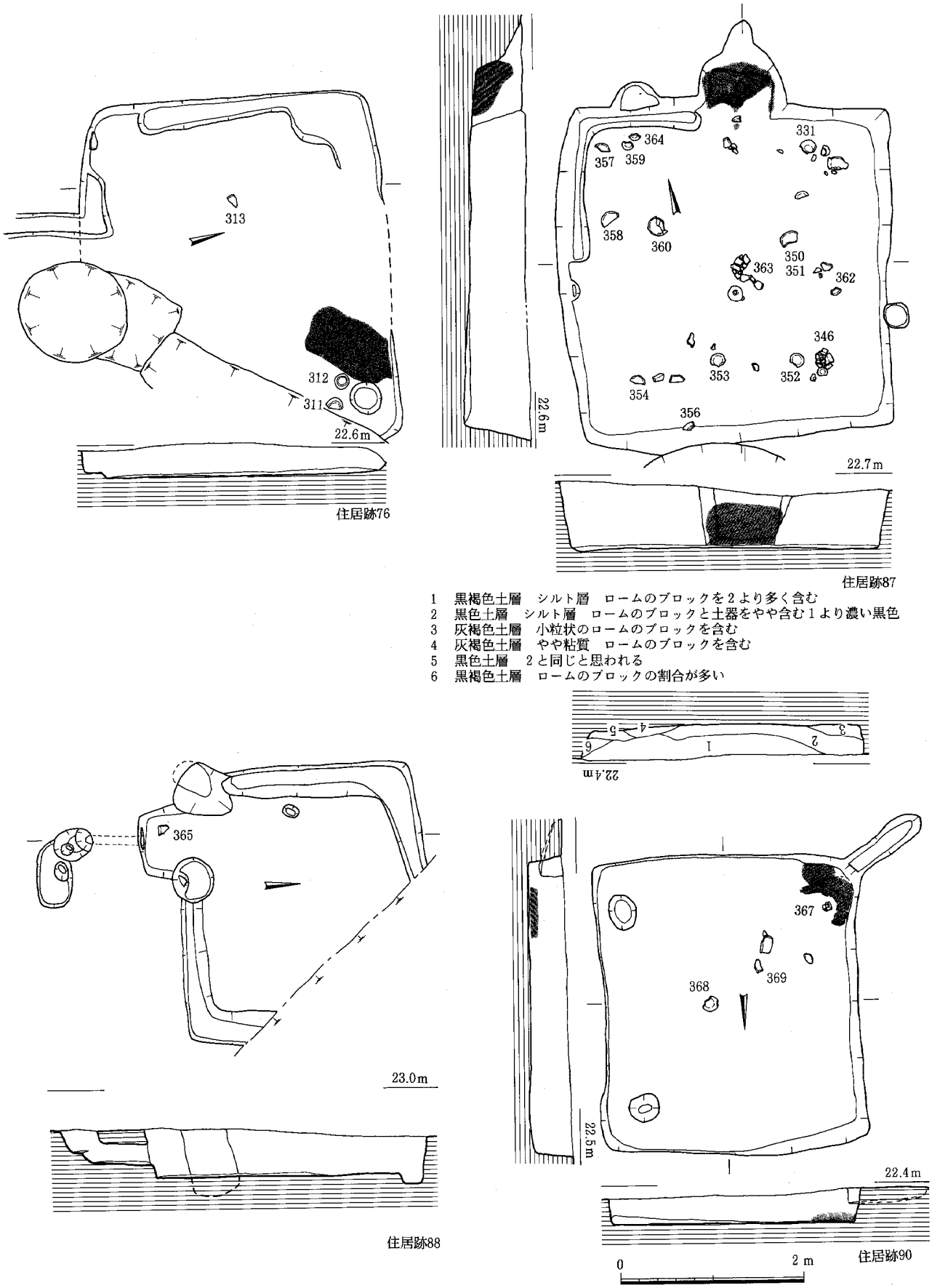


Fig. 52　古代住居跡実測図13（1：60）

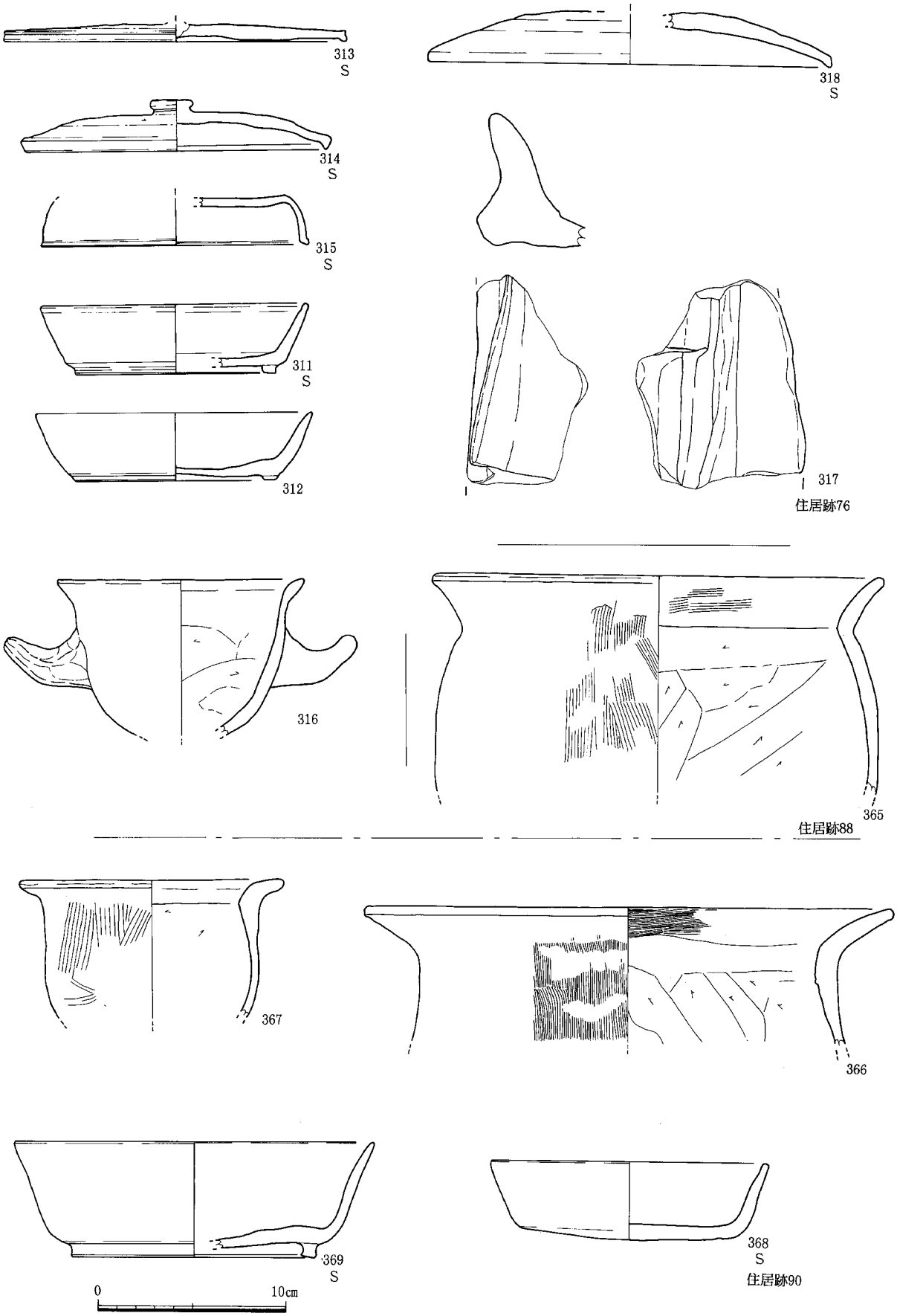


Fig. 53　古代住居跡出土土器実測図15（1 ： 3）

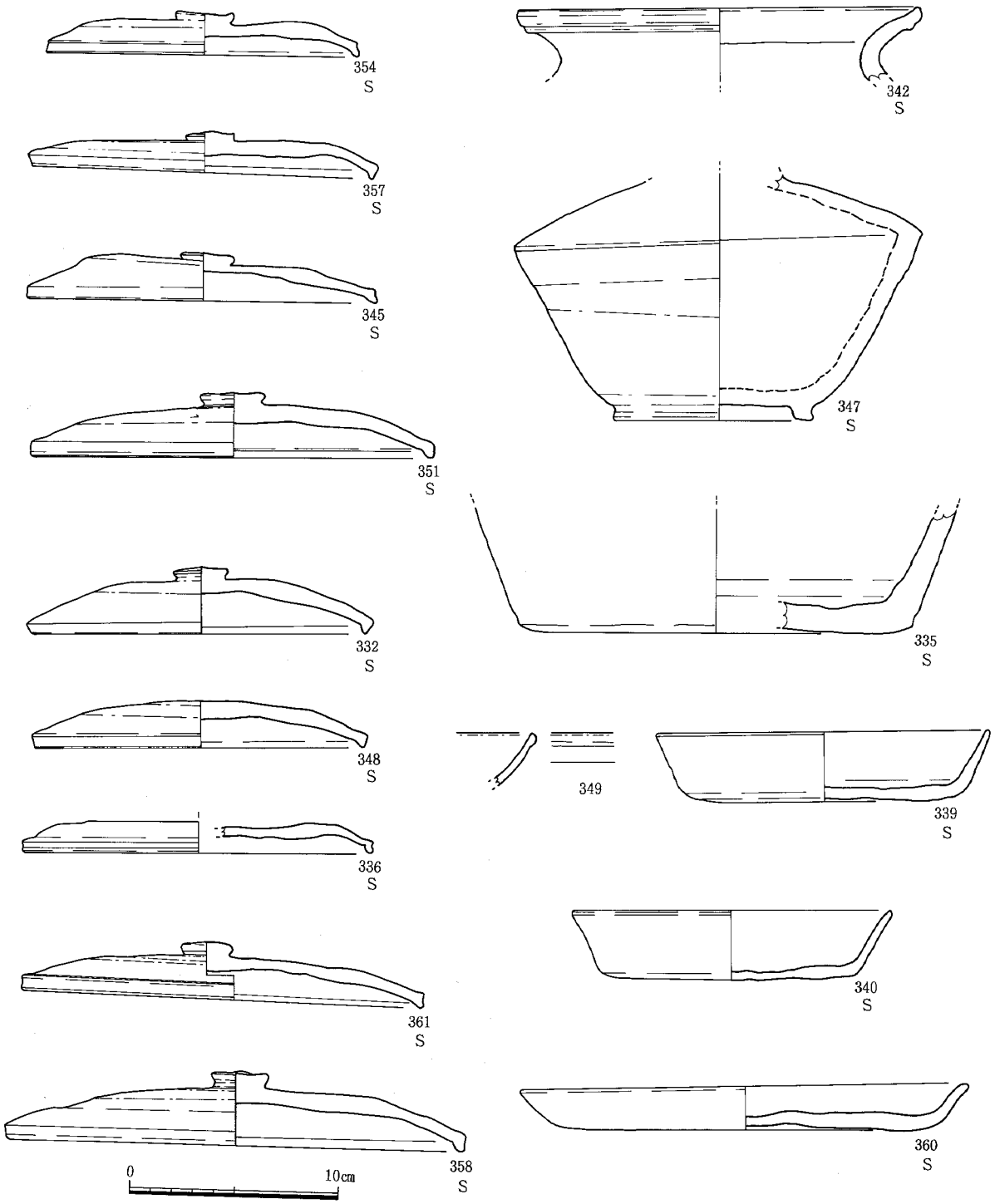


Fig. 54　古代住居跡出土土器実測図16（1 : 3）

とんどのものは底部端に付く。338、364、337は土師器甕である。337は把手を持つ。363は甑である。把手の方向と若干軸をずらして橋を架け、半円形の二孔を設ける。

住居跡88(Fig.52)

Ｈ５区で検出した。一部調査区外へ出るが、東西３ｍ、南北2.6ｍほどの横長の長方形を呈する。南側壁の南西コーナーよりに竈を持つ。調査区内で南側に竈を持つ例は少なく、南西コーナーを含めても４基に過ぎない。この４基はＨ区～Ｉ区に集中している。調査区内では遺構面が、この付近から東側へかけてかなり傾斜しているが、このことと関係があるのであろうか。竈は幅80cmほど、奥行50cmほどの張出し部に敷設される。張出し部奥壁中央からトンネル状の煙道が伸びる。煙道は幅30cm、長90cmほどである。煙道端部は径40cmほどのピットに連結する。竈は破砕され、粘土などの散布も見られない。南西コーナーには壁際を抉り込む形で、径60cm、住居床面からの深さ20cmほどの土壙を掘り込んでいる。住居の四周には張出し部、土壙部分を除いて壁溝が巡る。壁溝は幅30～40cmほどの幅広のものである。主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.53)

365は土師器の甕である。口縁は外反しながら開く。口縁内面から外面にかけてハケメを施し、口縁部付近のみヨコナデで消す。

住居跡90(Fig.52)

Ｈ８区で検出した。住居跡53に切られるが、南北3.2ｍ、東西2.8ｍほどの長方形を呈する。竈は南西コーナーに敷設され、コーナーから南西方向へ斜めに煙道が取り付く。煙道は幅25cm、長90cm程である。竈は破砕され、煙道前面に粘土塊が散布する。壁溝、主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.53)

甕366、367は土師器。367は小形である。366は内面削りが、口縁部と胴部の境よりやや下がった位置で止まっている。368、369は須恵器。368の底部はヘラ切りのままである。

住居跡92(Fig.56)

Ｈ８区で検出した。１辺３ｍの方形を呈する。竈の痕跡は北側壁と、西側壁に見られる。いずれも前面に焼土、粘土の散布が見られるが、北側の煙道前面には粘土の散布が見られず、焼土を含む土で埋め戻したような状況にも見える。これに対し西側の張出し部とその前面には白色粘土が多く散布しており、破砕後放置されたような状況と考えられる。従って西側の竈が最終段階の竈と考えておく。これは当初は煙道のみを住居外に出し、竈本体を住居内に設けたものが、住居が１辺３ｍと小規模であるため、張出しを設けて竈部分を拡張し、床面積の増大を測ったものと考えられる。

西側壁の竈は南西コーナーよりに敷設される。幅60cm、奥行40cmほどの張出しを設け、張出し部奥壁中央から幅20cm、長90cmの煙道がトンネル状に伸びる。煙道途中のピットは後世の攪乱であろう。端部は径30cmのピットに連結する。ピットには壁の補強材と思われる土師器甕が出土した。北側竈は北東部コーナーよりに敷設される。壁から直接幅20cm、長1.1ｍの煙道がトンネル状に伸び、端部は径25cmほどのピットに連結する。南側壁を除く三方に壁溝が巡る。

出土土器(Fig.57)

須恵器坏は376が口径11.2cmの小形品。374、375、371が13～14.5cmの中形品。370、372が17.5～18cmの大形品である。底部はヘラ切りのままのものが多く、376のみ板目が見られる。蓋373は須恵器で、

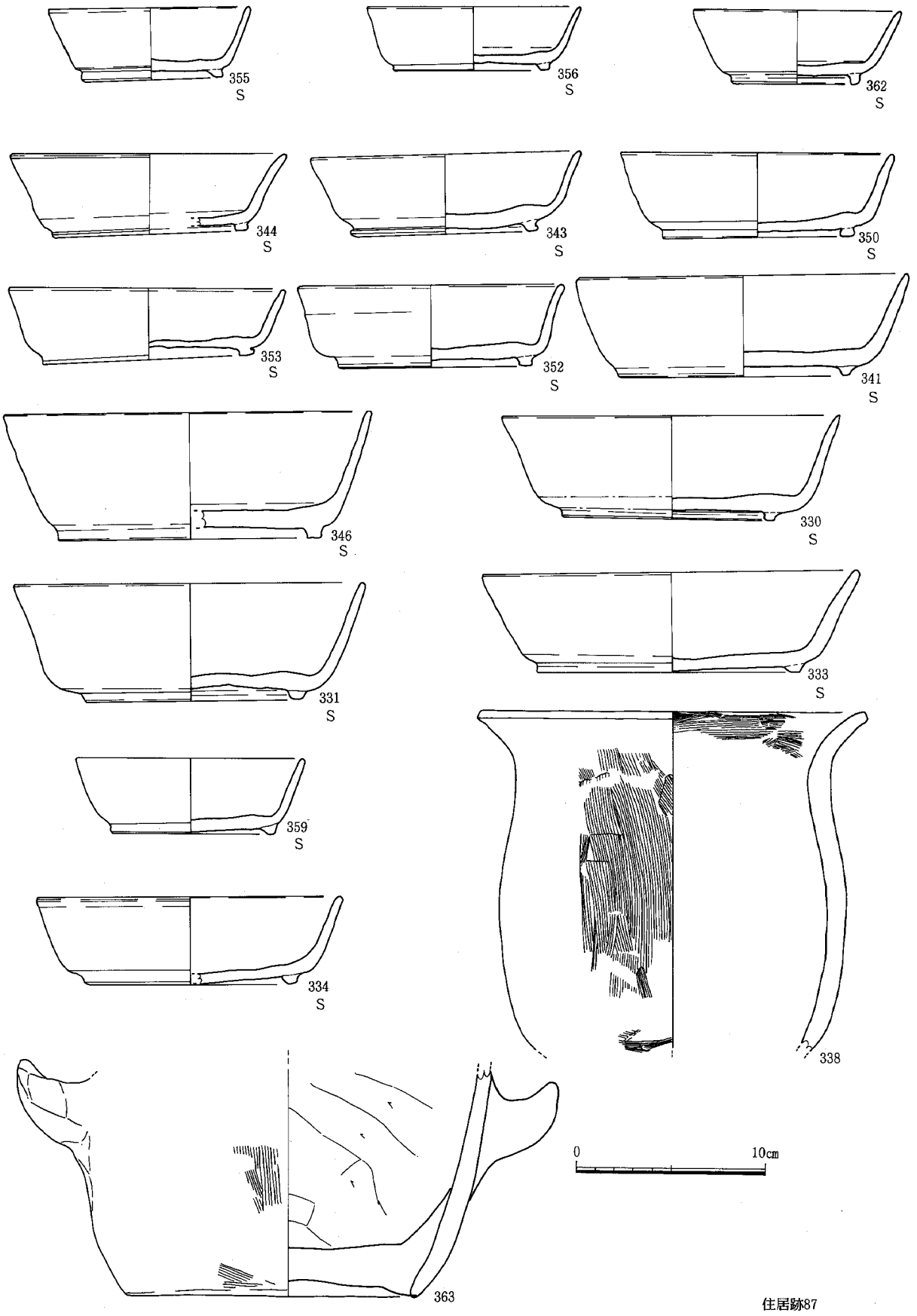


Fig. 55　古代住居跡出土土器実測図17（1：3）

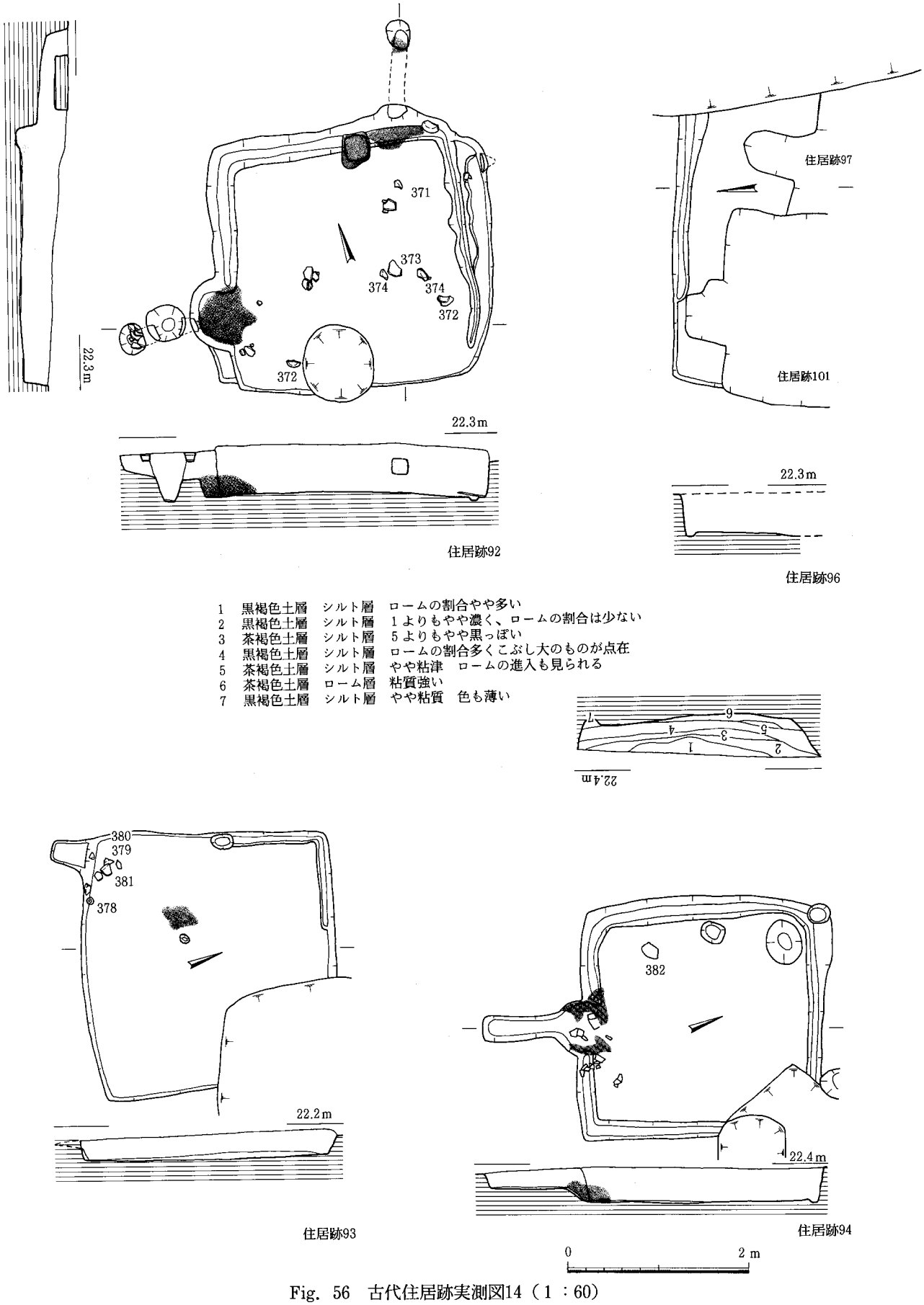


Fig. 56 古代住居跡実測図14（1：60）

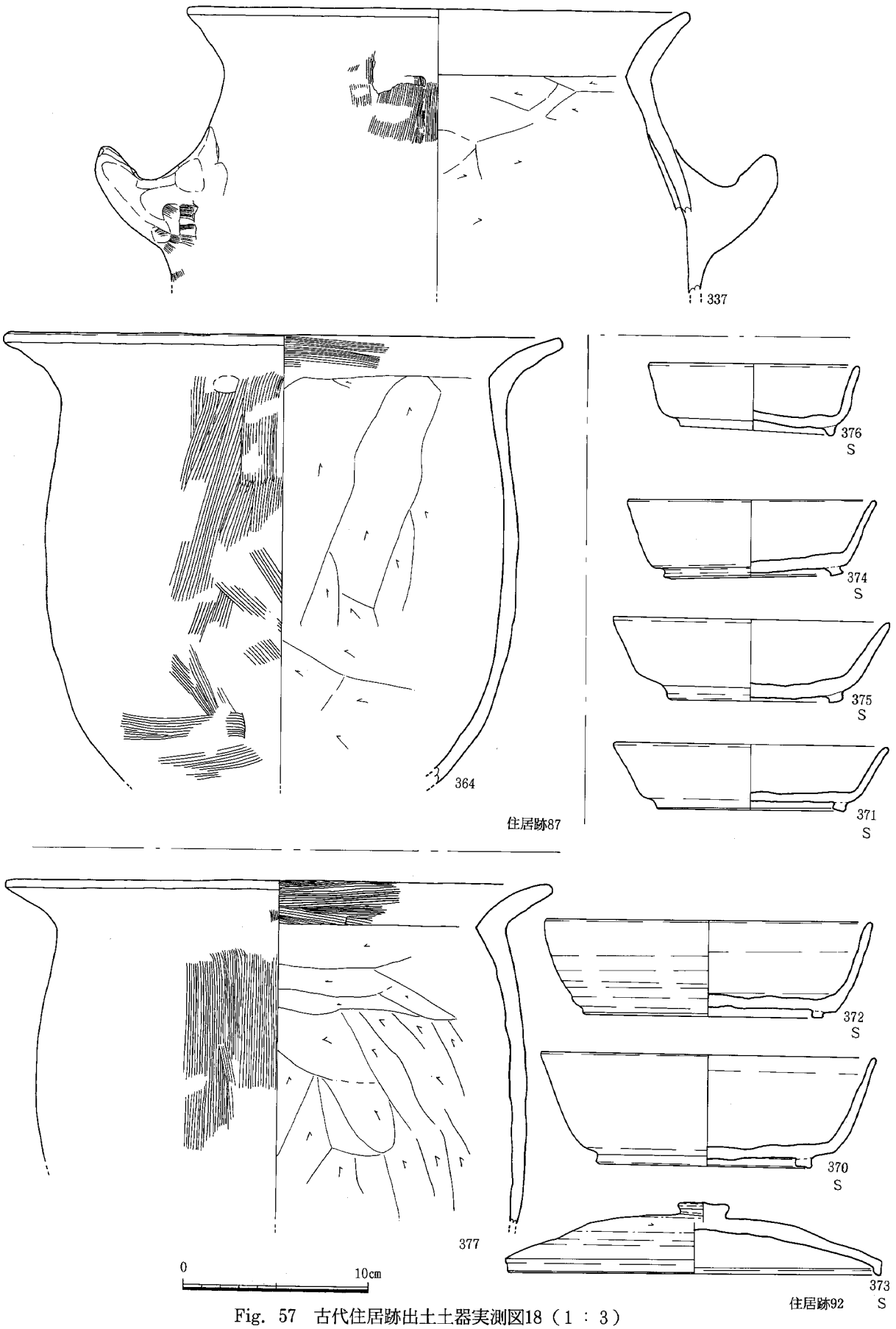


Fig. 57　古代住居跡出土土器実測図18（1 : 3）

天井部に回転ヘラ削りを施す。377は土師器甕である。煙道端部の出土である。

住居跡93(Fig.56)

Ｈ８区で検出した。北東部を攪乱により削平されるが、１辺2.8ｍほどの方形を呈する。竈は南西隅と考えられる。粘土などの散布は見られないが、コーナーから南方向へ、幅30㎝、長40㎝ほどの煙道らしき痕跡が残っている。煙道はピットには連結せず、そのまま緩やかに浅くなっていくと考えられる。壁溝は北西隅に一部検出した。主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.58)

須恵器蓋380は天井部に回転ヘラ削りを施す。378は須恵器坏で、口径9.5㎝の小形品。完存で出土した。379も須恵器坏。体部は浅い。外底部の高台内側に回転ヘラ削りを施す。381は土師器甕である。口縁は短く屈曲して開く。外面に煤が付着する。

住居跡94(Fig.56)

Ｉ７区で検出した。１辺2.7ｍほどの方形を呈する。竈は南側壁の中央にある。幅60㎝、奥行30㎝ほどの張出しを設け、奥壁から幅20㎝、長80㎝ほどの煙道が伸びている。竈は破砕され、張出し部に粘土が散布する。張出し部以外にはそれほど広がらず、破砕後放置された様な状況である。張出し部を除く四周に壁溝が巡る。

出土土器(Fig.58)

382は須恵器の坏である。383は土師器の甕で、胴部はあまり張らない。内面の屈曲部直下の削りを部分的にナデ消している。

住居跡96、97、101(Fig.56、59)

Ｉ７区で検出した。この住居付近では３基の住居と土壙１基が切りあっている。最も新しいのは土壙95で、住居跡96、101を切る。住居跡３基の切り合いであるが、住居跡97が、96を切るのは土層から確認できる。101は覆土中に焼土を多く含む層があり、この層は住居跡97の北側壁より、更に北に広がっている。また101は97より深く、97の方が後であれば101の覆土中に97の貼床面が検出されるはずであるが、その痕跡も無い。従って先後関係は96⇒97⇒101⇒95の順と考えられる。

まず住居３基を新しい順に述べる。土壙95については後項で述べる。住居101は１辺2.1ｍほどの小形の住居である。北側壁の中央やや西よりに張出し部があり、ここに竈が敷設されたと考えられる。住居跡97と切り合う部分を住居跡97の床面より若干深く掘り下げ、その部分を再び埋め立てる形で貼床を行なっている。

住居跡97は南北３ｍ、東西２ｍ以上を測る。北側壁に竈がある。竈は幅広の煙道とも、幅狭の張出し部ともとれる幅40㎝、長80㎝の張出し部を持つ。その前面に粘土などが散布している。主柱穴、壁溝は検出されなかった。

住居跡96は東壁も攪乱により削平され、北側壁の一部が残るのみである。規模は東西3.2ｍ以上、南北1.3ｍ以上としかわからない。北側壁に壁溝は認められるが、竈などは残存しない。

出土土器(Fig.60)

遺物はかなり混ざっており、異なる遺構として取り上げたものが接合したものもある。蓋392は96と97出土品の接合である。天井部に回転ヘラ削りを施す。須恵器坏は388は96出土。393は96と97の接合である。393はやや浅い器形である。高台がかなり内側に付く。須恵器皿394は97出土である。須恵

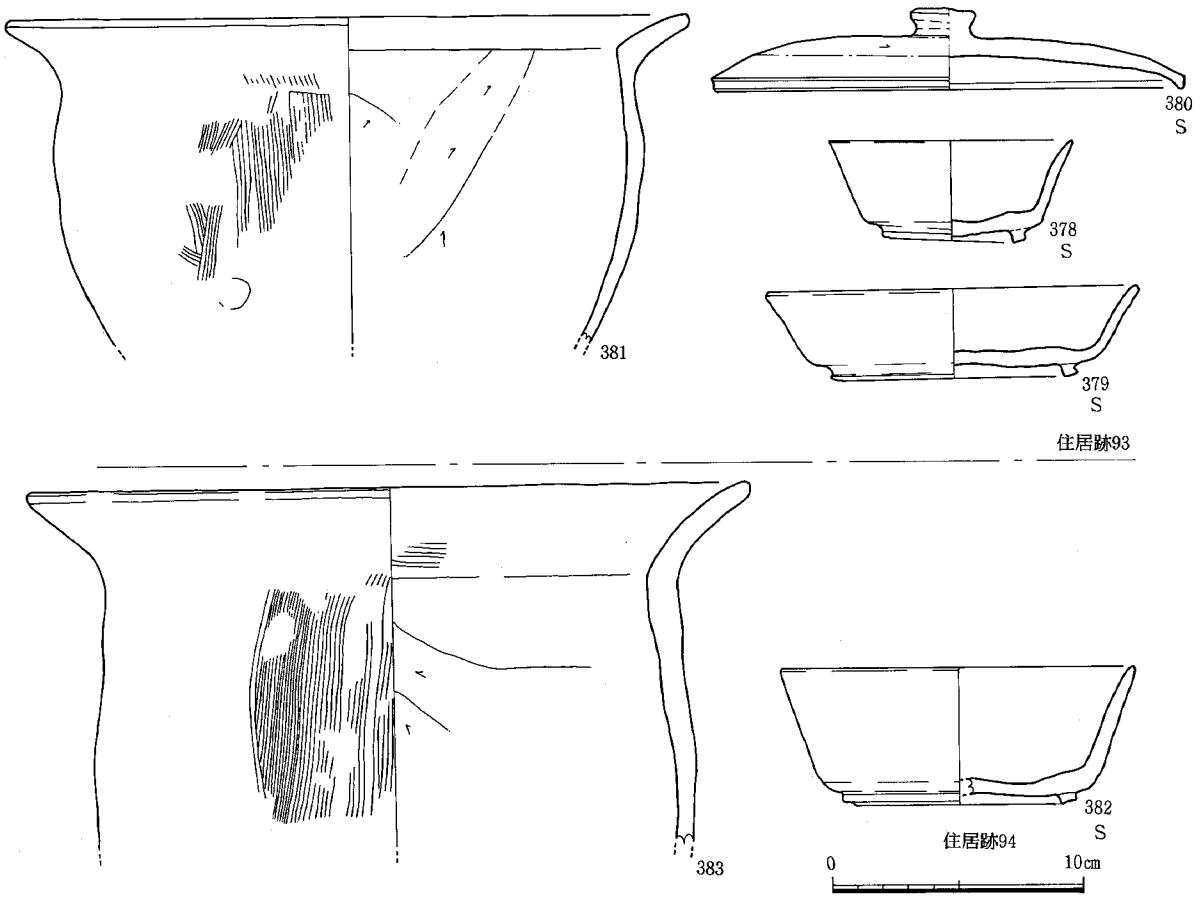
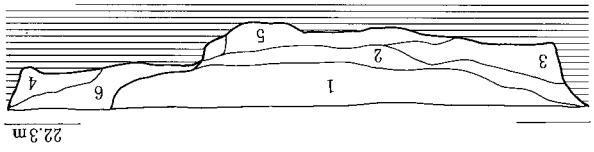
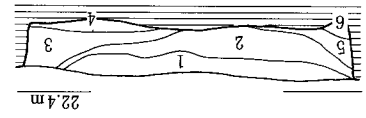
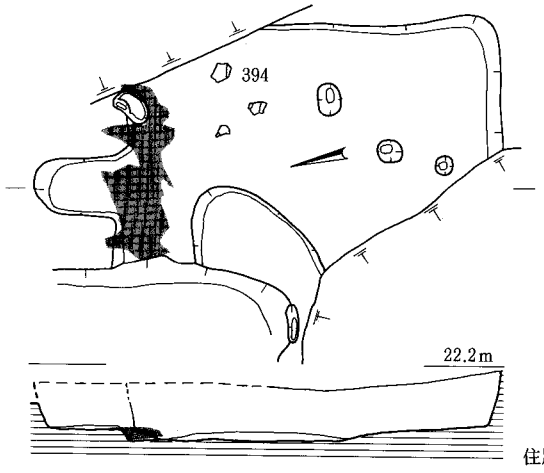


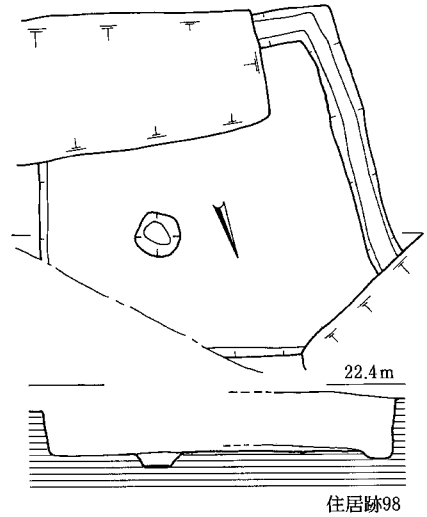
Fig. 58　古代住居跡出土土器実測図19（1：3）







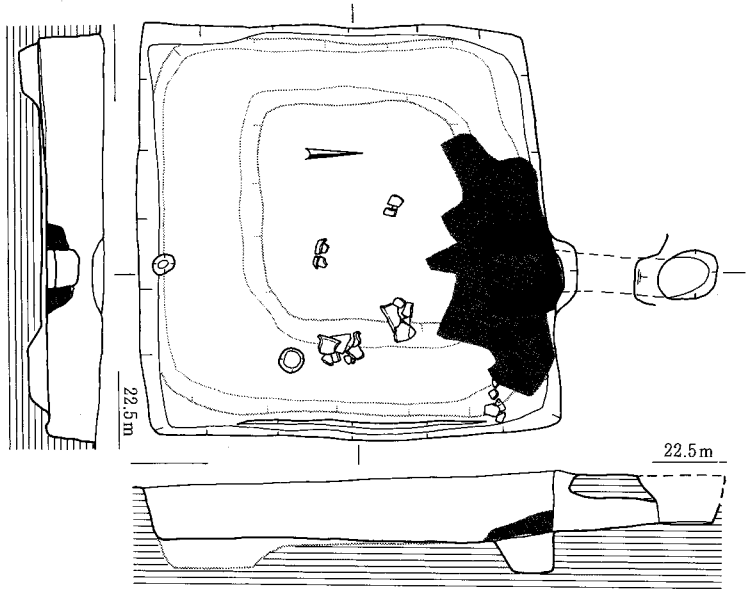
住居跡97



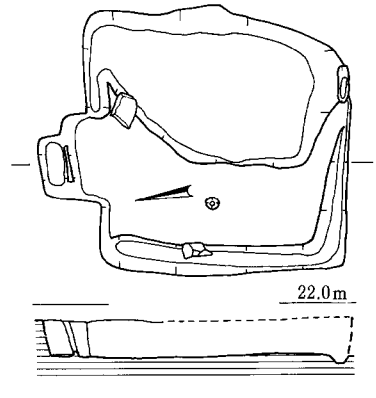
住居跡98

1　表土　黒褐色　上部に土器片あり　やわらかい
2　暗褐色 所々明褐色の土が混じっている 北の方は明褐色の土がやや多め
　　1よりややかたい感じ
3　暗褐色　2よりやや黒っぽい　明褐色の土が点在（2より少なめ）砂質性のある土質
4　暗褐色　床面の土に黒色の土が少し混じっている。ややかたい（貼床）
5　黒褐色　1よりやや薄い色　砂質性の上が混じっている
6　黒褐色　5と同じく砂質性はあるものの、床面の上が少し混じっている
　　5より少し色が薄い

1　黒茶褐色　小さいロームの粒子が少し混じっている粘質土
2　暗茶褐色　1よりやや多めにロームの粒子が混入。ロームブロック（3～5㎝）も所々見られる
　　この層に限って土器破片が点在。カマド近く（西より）に灰粘土のブロック混入粘卒質
　　土（1より硬い）
3　暗黄茶褐色　1、2に比べてロームの混入比率が高くなる。多粘質土
4　明茶褐色　1に比べてロームの粒子が多い。やや柔らかめの粘質土
5　明黄褐色　床面と土質は変わらない。所々に黒い土が見られる
6　暗褐色シルト　ロームブロック多



住居跡100



住居跡101

0　2 m

Fig. 59　古代住居跡実測図15（1：60）

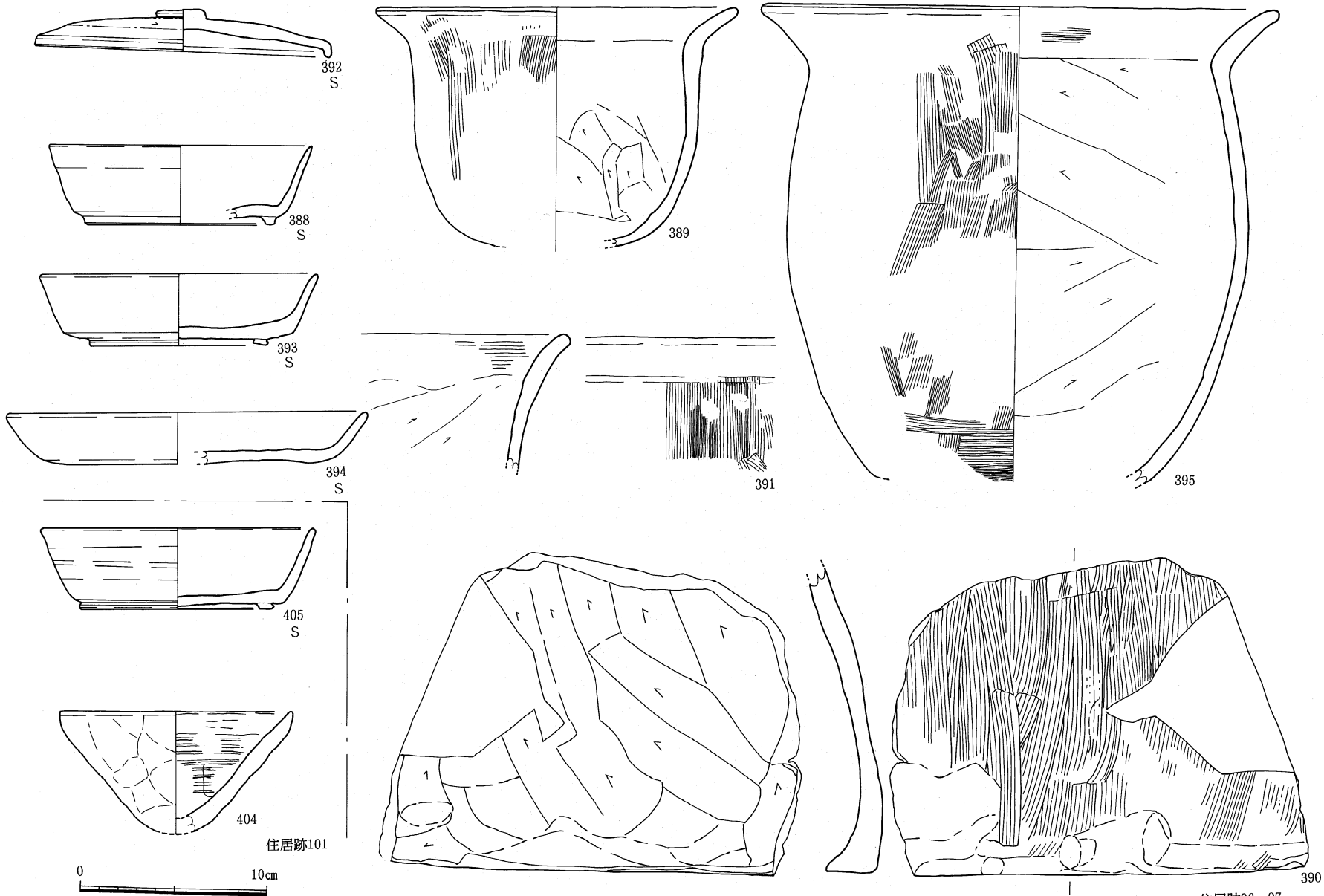


Fig. 60　古代住居跡出土土器実測図20（1：3）

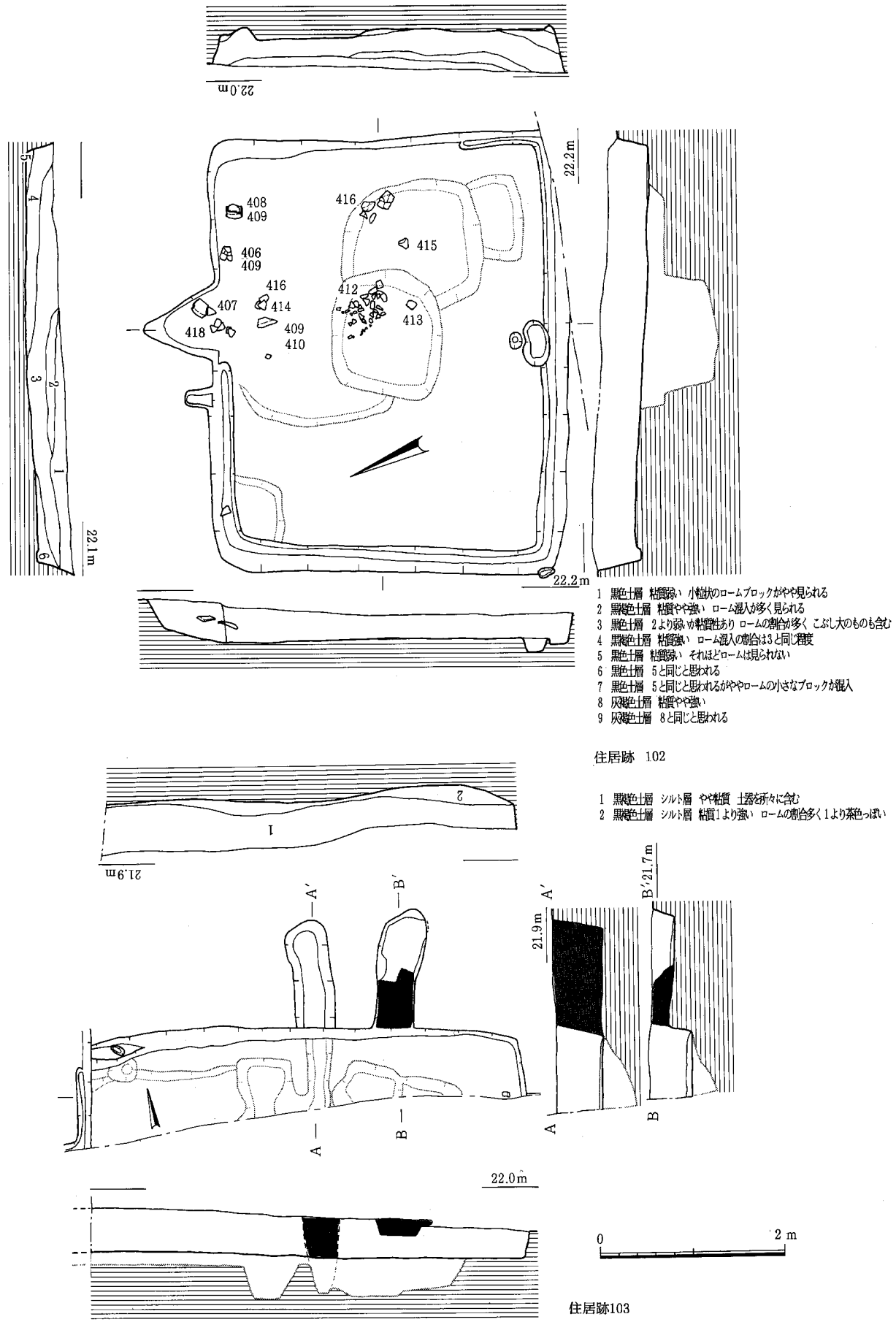


Fig. 61 古代住居跡実測図16（1：60）

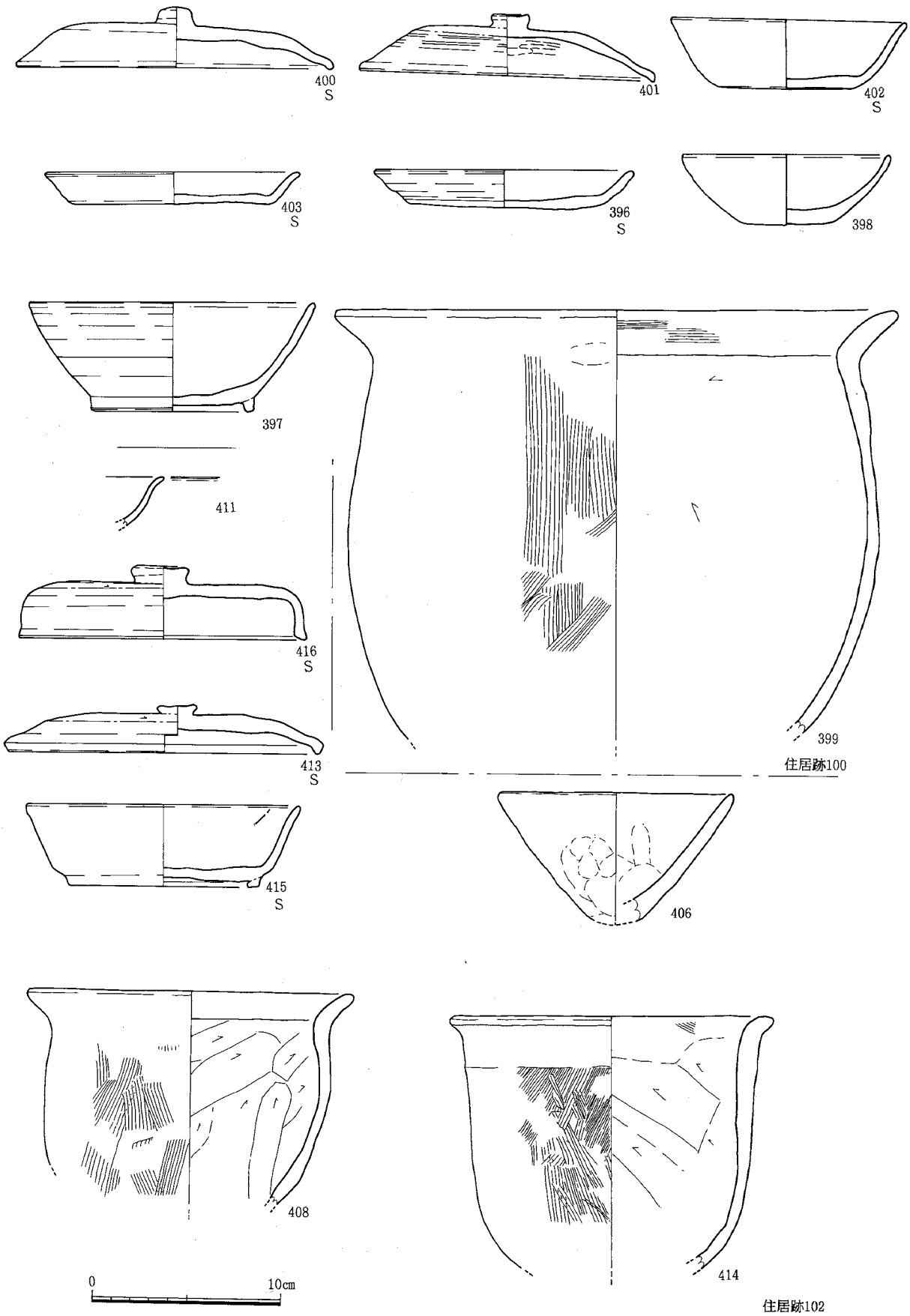


Fig. 62　古代住居跡出土土器実測図21（1 : 3）

器坏405は101出土。土師器甕389は96出土。器高が低い小形品である。395は96、97の接合である。391は甑である。口縁はわずかに外反する。390は竈の基底部であろう。外面ハケメ、内面削りを施す。底部坦面には板目状の圧痕が見られる。96と101の接合である。404は土師器の鉢である。尖底で、内面に叩きと思われる条痕がみられ、外面は指押さえによって成型される。器壁は厚い。類似したものが住居102からも出土しており、何か特殊な用途に用いられた可能性がある。

住居跡98(Fig.59)

Ｉ７区で検出した。北東隅が調査区外へ出る上、北西隅や南壁を攪乱により削平される。しかし規模は１辺2.7ｍほどの方形に復元できよう。西壁から南壁にかけて壁溝が認められるのみで、竈や主柱穴は検出されなかった。

図化に耐える遺物は出土していない。

住居跡100(Fig.59)

Ｇ８区で検出した。１辺3.2ｍほどの方形を呈する。北側壁に竈を持つ。壁の中央やや東よりに幅60㎝、長20㎝のごく短い張出し部を設ける。張出し部奥壁から幅30㎝、長1.4ｍの煙道がトンネル状に伸びる。端部は径40㎝ほどのピットに連結する。竈は破砕され、張出し部前面に粘土、焼土が広い範囲で散布するが、竈袖の一部分のみが残存していた。また燃焼室部分は住居床よりかなり深く掘り込まれており、これらから推定して、竈は幅、長さとも70㎝ほどの方形に復元されよう。床面での壁溝は東壁の一部で認められるのみであるが、住居掘方は壁に沿って幅50～80㎝の幅広の溝を掘り、その溝を埋め立てる形で貼床がなされている。

出土土器(Fig.62)

蓋400は須恵器であるが、焼成が悪く、瓦質に近い。天井部のヘラ削りはないようである。蓋401は土師器である。天井部に回転ヘラ削りを施す。内面はミガキをかけるようである。皿403、396は須恵器。底部はヘラ切りのままである。坏402は須恵器。398は内黒の黒色土器Ａ類である。397は土師器坏である。高台は底部端に付く。体部外面には回転ヘラ削りを施す。399は土師器甕である。

住居跡102(Fig.61)

Ｇ９区で検出した。住居跡103を切る。南北3.8ｍ、東西4.7ｍほどの横長の長方形を呈する。北側壁に竈を持つ。竈は壁のほぼ中央やや東よりに幅80㎝、奥行80㎝ほどの平面形三角形の張出しを設ける。煙道は検出されず、削平された可能性が高い。竈は破砕され、粘土など張出し部に散漫に散布する。壁溝は竈西側脇から西、南壁を経て東壁の一部まで確認された。貼床も施されるが、貼床除去後に検出した土壙は、他の住居の例から見て住居掘方に伴うものとは考えがたく、住居以前の遺構の可能性が高い。この土壙の埋め立てを第一義の目的として貼床がなされたものと考えられる。主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.62、63、64)

411は白磁の口縁部片である。口縁端は外反する。住居87例と異なり、覆土出土土器整理中の検出であり、混入の疑いは捨て切れない。413、416は須恵器蓋。いずれも天井部に回転ヘラ削りを施す。415は須恵器坏。高台は底部端に付く。406は土師器の鉢である。住居101の404とほぼ同形同大であるが、内面の条痕が見られず、すべて指押さえで成型される点が異なる。408、409、414は土師器の小形甕である。408は長胴、409は球形胴、414は口縁が極めて短いなど少しずつ形態が異なる。410、412、

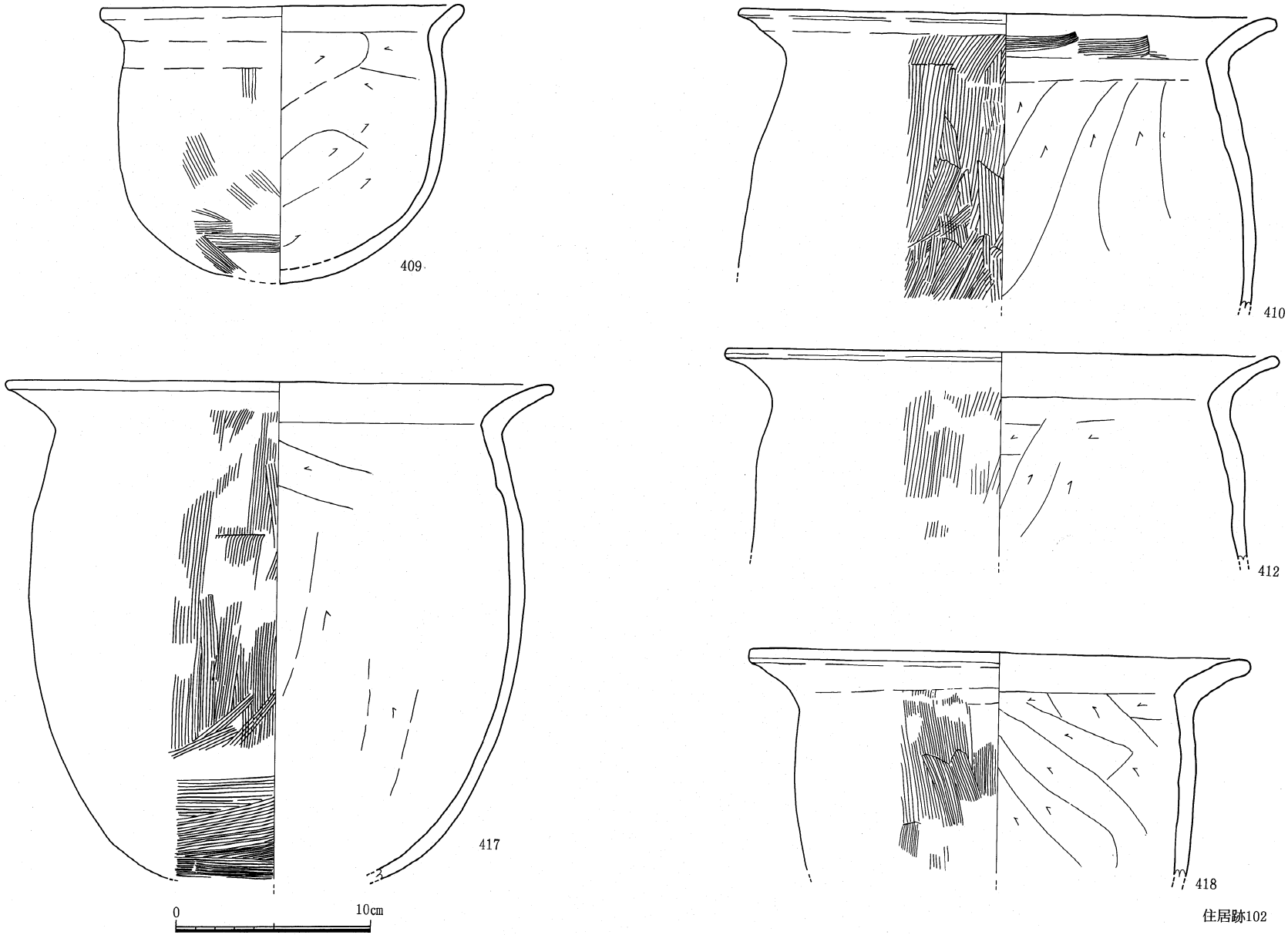


Fig. 63　古代住居跡出土土器実測図22（1 : 3）

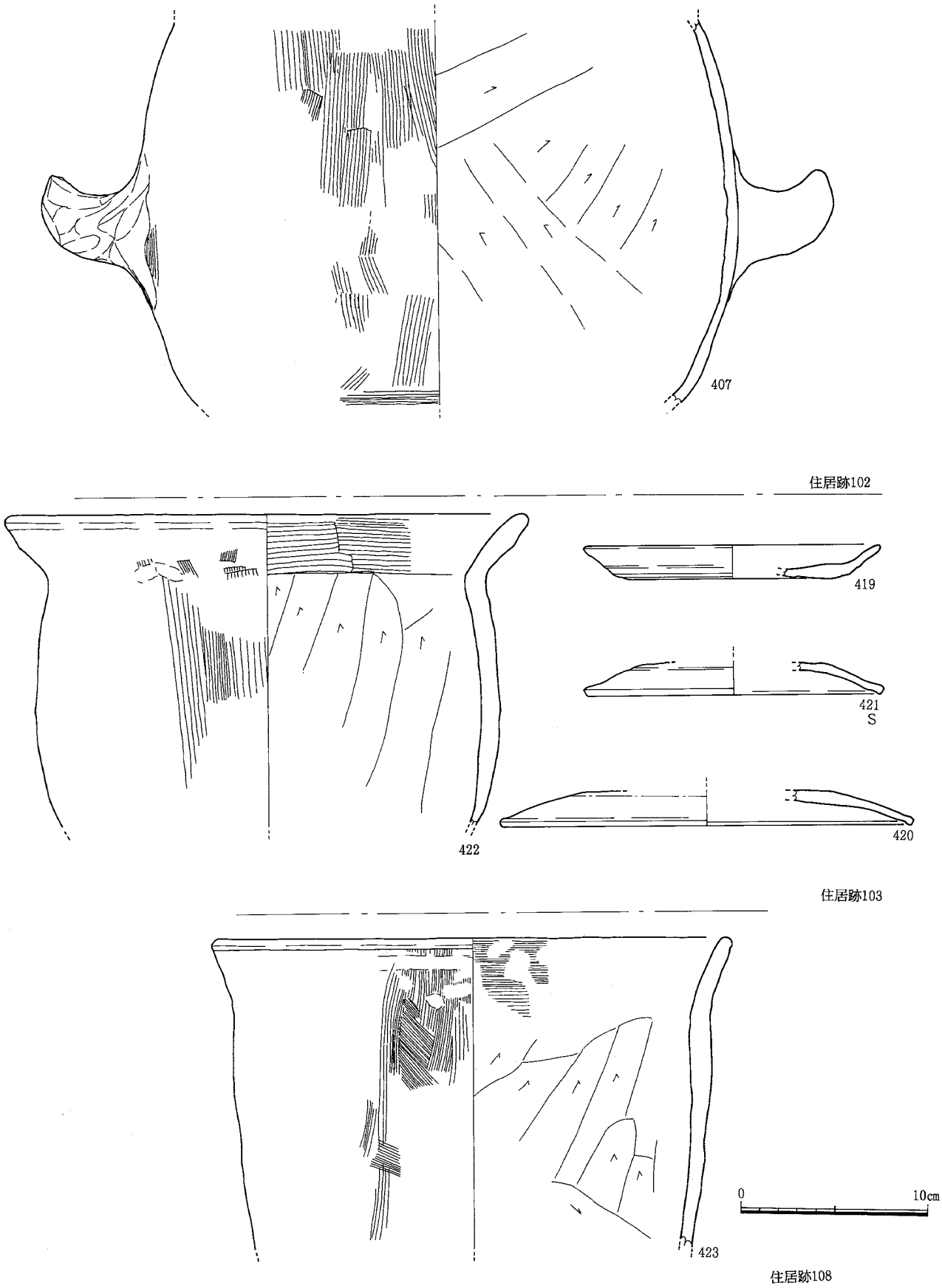
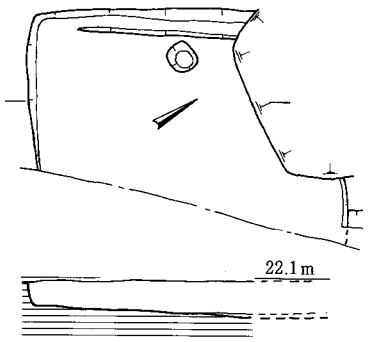
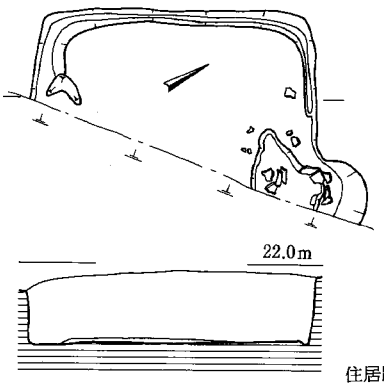


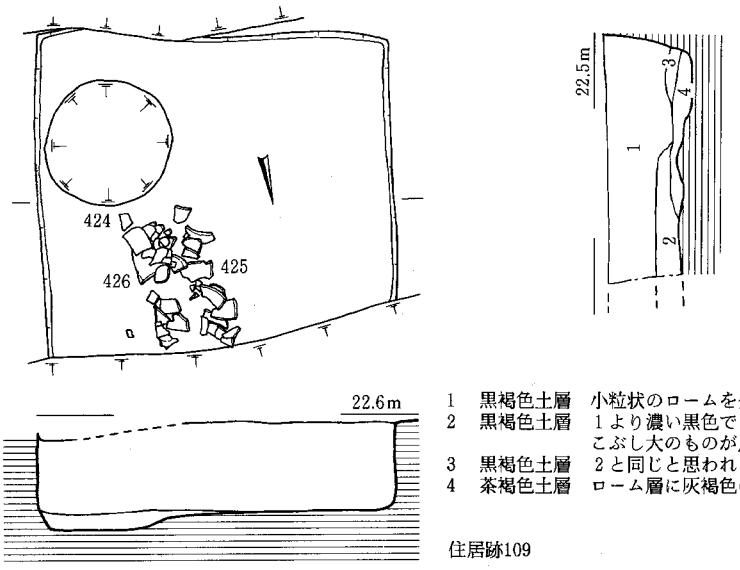
Fig. 64　古代住居跡出土土器実測図23（1：3）



住居跡107

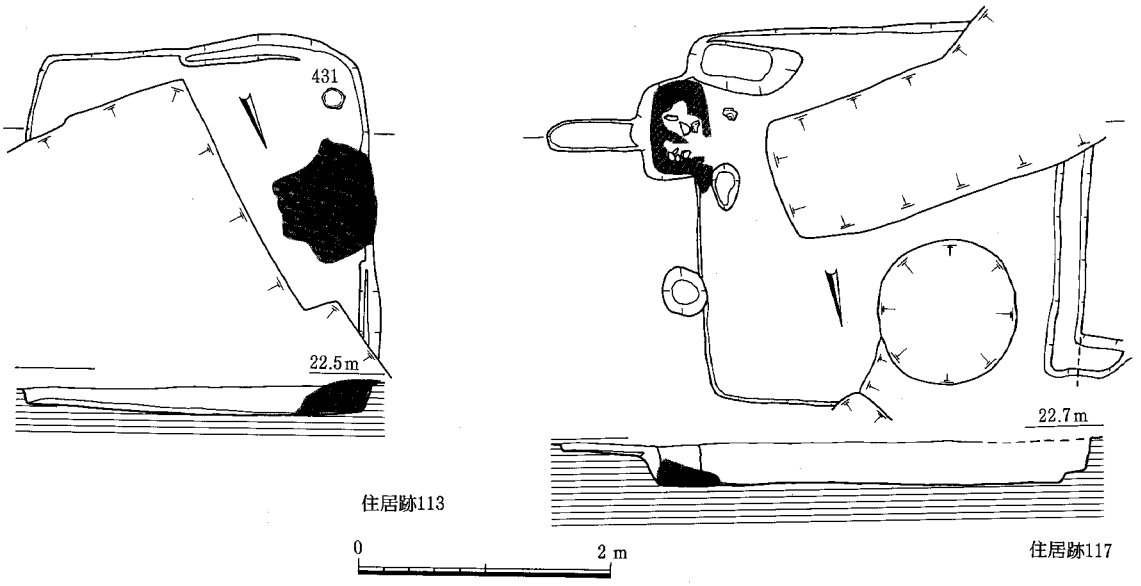


住居跡108



1　黒褐色土層　小粒状のロームを全体的に含む　粘質2より弱い
2　黒褐色土層　1より濃い黒色でロームのブロックは少ないが
　　こぶし大のものが点在
3　黒褐色土層　2と同じと思われる
4　茶褐色土層　ローム層に灰褐色の粘質土層が混入

住居跡109



住居跡113

住居跡117

Fig. 65　古代住居跡実測図17（1：60）

417、418は土師器甕である。410は口縁内部にハケメが残る。407は把手付きの土師器甕である。

住居跡103(Fig.61)

Ｇ９区で検出した。住居跡102に切られ、規模は不明であるが、東西4.7m以上の大形の住居である。大部分が調査区外に出る。調査区内では竈は検出されていないが、煙道が２基検出されている。いずれも埋め戻されており、２回以上の付替えの後、他の壁に移動したものと考えられる。東側の煙道は幅40cm、長1.3mほどである。西側の煙道は幅40cm、長1.3mほどであるが、住居103の貼床下からこの煙道の続きが検出されており、本来一回り小さい住居に取り付けられた煙道が、住居の拡張にともなって移設された状況を示している。

出土土器(Fig.64)

419は土師器皿である。体部は回転ナデ。421は須恵器の蓋。天井部には回転ヘラ削りを施さない。口縁端部は坦面をなすのみで、ほとんど突出しない。420は土師器の蓋で、天井部はヘラ削りを施すようである。422は土師器甕。外面に煤が付着する。

住居跡107(Fig.65)

Ｉ７区で検出した。調査区外に出る上、北側の大部分を攪乱により削平される。南北2.4m、東西1.8m以上を測る。西壁に壁溝が認められるのみで、竈や主柱穴は検出されなかった。

図化に耐える遺物は出土していない。

住居跡108(Fig.65)

Ｈ９区で検出した。半分以上調査区外へ出る。南北2.2m、東西1.5m以上の小形の住居と考えられる。北側に竈がある。半分ほどが調査区外に出るが、幅60～70cmほど、奥行40cmの張出しを持つものと考えられる。張出し前面の竈跡は、住居床面より若干深く掘り凹められている。調査した範囲では張出し部分を除いて壁溝が巡る。

出土土器(Fig.64)

423は竈付近で出土した土師器である。甑と考えられる。口縁部はわずかに開く。外面は縦方向のハケメ、口縁内面は横方向のハケメ、胴部内面に削りを施す。

住居跡109(Fig.65)

Ｈ６区で検出した。北側を攪乱で削平される。東西2.8m、南北2.5m以上を測る。遺存していた範囲では竈は無いので、北側壁に敷設されていた可能性が高い。壁溝、主柱穴も検出されない。まとまって出土している土器群はいずれも床面から浮いており、廃絶後の投棄と考えられる。

出土土器(Fig.66)

427、429は須恵器蓋である。429は天井部の回転ヘラ削りがない。427は口径が大きく、天井部に回転ヘラ削りを持つが、歪みが大きい。424、428は須恵器坏である。底部はヘラ切りの後、高台内側付近に回転ナデをかける。430は須恵器皿。底部はヘラ切り痕を消すが、指頭痕等も残る粗いナデである。426は須恵器の鉢である。口縁部は直立し、端部は垂直に坦面を持つ。胴部との境は段状を呈し、胴部は半球形を呈する。把手の剥離痕が見られ、半環状の把手が横向きについていたと考えられる。外面は格子目叩き。内面は同心円文の当て具痕が見られる。425は土師器甕。口縁部が大きく開く。

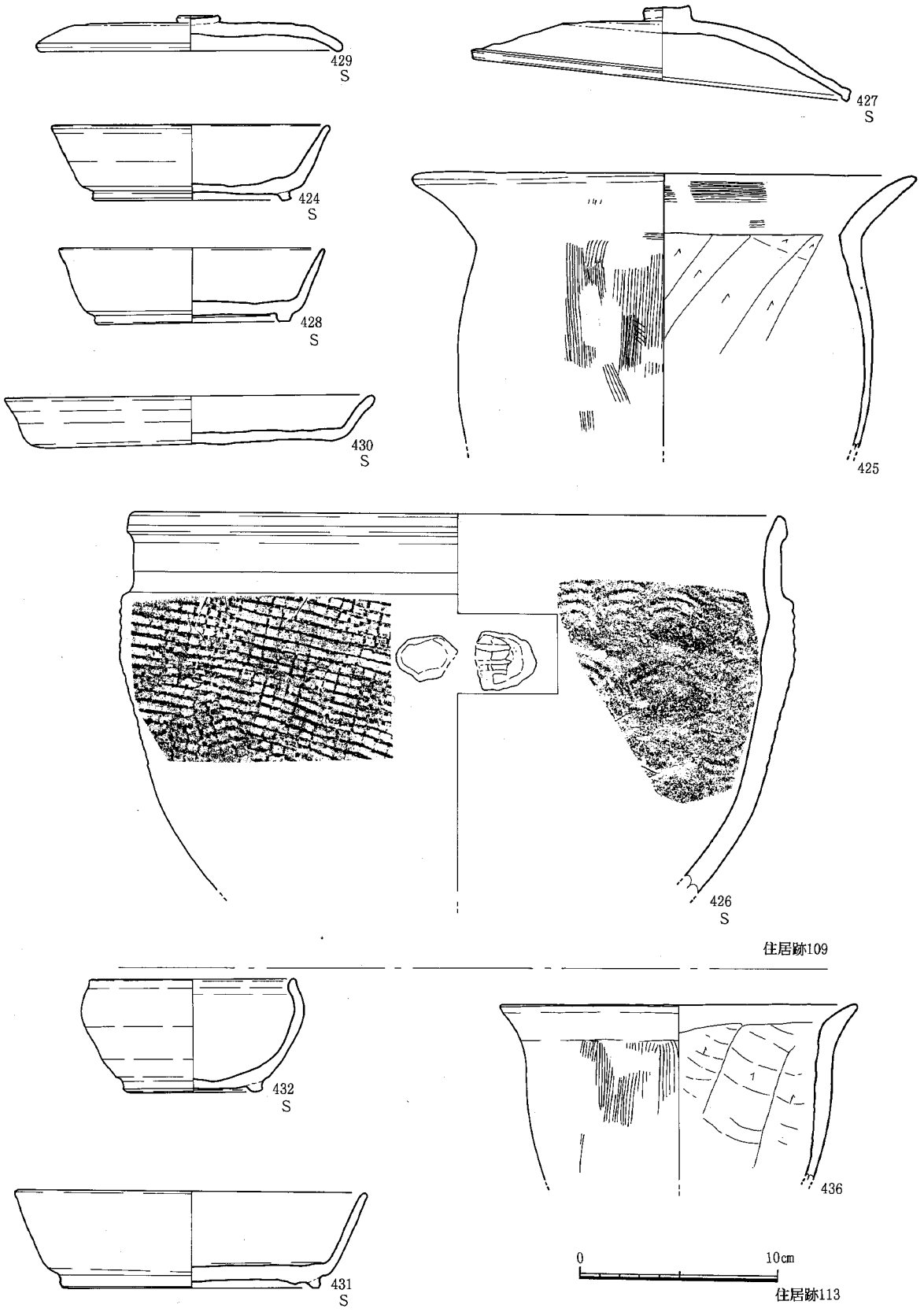
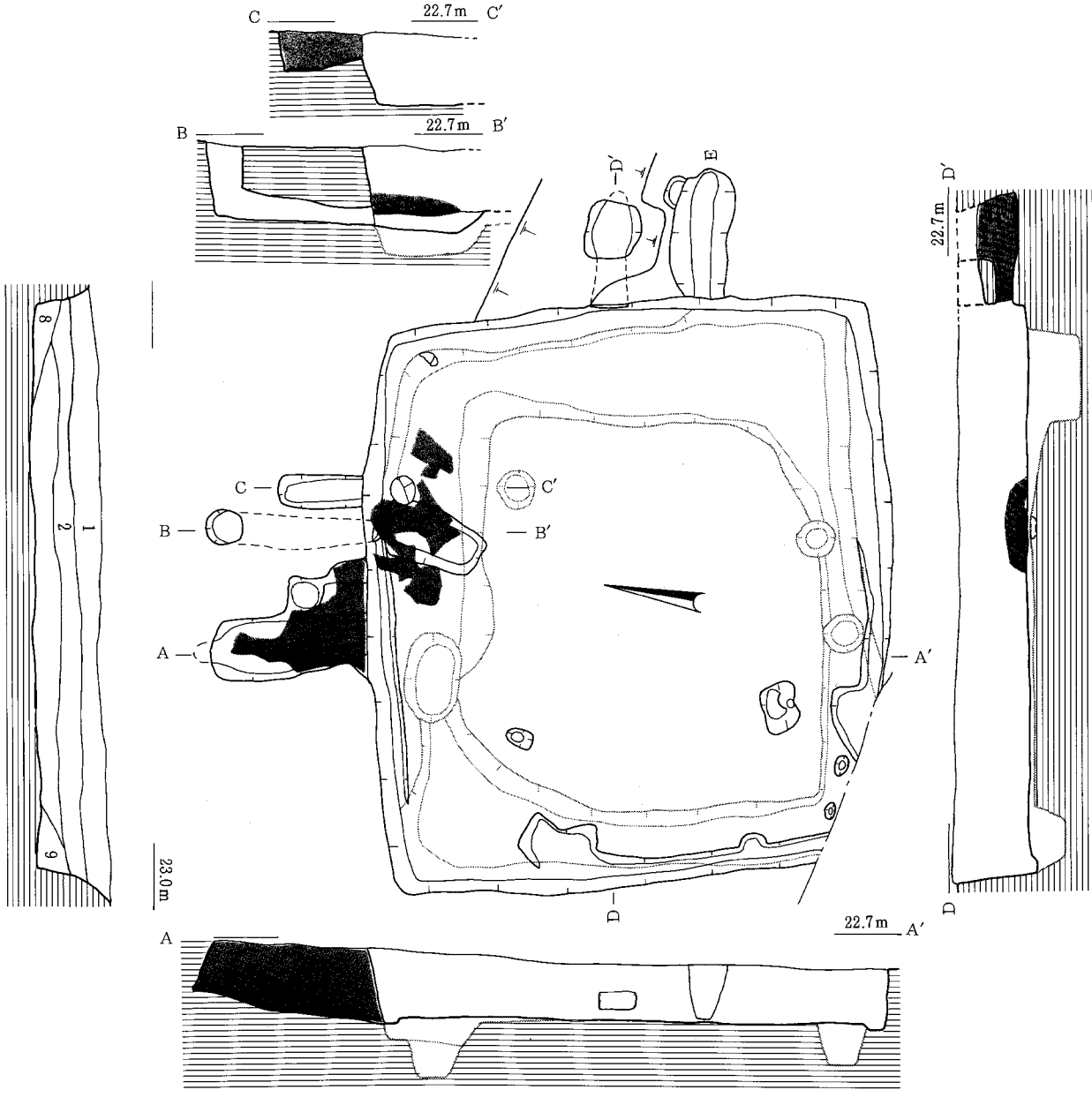
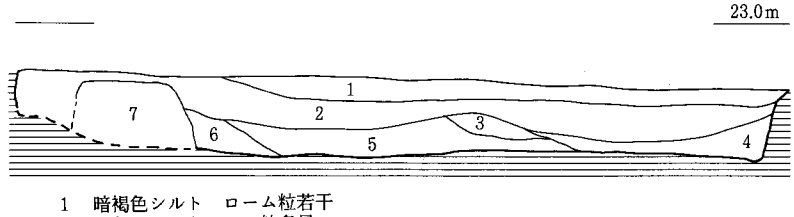


Fig. 66　古代住居跡出土土器実測図24（1 : 3）

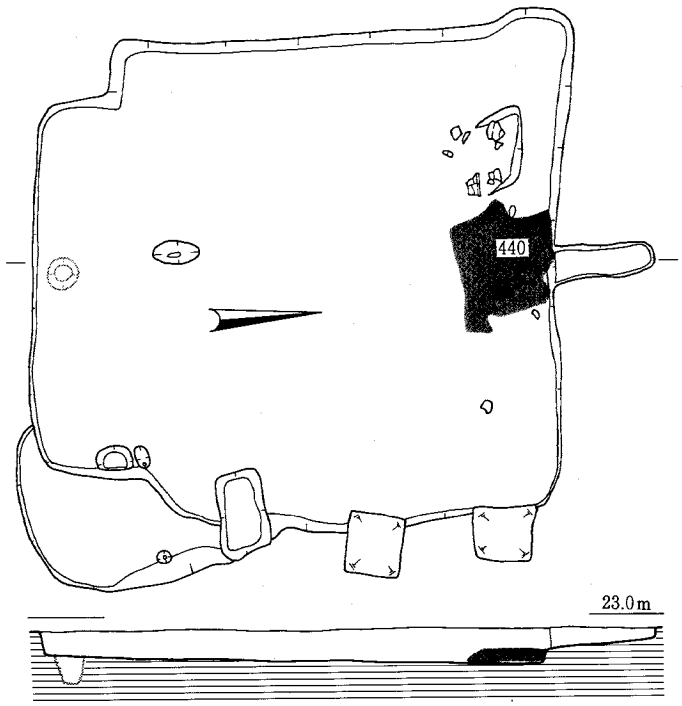




1　暗褐色シルト　ローム粒若干
2　黒色シルトとローム粒多量
3　黄褐色ロームブロック
4　黒色シルトにローム粒足る追う　2よりやや明るいが同一層の可能性あり
5　黒色シルトにローム粒、ロームブロック多量
6　ロームブロック　多量　褐色シルト
7　地山埋戻し　壁の復旧か？
8　黒色シルト　ローム粒若干
9　黒色シルト　ロームブロック含む

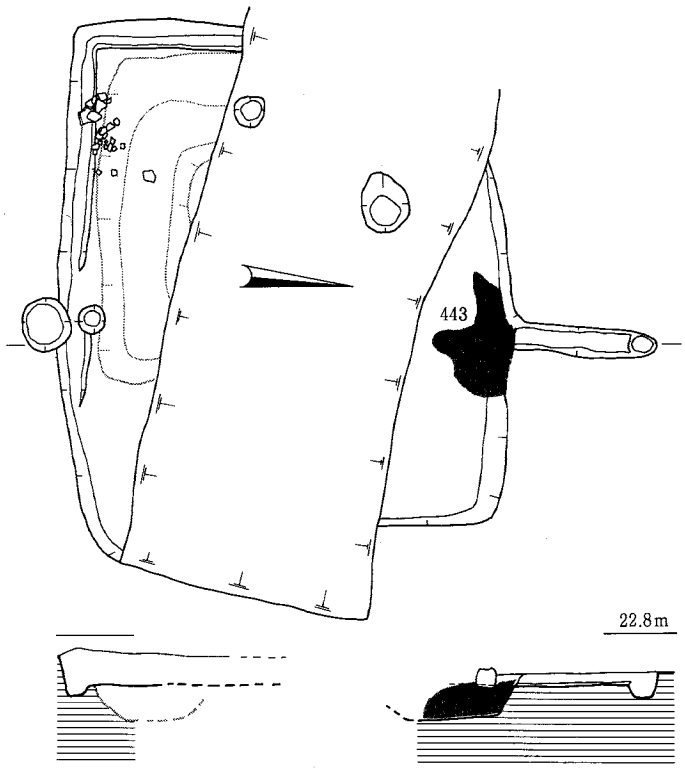
0　2 m

Fig. 67　古代住居跡実測図18（1：60）



住居跡115

0　2 m



住居跡116

Fig. 68　古代住居跡実測図19（1：60）

住居跡113(Fig.65)

Ｇ７区で検出した。攪乱で大きく削平される。東西2.7m、南北2.4m以上を測る。西側壁に白色粘土の散布があり、竈痕跡の可能性があるが、張出し部、煙道とも検出されず、また調査区内で西側に竈を持つ例は極めて少ないことからも疑問もある。壁溝は西壁、南壁の一部で検出されている。主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.66)

432は須恵器の小形鉢である。口縁部は上方へつまみ上げ薄く尖らせる。肩が張り、底部端に低い高台を付ける。431は須恵器坏。口径17cmを測る比較的大形品である。436は小形の土師器甕。口縁部は短く屈曲して開く。

住居跡114(Fig.67)

Ｆ８区で検出した。南北4.6m、東西５ｍほどの長方形を呈する大形の住居である。竈は４回移設され、北側に３ヶ所、東側に２ヶ所の計５ヶ所の煙道が取り付く。最後に使われていたのは北側の煙道Ｂであると考えられる。煙道Ｂの前面には粘土、焼土が散布しているが、その他の煙道は地山ブロックを多量に含む土で埋め戻されている。煙道はいずれも壁に直接取り付き、張出し部は持たない。煙道Ｂは幅20cm、長1.6mを測り、トンネル状を呈する。端部は径30cmほどのピットに連結する。竈部分は住居床より一段深く掘り凹ませる。煙道Ａは幅40cm、長1.4mを測る。最も規模の大きい煙道である。煙道Ａの前面には若干位置がずれるが、貼床下から楕円形の土壙が検出されている。この土壙が竈痕跡の可能性があり、竈Ａ廃絶後、すべての痕跡を補修した形跡が窺われる。煙道Ａの東側に溝状をなす遺構があり、これも煙道かとも考えたが、住居壁の直前で立上り、住居との間に障壁をなす形になるので、煙道の可能性は低いと考える。煙道Ｃは幅30cm、長70cmを測る。煙道Ｄは幅30cm、奥行１ｍを測るトンネル状で、端部は径50cmのピットに連結する。煙道Ｅは幅40cm、長1.2mを測る。住居掘方には壁に沿って幅40cm～80cmほどの幅広の溝が巡り、この溝を埋め立てる形で、貼床が施されている。

出土土器(Fig.69)

439は須恵器蓋。端部は比較的広い坦面をなす。高いつまみを持つ。天井部には回転ヘラ削りを施す。434は須恵器皿。外底部は端部のみ回転ナデを施す。433は土師器の高台付き皿。口径21cmを測る。438は土師器皿である。内外面にミガキを施し、焼成も極めて堅緻な精製品である。土師器坏435の内面にもミガキが見られる。外底部は回転ヘラ削り。437は内黒の黒色土器の椀である。内面から口縁端部外面にかけてミガキが見られる。

住居跡115(Fig.68)

Ｄ７区で検出した。南北3.5m、東西3.8mのやや横長の長方形に、幅３ｍ、奥行80cmの張出しが南側に取り付いている形状を呈する。このような形状は調査区内には例が無く、２基の住居の切り合いの可能性もあるが、住居の遺存が良くなく、土層や貼床面などで確認することができなかった。ここでは張出しを持つ住居としておく。竈は北側に敷設される。竈には張出しが無く、北側壁中央に煙道が直接取り付く。煙道は幅30cm、長80cmほどを測る。竈は破砕され、煙道前面に粘土などが散布する。壁溝、主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.69)

図示した土器はいずれも土師器である。441は皿であろう。底部と体部の境は不明瞭。440も皿であ

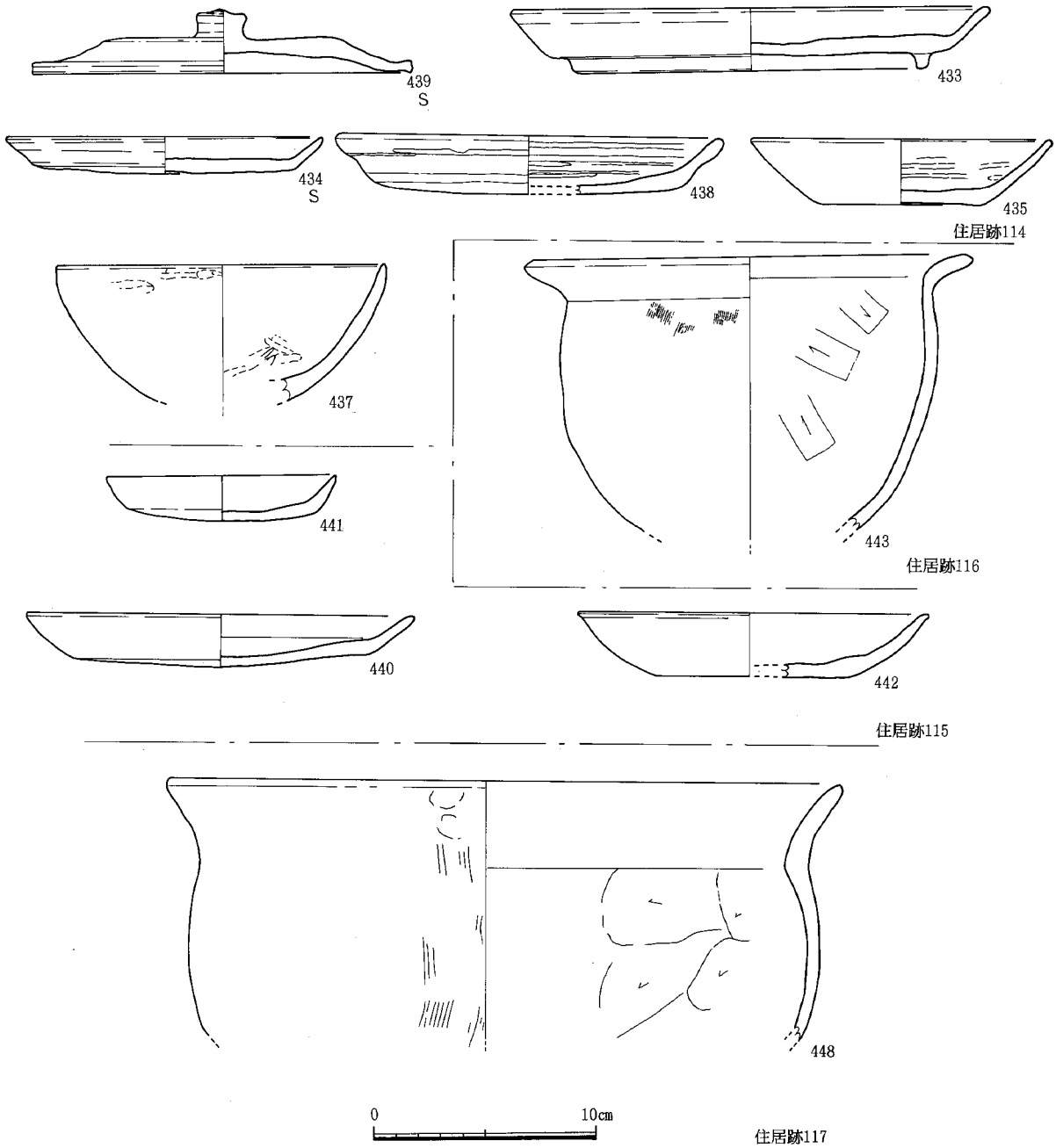


Fig. 69　古代住居跡出土土器実測図25（1：3）

る。底部は回転ヘラ削り。442は坏である。底部と体部の境は明瞭で、体部が開く。

住居跡116(Fig.68)

Ｃ３区で検出した。中央部を攪乱で大きく削平される。南北3.6m、東西４ｍほどを測る。この復元では、北側壁の中央やや東よりに竈があると考えられる。竈には張出しを持たず、幅20cm、長1.1ｍの煙道が取り付く。煙道端部は径20cmほどのピットに連結し、ピットは煙道床より一段深く掘り込まれている。壁溝は南壁と西壁に認められる。住居掘方には壁に沿って幅70cm程の幅広の溝を巡らしており、これを埋め立てる形で貼床を施している。主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.69)

443は土師器小形甕である。口縁部は屈曲して開く。胴部は球形である。

住居跡117(Fig.65)

Ｈ６区で検出した。攪乱によって大きく削平されるが１辺３ｍほどの方形に復元できる。竈は東側壁の南東コーナーよりにある。幅80cm、奥行50cmほどの張出しを設け、奥壁中央から幅20cm、長70cmほどの煙道が伸びている。竈は破砕され、張出し部に粘土が散布する。張出し部脇にあたる南東コーナーには浅い楕円形土壙が掘り込まれている。竈に対面する西壁のみに壁溝が検出された。主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.69)

448は土師器甕である。口縁部は外反しながら開く。外面はハケメ、内面にケズリを施す。

住居跡801(Fig.70)

以下は、８次、10次調査で検出された住居について述べていく。住居跡801はＢ９区で検出した。調査区内では最も南西端に位置する。南側が調査区外に出る。東西３ｍ、南北1.4ｍ以上を測る。竈は北側にある。検出時には、幅80cm、奥行80cmの張出し部とも煙道ともとれる平面形三角形の張出し状を呈していたが、本来は奥行40cmほどの張出し部に煙道が付く形ではなかったかと考えられる。竈は破砕され、張出し部前面に粘土などが散布するが、袖の基底部の一部が残っている。竈脇にあたる北東コーナーに土壙が掘り込まれている。壁溝は竈西側の北壁にのみ検出された。

出土土器(Fig.72)

１、２は須恵器坏である。１は極めて焼成が悪い。２は口径18.8cmを測る大形で、高台も大振りで踏張る。底部は回転ヘラ削りのままである。

住居跡806(Fig.70)

Ｅ９区で検出した。北側が調査区外に出る。東西３ｍ、南北2.3ｍ以上を測る。竈は東側壁に敷設される。幅60cm、奥行30cmほどの張出しを作り、更に外側に幅30cm、長30cmほどの煙道が伸びる。煙道は緩やかな斜面をなして立ち上がっていくようである。竈は破壊され、煙道、張出し部及びその前面に粘土などが広く散布している。南、西壁に壁溝が見られ、本来は竈側の東壁を除く三方に巡っていたものであろうか。20cm近い貼床があり、住居掘方床面は比較的平坦で、溝状の掘り込みは見られない。廃絶後はほとんど人為的に埋め立てられている。

出土土器(Fig.72)

蓋５は須恵器である。端部の突出は小さく、つまみも低平である。天井部は回転ヘラ削りを施す。

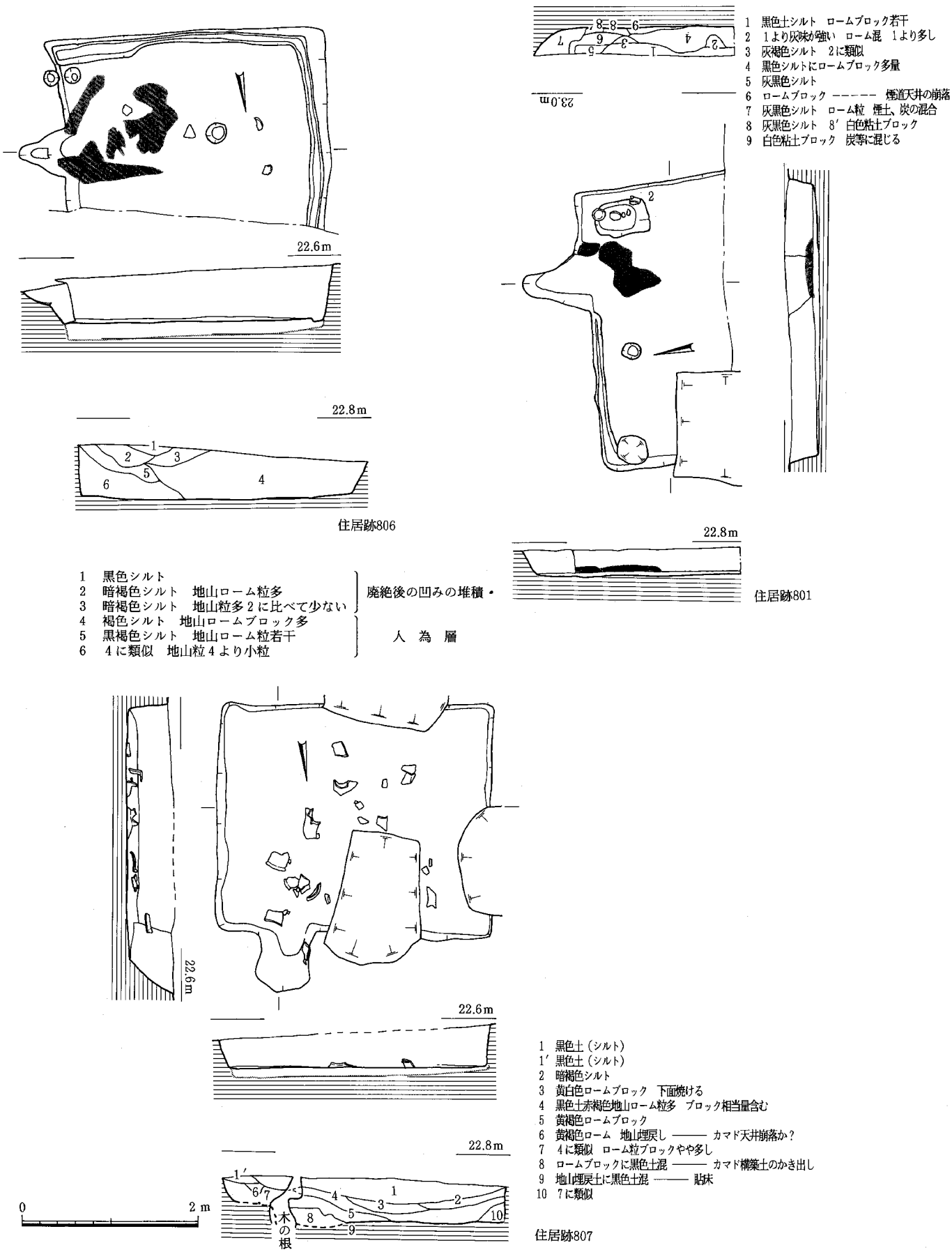


Fig. 70 古代住居跡実測図20（1：60）

6は土師器の皿である。底部はヘラ切りの後、周辺部に回転ヘラ削りを施す。

住居跡807(Fig.70)

Ｆ９区で検出した。南北2.6m、東西3.1mほどのやや横長の長方形である。北側壁の北東コーナーよりに竈を持つ。竈は幅60cm、奥行70cmの張出し部を設けるが、煙道は検出されない。やや長めの張出し部が、煙道を兼ねているものか。竈は破砕され、張出し部とその前面に粘土の散布が見られるのみである。床面から比較的多くの土器が出土している。10cm近い貼床があるが、住居掘方床面は比較的平坦で、溝状の掘り込みは見られない。壁溝、主柱穴は検出されなかった。

出土土器(Fig.74)

図示したものは須恵器である。7は高坏である。坏部は歪みが大きい。口縁部は直立し、坏部は浅い。外底部は回転ヘラ削りを施す。脚部は低く太い。8は長頸壺である。胴部は稜を持って屈曲する。大振りの高台が付き、高台底に板目が見られる。胴部は回転ヘラ削りの後、回転ナデをかける。9は高台付きの坏。口径18cmを測る大形品である。外底部はヘラ切りのままである。10は高台のない坏である。底部はヘラ切りのままである。蓋11は天井部にヘラ削りを施さない。12は把手である。半環状を呈する。把手も大形で、把手が付く胴部も厚い。かなりの大形品と考えられる。外面に格子目叩き、内面に同心円文の当て具痕が見られる。26は須恵器甕である。外面は擬格子叩きの上から粗くカキメを施す。

住居跡810(Fig.71)

Ｅ９区で検出した。溝808に切られ、住居跡811を切る。１辺３ｍほどの方形を呈する。竈痕跡は検出されなかったが、北東コーナーが現代井戸による攪乱の東西で壁がずれて検出されており、この部分が張出し部になる可能性がある。壁溝は南半分で確認したが、北半部では住居811と切り合う部分で確実に床面を抑えきれていないので、更に北半部へ伸びる可能性はある。貼床はほとんど住居811を埋めた部分にのみ施される。

出土土器(Fig.72)

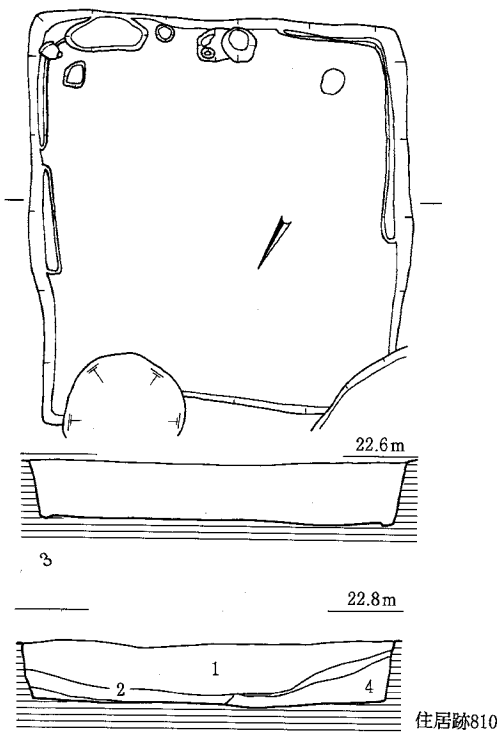
13は小形の甕である。口縁は短く屈曲する。胴部は球形に近い。14は坏であろうか。外反しながら開く口縁を持つ。外底部はナデ、それ以外は回転ナデを施す。土製品1001は円板形を呈する紡錘車である。

住居跡811(Fig.71)

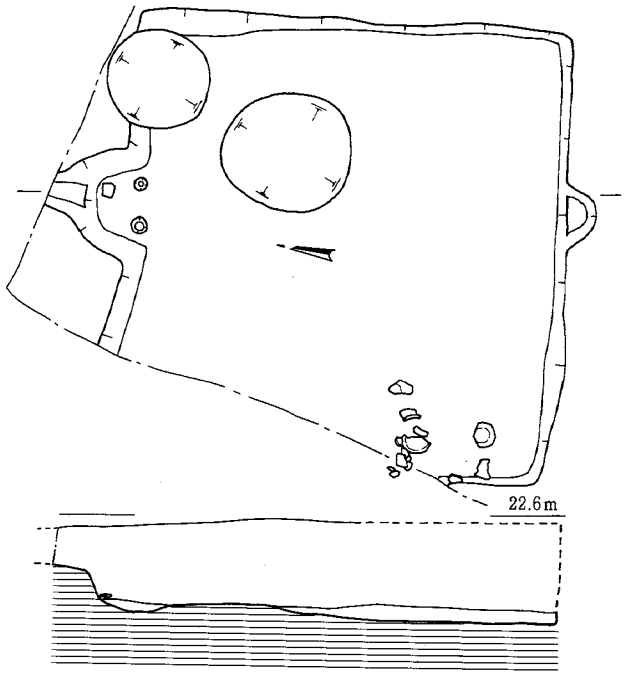
Ｅ９区で検出した。溝808、住居跡810に切られる。西側が調査区外に出る。東西3.6m、南北3.5mのわずかに横長の方形を呈する。１辺2.5mほどの方形を呈する。張出し部を北側と、西側に持つ。北側は壁の中央やや東よりにあり、幅80cm、奥行50cmほどを測る。その奥壁中央から、幅30cmの煙道が伸びる。煙道端部は調査区外へ出る。この張出し部は地山埋め戻し土などで埋め戻されてはいなかったものの、周囲に粘土などの散布が無く、掘方のみを検出したものである。この他に西側壁の、南西コーナーから60cmの個所から壁が更に西方向へ折れ、調査区外へ出ている。この部分も張出しになると考えられる。この前面には土器が比較的まとまって出土しており、また粘土も少量散布している。こちら側に最終段階の竈があった可能性が高い。

出土土器(Fig.72)

15は土師器の皿である。底部から口縁部まで厚さがあまり変わらない。外底部は回転ヘラ削りを施

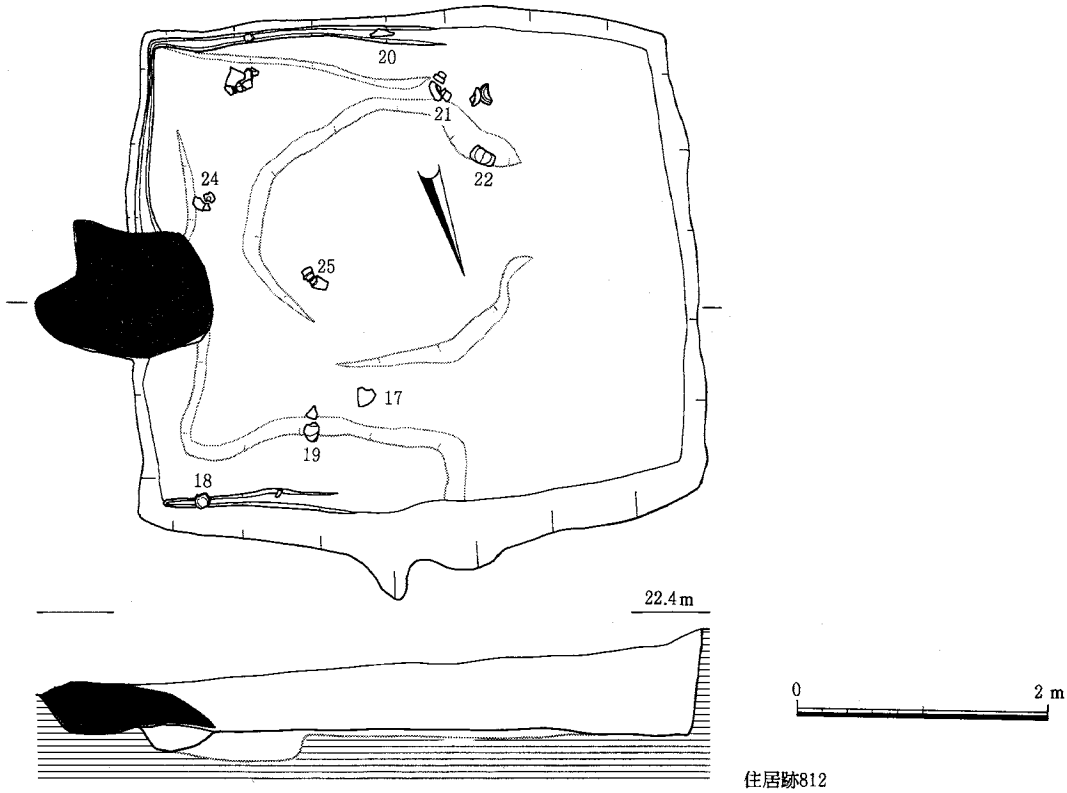


住居跡810



住居跡811

1　暗褐色シルト　地山ブロックやや多く含む　しまりよい
2　黒褐色シルト　地山ブロックやや含む　1より少ない　しまりよい
3　黒褐色シルト　2に類似するが地山ブロックは含まない　しまりやや悪い
4　暗褐色シルト　1に類似　しまりやや長い



住居跡812

Fig. 71　古代住居跡実測図21（1：60）

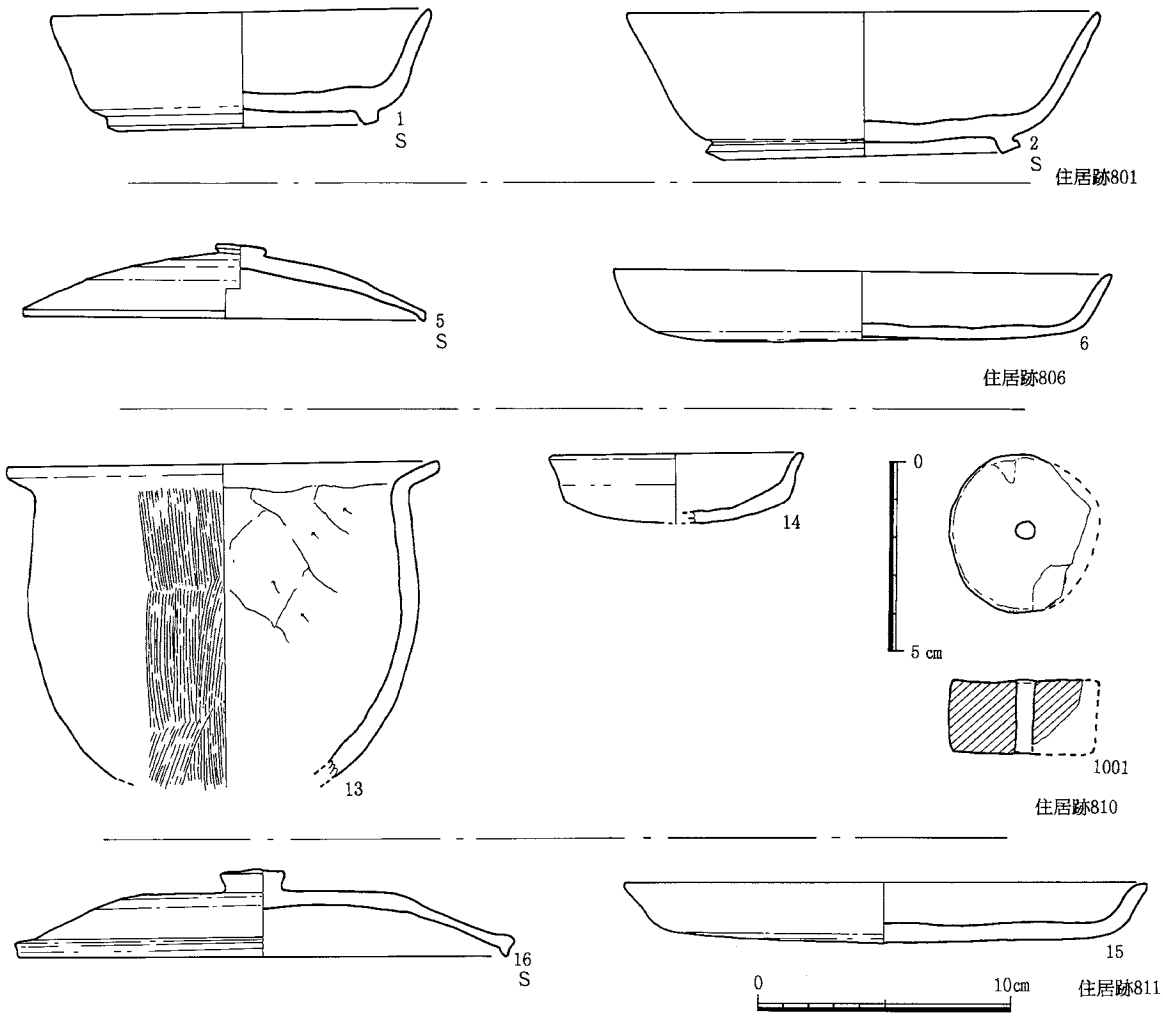


Fig. 72　古代住居跡出土土器実測図26（1：3）（1：2）

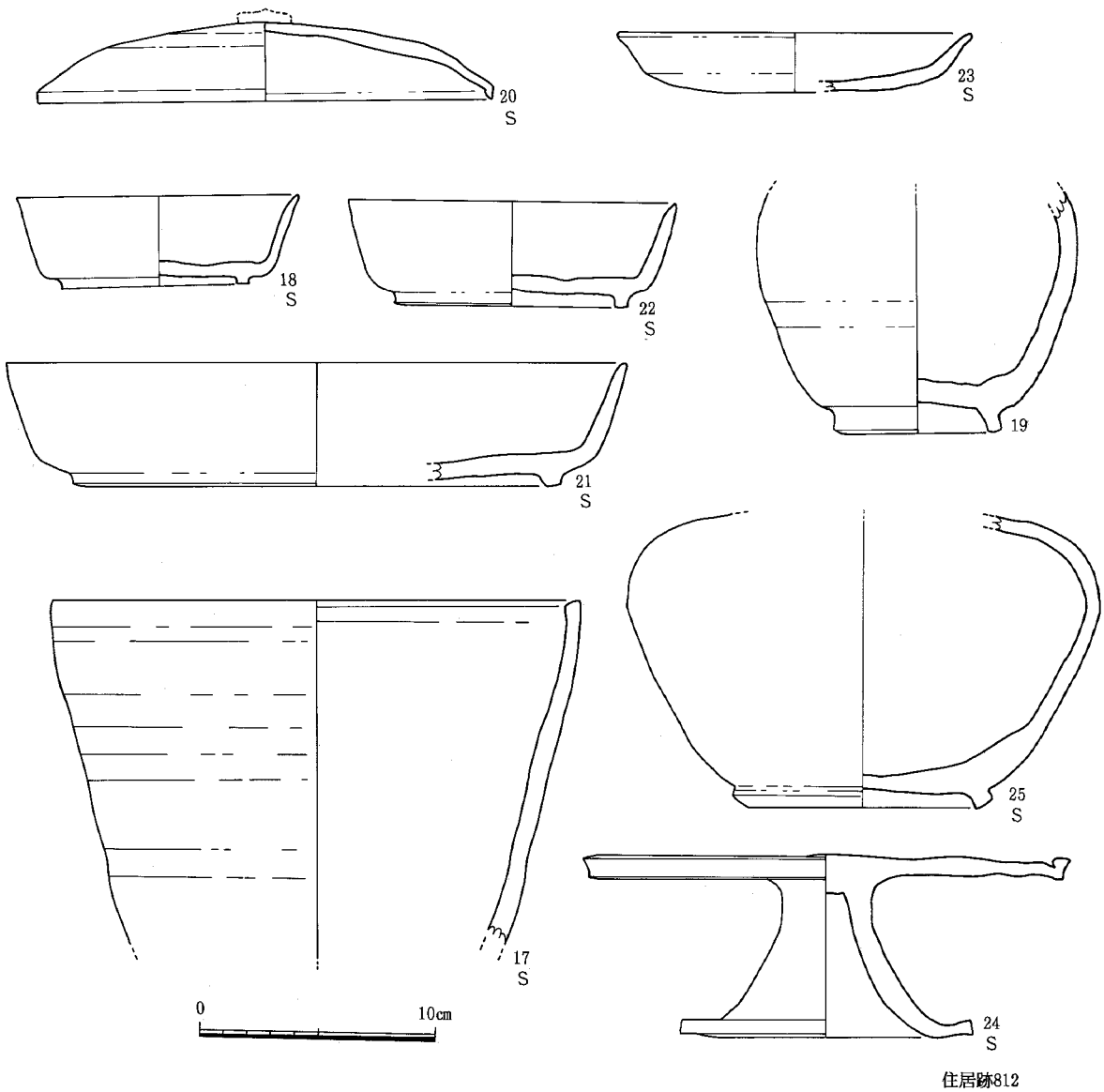


Fig. 73　古代住居跡出土土器実測図27（1 ： 3）

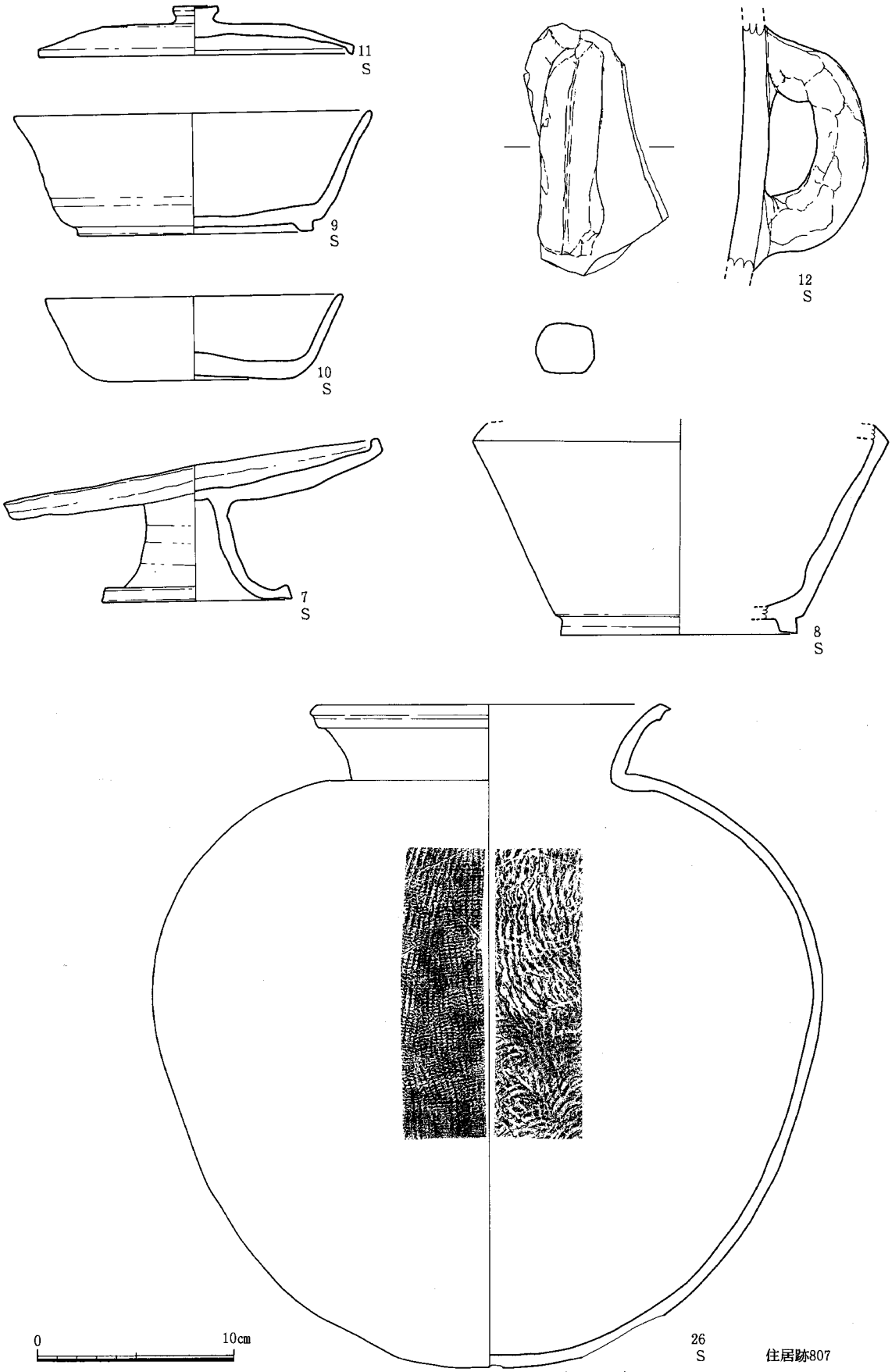


Fig. 74　古代住居跡出土土器実測図28（1：3）

す。16は須恵器蓋である。径19.2cmを測る大形品である。端部はわずかに上方にも拡張して坦面をなす。天井部には回転ヘラ削りを施す。

住居跡812(Fig.71)

Ｆ10区で検出した。東西5.4m、南北５ｍほどの縦長の長方形を呈する。東側壁に竈を持つ。幅100cm、奥行80cmの張出し部を設けている。煙道は検出されなかったが、張出し部の奥壁は斜めに立上り、煙出しを兼ねているものかもしれない。竈は破砕され、張出し部とその前面に粘土などが散布する。主柱穴はあ検出されない。住居掘方は、はっきりした溝状は示さないが中央部より周辺部を深く掘り凹めている。この凹凸を埋め立てる形で貼床が施される。

出土土器(Fig.73)

17は須恵器鉢である。体部が直線的に開き、口縁端部は坦面を持つ。18、21、22は須恵器坏である。21は口径26cmを測る大形品である。20は須恵器蓋で、つまみを欠く。天井部には回転ヘラ削りを施す。23は須恵器皿で、底部はヘラ切りのままである。19は壺である。長胴で、比較的高い高台をもつ。外面は回転ヘラ削りをナデ消している。24は高坏である。復元的に図化したが、実際は坏部の歪みが大きい。浅い円盤上の坏部である。25は短頸壺であろう。肩が張る胴部で、踏張る高台が付く。胴部下端から外底部にかけて回転ヘラ削りを施す。この他図示していないが土師器甕、甑等も相当量出土している。

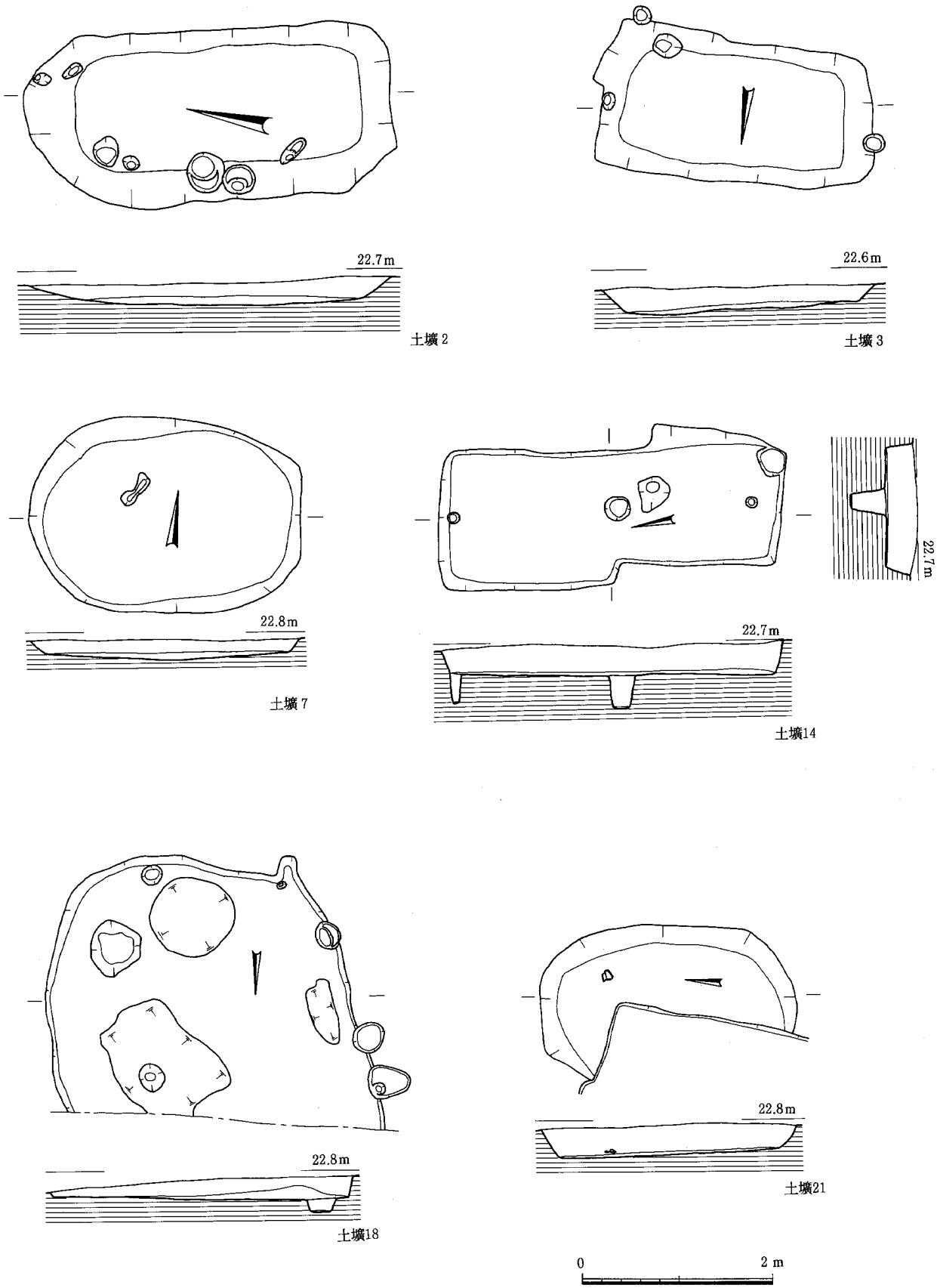


Fig. 75　古代土壙実測図（1：60）

（2）土壙

土壙は前述のように、調査時において一定の規模と深さを持ち、人為的になんらかの目的を持って掘り込まれたと判断したものに遺構番号を付した。その内古代に属するもの50基に付いて報告する。

土壙 2（Fig.75）

Ｂ２区で検出した。隅丸の長方形を呈する。南北3.8m、東西1.8mを測る。浅い皿状を呈する。図化に耐える遺物は出土していない。

土壙 3（Fig.75）

Ｃ２区で検出した。土壙２と同様平面形長方形の浅い皿状を呈する。南北1.4m、東西2.8mを測る。図化に耐える遺物は出土していない。

土壙 7（Fig.75）

Ｅ２区で検出した。東西に長い楕円形を呈し、長径2.8m、短径２mを測る。浅い皿状を呈する。図化に耐える遺物は出土していない。

土壙14（Fig.75）

Ｅ３区で検出した。南北に長い長方形を呈するが、東、西壁が段状にずれている。２基の土壙の切り合いの可能性もあるが、調査時には確認できなかった。南北3.6m、東西1.4mを測る。壁はかなり直に立つ。床面には、壁際と中央にピットがある。前述した弥生時代土壙に構造が類似しているが、覆土中の遺物を見ると、須恵器、土師器の比率が高く、一応古代の土壙としておく。尚図示に耐え得る遺物はなかった。

土壙18（Fig.75）

Ｆ２区で検出した。浅く大きい土壙である。弥生時代の円形住居かとも考えたが、覆土中には須恵器、土師器が多量にあり、古代の土壙と考えられる。北側が調査区外に出るが、楕円形に近い平面形であろう。浅い皿状を呈する。

出土土器（Fig.76）

101は土師器の皿である。底部から体部下半にかけて回転ヘラ削りを施す。

土壙21（Fig.75）

Ｄ３区で検出した。住居跡20に切られる。東西1.7m、南北2.6mほどの楕円形に復元される。浅い皿状を呈する。図化に耐える遺物は出土していない。

土壙24（Fig.77）

Ｅ４区で検出した。南北3.4m、東西1.8mの長楕円形の土壙の中を、径1.3mの円形に更に一段掘り凹めている。一段目の壁は浅い皿状であるが、円形の土壙の壁はかなり直に近い。

出土土器（Fig.76）

図示したものは須恵器。119は高坏坏部であろう。蓋121は天井部に回転ヘラ削りを施す。

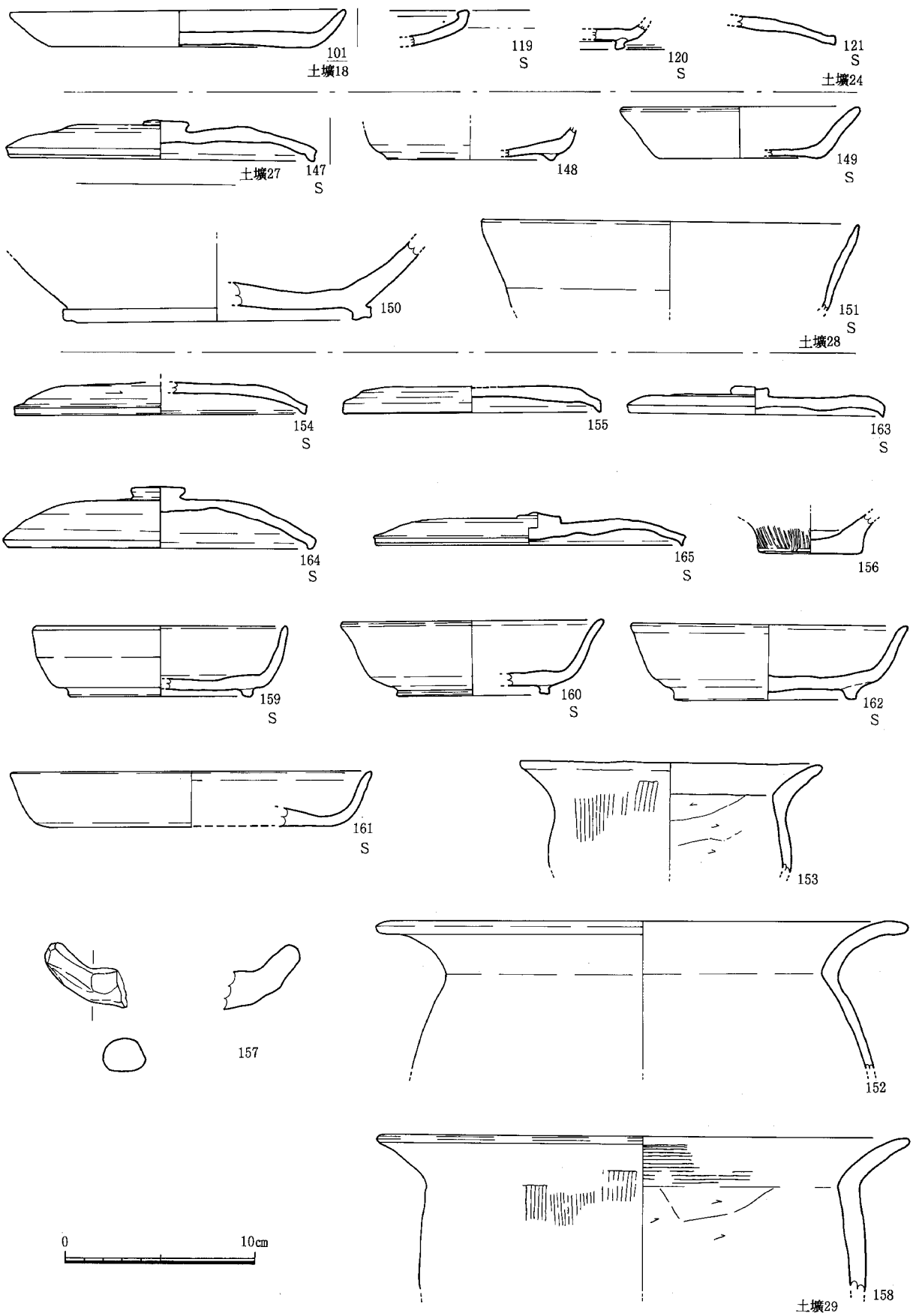


Fig. 76　古代土壙出土土器実測図1（1：3）

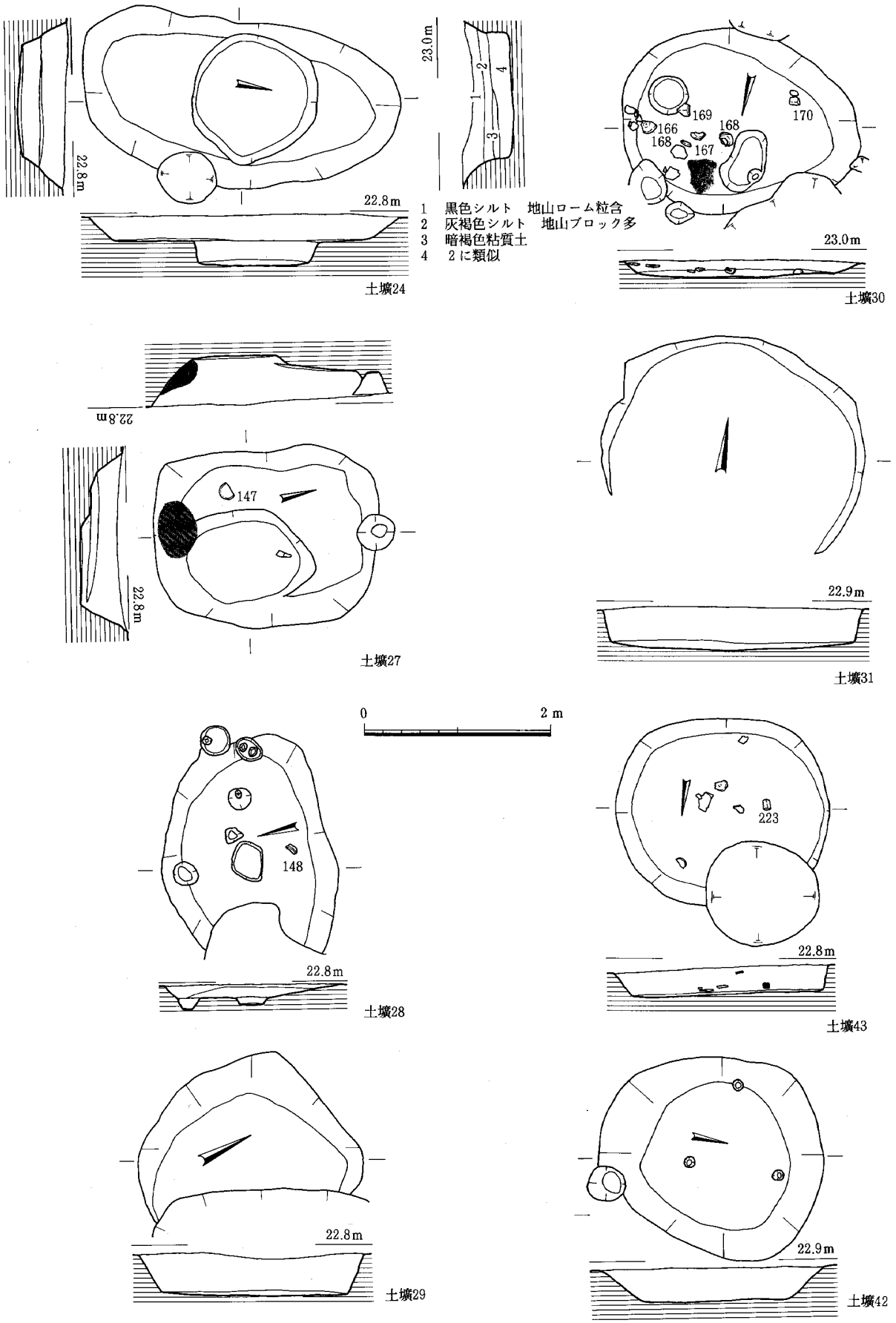


Fig. 77　古代土壙実測図2（1：60）

土壙27(Fig.77)

Ｄ４区で検出した。楕円形を呈する。南北2.4ｍ、東西1.9ｍを測る。壁は緩やかに落ちるが、深さは検出面から50㎝ほどと比較的深い。土器の大破片や、白色粘土、焼土などが見られ、竈廃棄後の構築材などを捨てた廃棄土壙と考えられる。

出土土器(Fig.76)

147は須恵器蓋。天井部にはヘラ削りを施さない。つまみは平板である。

土壙28(Fig.77)

Ｅ３区で検出した。土壙79と切り合う。土壙79は弥生時代貯蔵穴なので、当然土壙28が切るのであるが、土壙79と切り合う部分では、土壙28の輪郭を明らかにし得なかった。これは次の土壙29でも同じである。土壙28は楕円形を呈する。南北1.9ｍ、東西は2.5ｍほどであろう。浅い皿状を呈する。

出土土器(Fig.76)

148は土師器坏である。149は須恵器坏。高台を持たない。底部はヘラ切りのままで、体部は回転ナデを施す。150は壺底部であろう。大振りで踏張り気味の高台が付く。151はやや大形の須恵器坏であろう。内外面回転ナデ。

土壙29(Fig.77)

Ｅ３区で検出した。土壙28と同じく西側で土壙79を切るが、切り合う部分の輪郭を明らかにできなかった。楕円形を呈し、南北2.4ｍ、東西は２ｍほどであろうか。土壙28よりはやや深く、検出面から40㎝ほどを測る。

出土土器(Fig.76)

蓋154、163、165は須恵器。155は土師器。164は焼成が悪いが、灰黒色に瓦質化している部分があり、窯で焼かれたものと考えられる。いずれも天井部に回転ヘラ削りを施す。坏159、160、162も須恵器である。高台は底部端からやや内側に付く。156は土壙79からの混入であろう。161は須恵器皿。底部は回転ヘラ削り。底部と体部の境まで回転ヘラ削りし、面取りしたような形態になる。153は小形の土師器甕。152、158は土師器甕で、152は口縁が強く外反し、胴が張る。158は直線的に開き、胴も張らない。157は円棒を屈曲させたような把手である。

土壙30(Fig.77)

Ｅ７区で検出した。楕円形を呈する。南北２ｍ、東西2.5ｍを測る。浅い皿状を呈する。土器片や粘土が出土し、廃棄土壙と考えられる。

出土土器(Fig.79)

坏167、168、173は須恵器である。いずれも底部はヘラ切りのままである。蓋166、171、172も須恵器。いずれも天井部に回転ヘラ削りを施す。172は短頸壺の蓋である。端部を面取りして坦面をなす。170は把手付の甕。口縁は短く屈曲する。把手は円棒状で、水平に伸びる。169は土師器甕。

土壙31(Fig.77)

Ｅ７区で検出した。住居跡32を切る。南側を攪乱により削平されるが、ほぼ円形と考えられる。径2.7ｍを測る。壁は比較的直に近く、検出面からの深さは40㎝ほどである。

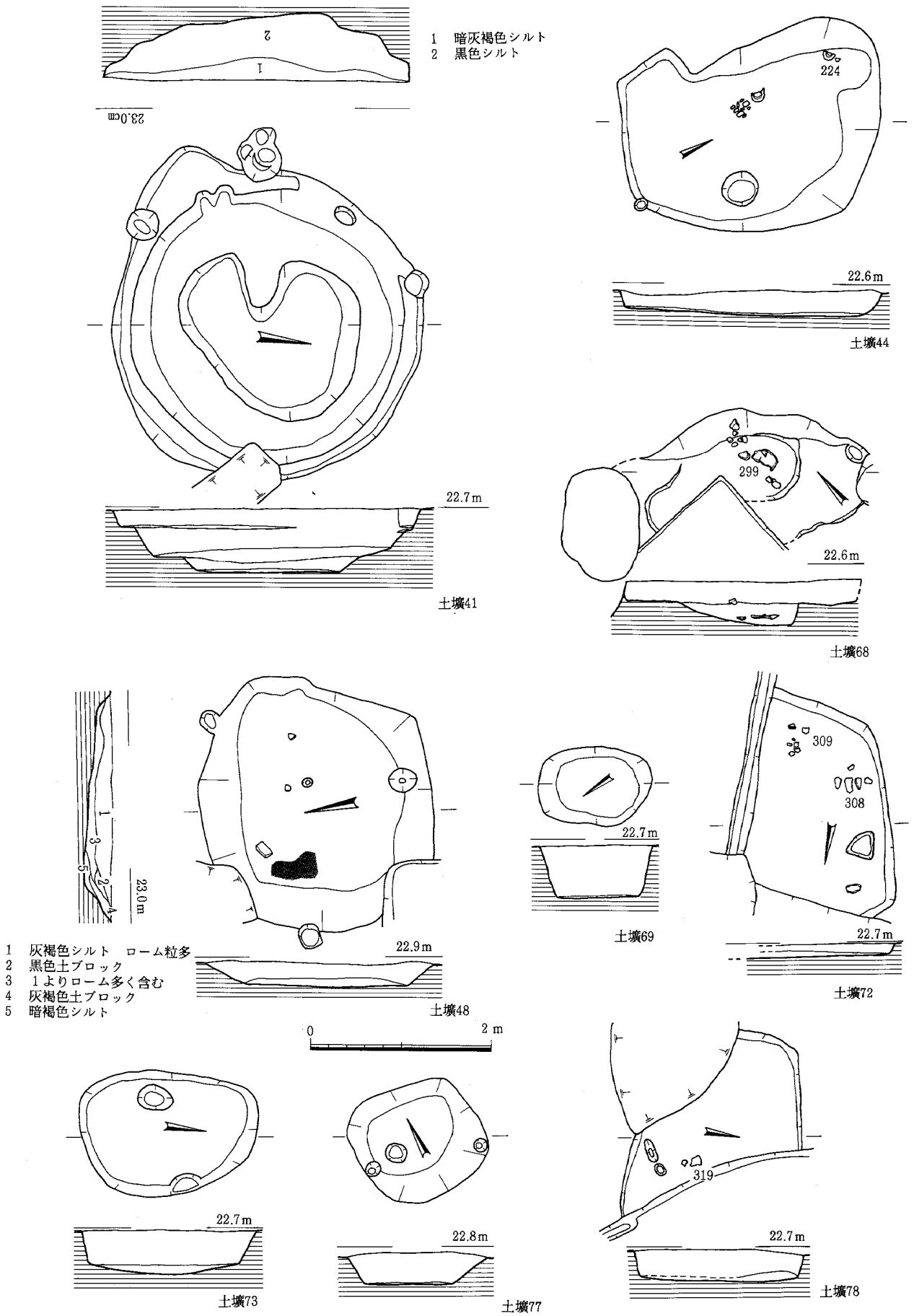


Fig. 78 古代土壙実測図3（1：60）

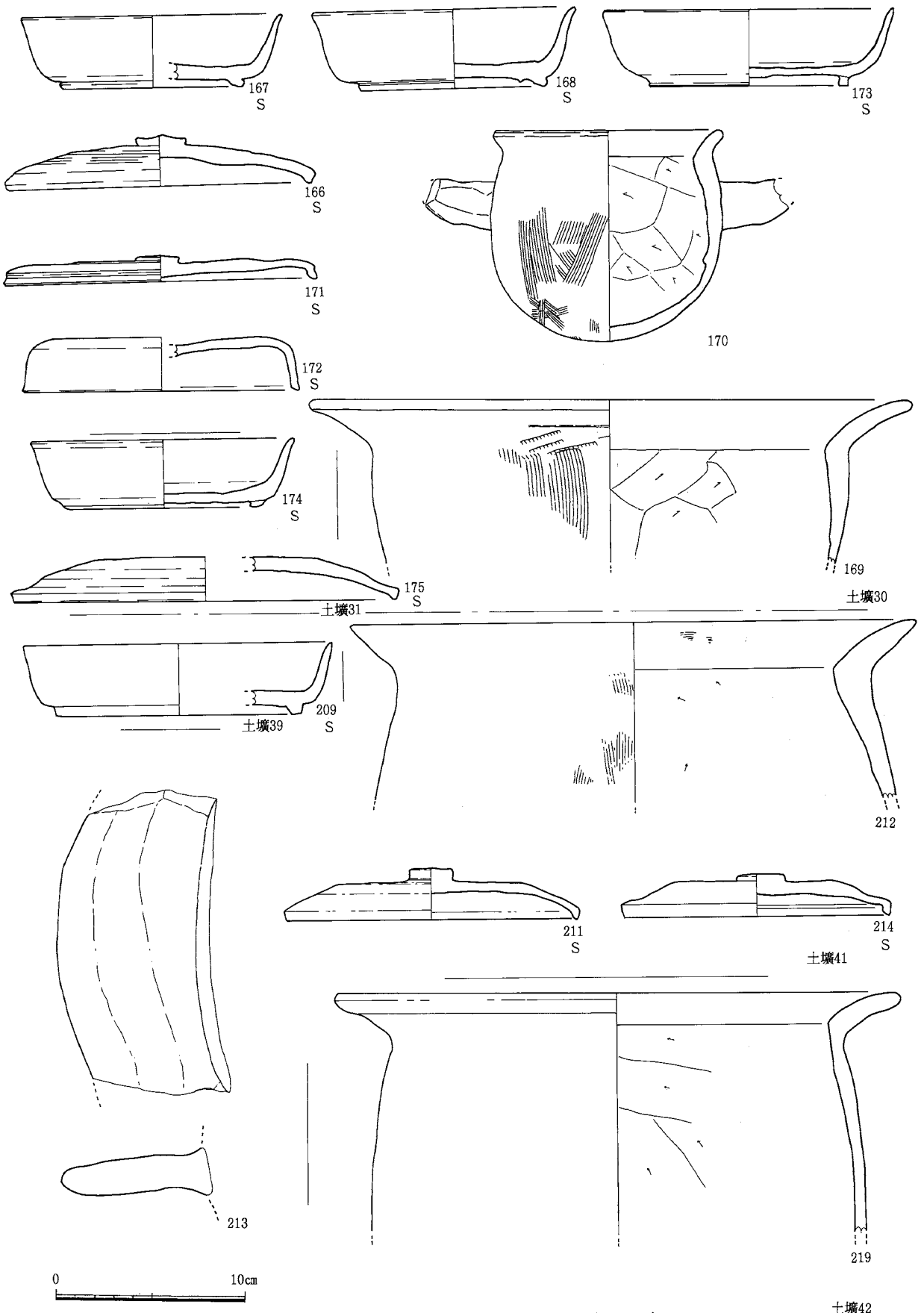


Fig. 79　古代土壙出土土器実測図２（１：３）

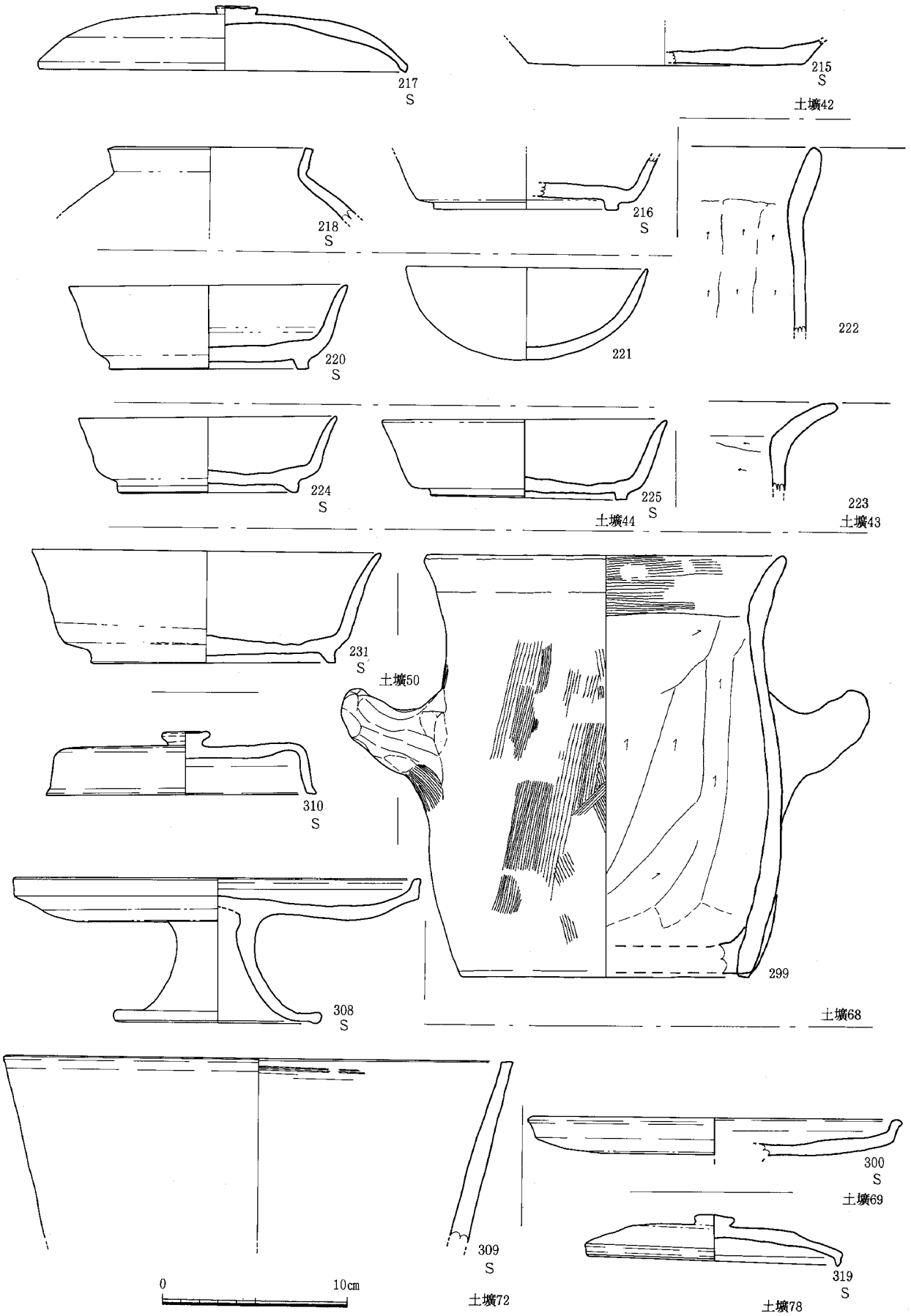


Fig. 80　古代土壙出土土器実測図3（1：3）

出土土器(Fig.79)

坏174、蓋175は須恵器である。174の高台は底部端につき、底部はヘラ切りのままである。175の天井には回転ヘラ削りを施す。

土壙39(Fig.16)

Ｇ６区で検出した。これも弥生時代貯蔵穴である土壙38と切り合い、土壙39が切るのは明らかであるが、土壙39が浅いため、切り合う部分では土壙39の輪郭を明らかにできていない。南北1.8ｍ、東西2.5ｍほどの楕円形を呈すると考えられる。

出土土器(Fig.79)

209は須恵器坏である。高台は底部端で、体部は直線的に立つ。

土壙41(Fig.78)

Ｇ４区で検出した円形の土壙で、径４ｍを測る。調査区内ではかなり大形の部類に入る。壁は段をなしながら緩やかに落ちていき、検出面からの深さは70cmほどを測る。

出土土器(Fig.79)

212は土師器甕である。口縁は厚く、内面はケズリを施す。211、214は須恵器蓋。天井には回転ヘラ削りを施す。213は土師器竈の炊口の鍔部である。

土壙42(Fig.77)

Ｆ６区で検出した。円形を呈し、径2.2ｍ程を測る。壁は緩やかに落ちていき、検出面からの深さは35cmほどである。

出土土器(Fig.79、80)

219は土師器甕である。口縁は強く屈曲して開く。215～218は須恵器である。蓋217の天井は回転ヘラ削り。215は厚手の底部で、外底部は回転ヘラ削り。218は短頸壺である。口縁は短く直立する。端部は坦面をなす。

土壙43(Fig.77)

Ｇ６区で検出した。南北２ｍ、東西2.3ｍの楕円形を呈する。壁は比較的直に近く、検出面からの深さは30cmほどである。土器の大破片や粘土塊が出土しており、廃棄土壙と考えられる。

出土土器(Fig.80)

221～223は土師器で、221は丸底の碗。222は口縁部がほとんど屈曲しない。甑であろう。223は甕の口縁部片である。220は須恵器坏。高台は底部端につき、底部はヘラ切りのままである。

土壙44(Fig.78)

Ｈ５区で検出した。本来は南北2.9ｍ、東西2.1ｍの楕円形を呈すると考えられる。深さ20cmほどの浅い土壙であるが、壁は比較的直に近い。土器の大破片が出土しており、廃棄土壙であろう。

出土土器(Fig.80)

図示したものはいずれも須恵器坏である。高台はほぼ底部端につき、224は若干内側である。225は底部ヘラ切りのままで、224は粗くナデを施す。

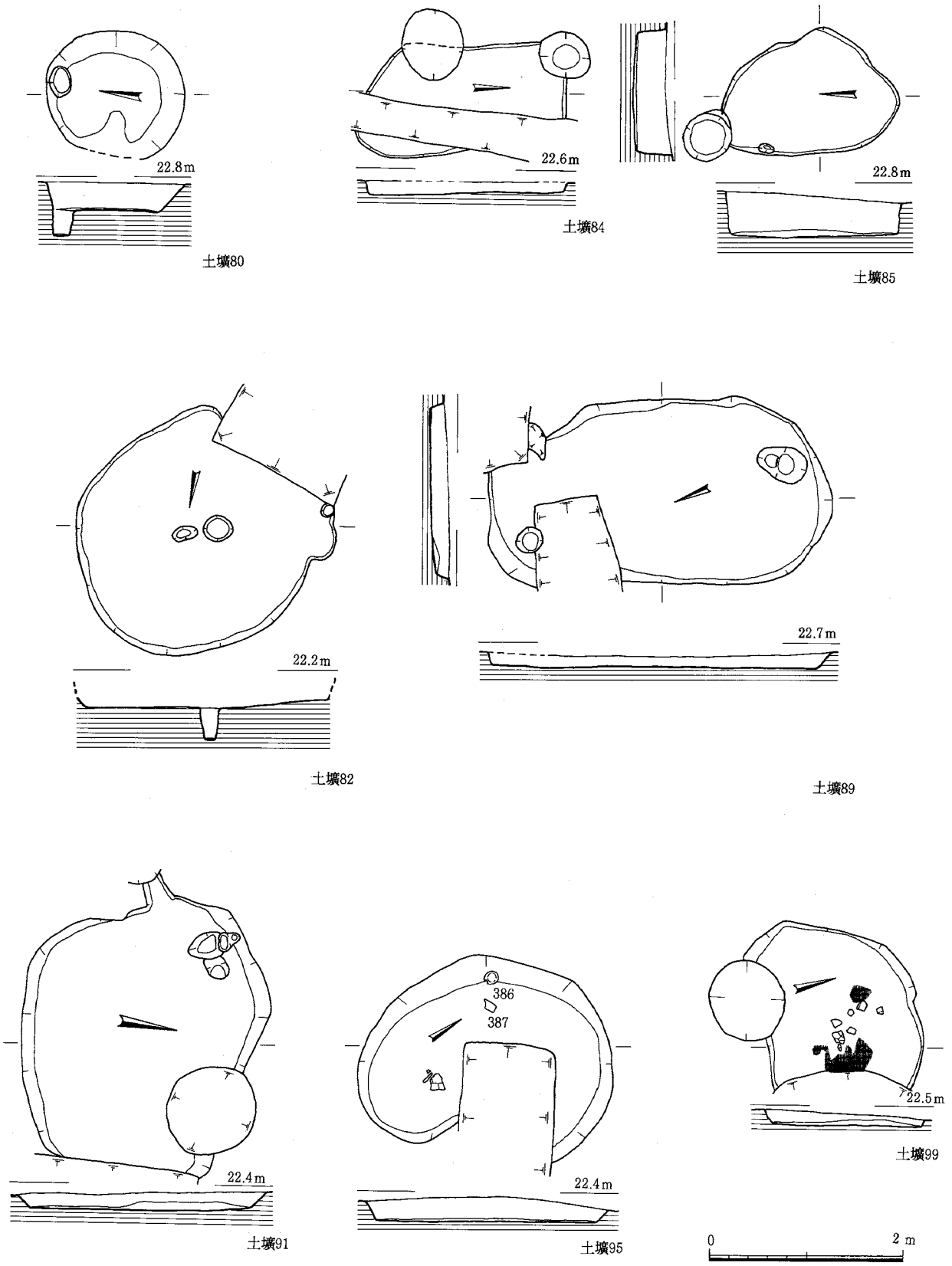


Fig. 81　古代土壙実測図４（１：60）

土壙48(Fig.78)

Ｆ６区で検出した。住居跡53に切られる。径2.6ｍほどの円形を呈する。浅い皿状である。粘土塊や土器片が出土しており、廃棄土壙と考えられる。図化に耐える遺物は出土していない。

土壙68(Fig.78)

Ｆ２区で検出した。住居跡66、土壙69に切られる。長径３ｍ、短径2.6ｍほどの楕円形と考えられる。中央部が一段深くなり、そこから甑が出土している。

出土土器(Fig.80)

299は土師器甑である。口縁はわずかに開く。底部は把手の方向に橋部をかけ、半円形の孔をあける。外面と口縁内面はハケメ、胴部内面はケズリを施す。

土壙69(Fig.78)

Ｆ２区で検出した。住居跡66、土壙68を切る。長径90㎝、短径120㎝の楕円形を呈する。壁は比較的直に立ち、検出面からの深さ50㎝を測る。これまで廃棄土壙としてきた円形、楕円形土壙とは規模、形態が異なり、性格を異にするものであろう。

出土土器(Fig.80)

300は須恵器高坏の坏部である。外底部には回転ヘラ削りを施す。

土壙72(Fig.78)

Ｅ２区で検出した。西側を住居跡70に切られ、北側を攪乱によって削平されるため、規模がわからないが、東西1.8ｍ以上、南北2.2ｍ以上を測る。楕円形もしくは円形を呈すると考えられる。壁は立つが浅い皿状である。土器片が比較的多く出土している。

出土土器(Fig.80)

310は体部が屈曲する須恵器蓋である。口縁端部は面取りし、坦面をなし、わずかに外側へ拡張される。天井部は回転ヘラ削りを施す。308は須恵器高坏。坏部は平板で浅く、口縁部が直に屈曲する。外底部は回転ヘラ削り、内底部は不定方向のナデを施す。脚は短く、脚台は大きく開く。脚端部は上下にわずかに拡張して坦面をなす。脚部は内外とも回転ナデを施す。309は須恵器の鉢であろう。体部は直線的に開く。口縁端は水平に坦面をなす。

土壙73(Fig.78)

Ｅ３区で検出した。住居跡71を切る。楕円形を呈する。南北1.8ｍ、東西1.4ｍを測る。壁は比較的直に立つ。深さは検出面から50㎝ほどと比較的深い。

図化に耐える遺物は出土していない。

土壙77(Fig.78)

Ｇ２区で検出した。径1.4ｍの円形を呈する。壁は緩やかに落ち、検出面からの深さは30㎝程である。

図化に耐える遺物は出土していない。

土壙78(Fig.78)

Ｇ３区で検出した。住居跡63に切られる。南北２ｍ、東西２ｍ以上の楕円形を呈すると考えられる。

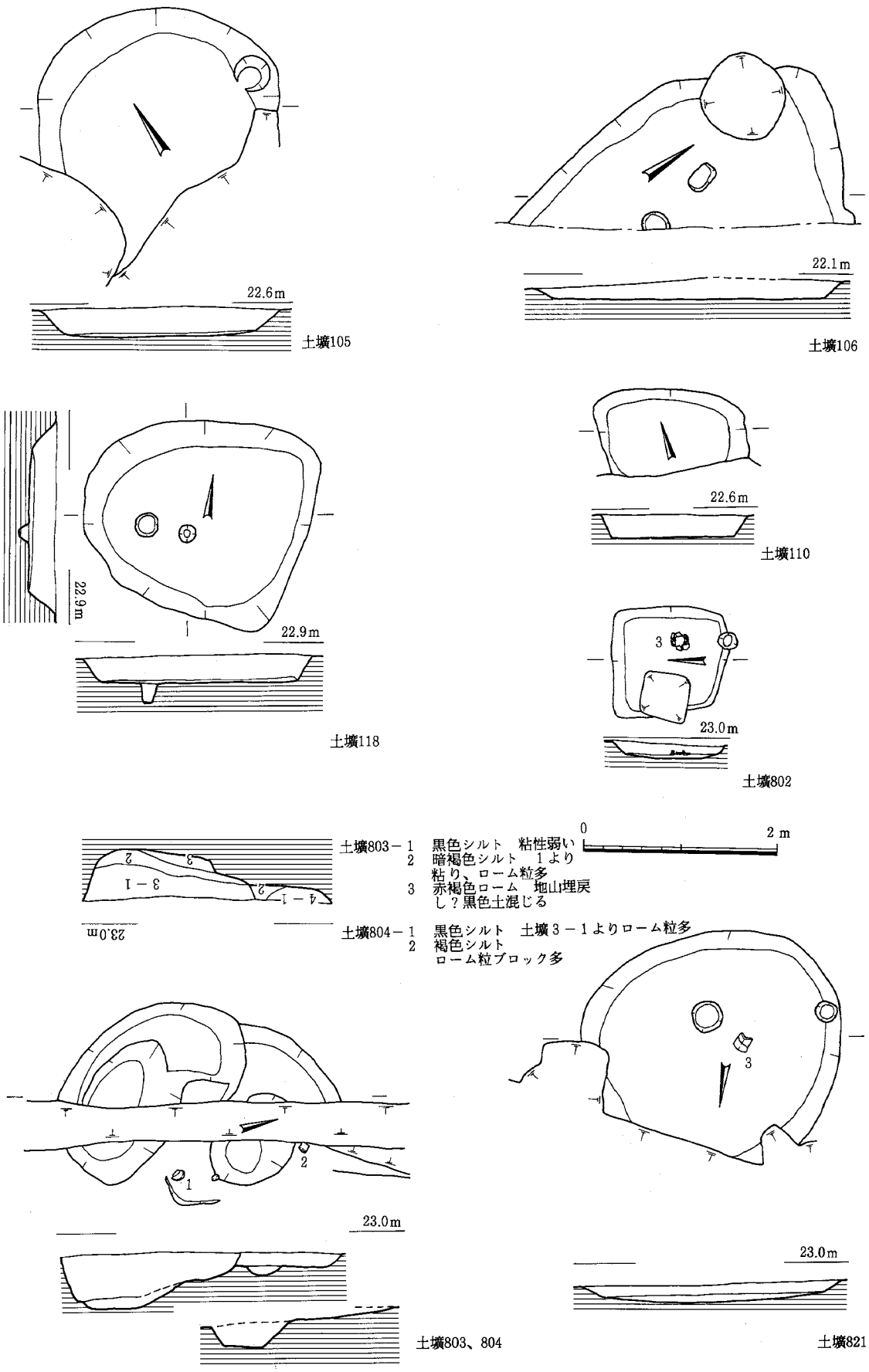
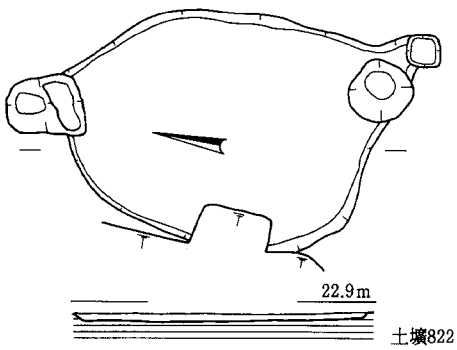
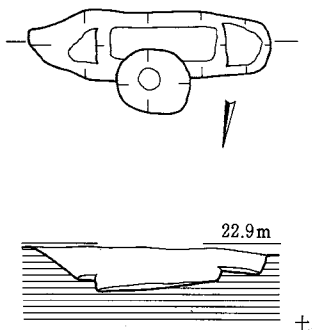


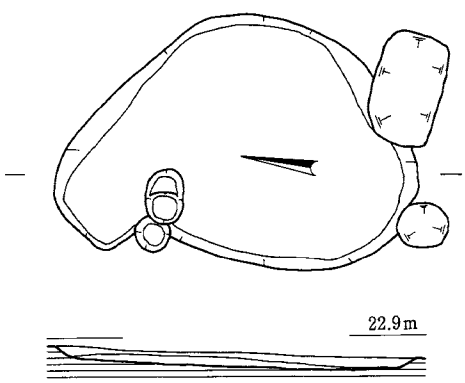
Fig. 82　古代土壙実測図5（1：60）



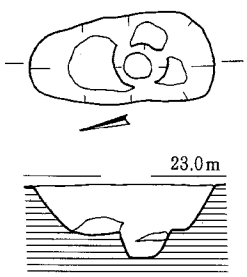
土壙822



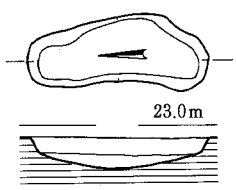
土壙824



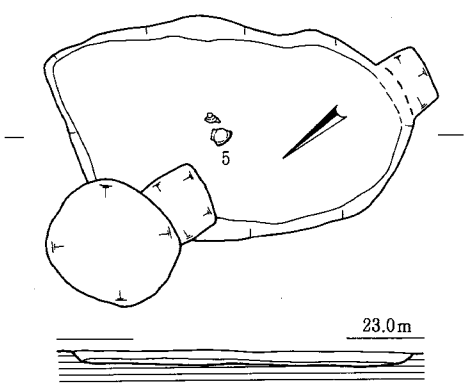
土壙823



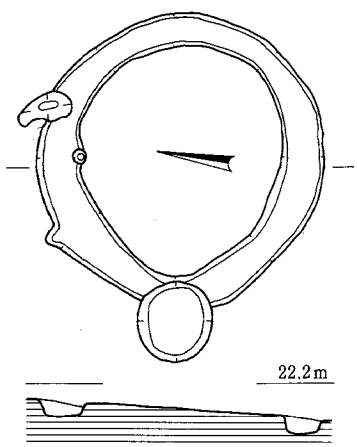
土壙826



土壙827



土壙825



円形周溝112

浅い皿状を呈する。壁は直に近く、検出面からの深さ40cmを測る。

出土土器(Fig.80)

319は須恵器蓋である。天井部には回転ヘラ削りを施す。

土壙80(Fig.81)

Ｆ２区で検出した。弥生時代の土壙12を切る。径1.4ｍほどの円形を呈する。壁はかなり直に近いが、浅い。

図化に耐える遺物は出土していない。

土壙82(Fig.81)

Ｅ３区で検出した。弥生時代円形住居跡81の掘り下げ中に、古代遺物の集中する個所があり、覆土を精査してプランを検出した。床面の深さは住居跡81とほとんど変わらず、壁の立上りなどの確認は困難で、断面形には疑問がある。平面形はほぼ円形で、径2.6ｍほどを測る。住居跡81の覆土部分であるやわらかい土壌のみを掘り下げた廃棄土壙であろう。

出土土器(Fig.84)

325、326は須恵器蓋である。325のみ天井部に回転回転ヘラ削りを施す。324は小形の坏で、須恵器である。高台は薄く華奢である。

土壙84(Fig.81)

Ｆ３区で検出した。これも弥生時代住居跡81を切る古代の土壙であるが、住居跡81の床面にいたるまで検出できなかった。その状態では南北２ｍ、東西１ｍの長楕円形を呈する。床面で検出した後に、住居跡81の混入とは考えにくい状況で古代遺物が出土したため、住居跡81の中央土壙では無く、住居跡81を切る古代遺構と判断した。

出土土器(Fig.84)

327、328は須恵器坏である。両者とも比較的径が大きい。高台は底部端からわずかに内側に付く。体部は大きく開く。327の底部はヘラ切りのままである。

土壙85(Fig.81)

Ｆ２区で検出した。楕円形を呈し、南北1.8ｍ、東西1.2ｍを測る。壁は比較的直に立ち、検出面から40cmほどの深さを測る。

図化に耐える遺物は出土していない。

土壙89(Fig.81)

Ｈ６区で検出した。楕円形を呈し、南北3.5ｍ、東西1.9ｍと比較的規模が大きいが、浅い皿状を呈する。

図化に耐える遺物は出土していない。

土壙91(Fig.81)

Ｈ８区で検出した。東側を攪乱されるが、南北2.4ｍ、東西３ｍほどの楕円形を呈する。浅い皿状を呈し、検出面からの深さは20cmほどである。住居跡90に切られる溝状の部分まで、土壙91に含まれ

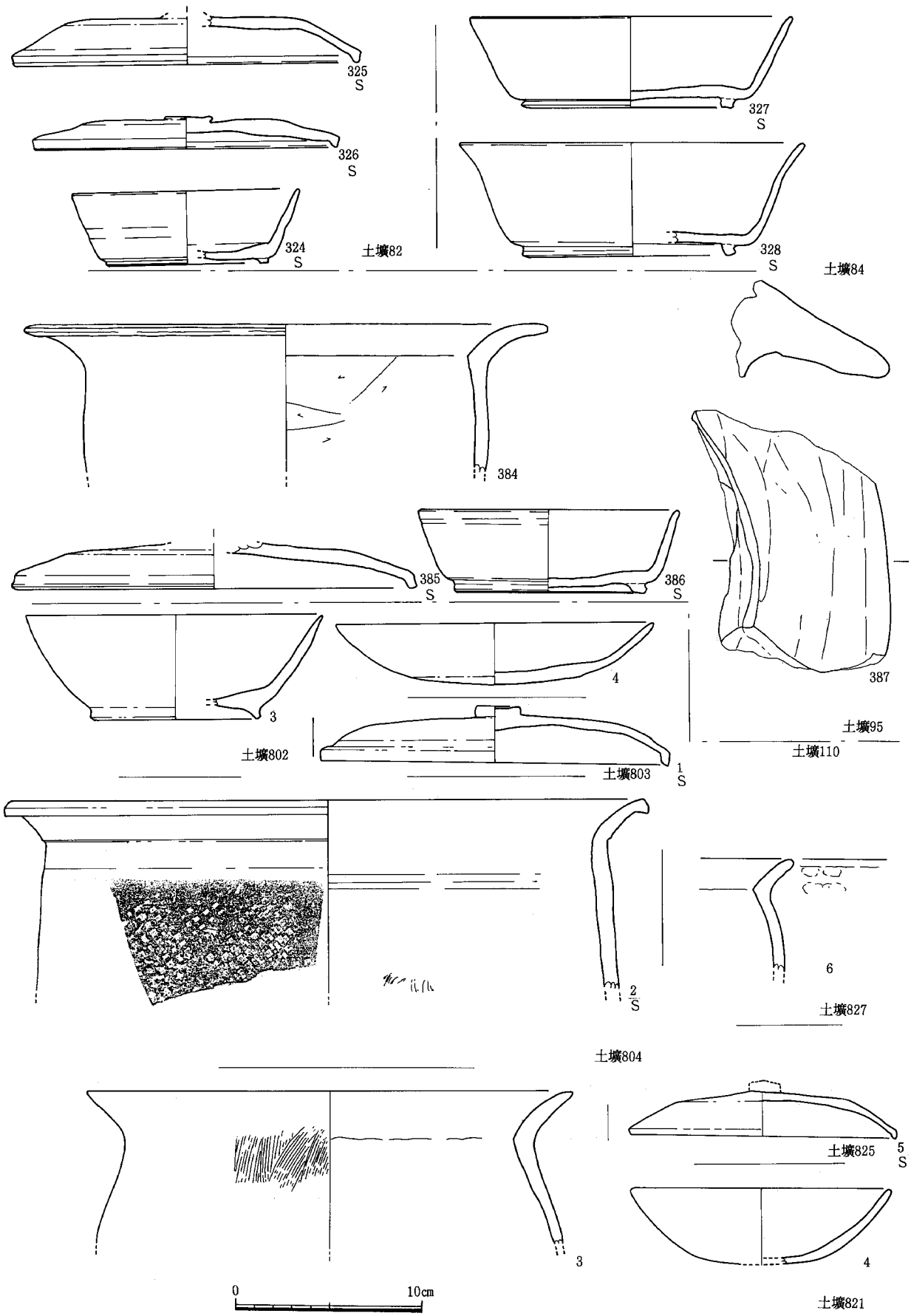


Fig. 84　古代土壙出土土器実測図４（１：３）

る可能性が高い。

図示してはいないが、土師器甕口縁片などが出土している。

土壙95(Fig.81)

Ｉ７区で検出した。住居跡96、101を切る。南東部を攪乱されるが、長径2.6ｍ、短径2.3ｍの楕円形を呈すると考えられる。深さ20㎝ほどの浅い皿状を呈する土壙である。廃棄土壙であろう。

出土土器(Fig.84)

384は土師器甕である。口縁部が大きく外反して開く。胴部はあまり張らない。387は土師器竈である。炊口鍔部の破片である。385、386は須恵器である。385は蓋として復元したが、端部に坦面を持ち、天井部のつまみ付近に大きな剥離痕が見られることから、高坏の可能性もある。天井部に回転ヘラ削りを施す。386は須恵器坏である。

土壙99(Fig.81)

Ｉ６区で検出した。東側を攪乱されるが、南北1.6ｍ、東西２ｍほどの楕円形であろう。検出面からの深さ10㎝ほどの浅い皿状である。粘土塊や土器片が比較的多く出土しており、廃棄土壙と考えられる。

図示してはいないが須恵器甕肩部片、土師器甑片が出土している。土師器甑は小形のもので、丸底の底部に小孔を６個三角形に配置している。

土壙105(Fig.82)

Ｈ７区で検出した。住居跡87を切る。径2.4ｍほどの円形と考えられる。壁はあまり立たないが、検出面からの深さ30㎝ほどを測る。

図示してはいないが、須恵器坏口縁片などが出土している。

土壙106(Fig.82)

Ｉ８区で検出した。東側が調査区外に出る。南北3.2ｍ以上、短径1.8ｍ以上の、比較的規模の大きい土壙である。隅丸方形ないしは楕円形と考えられる。壁はあまり立たず、検出面からの深さも20㎝ほどで、皿状を呈する。

図示してはいないが、須恵器坏などが出土している。坏には口径18㎝ほどの大形品と、口径13㎝ほどの中形品があり、また口径14㎝ほどの高台のない坏もある。

土壙110(Fig.82)

Ｈ６区で検出した。南側を攪乱によって削平されるが、東西1.8ｍ、南北１ｍほどの楕円形であろう。浅い皿状を呈する。

遺構自体は古代の遺構と考えられるが、形態のわかる出土遺物としては弥生時代の甕片があるのみである。

土壙118(Fig.82)

Ｅ３区で検出した。南北２ｍ、東西2.4ｍを測る。楕円形を呈する。壁は緩やかに落ちて、深さは検出面から30㎝ほどを測る。

図示してはいないが、須恵器甕肩部片や、土師器の高台付きの坏の破片などが出土している。

土壙802(Fig.82)

Ｃ９区で検出した。１辺１ｍほどの方形を呈する。浅い皿状を呈するが、床面から底部穿孔された坏が出土した。

出土土器(Fig.84)

３は土師器坏である。体部はやや内湾しつつ開く。高台は底部端につき、踏張る。体部下半に回転ヘラ削りをかけるか。４は土師器皿である。底部は丸みを持ち、体部との境は不明瞭である。底部に回転ヘラ削りを施す。

土壙803、804(Fig.82)

Ｄ９区で検出した。土壙803、804は８次調査区と10次調査区のちょうど境界に位置し、かつ中央部を溝状の攪乱により壊されているので、形態にやや疑問な点が多い。８次調査区での土層観察の結果からは土壙803が、804を切っている。どちらも２段掘りになると思われ、土壙803は南側、土壙804は中央を一段深く掘り凹める。土壙803は長径2.2ｍ、短径1.2ｍほどの楕円形と考えられる。土壙804は径２ｍほどの円形であろうか。

出土土器(Fig.84)

図示したものは10次調査出土分である。１は須恵器蓋。天井部に回転ヘラ削りを施す。つまみは低平である。２は鉢であろうか。口縁部は外反しながら開き、付け根に段を持つ。外面は格子目叩き。内面は同心円文当て具痕をナデ消す。

土壙821(Fig.82)

Ｄ９区で検出した。北側を攪乱されるが、径2.6ｍほどの円形を呈すると考えられる。深さ20㎝ほどの浅い皿状を呈する土壙である。

出土土器(Fig.84)

３は土師器甕である。椀４は内黒の黒色土器であろう。磨滅が著しいが、内面はミガキのようである。

土壙822(Fig.83)

Ｄ９区で検出した。楕円形を呈し、南北2.5ｍ、東西1.8ｍほどを測る。検出面からの深さ10㎝ほどの浅い皿状である。

図化に耐える出土遺物は見られなかった。

土壙823(Fig.83)

Ｄ９区で検出した。楕円形を呈し、南北2.9ｍ、東西２ｍほどを測る。検出面からの深さ10㎝ほどの浅い皿状である。

図化に耐える遺物は出土していない。

土壙824(Fig.83)

Ｂ８区で検出した。細長い長楕円形を呈し、今まで見て来たものとは規模、形態に違いがある。長

1.9m、幅50cmを測る。両端に段を持つ。検出面からの深さは30cmほどである。
図化に耐える遺物は出土していない。

土壙825(Fig.83)
B8区で検出した。長径2.7m、南北1.8mほどの楕円形である。検出面からの深さは10cmほどで、浅い皿状を呈する。
出土土器(Fig.84)
5は須恵器蓋。端部の突出は小さい。天井部は回転ヘラ削りを施さない。

土壙826(Fig.83)
B8区で検出した。細長い長楕円形を呈し、土壙824に類似した規模、形態を示す。長1.5m、幅70cmを測る。中央を一段掘り凹める。検出面からの深さは50cmほどである。土壙824、825は、形態的には大形の柱穴などが考えられるが、調査区内ではこれらの土壙と組み合って建物をなす状況にはない。図化に耐える遺物は出土していない。

土壙827(Fig.83)
B9区で検出した。長楕円形を呈する。南北1.4m、東西50cmを測る。壁は緩やかに落ち、皿状を呈する。検出面からの深さは25cmほどである。
出土土器(Fig.84)
図化できたのは土師器甕6の1点のみである。小形甕と考えられ、外面もナデを施す。口縁部に指頭痕が見られる。

（3）井戸

井戸75(Fig.85)

Ｈ４区で検出した。平面形円形の井戸である。断面円筒形を呈する。検出面での径95㎝、深さ2.1ｍを測る。出土遺物が全く無く、時期は不明であるが、弥生時代とすれば、福岡平野で井戸が盛行する中期後半以降の遺構が、調査区内になく、前期後半から中期初頭という最古例の井戸になってしまう。可能性は否定できないにせよ、断定もできないので、この古代の項で報告した。

井戸111(Fig.85)

Ｆ８区で検出した。１辺1.1～1.2ｍの方形を呈する。検出面からの深さは３ｍを測る。隅角の明瞭な方形を呈するので、木質の井戸枠があった可能性が高い。溝内からは須恵器、土師器を中心として比較的多くの遺物が出土したが、井戸の内部が狭く、また深いため、層位を観察しながら遺物を分離して取り上げるのは不可能であった。従って大きく上位、中位、下位にわけて遺物を取り上げることとした

出土土器(Fig.86、87)

444は須恵器の蓋である。器高は低く低平な器形を呈する。つまみも低平で、頂部が突出しない。口縁部は短く折り返して、薄く尖らせる。屈曲部は回転ナデにより、明瞭な稜が立つ。天井部は回転ヘラ削りを施す。内面は回転ナデを施し、天井内面に不定方向のナデを施す。とくに直径方向のナデが目立つ。復元口径16㎝を測る。445は須恵器である。壺口縁部片と思われるが、脚台の可能性もあるか。口縁部は直線的に屈曲する受口状を呈する。頸部も直線的に開く。破損面は剥離面であり、明瞭な稜が立つ。ここから胴部に接合すると考えられ、そうであれば極めて短い頸部となる。内外面回転ナデ調整される。以上二点は井戸111上位の出土である。

447は須恵器で、高坏の脚である。裾部に向かって緩やかに広がり、裾部は平板になる。脚端部は坦面をなし、わずかに突出する。坏部がわずかに残存するが、やや深い器形になりそうである。脚部は内外面回転ナデで、沈線などはない。絞り痕が明瞭に残る。坏部は外面回転ナデ、内面は不定方向のナデを施す。脚端径11.6㎝を測る。449は須恵器の鉢である。口縁部は短く屈曲して開く。口縁端は段状を呈する。肩が張る偏球形の胴部を持つ。胴部は内面に同心円文の当て具を当て、外面に併行叩きを施すが、内外面ともナデ消している。とくに胴部上位1／3程は、回転ナデにより丁寧にナデ消している。焼成は堅緻である。復元口径23.6㎝を測る。446は須恵器長頸壺の胴部であろう。肩で屈曲するが緩やかで、明瞭な稜は立たない。底部は平底で、底部端に高台がつく。底部付け根の内面には接合痕が明瞭に残る。肩部にはカキメ、胴部下半は回転ヘラ削りを施す。底径10.7㎝ほど、胴部最大径16.7㎝程に復元される。450は土師器甕である。肩部ですぼまらず、胴部からそのまま緩やかに口縁が緩やかに開く。底部は丸底である。外面は削りに近い調整であるが、内面ほど顕著ではない。上半部はナデを施すようであるが、口縁部近くでもヨコナデは見られない。ヨコナデは口縁部内面のみである。復元口径21㎝、器高14.8㎝を測る。以上四点は井戸111中位の出土土器である。

451は須恵器甕の口縁部である。口縁は外反しながら大きく開く。端部は段状を呈する。外面は擬格子叩きを施した後、カキメを施す。内面には同心円文当て具痕が見られる。復元口径23.8㎝を測る。454は須恵器坏である。口径11.8㎝を測る小形品である。体部はあまり開かず、直立気味である。底部と体部の境は比較的明瞭で、底部端近くに高台がつく。底部はヘラ切りのままである。455は土師器と考えられる。口径18㎝を測る大形品である。器壁が磨滅してよくわからないが、体部は回転ナデ、底部はナデと考えられる。底部端に高台がつく。457は須恵器長頸壺の口縁部である。頸部は口縁端

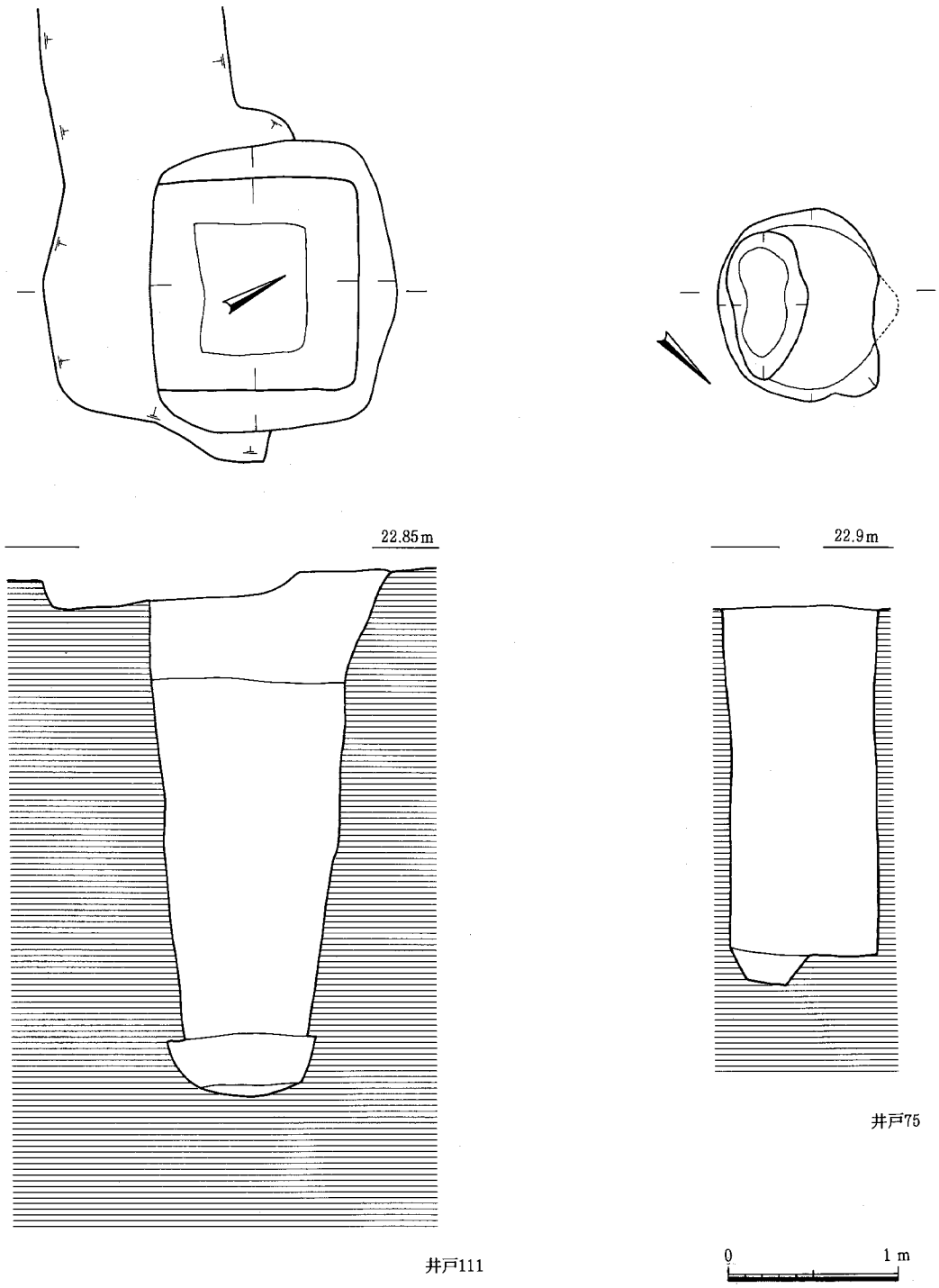


Fig. 85　井戸実測図（1：40）

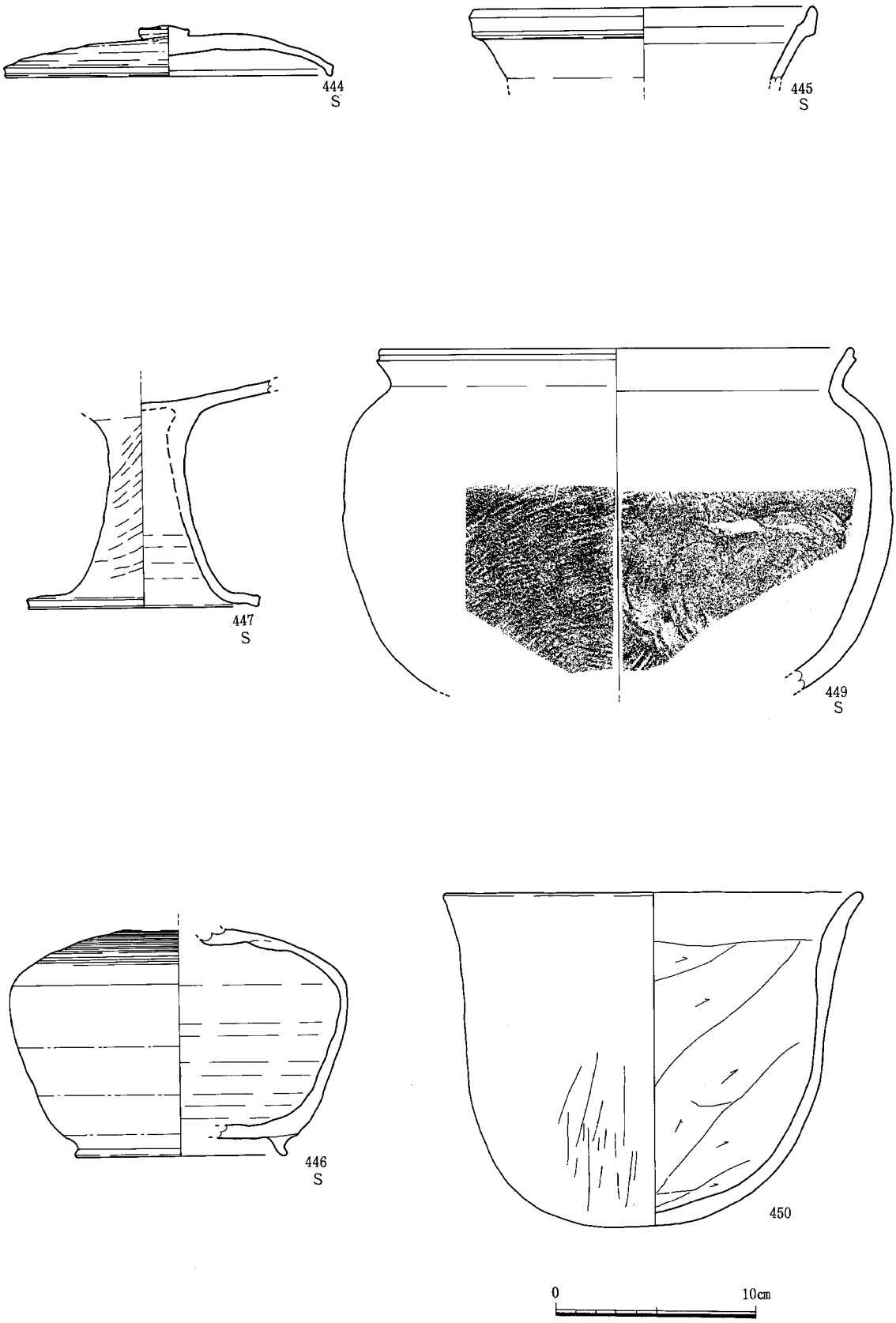


Fig. 86　井戸111出土土器実測図1（1：3）

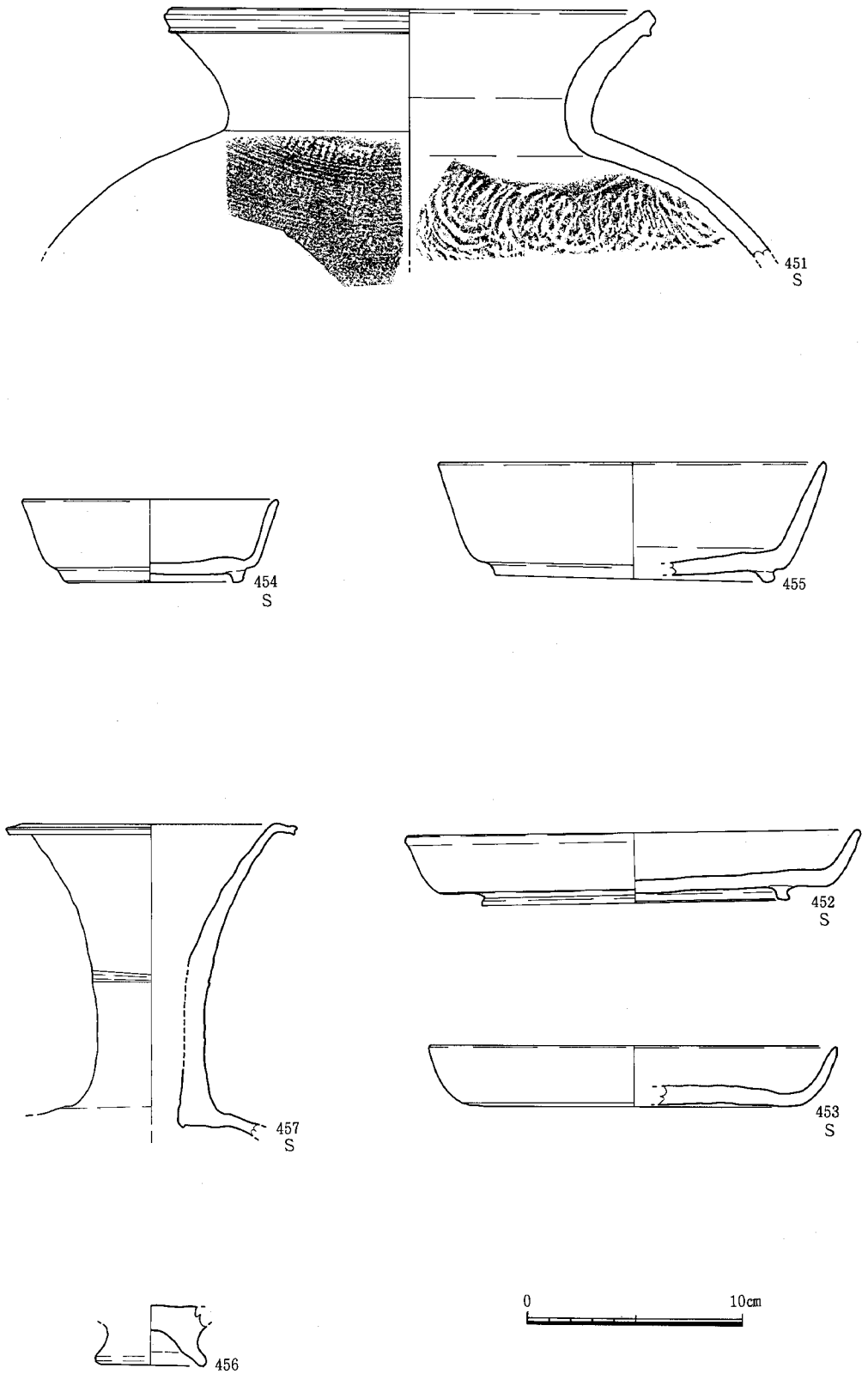


Fig. 87　井戸111出土土器実測図２（１：３）

部に向かって大きく広がり、短く屈曲して端部にいたる。端部は薄く、坦面をなす。ほぼ中位に沈線を一状巡らせる。肩部内面にも回転ナデを施す。円孔部の縁に頸部から胴部へ向けて粘土の飛び出しが見られる。この特徴から脚ではなく壺であることが知られる。452は須恵器の皿である。体部はやや開く。底部端のかなり内側に高台が付く。底部は回転ヘラ削りを施す。口径21cmほどに復元される。453も須恵器の皿である。体部は内湾気味に立ち上がる。底部はやはり回転ヘラ削りを施す。口径18.8cm程に復元される。以上の六点は井戸111下位の出土土器である。

（4）円形周溝状遺構

円形周溝112(Fig.83)

Ｇ９区で検出した。外径2.3ｍほどの円形を呈し、幅20cmほどの溝が巡る。検出時には溝の内外でレベルは変わらず、円形の竪穴遺構ではなく、完全に周溝状に検出した。溝の深さは10cmほどと極めて浅い。調査区内でもこれ１基のみの検出で、性格は不明である。

図化に耐える遺物は出土していない。

（５）溝、掘立柱建物（付図）

溝として注目されるのは８次調査で検出した溝808、809である。これは同一の溝で、住居跡810、811を切る。深さは10cmほどで極めて浅い。この延長が５次調査地点では、溝1200として検出されており、調査区のほぼ中央を南北に縦断するような溝となる。北端はＥ３区の弥生時代住居81付近にあり、それから北では検出されていない。そこから弥生時代住居跡群を縦貫しながら東側へ湾曲し、Ｅ８区へ至る。南端の８次地点ではＤ10区まで至るので、緩やかな円弧を描いている可能性もある。検出時には所々断絶も見られるが、復元すると延長70ｍに及ぶ。南端はまだ調査区外に伸びると考えられる。時期は住居と切り合い関係にあるものの、奈良時代の中で収まるものと考えられ、集落の後半期に併存していた溝である。住居の遺存と比較して見ても、本来極めて浅い溝であったことは確実であり、その性格は不明である。

掘立柱建物は極めて注目すべき内容を持っているが、今回報告では十分に検討することができない。現在までに７棟程復元しえた。復元できたものは住居跡の分布が疎になる西端部に集中している。住居跡が集中する範囲では、掘立柱建物はほとんど復元できないが、印象としては西端部のようなあり方は示す可能性は少ないように思える。西端部では東西棟２棟、南北棟５棟程を検出した。いずれも方向はほぼ一致しており、同時期性の高い建物群と考えられる。東西棟のうちＣ－Ｄ６区にあるものが２間×３間の建物である。梁行4.5ｍ、桁行6.5ｍ程を測る。他の掘立柱建物と比べて柱穴が大きい。住居跡25に切られる。このため調査時には弥生時代の可能性も考えていたが、他の建物と方向が一致することから、他と同様古代の建物と考えられる。Ｄ－Ｅ６区の東西棟は、２間×２間の建物で、梁、桁とも５ｍを測る。この２棟は柱筋を通す。

南北棟はＣ４－５区で１棟、Ｂ４区～Ｂ８区にかけて３棟ないし４棟検出した。Ｃ４－５区の建物は２間×３間で、梁行5.5ｍ、桁行8.5～９ｍを測る。この建物は、西側の建物群とは柱筋がずれているが、西端の柱列は、Ｃ－Ｄ６区の東西建物の西柱列とほぼ一直線になる。

Ｂ４区～Ｂ８区の南北建物列は、Ｂ３区より北、Ｂ８区より南には伸びないようである。Ｂ４区の建物は２間×３間の身舎に１間の軒が付くものか、Ｂ５区の建物との間に３本の柱による柵を設けるものかいずれかであろうと考えられる。身舎部分で、梁行５ｍ、桁行８ｍ程を測る。Ｂ５区の建物は、２間×３間の総柱の建物と考えられる。梁行５ｍ、桁行6.5ｍ程に復元できる。Ｂ７－８区の建物は、８次調査区で３間分、10次調査区で２間分検出されており、１棟であれば２間×６間の建物となるが、２間×３間の１棟と、２間×２間の１棟に分かれる可能性もある。この南北建物列は、柱筋を通して立てられている可能性が高い。また東西建物との関係を見ると、ちょうど東西建物列の西側に、南北建物列の空白部分があり、建物群全体がある企画に基づいて設計された可能性が高い。

この他、周辺で調査された４次、６次、７次調査地点でも掘立柱建物が検出されている。これらの調査区で検出された建物も、ほぼ５次、10次調査区の建物群と方向を同じくするようである。住居跡集中部の中での掘立柱建物の検討が十分でない今、早急な結論は避けるべきであるが、先に想定したように（註）、ほぼ５次調査区の西端から４、６、７次にかけての地区に、集落と同じ時期の掘立柱建物群が集中する個所があったと考えてよかろう。

（註）福岡市教育委員会「雑餉隈周辺遺跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第528集　1997

V 小　　結

今回の調査は、麦野、雑餉隈遺跡群でも最も調査面積が広く、検出した遺構、出土した遺物も多岐にわたる。主な遺構は弥生時代の集落関係遺構と、奈良時代の集落関係遺構である。とくに奈良時代集落については58基におよぶ住居跡が検出され、住居の構造などを明らかにする上で、多くの資料を提供したものと考える。ここでは今回の調査で明らかになった点のいくつかについて、簡単なまとめを行なうこととする。

弥生時代の集落について

弥生時代の集落関係遺構としては、円形住居跡、方形住居跡、貯蔵穴などが検出された。時期については、方形住居49が中期と考えられるのみで、あとは前期後半と考えられる。ここでは前期集落を中心に考えて見たい。

出土した土器から見ると、住居跡62出土土器や、土壙40出土品のようにやや古式の形態を示すものと、土壙15、17出土土器のように、やや胴が張る新式の形態を示す土器がある。古式のものは板付Ⅰ式としてもよいかも知れないが、共伴する遺物の中に刻目突帯文系の土器を含まないので、板付Ⅱ式の古段階と考えておきたい。また、新式のものの中にも、いわゆる前期末、中期初頭とされる土器は含まれていない(方形周溝状遺構８は該期の可能性があるが）と考えられる。従って、ほぼ前期後半の中で推移した集落と考えられる。

つぎに遺構の分布であるが、まず調査区内での粗密を見ると、住居81、51、59が接近しすぎており、同時併存は考えにくい。また住居64と土壙15も同様である。従って、遺物から見た古式、新式に対応して、大略２時期にわたって推移していると考えてよかろう。つぎに集落の範囲を考えると、今回調査区では弥生時代遺構がほぼ北東部に集中している。雑餉隈遺跡としては調査区の北側には更に台地部が伸びると考えられており、弥生時代集落も更に北側へ広がると考えられる。しかし東側は調査区の南東側にある池を谷頭とする谷があり、それほどには広がらない。また今回調査区の北側にある９次、２次、３次調査区では弥生時代遺構は検出されていない。そうすると、５次調査区から若干北に伸び、早良大野城線付近を北限として、東側の谷に水田を開いた小集落が想定される。

福岡平野では最古の農耕集落として著名な板付遺跡を始めとして、前期初頭の集落としては那珂遺跡、比恵遺跡、雀居遺跡などが知られ、いずれも弥生時代前期後半から更に中期へ継続している。前期後半から末頃から始まる遺跡には甕棺墓地が多く、集落は発見例が少ない。集落関係遺構に限定すると、持田ヶ浦遺跡、影ヶ浦遺跡などが挙げられる程度である。周辺地域では、該期以降集落が拡大していくことが指摘されているが、その発祥地たる福岡平野では、既に前期前半代までに、ある程度の展開がすんでいたようである。現状では資料が少ないが、月隈丘陵や、樋井川流域の段丘上（浄泉寺遺跡）など高所に進出する傾向は見られるかも知れない。

その中では雑餉隈遺跡の集落は、低台地上の該期の集落として注目されるが、とくに住居81出土の大量の石鏃とその未製品は重要である。この住居は石鏃工房と考えられる。武器工房を有する集団は、農耕集落の拡大に伴う「争い」の実像の一端を示していると言えようか。

古代住居の構造と規模

今回調査した古代住居の一覧はTab.2に示した。これらの住居は極めて企画性が高いものと考える。共通する特徴をまず上げて見よう。形態は方形を基本とするが、若干長方形気味になるものがある。その場合はほとんど横長になり、縦長になるものは2基に過ぎない。竈は未検出のものも含めて、ほぼ全部の住居跡に付くものと考えられる。竈位置は北側に付くものが卓越し、東側がそれにつぎ、西、南は少ない。竈は住居跡内に取り付くものと、張出し部を設けて取り付くものがある。後述するように、概ね住居の規模と相関するようである。主柱穴は大形のものについては4本柱が検出された例もあるが、ほとんどの住居跡では床面からは検出されていない。小、中規模のものについては壁の外側に設けていた可能性を考えざるをえない。このように構造的な特徴はほぼ共通しており、差異は規模の大小について現われるのみである。従ってつぎに住居の規模について考えてみる。

住居跡の規模を、単純に横長と縦長を基準にグラフ化したのがFig.88である。ドットはある程度の集中を見せており、類型化することが可能と考えられる。その結果Ⅰ～Ⅳ類の四類型に分類できると考えた。

Ⅰ類は1辺2.2m以下の住居である。調査区内では2基に過ぎない。2基とも方形で、竈は張出し部を設けている。超小形住居跡とすることができよう。

Ⅱ類は1辺2.4m～3.2m程の住居である。中でも2.7m～3mほどを測る住居が多い。この類型は調査区内では最も数が多い。方形がほとんどであるが、若干縦長、横長を呈するものも見られ、長方形指数（縦長／横長）0.84～1.07を示す。竈は張出し部の不明なものも多いが、張出しをもつものが卓越すると考えられる。小形住居と考えることができよう。

Ⅲ類は1辺3.2m～4mほどを測る住居である。この類型は規模、形態にばらつきが大きい、縦長や、横長を呈するものがⅡ類に比べて多くなり、また長方形指数も0.81～1.23と幅が大きくなる。竈は張出しを持つものと持たないものがほぼ五分五分となる。中形住居跡と考えることができよう。

Ⅳ類は1辺4.6m以上を測る住居である。調査区内では6基を数える。形態はまたほぼ方形に近くなり、長方形指数は0.89～1.08を示す。竈は張出しを持たないものが4基、持つものが2基と、持たないものが卓越すると考えてよかろう。大形住居とすることができる。

これらのうち、Ⅱ類からⅢ類への変化は漸移的であるが、Ⅰ類とⅣ類は隔絶している。従って住居規模としては概ね3ないし4種の階層に分かれるものと考えられる。すなわちⅣ類の大形住居は集落の有力者層の住居であろう。Ⅱ、Ⅲ類の住居が、集落の一般成員の住居と考えられる。問題はⅠ類の住居であるが、集落の隷属者層の住居と考えるには数が少な過ぎる、やはりこれも一般成員の住居の一種であろう。Ⅰ類からⅢ類の格差は質的なものというより、居住する人数の差によるものと考えられる。

また住居規模と竈の関係を見ると、概ね、住居規模が大きくなるほど張出しを持つ竈の比率は低くなる。従って、竈の張出しは住居内の使用可能な面積を確保するのが第1義的な目的であると考えることができよう。

なお土壙の一覧もTab.3に示した。土壙のうち廃棄土壙と考えられるものは円形もしくは楕円形の浅い皿状、または壁があまり立たず、緩やかに深くなる形状を示す共通性が見られる。

No.	類　型	竈位置	縦　長	横　長	張出し	長方形指数（縦／横）
1	Ⅲ	北	3.8	3.8	?	1.00
4	Ⅲ	東	3.5	3.5	有	1.00
5	Ⅱ	西	2.8	2.8	有	1.00
6	Ⅱ		2.7	2.7	?	1.00
9	Ⅲ	北	3.5	4.5	無	0.78
11	Ⅲ	北?	2.8	3.1	無	0.90
20	Ⅱ	北	2.5	2.5	無	1.00
23	Ⅳ	北	4.7	5.3	無	0.89
25	Ⅲ	東、北	3.7	3.7	無	1.00
26	Ⅳ	北2	5.4	5.4	無	1.00
32	Ⅱ		2.6	3.0	?	0.87
33	Ⅱ	北	2.7	2.9	有	0.93
34	Ⅱ	北東隅	3.0	2.8	有	1.07
35	Ⅱ	北	2.6	2.9	無	0.90
37	Ⅱ	北?	2.8	2.8	?	1.00
38	Ⅱ	北	2.8	3.0	有	0.93
52	Ⅱ	東	2.8	2.8	有	1.00
53	Ⅲ	東	3.5	3.5	有	1.00
54	Ⅲ	東	3.6	4.0	有	0.90
55	Ⅲ	東2?	2.8	3.8	有	0.74
60	Ⅲ	北	4.0	4.0	無	1.00
61	Ⅲ	東	3.6	3.2	有	1.12
63	Ⅲ	北	3.6	4.2	無	0.86
65	Ⅲ	東	3.2	3.2	有	1.00
66	Ⅱ		3.0	3.0	?	1.00
67	Ⅱ	東	2.8	2.8	有	1.00
70	Ⅳ	北	4.8	4.6	有	1.04
76	Ⅲ	北?	3.2	3.8	?	0.84
87	Ⅲ	北	3.5	3.5	有	1.00
88	Ⅱ	南	2.6	3.0	有	0.87
90	Ⅱ	南西隅	2.8	3.2	無	0.88
92	Ⅱ	西、北	3.0	3.0	有	1.00
94	Ⅱ	南	2.7	2.7	有	1.00
96					?	
97	Ⅱ	北	3.0	3.0	有	1.00
98	Ⅱ		2.7	2.7	?	1.00
100	Ⅱ	北	3.2	3.2	有	1.00
101	Ⅰ	北	2.1	2.1	有	1.00
102	Ⅲ	北	3.8	4.7	有	0.81
103	Ⅳ	北2	4.7	4.7		1.00
107	Ⅱ		2.4	2.4	?	1.00
108	Ⅰ	北	2.4	2.4	有	1.00
109	Ⅱ	北?	2.8	2.8	?	1.00
113	Ⅱ	西?	2.7	2.7	?	1.00
114	Ⅳ	北3、東2	4.6	5.0	無	0.92
115	Ⅲ	北	3.5	3.8	?	0.84
117	Ⅱ	東	3.0	3.0	有	1.00
801	Ⅱ	北	3.0	3.0	有	1.00
810	Ⅱ	北	3.0	3.0	有	1.00
811	Ⅲ	北、西	3.5	3.6	有	0.97
812	Ⅳ	東	5.4	5.0	有	1.08

Tab. 2　住居跡一覧

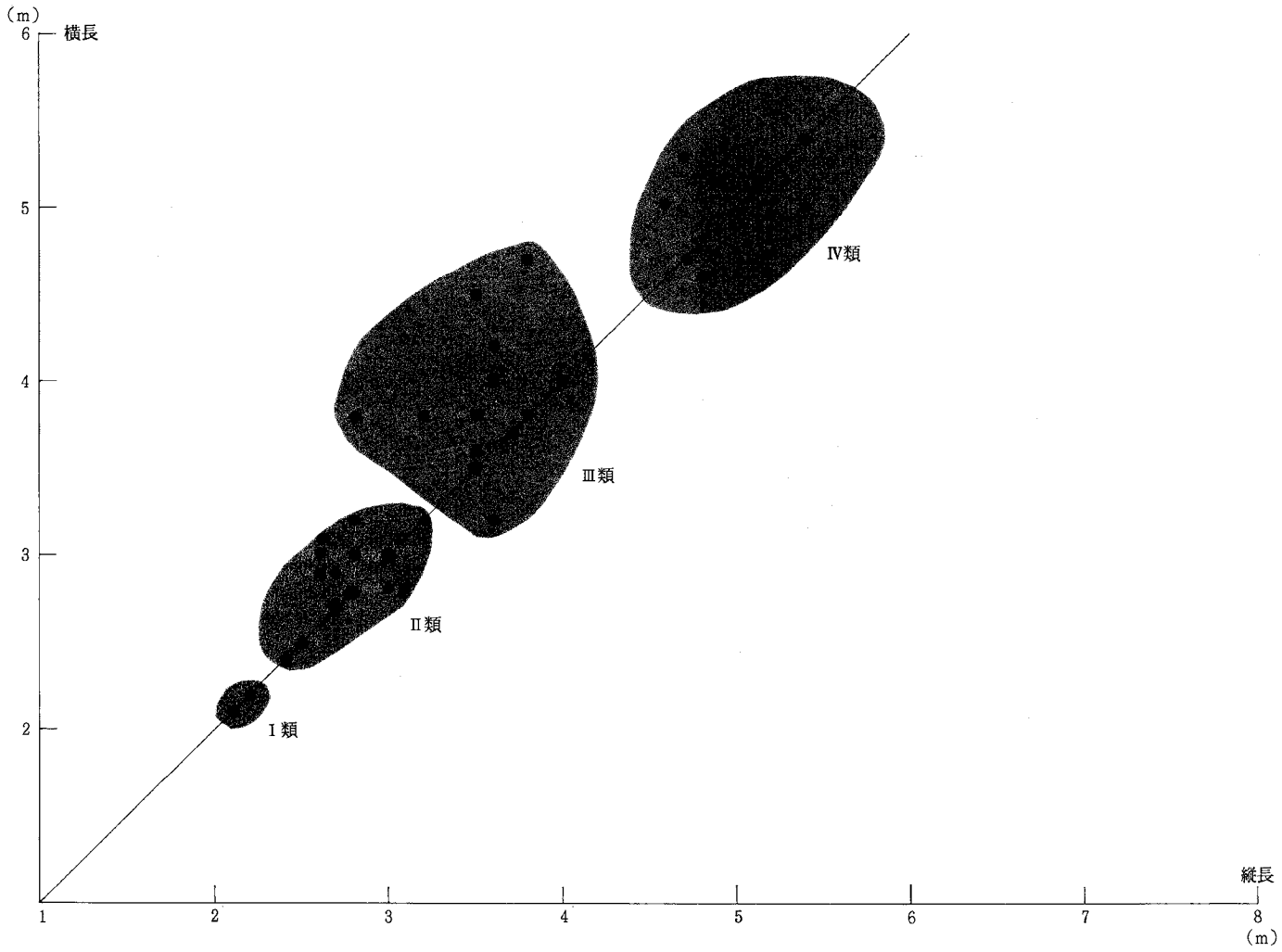


Fig. 88　古代住居跡の規模と類型

No.	形　状	特　　徴	長軸長	短軸長
2	隅丸長方形	浅い皿状	3.8	1.8
3	長方形	浅い皿状	2.8	1.4
7	楕円形計	浅い皿状	2.8	2.2
14	長方形	壁は直に立つ	3.6	1.4
18	円形	浅く大きい		
21	楕円形	浅い皿状	2.6	1.7
24	長楕円形	二段掘り	3.4	1.8
27	楕円形	緩やかに深まる	2.4	1.9
28	楕円形	浅い皿状	2.5	1.9
29	楕円形	28より深い	2.4	2.2
30	楕円形	浅い皿状　遺物多い	2.5	2.0
31	円形	壁は直に立つ	2.7	2.7
39	楕円形	浅い皿状	2.5	1.8
41	円形	大形、壁は段状	4.0	4.0
42	円形	緩やかに深まる	2.2	2.2
43	楕円形	遺物多い	2.3	2.0
44	楕円形	遺物多い	2.9	2.1
48	円形	浅い皿状	2.6	2.6
68	楕円形	二段掘り	3.0	2.6
69	楕円形	壁は直に立つ	1.2	0.9
89	楕円形	浅い皿状	3.5	1.9
91	楕円形	浅い皿状	3.0	2.4
95	楕円形	浅い皿状、遺物多い	2.6	2.3
99	楕円形	浅い皿状、遺物多い	2.0	1.6
105	円形	緩やかに深まる	2.4	2.4
106	隅丸方形	浅い皿状　比較的大きい	3.2	1.8
110	楕円形	浅い皿状	1.8	1.0
118	楕円形	緩やかに深まる	2.4	2.0
802	方形	浅い皿状	1.0	1.0
803	楕円形	二段掘り	2.2	1.2
804	円形	二段掘り	2.0	2.0
821	円形	浅い皿状	2.6	2.6
822	楕円形	浅い皿状	2.5	1.8
823	楕円形	浅い皿状	2.9	2.0
824	長楕円形	二段掘り	1.9	0.5
825	楕円形	浅い皿状	2.7	1.8
826	長楕円形	二段掘り	1.5	0.7
827	長楕円形	二段掘り	1.4	0.5

Tab. 3　土壙一覧

雑餉隈遺跡集落の構造と景観

奈良時代の集落関係遺構は、住居跡同士、また住居と土壙の間で切り合いがあり、また住居同士が接近し過ぎる個所が見られることから、二時期以上にわたって継続していることが知られる。遺物の上からも奈良時代前半に属するものと、奈良時代後半に属するものがあり、概ね奈良時代一杯にわたって営まれていた集落と考えることができよう。今各住居跡について時期を明らかにしつつ、集落の変遷を明らかにする余裕が無いので、奈良時代集落遺構を一括して構造と景観について考えて見ることにする。

雑餉隈遺跡内に集落が造営されるのは８世紀に入ってからと考えられる。集落内は、竪穴式住居が集中する地区と、掘立柱建物が集中する地区に分かれると考えてよかろう。竪穴式住居が集中する地域は、集落の東半部と考えられる。すなわち、調査区南東部の谷に面する部分であり、住居は谷に面したかなり傾斜の強い部分にまで作られている。掘立柱建物は西半部に集中する。先述したように、住居集中部にも掘立柱建物が広がる可能性は否定できないものの、例えば10次調査地点などでは、住居跡が見られなくなる西半部では、明らかにピットの分布が密になることからも、傾向として住居の集中部と、掘立柱建物の集中部は東西にわけられると考える。この両地区は一部重複する部分がある。集落の西端に近い部分と考えられる６次調査地点で検出された住居跡15、また５次調査地点の住居跡１などは竪穴式住居分布域のはずれで、掘立柱建物の分布域に割り込んだ印象を与える。従って、それほど截然と区別される状況でもなかったようである。この点は掘立柱建物と竪穴式住居の関係を考える上で重要な点である。

竪穴式住居分布域内での、各住居のグルーピングはいくつか可能であろうが、各分期ごとの分布状況を明らかにしていない現在では、結果があまりに恣意的に過ぎるので、敢えて行なうことはしない。ただ、前項で分類した各類型の分布のみ概観しておく。最も大きなⅣ類住居はＦ10区、Ｇ９区、Ｆ８区、Ｄ７区、Ｄ４区、Ｆ３区にあり、竪穴式住居分布域の周縁を巡るように配置される。しかしこれ以下の３類型の住居が、Ⅳ類住居を取り巻いて配置されるような状況にはないようで、とくに調査区の北西部はⅡ、Ⅲ類の住居が密集する状況を示している。これは例えば各類型（階層）の住居が複数集まって一家族を構成し、その中心にⅣ類の大形住居が位置するというような性格とは異なる可能性がある。むしろ、住居26、23などは掘立柱建物と竪穴式住居を画する位置にあり、また方向も掘立柱建物と同じくすることから、Ⅳ類住居の配置は掘立柱建物の管理と、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ類住居の囲い込みを目的とするのではないかと考えられる。

つぎに掘立柱建物分布域についてであるが、見てきたように極めて企画性の高い配置を示す。これらの建物は先述したように住居に切られるものがあることや、９世紀以降の遺物が遺跡全体で極めて少ないことなどから、集落と時期的に重複する建物が主体であると考えておく。これら建物の企画性は、郡衙などの公的施設の配置に通じるものがある。しかし竪穴式住居と隣接し、その分布域も一部重複している点は、官衙とは決定的に異なる点である。むしろ大形住居との位置関係、方向の同一性などを考えると、竪穴式住居跡群に付設される建物群ではないかと考える。つまり、集落の共有財産を管理し、保管する倉庫や、祭祀、集会等に使用される建物群ではないだろうか。これらの点から浮かび上がる雑餉隈の集落の姿は、大規模な掘立柱建物群を擁し、それを管理する有力者層がいてその下に極めて多くの一般成員がいるというものである。

これが雑餉隈遺跡のみであるなら、古代集落の一パターンとして理解することができようが、麦野、雑餉隈遺跡群内では、至る所この手の集落があった。あらゆる集落で掘立柱建物と竪穴式住居の関係がわかるわけではないが、各遺跡における住居跡の極めて密な検出例は、雑餉隈遺跡の成果を敷衍す

るに十分なものと考える。このような集住の形態は、自然発生的なものとは考えがたい。奈良時代という時期的なものも考慮にいれると、やはり政治的、強制的な集住が行なわれた可能性が強いのではないか。その上で、雑餉隈遺跡９次調査地点で検出された大形掘立柱建物群は示唆的である。この建物は７世紀末～８世紀初頭とされ、まさにこの地域に多くの人が集められる直前の時期にあたるのである。

雑餉隈遺跡の集落では、遺物としてはほとんど須恵器、土師器等の土器類がほとんどである。生産手段に関わるような農具、工具類はほとんど出土していない。これらもあるいは掘立柱建物に一括管理され、各住居では保有していなかったのかもしれない。その内で、わずかに生活感の漂う遺物として住居23出土の鉄製紡錘車を図示した(Fig.89)。ほぼ完形で、軸部長18.7㎝、円板径4.9㎝を測る。軸は断面方形を呈する。円板の厚さは３㎜程で、反りはない。この他に注目すべき遺物としては、この手の集落としては希少な白磁片がある。少なくとも住居87例は混入ではないと思われる。このムラの住人が、大宰府かどこかから持ち帰ったものであろうか。

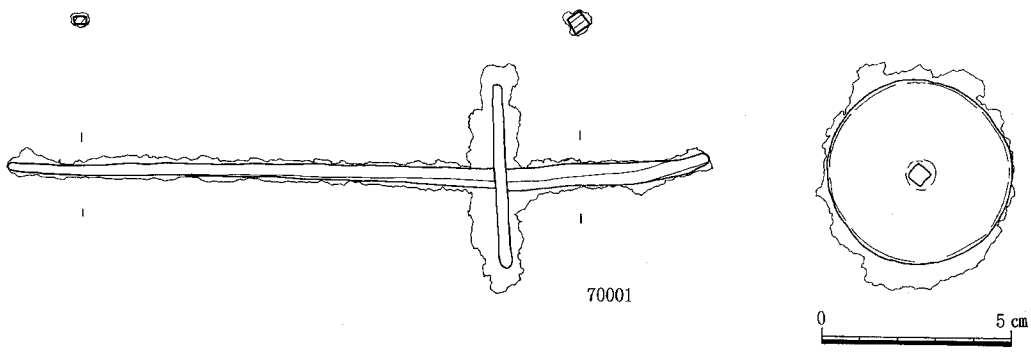
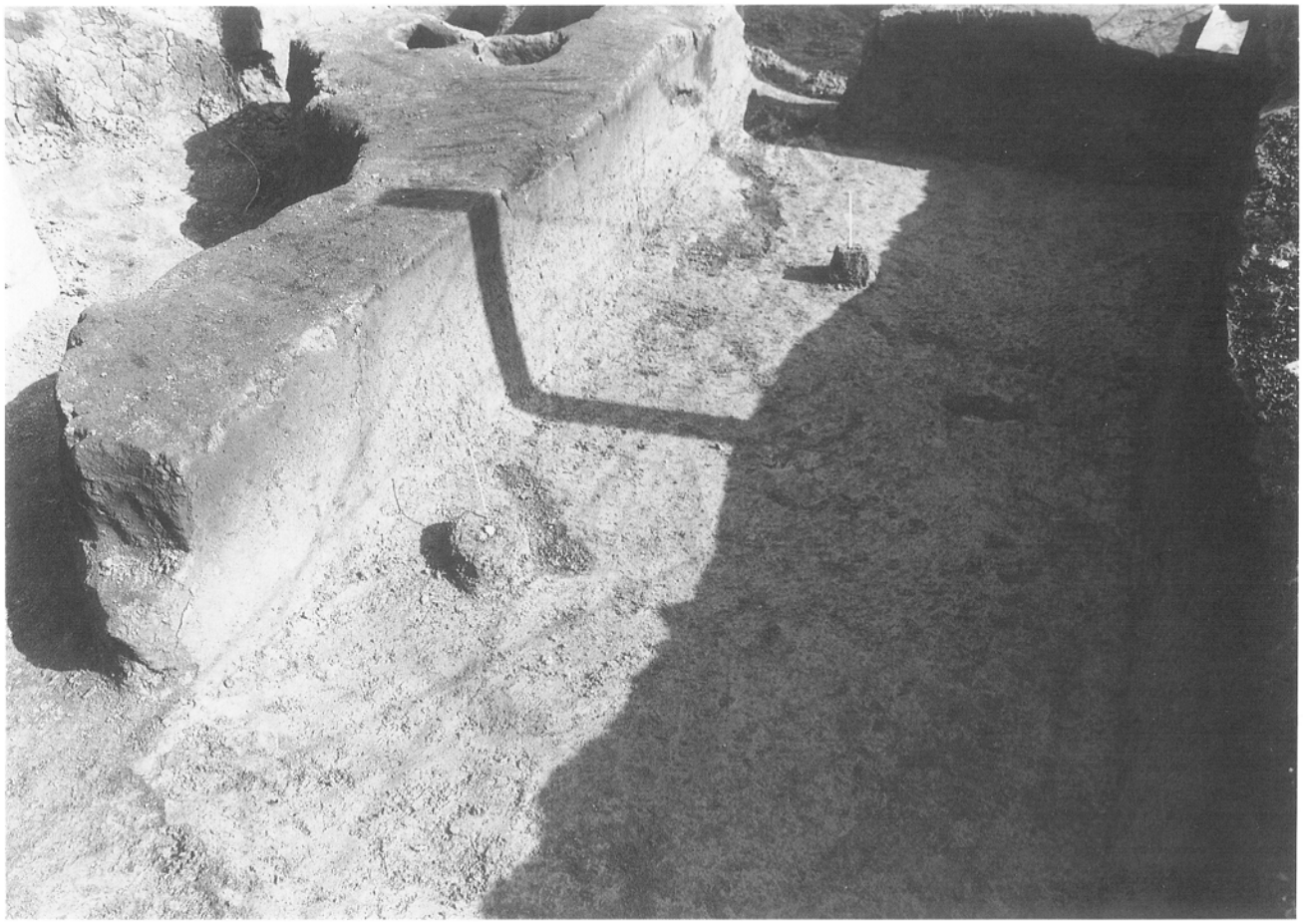


Fig. 89　住居跡23出土鉄製紡錘車実測図

図　　版

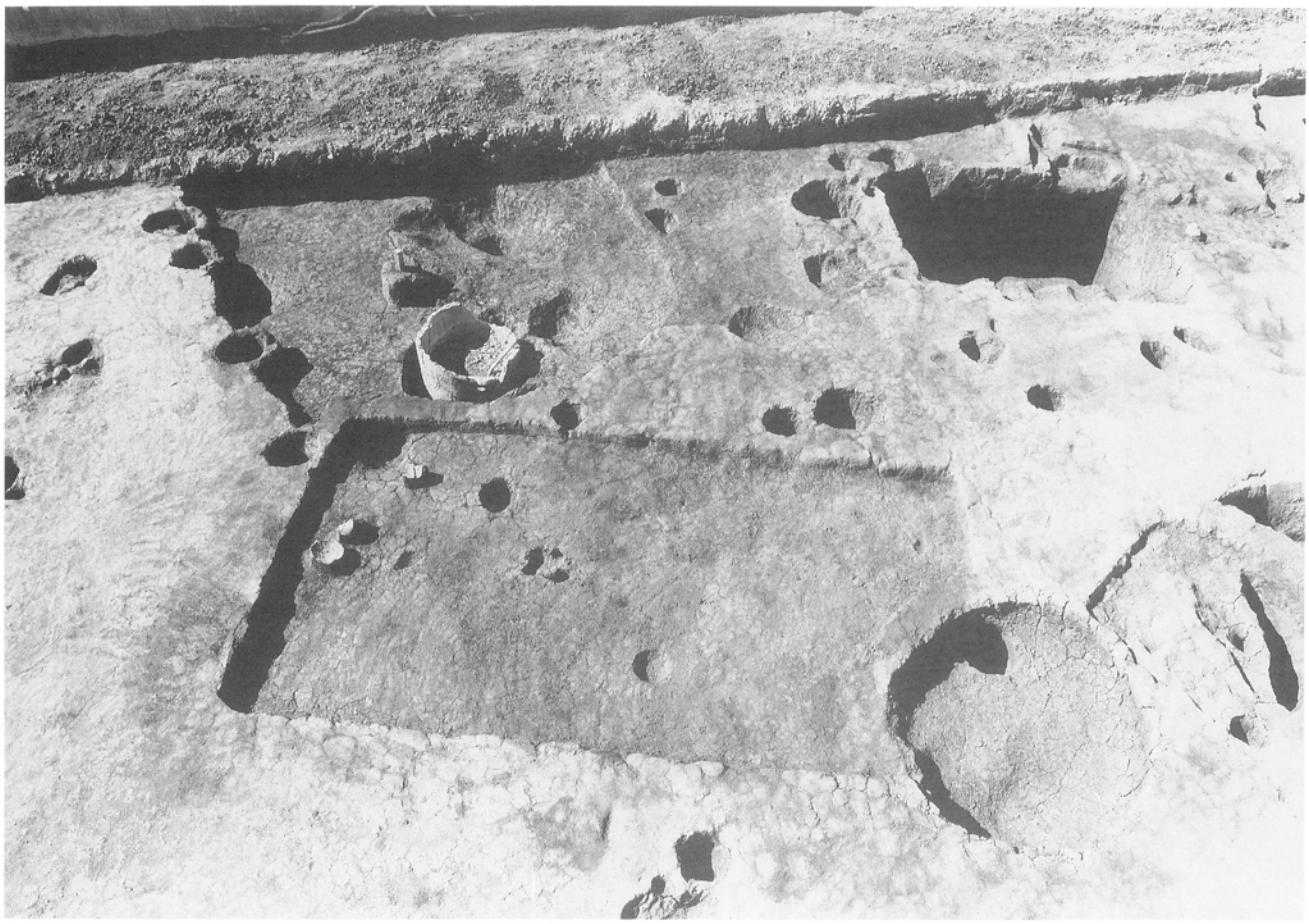


（1）10次調査区石器出土状況

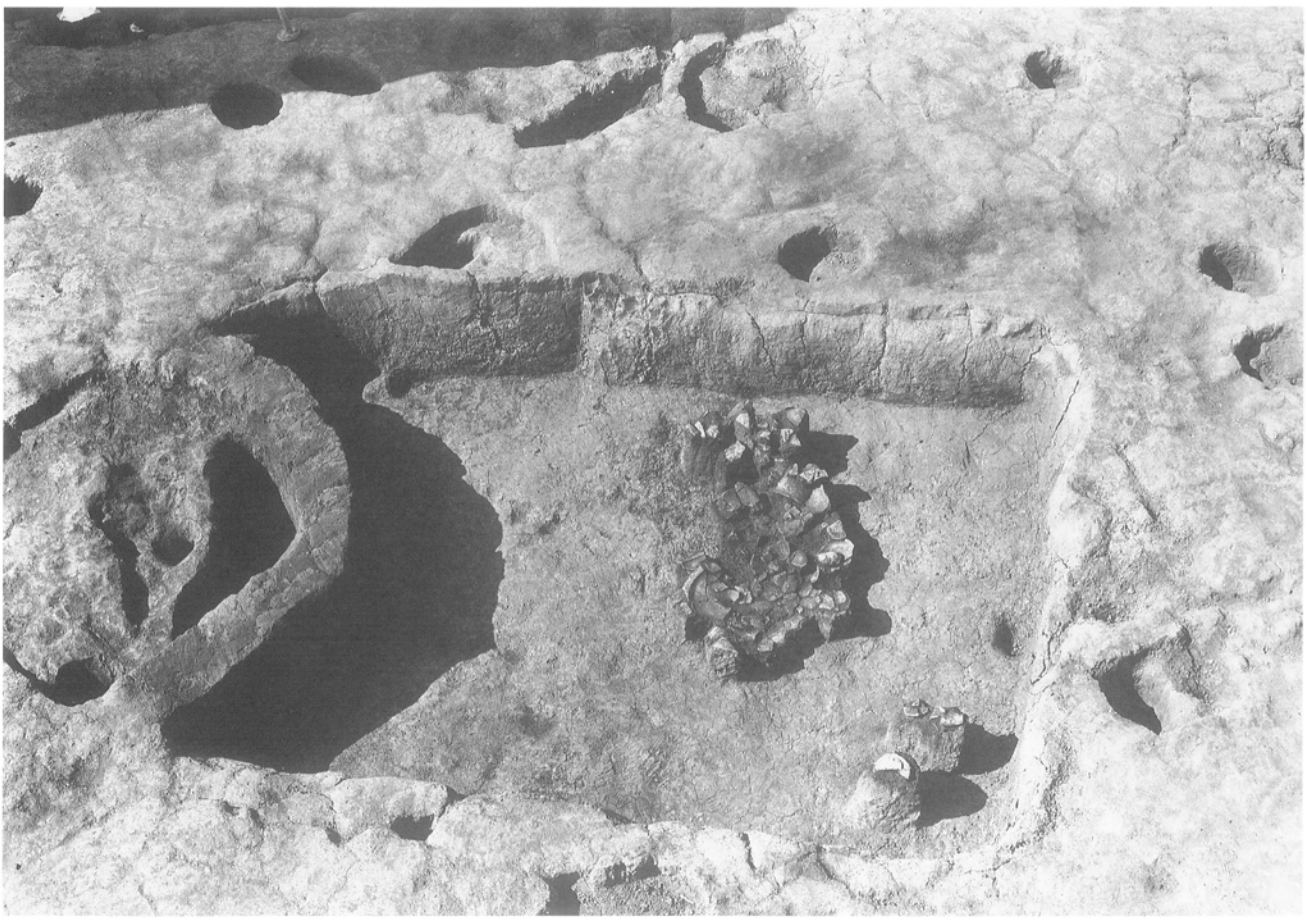
（2）10次調査区（南から）

（1）住居跡64、67（南から）

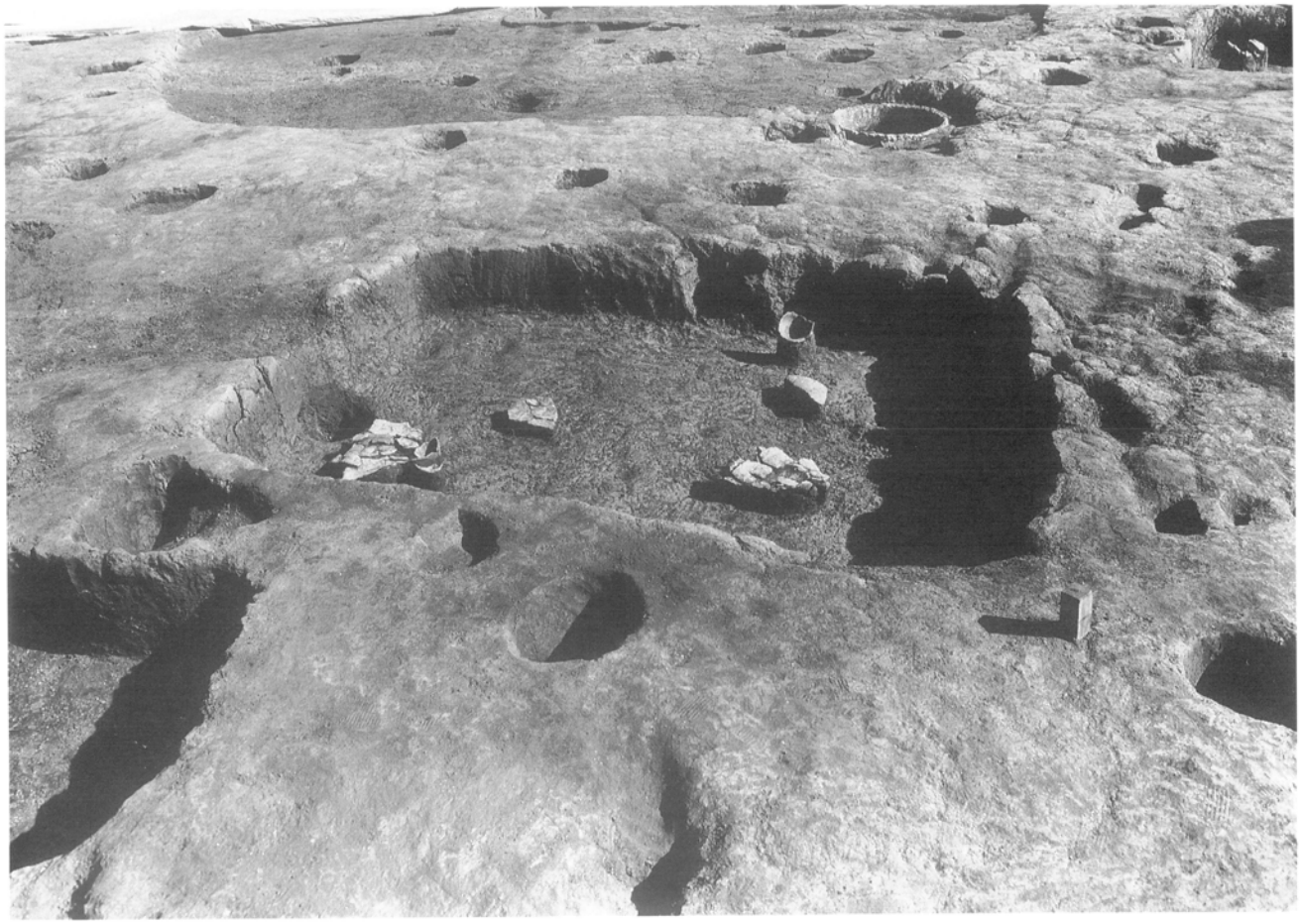
（2）住居跡49（西から）



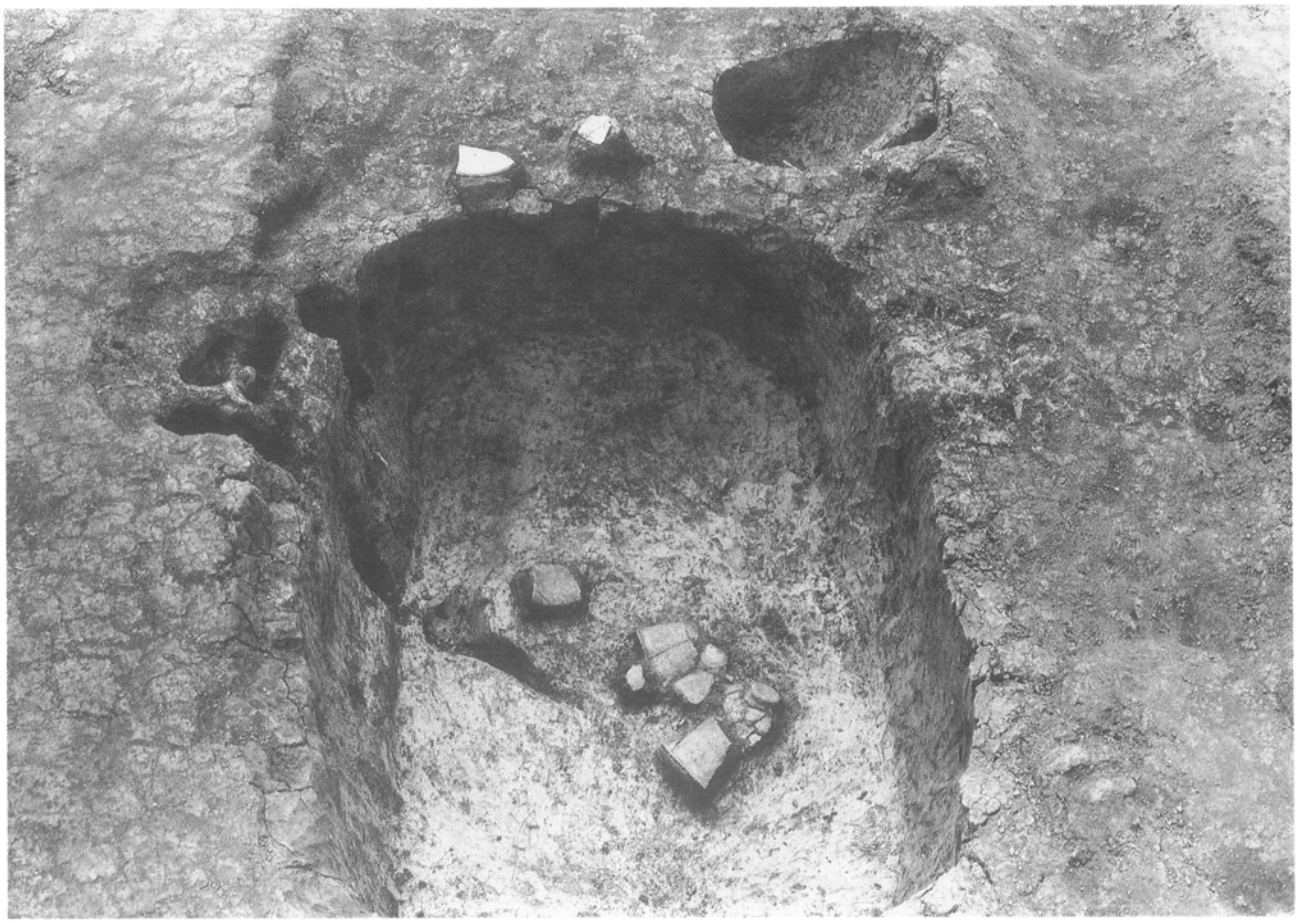
（1）土壙12（南から）



（2）土壙13（北から）



（1）土壙15（北から）



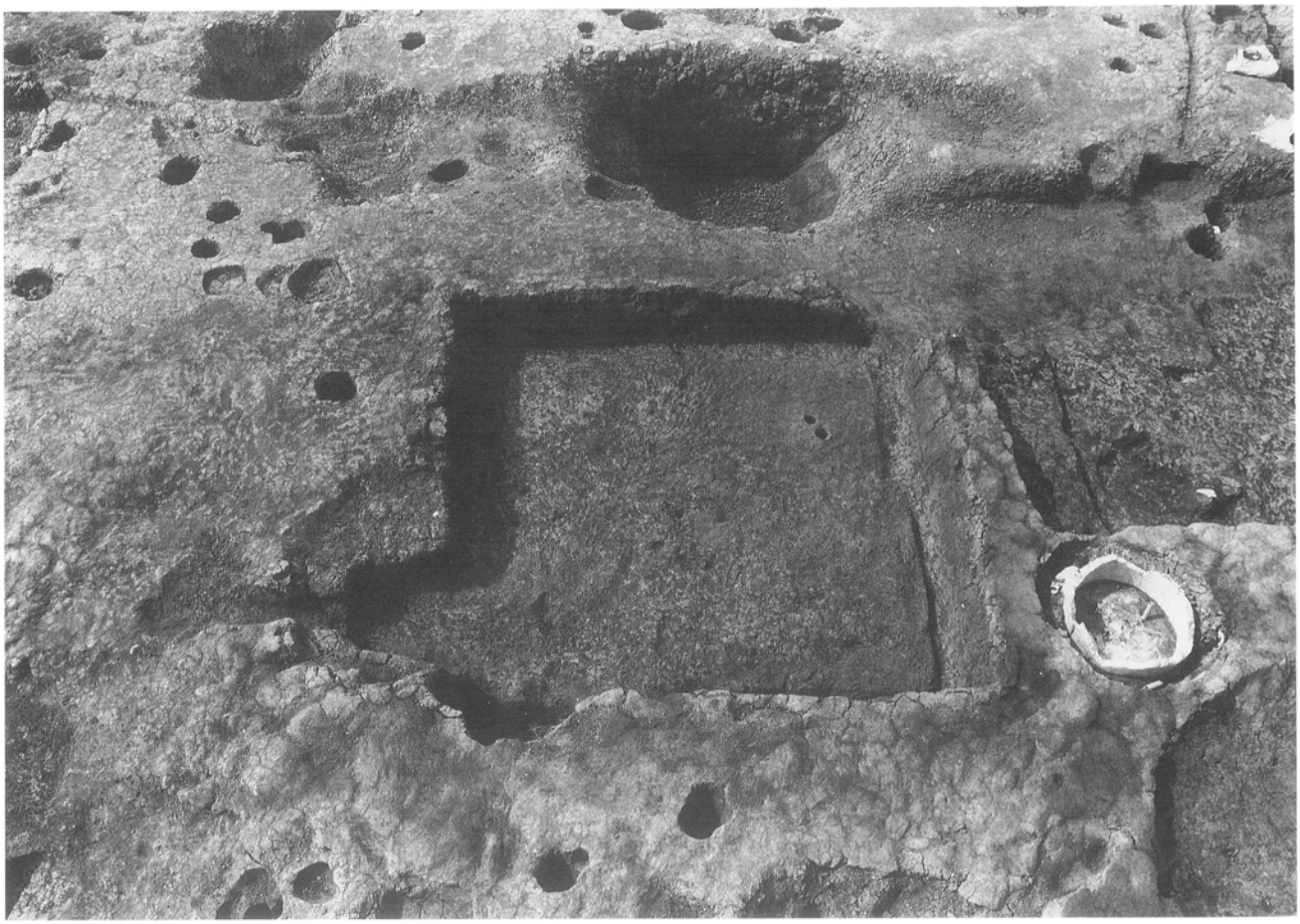
（2）土壙40（西から）

（1）土壙74（南から）

（2）遺構8（南から）

（1）遺構58（西から）

（2）住居跡4（西から）

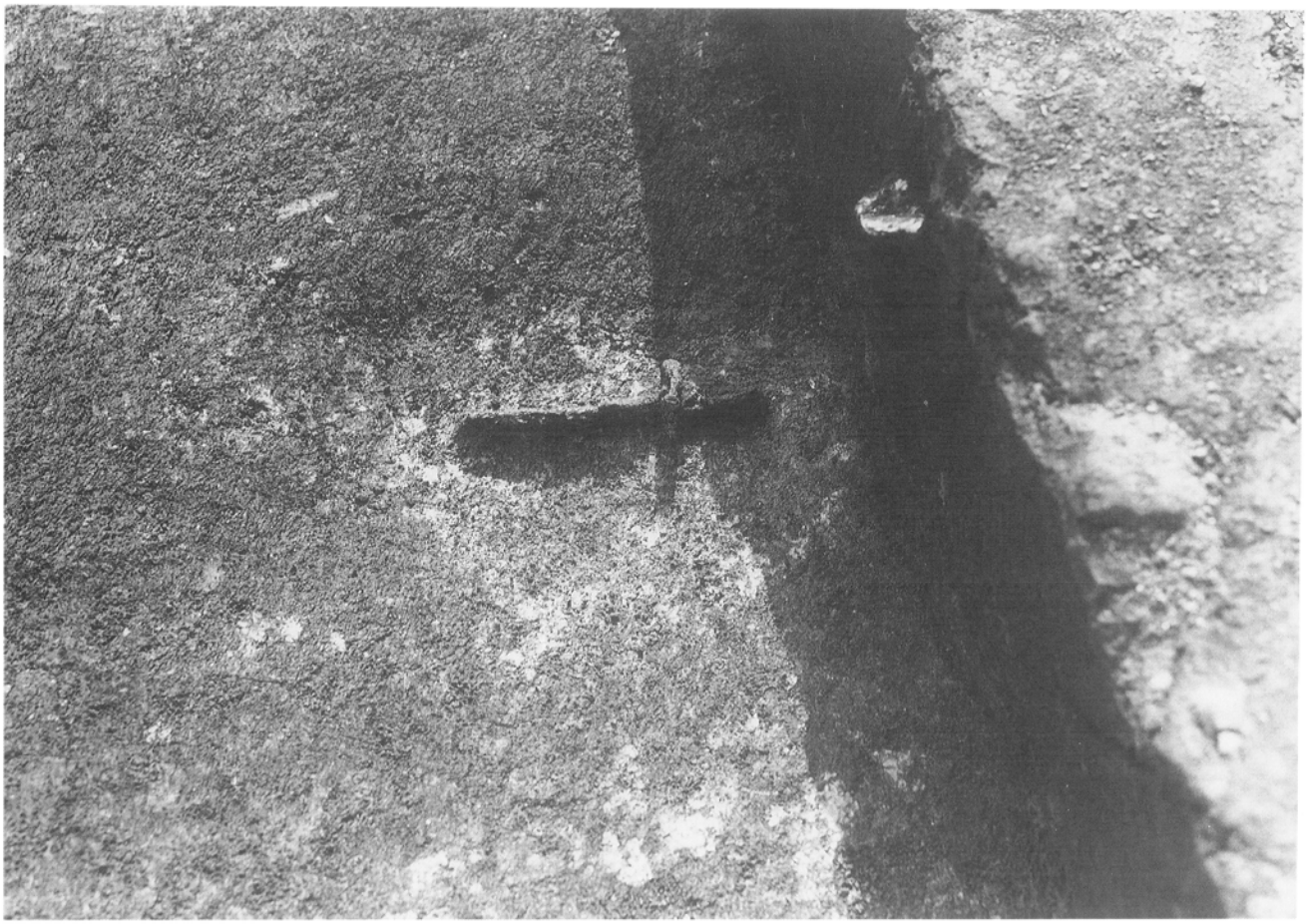


（1）住居跡5（南から）

（2）住居跡9（南から）

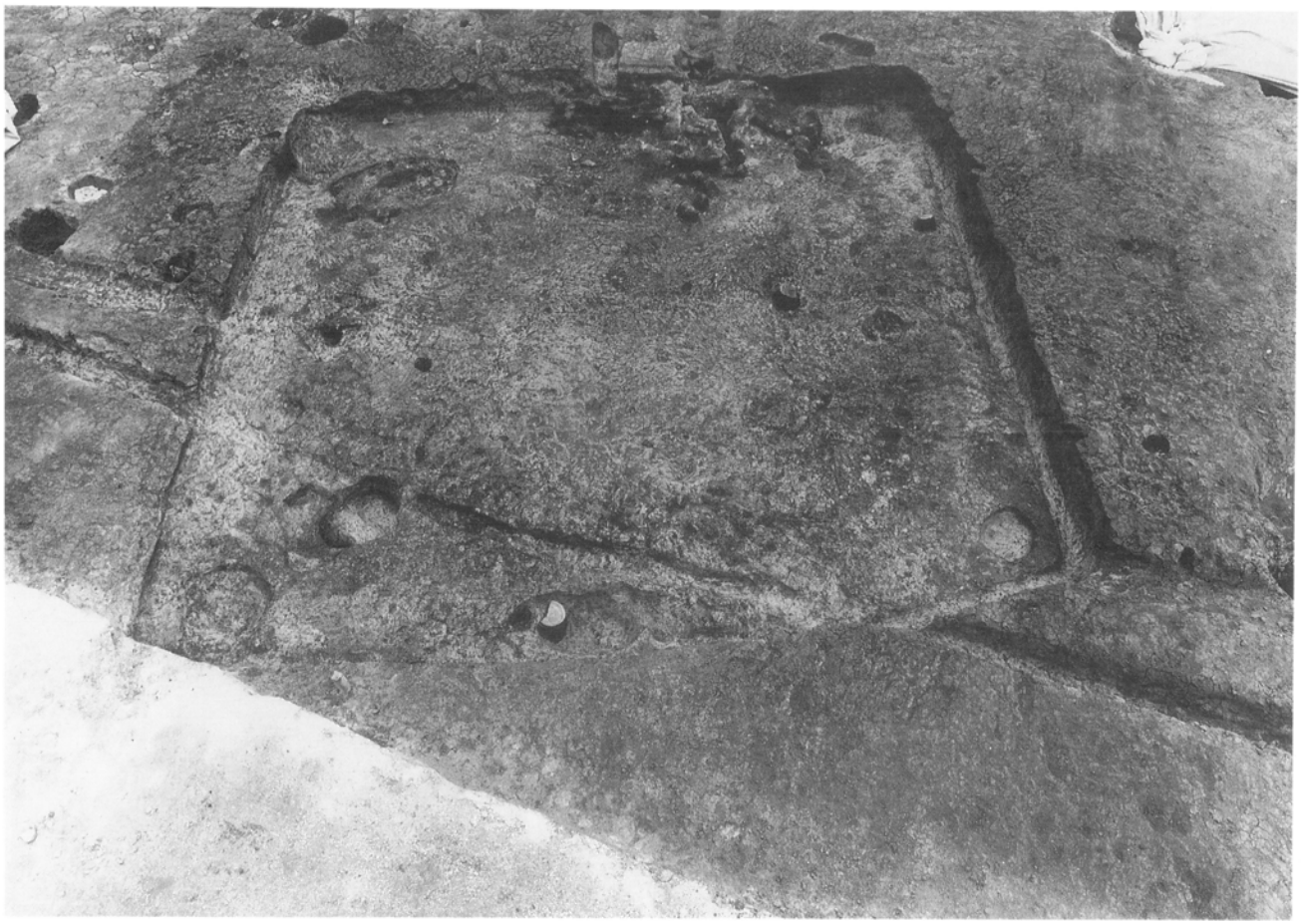
（1）住居跡6、16（南から）

（2）住居跡20、土壙21（北から）



（1）住居跡23出土鉄製紡錘車

（2）住居跡25（西から）

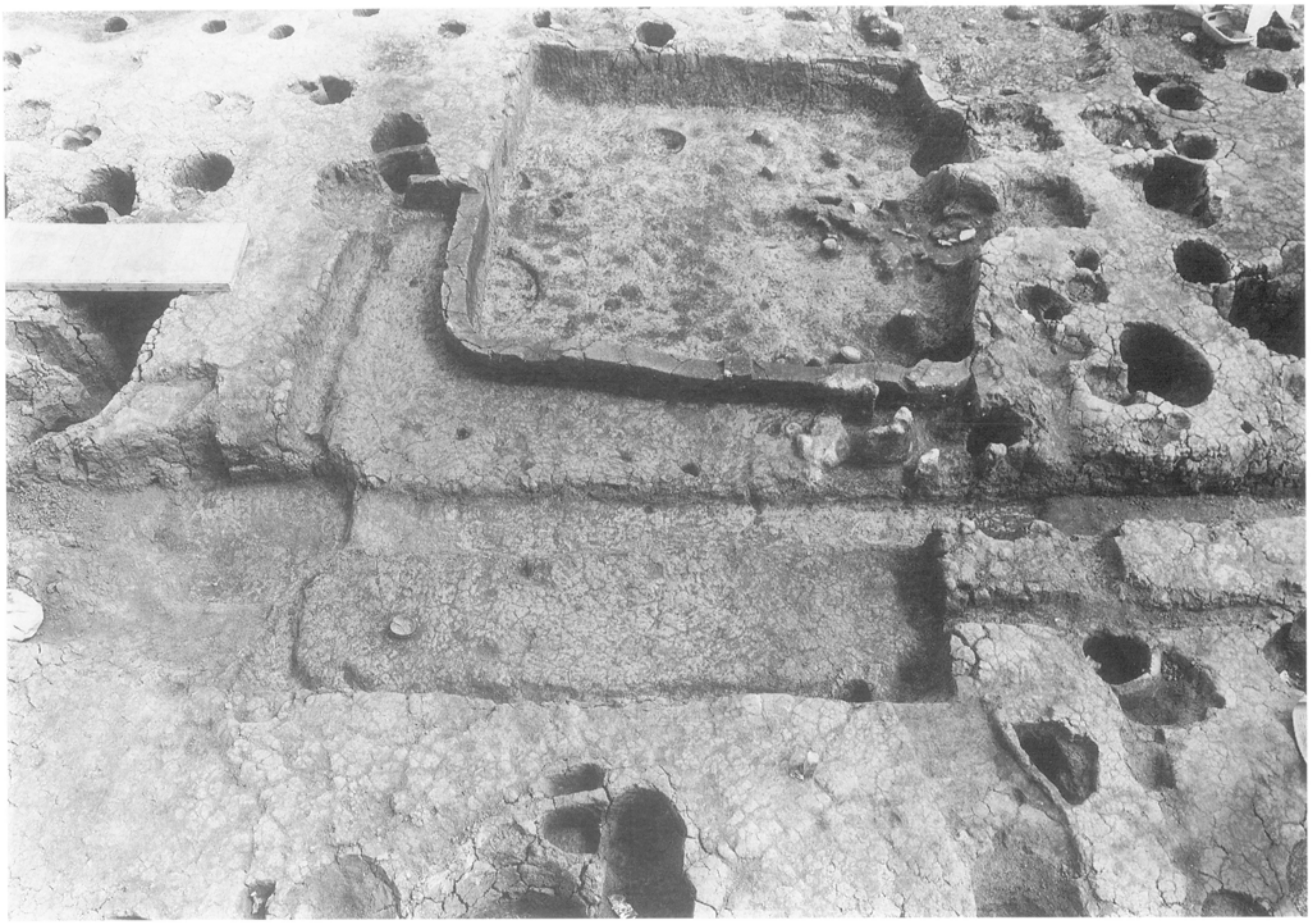


（1）住居跡26（南から）

（2）住居跡26竈（南から）

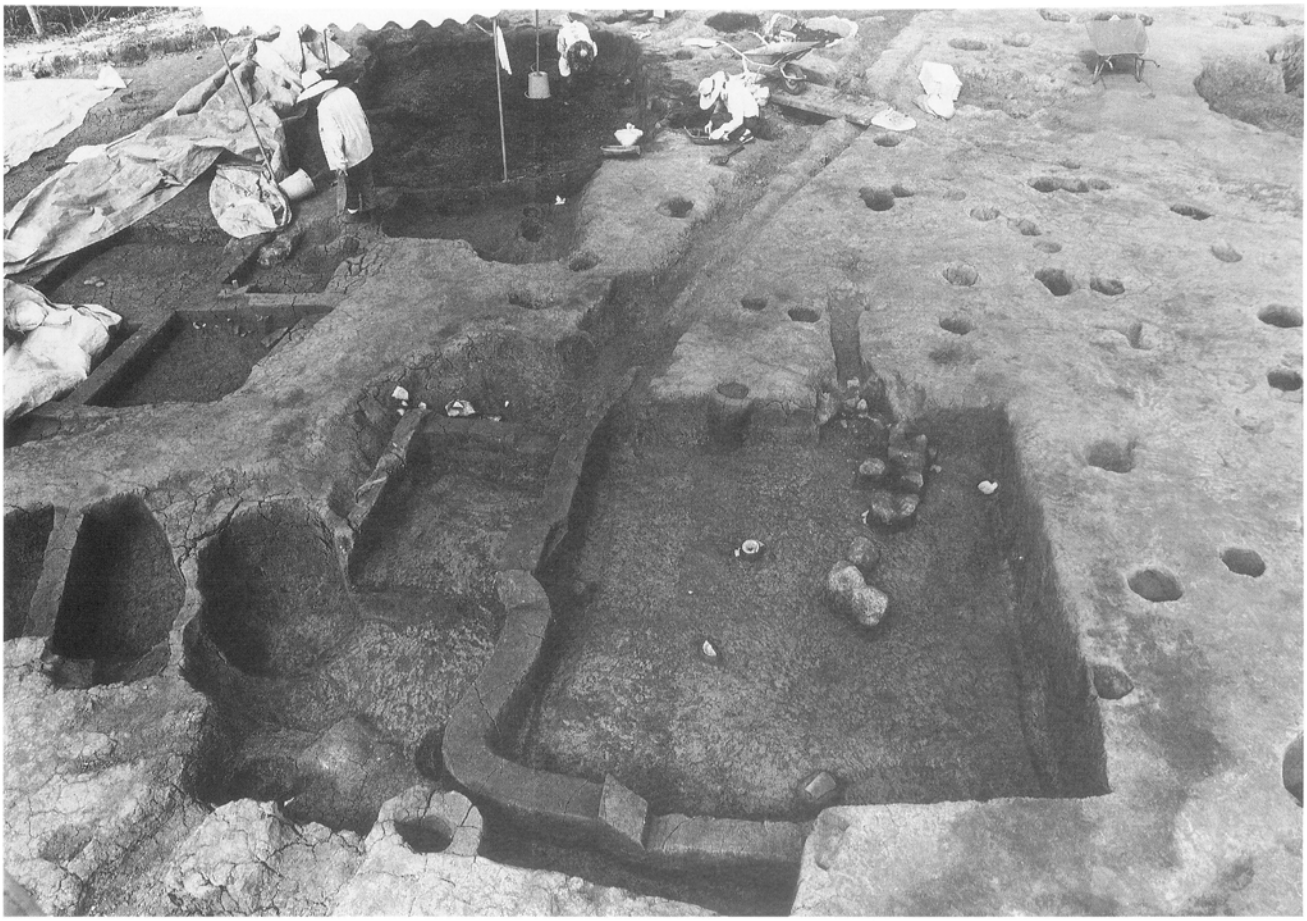
（1）住居跡33（南から）

（2）住居跡36（西から）



（1）住居跡53、54（南から）

（2）住居跡60、61（南から）

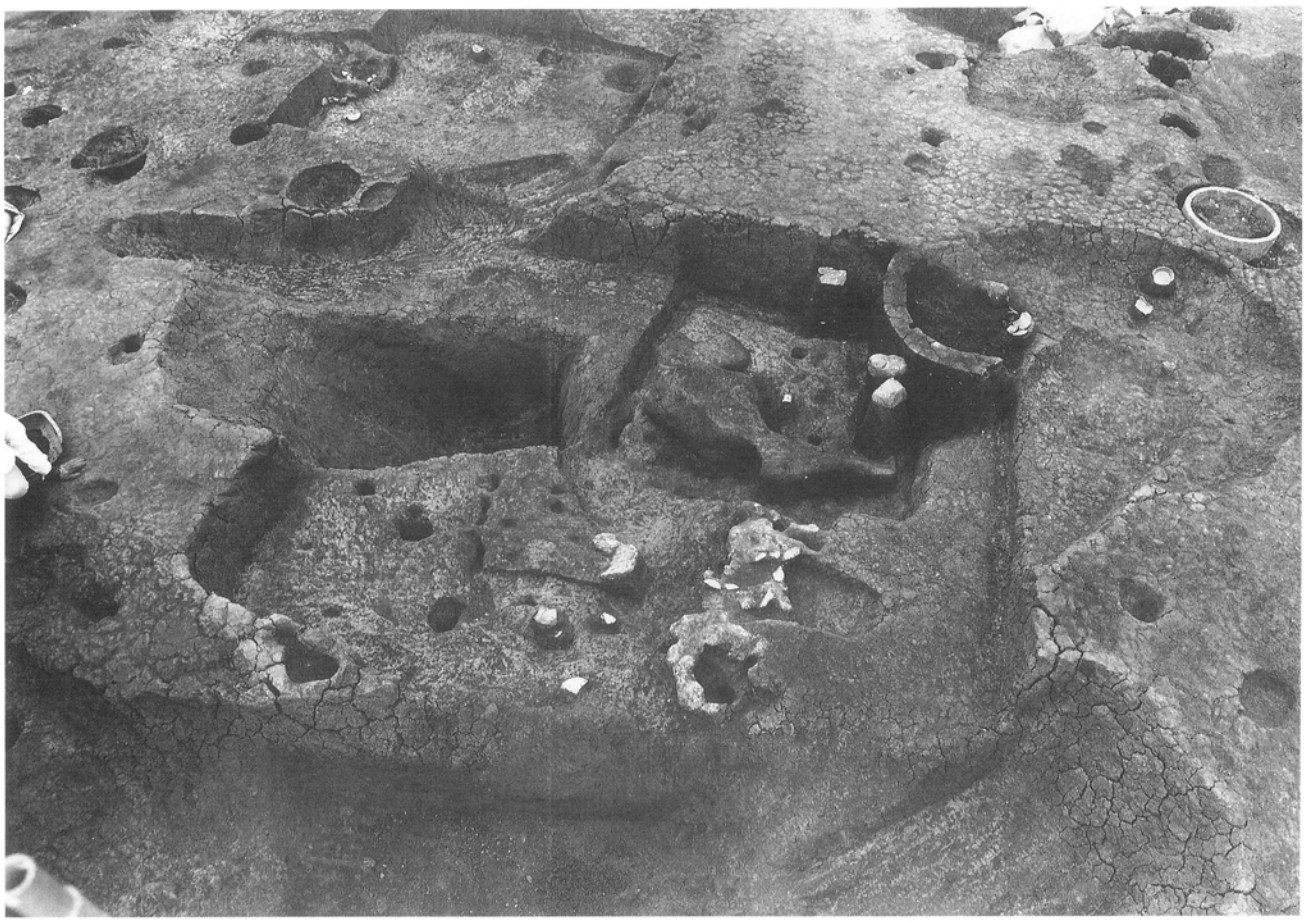


（1）住居跡65、66（西から）

（2）住居跡87（東から）

（1）住居跡88煙道（北から）

（2）住居跡90（北から）



（1）住居跡96、97、101（東から）

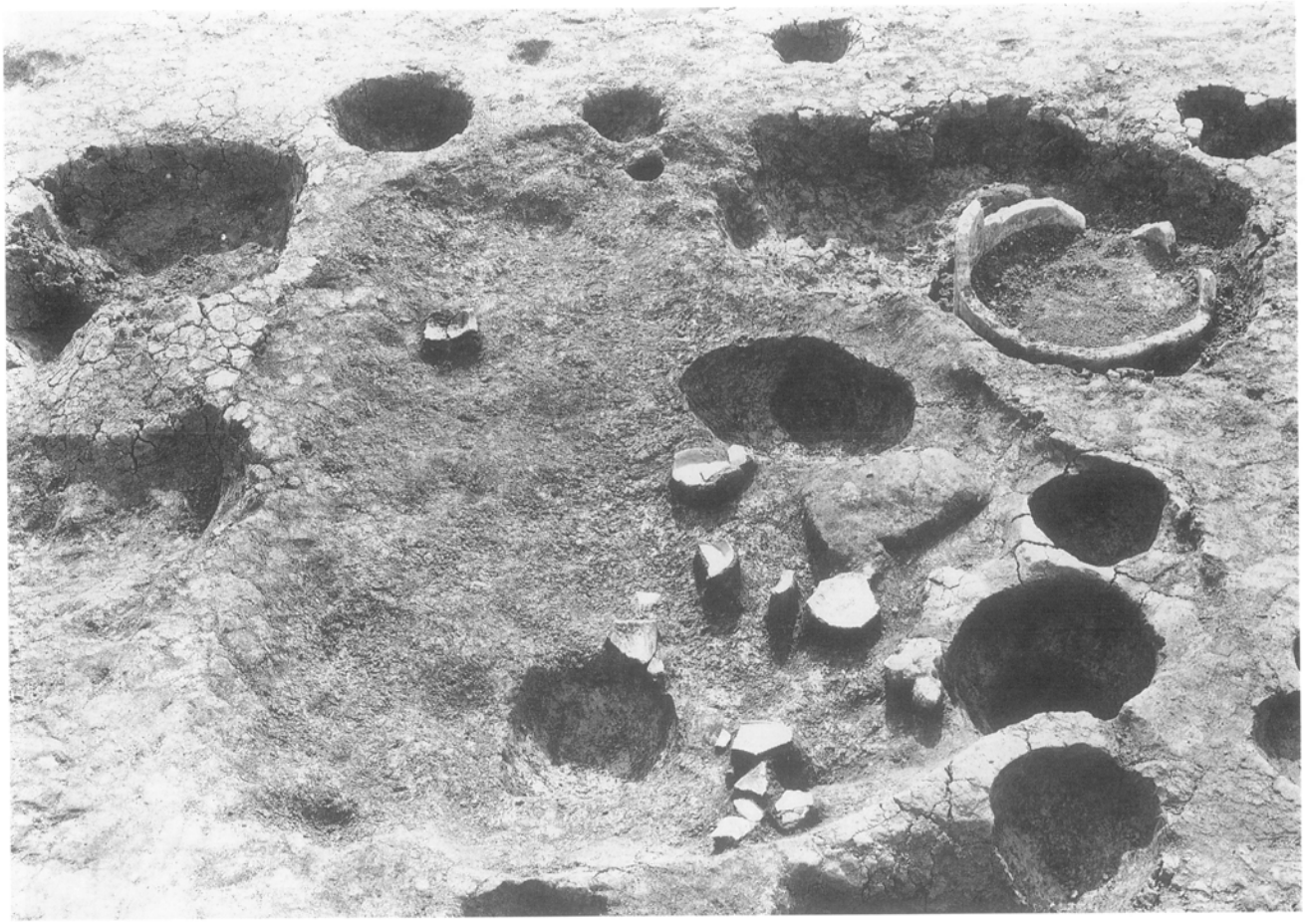
（2）住居跡100（南から）

（1）住居跡102（北から）

（2）住居跡114（東から）

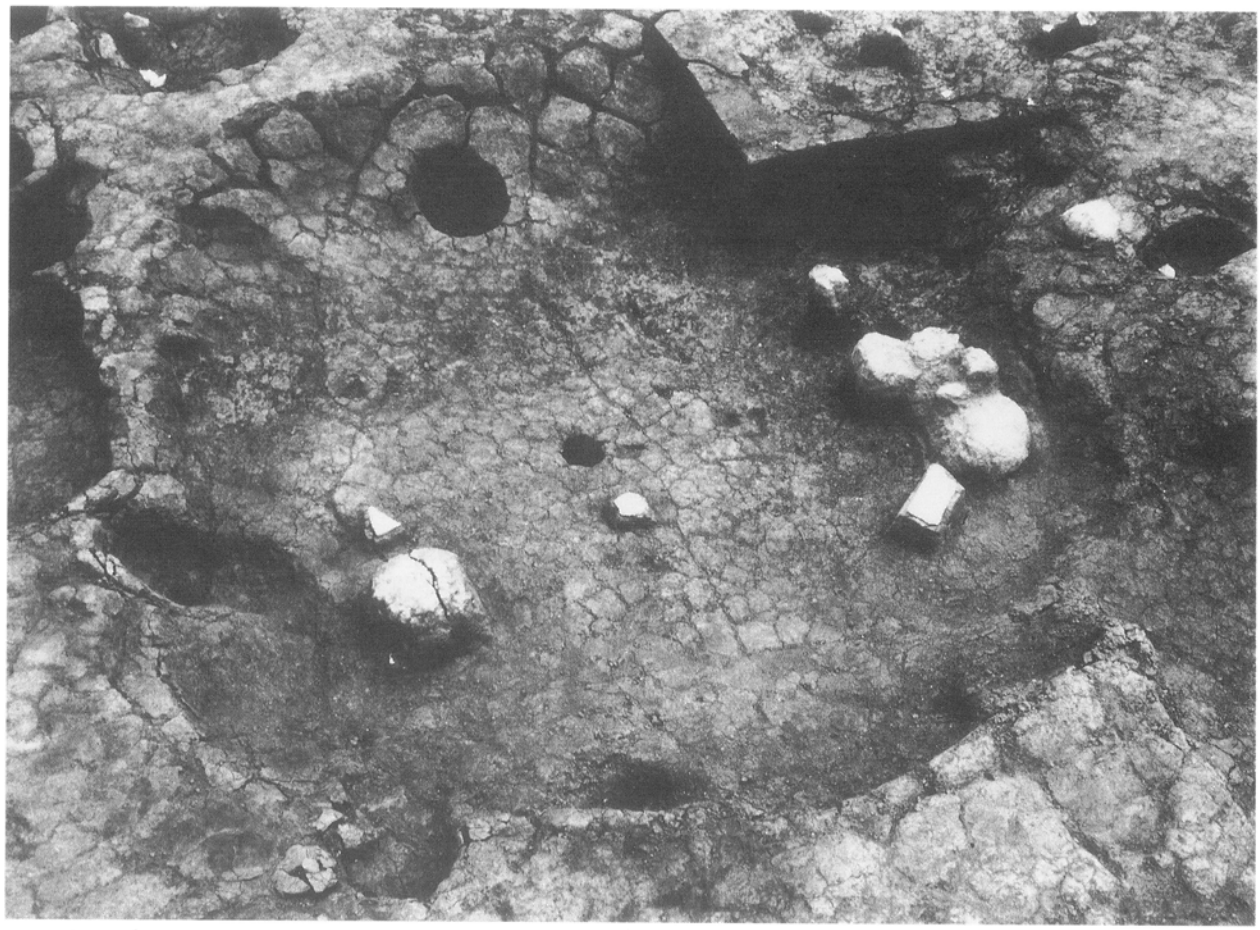
（1）住居跡114竈（南から）

（2）8次調査区検出住居（東から）



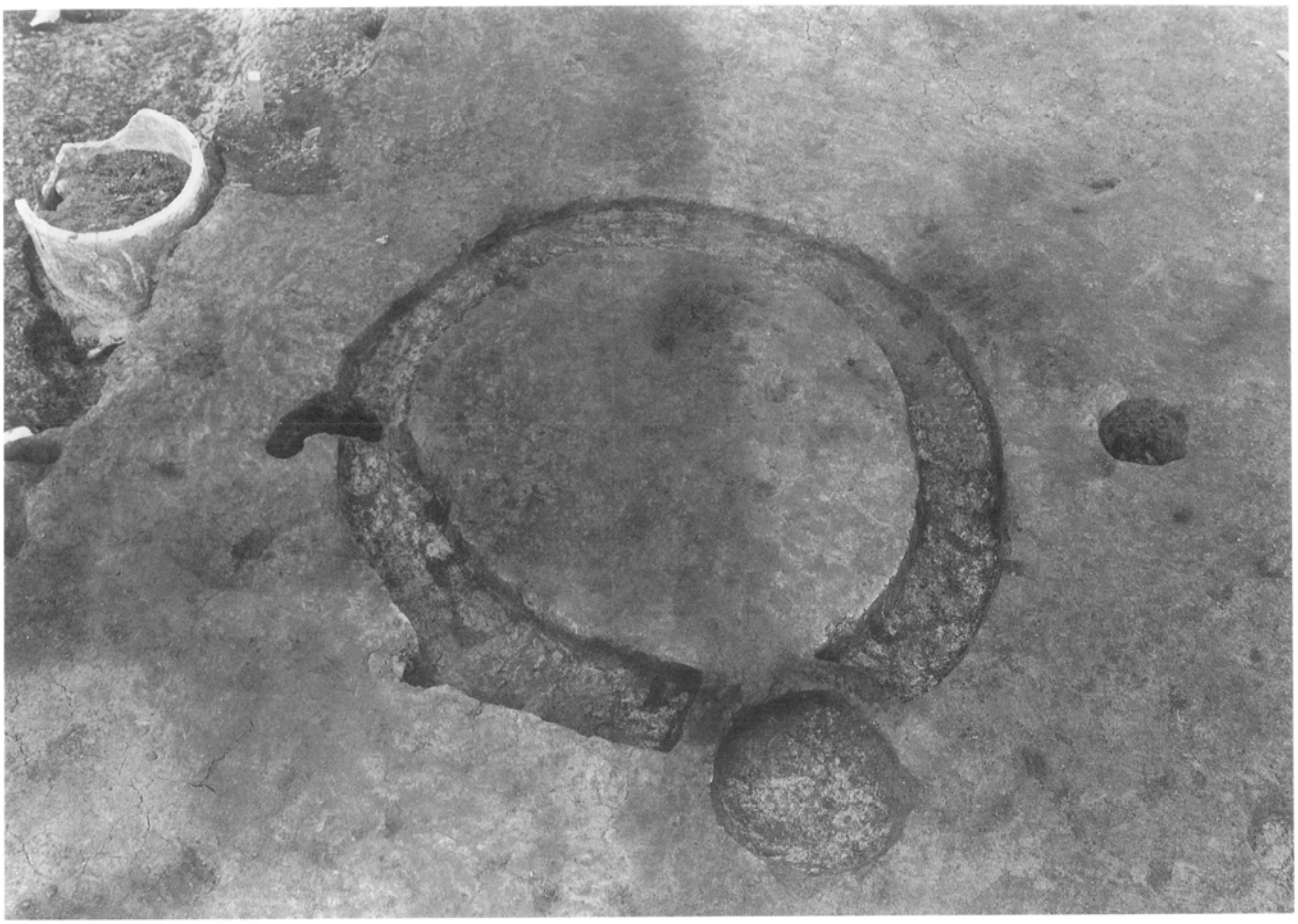
（1）土壙30（東から）

（2）土壙43（北から）



（1）土壙48（北から）

（2）土壙68（東から）



（1）円形周溝状遺構112（西から）

（2）井戸111（北から）

付　　編

雑餉隈遺跡第７次調査

例　　言

1．本書は、平成７年８月28日から９月１日にかけて福岡市教育委員会が行った、博多区新和町２丁目14－1に関する発掘調査報告である。

2．本書で使用した図の作成には、大庭康時が当たった。なお、遺構実測図の方位は、磁北である。

3．本書に掲載した図の浄書は、折茂由利がおこなった。

4．本書で使用した写真は、大庭が撮影した。

5．本書の執筆・編集は、大庭がおこなった。

6．本調査に関するすべての記録類と出土遺物は、整理終了後福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理し、公開する。

目　　次

第一章　はじめに……1

1．発掘調査にいたる経過……1

2．発掘調査の組織と構成……1

第二章　発掘調査の記録……2

1．発掘調査の方法と経過……2

2．基本層序……3

3．発掘調査の概要……5

4．遺構と遺物……5

第三章　まとめ……7

第一章　はじめに

1．調査にいたる経過

平成７年５月29日、山本綾子氏より東部産業株式会社を介して福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区新和町２丁目14-1に関する埋蔵文化財事前調査願が提出された。申請地は、雑餉隈遺跡群に属し、周辺では、それまでに６次にわたる発掘調査が実施されていた。さらに東接する隣地においても、1994年３月に発掘調査が行われ、その成果はすでに福岡市埋蔵文化財調査報告書第409集に収録されている。これらの点から、本申請地においても埋蔵文化財が遺存している事は、十分に予想された。

埋蔵文化財課では、まず試掘調査が必要である旨を回答した。その後協議の過程で、同年９月には共同住宅建設に着工したいという希望が示されたが、既存建築物の構造からみて遺構の存在は確実であり、発掘調査は不可避である事を申し渡した。

結局、調査対象面積が82.64平方メートルと狭く、調査予定期間も7日と短い事から、試掘調査を経ずに直接発掘調査を実施することで合意が成立した。発掘調査には、同年7月末まで博多遺跡群第85次調査に担当していた大庭康時が当たる事になり、8月28日調査に着手した。

2．発掘調査の組織と構成

調査委託	山本　綾子	
調査主体	福岡市教育委員会 教育長	尾花　剛（前任）
		町田　英俊（現任）
調査総括	福岡市教育委員会 埋蔵文化財課 課　長	荒巻　輝勝
	福岡市教育委員会 第二係長	山口　譲治
調査庶務	福岡市教育委員会 第一係	西田　結香（前任）
		河野　淳美（現任）
調査担当	福岡市教育委員会 第二係	大庭　康時
調査作業	石川　君子　江越　初代　関　加代子　関　義種	
	曾根崎昭子　能丸勢津子　村崎　祐子	

遺跡調査番号	９５２３		遺跡略号	ＺＳＫ－７	
調査地地籍	福岡市博多区新和町２丁目14－１		分布地図番号	雑餉隈13	
開発面積	82.64㎡	調査対象面積	82.64㎡	調査面積	54㎡
調査期間	1995（平成７）年８月28日～９月１日				

第二章　発掘調査の記録

1．発掘調査の方法と経過

前述のように、今回の発掘調査に際しては、事前の試掘調査は行われなかったが、隣接地の発掘調査（第４次調査）から現地表下40センチ前後で地山の鳥栖ローム層にいたり、遺構が検出できる事が予想できた。そこで、まずバックホーで一息にこの地山面まで掘削し、遺構検出・遺構調査にとりかかる事にした。

発掘調査の大まかな経過は、次の通りである。

８月28日　バックホーによる表土掘削。発掘調査事務所設営。発掘調査機材搬入。
表土掘削は一日で終了し、遺構検出面の乾燥を避けるためビニールシートで覆う。
調査区周辺をバリケードとトラロープで養生し、本日の作業を終える。

８月29日　調査区の壁面を清掃。検出面である地山は南に緩く下降して傾斜しており、最も深い南側の壁で土層柱状図を作成する。
矩形を呈する調査区の形状に合わせて、測量の基準杭を設定。調査地点周辺を測量。遺構検出し、精査を行う。

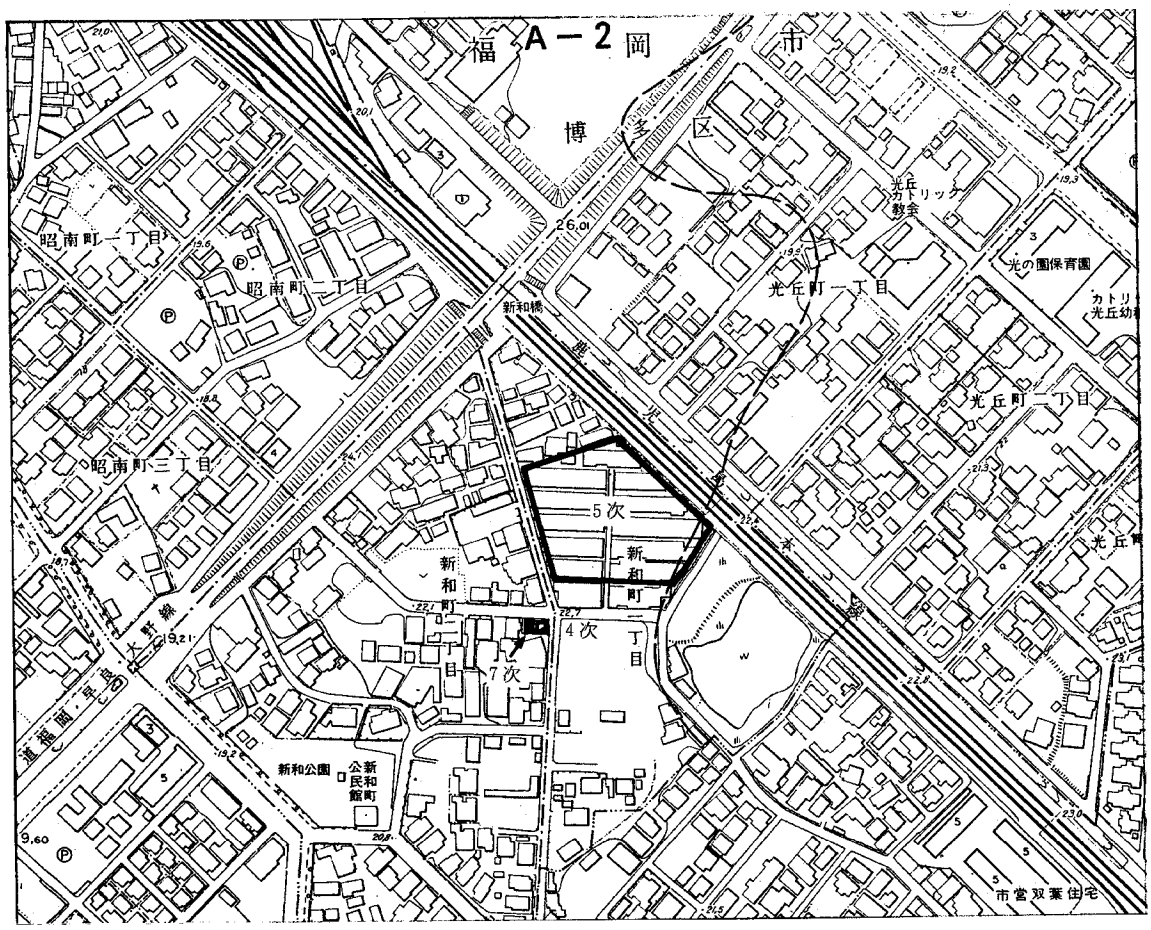


Fig. 1　第７次調査地点位置図（1／4000）

8月30日　調査区を清掃し、写真を撮影する。20分の1で、全体を実測する。近隣の第5次調査地点の基準杭から、レベルを移動。

8月31日　雨がちの一日であったが、降雨の合間を縫ってレベリングを済ませる。

9月1日　バックホーによる埋め戻し。調査機材撤収。発掘調査事務所も撤去し、雑餉隈遺跡群第7次調査を終了する。

2．基本層序

地山は鳥栖ローム層であり、その上に厚さ40センチ前後の包含層が堆積し、さらに現代の生活面とバラスによる整地層で覆われていた。

以下、土層柱状図に基づいて詳述し、基本層序の説明に代える。

1．白色砂質土とバラスによる整地層。
2．暗灰色のガラ。
3．旧生活面。
4．暗褐色土。若干の遺物を包含する。
5．茶色土。
6．暗褐色土。若干の遺物を包含する。
7．黄茶色粘土。地山の鳥栖ローム層。

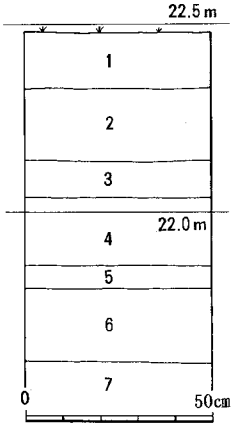


Fig. 2　土層柱状図

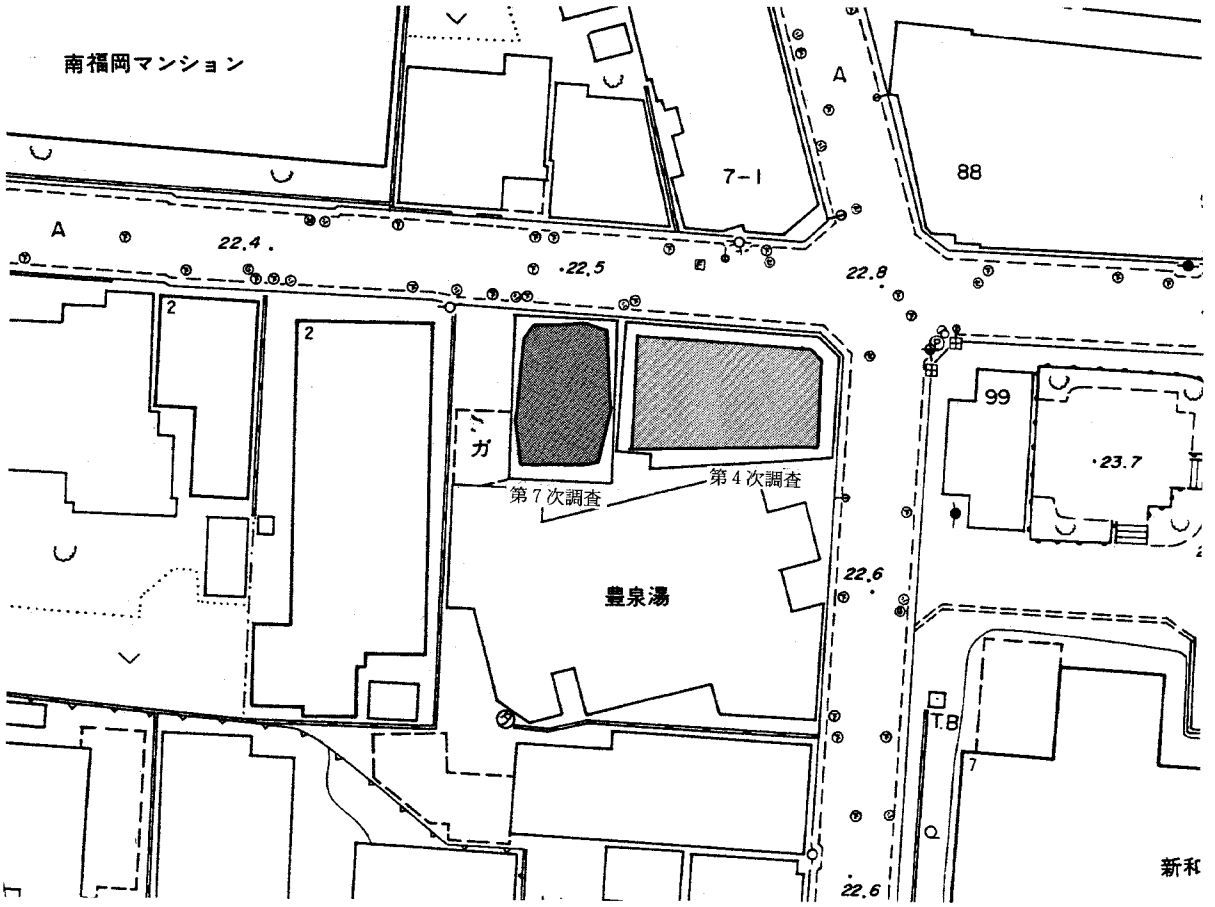


Fig. 3　第7次調査地点位置図（1／5000）

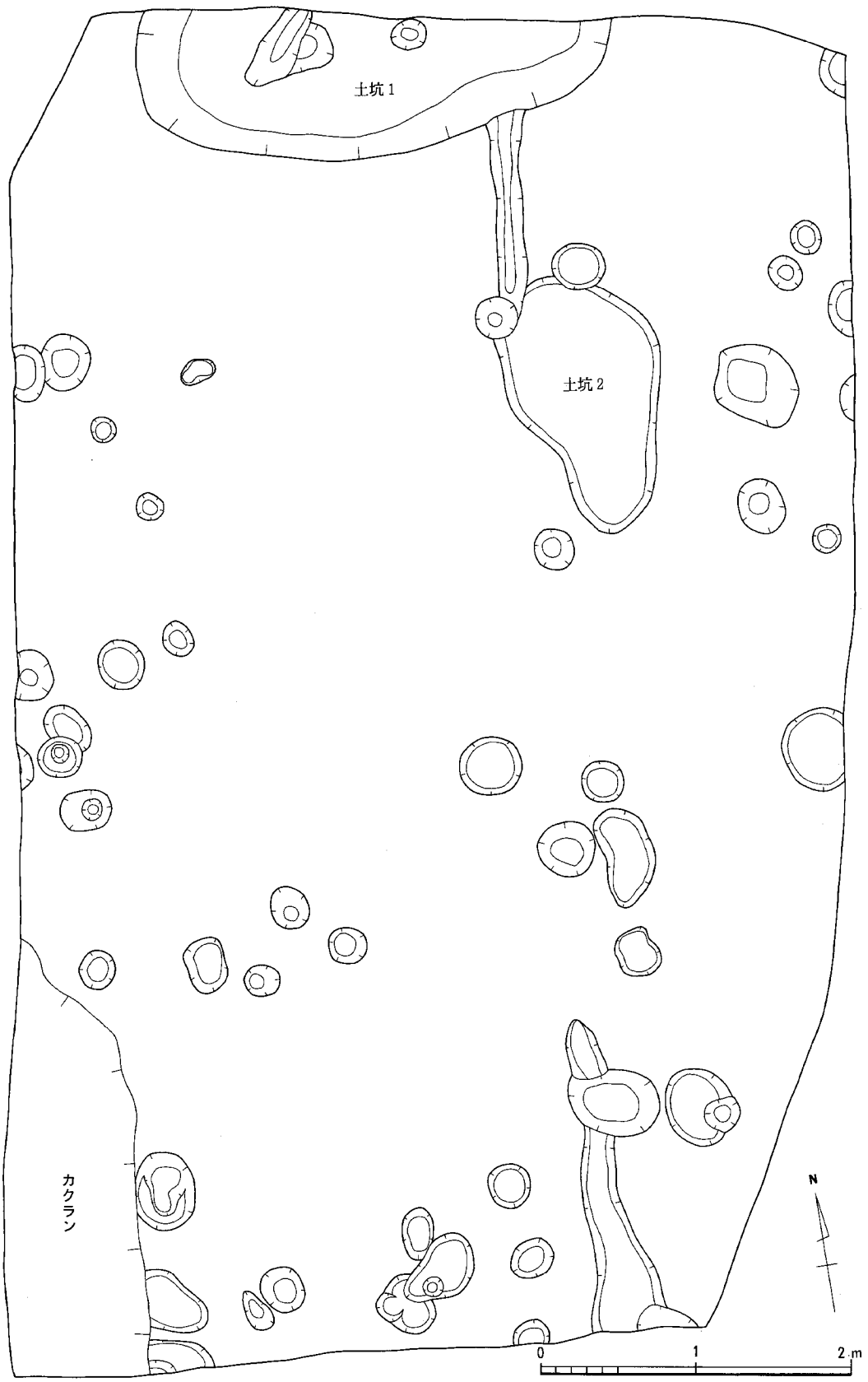


Fig. 4　第7次調査遺構平面図（1／40）

3．発掘調査の概要

今回の発掘調査では、地山である鳥栖ローム層の上面で、柱穴・土坑などの遺構を検出した。全体に、既に大規模な削平を受けていたようで、遺構の遺存状態は良くなかった。

検出した遺構は、土坑２基・柱穴42基・溝２条である。調査範囲が狭く、柱穴から掘立柱建物跡を復元するにはいたらなかった。また、２条の溝状遺構は、ほぼ南北方向を取り、調査区の北と南から2メートルずつ程伸びてきている。遺存状態が悪く、ともに深さ5センチ程度しか残っていなかった事を考えると、本来一連の溝であった可能性が強い。あるいは、丁度この部分で、途切れていたものかもしれない。

出土遺物としては、土坑から須恵器片・土師器片が出土したほか、柱穴からも若干の土器片が出土している。出土量は少なく、コンテナ1箱分に過ぎない。

4．遺構と遺物

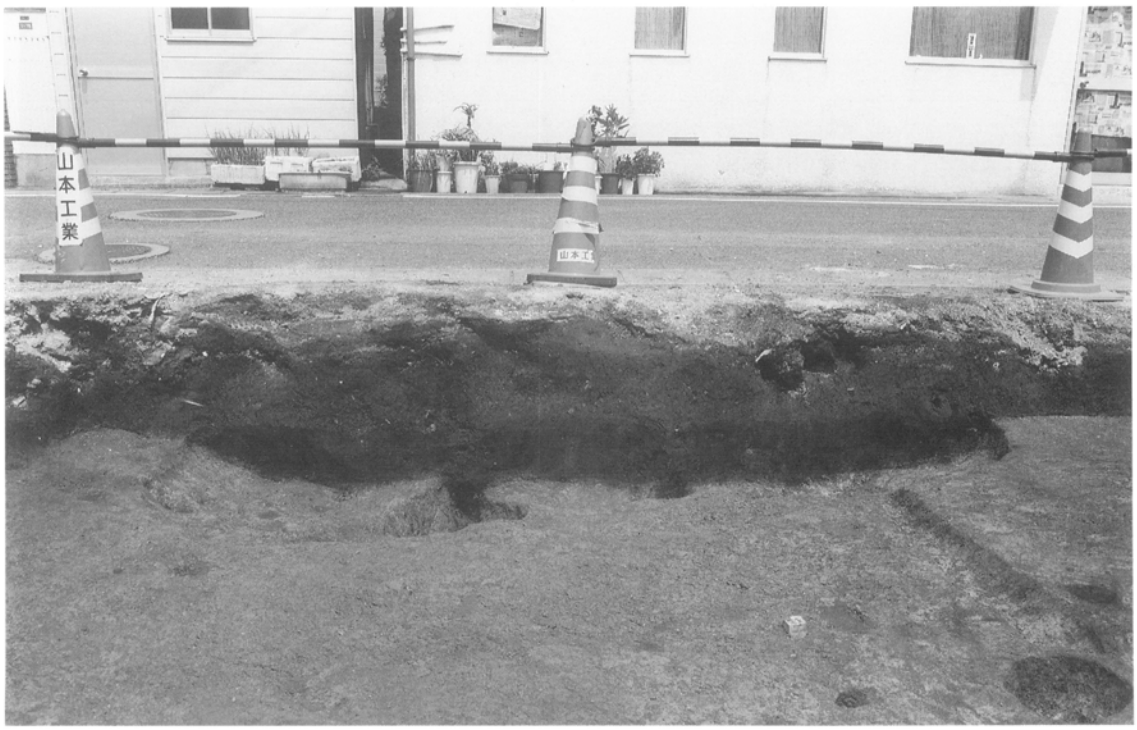
上述したように、遺構・遺物ともに特筆すべき所はないが、少ないながらも一定の出土があった土坑１と、検出面から出土した遺物の内実測に耐えたものについて報告する。

土坑１（Ph. 2～3 ,Fig. 5 - **1～4**）

調査区北辺の中央付近で検出した不整形の土坑である。過半が調査区外にでると思われ、全体を知

Ph.　1　調査地点全景（東より）

Ph. 2　土坑1（東より）



Ph. 3　土坑1土層断面（南より）

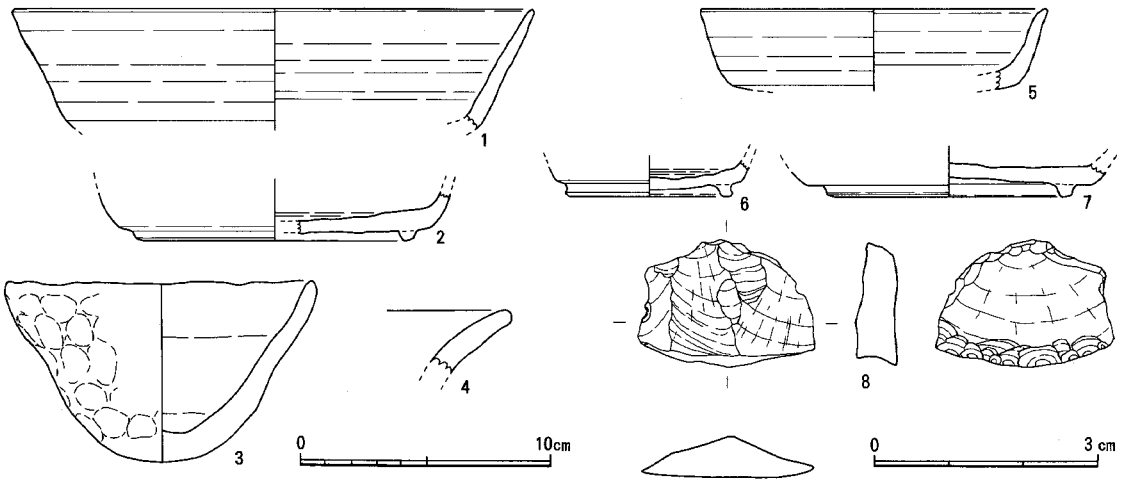


Fig. 5　出土遺物実測図（1～7…1／3、8…1／1）

り得ない。調査区北壁に現れた土坑断面を見る限り、あまり形を意識した形状にはならないようである。おそらく、廃棄坑であろう。

土師器・須恵器の破片が出土している。Fig. 5－1・2は、**須恵器**の高台坏である。1は、高台部分を欠いた体部片で、内外面ともに横なで調整する。2には、低平な角張った高台を貼り付ける。3・4は、**土師器**である。3は、手捏ねの盃である。外面には指頭圧痕がならび凹凸が激しい。内面は、指なでで平滑に仕上げている。4は、甕形土器の口縁部の破片である。内外面ともに横なで調整する。

これらの出土遺物から、8世紀代の遺構と考えられる。

検出面出土遺物（Fig. 5－5～8）

5～7は、**須恵器**の高台坏である。体部の内外面は横なで調整、底部内面には、なで調整を加える。8は、**黒曜石**の剥片である。主剥離面の下辺には、細かくて浅い押圧剥離がならんでいる。

このほか、土師器・須恵器の小片が出土したが、実測に耐えるものはなかった。また、出土遺物の上からは時期幅は認めがたく、ほとんどの遺物が8世紀代に属する。

第三章　ま　と　め

今回の調査では、8世紀代の柱穴・土坑・溝等を検出した。調査範囲が狭く、柱穴から掘立柱建物跡を復元するにはいたらなかったが、柱穴の並びから柱筋が推定できるものが若干見受けられた。確証はないが、建物の一部をうかがわせるものとして、Fig. 6に示した。

2条の溝状遺構は、一連の遺構としてとらえられる。出土遺物に時期を明瞭に示すものがないが、土坑1に切られており、他の遺構同様に奈良時代の遺構と考えたい。遺存状態が悪く、浅くしか検出されなかったので本来の規模は知り得ないが、いずれにしてもさほど大型の溝になるとは考えがたい。土地を区画するための小溝であったと推測する。ただし、今回の調査及び隣接する第4次調査で推定された掘立柱建物の柱筋で、この溝状遺構と厳密に一致した方向を取るものはない。これを時期差と見るのが妥当かどうか、今後の検討課題としたい。

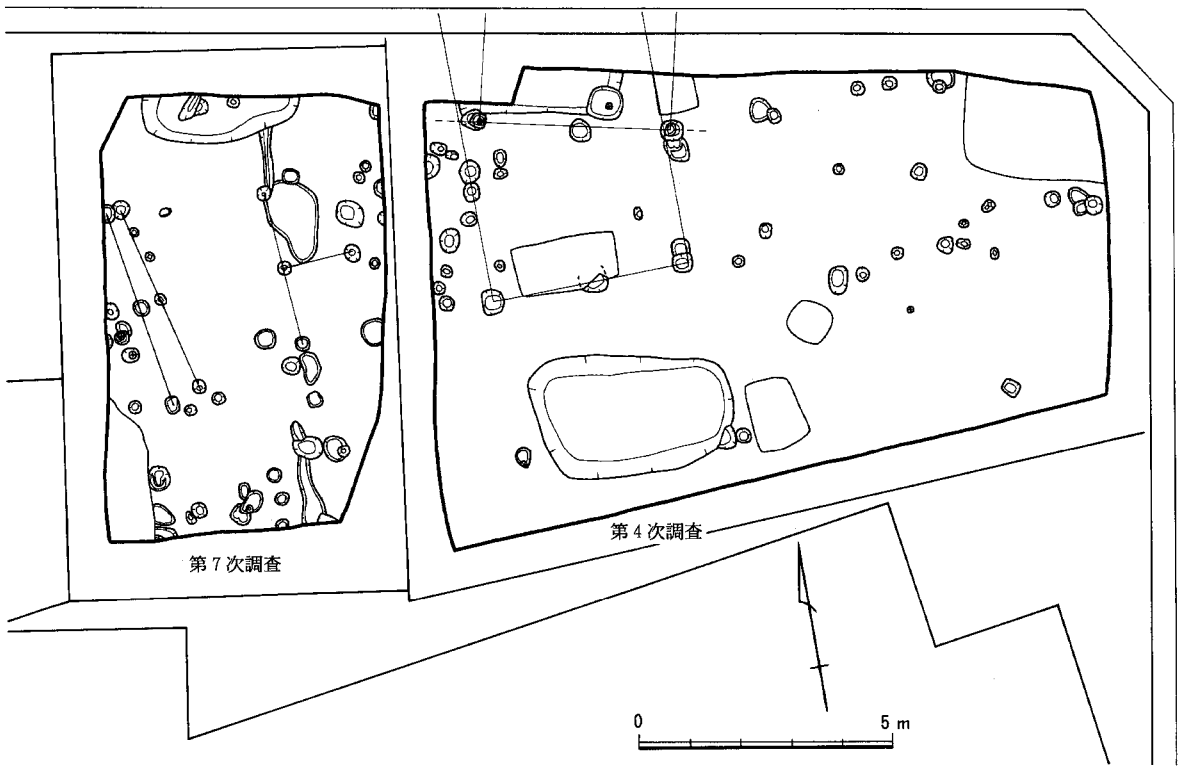


Fig. 6　第4次調査・第7次調査遺構全体図（1／150）

土坑1は、不整形の廃棄土坑と見られる。類似の土坑は第4次調査でも報告されており、土坑1を長楕円形のプランとすると、両調査の土坑の長軸は同一方向となる。出土遺物からもほぼ同時期に営まれたものと知れる。

本調査地点の北側の第5次調査・第6次調査などでは、奈良時代の竪穴住居跡・土坑などが多数検出されている。本調査地点及び第4次調査地点では、竪穴住居跡は検出されていないが、この集落跡の一角に含まれる事は疑いない。集落の南辺の様相を示す地点として理解したい。

雑 餉 隈 遺 跡 4

雑餉隈遺跡５次、８次、10次調査

福岡市埋蔵文化財報告書　第569集

1998年３月31日

発　　行　　福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市中央区天神１－８－１

印　　刷　　㈲ 大 進 印 刷

福岡市中央区平和５丁目21－６

雑 餉 隈 遺 跡　4

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第569集　1998

付図　雑餉隈遺跡第５次、８次、10次調査区遺跡配置図（1：200）